秋田県文化財調査報告書第425集

土　飛　山　館　跡

－ 片山自歩道事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 －

２００７・８

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の構築や国道の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、片山自歩道事業に先だって、平成17年度に大館市で実施した土飛山館跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡や竪穴状遺構、土坑等の遺構や、須恵器や土師器などの遺物が発見されました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所、大館市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成19年８月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　　言

1　本書は、片山自歩道事業に係る土飛山館跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、平成17年度に発掘調査した秋田県大館市豊町に所在する、土飛山館跡の調査成果を収めたものである。

3　発掘調査成果については、既にその一部が公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4　本書に使用した地形図等は、国土地理院発行の25,000分の１及び50,000分の１『大館』、大館市提供の2,500分の１都市計画図、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所提供の工事路線計画図である。

5　土層断面等の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2002年版に拠った。

6　本書に使用したグリッド配置図等は、㈲大館換地測量設計事務所に委託した測量によるものである。

7　本書に使用した空中写真は、昭和23年米軍撮影及び昭和50年建設省国土地理院撮影によるものを㈶日本地図センターより購入したものである。

8　第５章「自然科学的分析」は、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した成果報告である。

9　出土した鉄製品の一部は、保存処理業務を株式会社吉田生物研究所に委託した。

10　本書の草稿執筆は第１章から第３章を菊池晋が、第４章を菊池晋、平野左近が、第６章を菊池晋が行った。編集は菊池が行った。

凡　　例

1　遺構番号は、種類毎に略記号を付し、種別を問わず検出順に通し番号とした。ただし、調査の結果、遺構でないと判断したものについてはこれを欠番とした。

2　遺構図および本文に用いた遺構の略記号は下記のとおりである。

ＳＩ・・・竪穴住居跡	ＳＫＩ・・・竪穴状遺構	ＳＫ・・・土坑
ＳＮ・・・焼土遺構	ＳＡ・・・・柱穴列	ＳＤ・・・溝跡
ＳＸ・・・性格不明遺構	ＳＫＰ・・・柱穴様ピット	

3　遺構図および本文中のＰは、竪穴住居跡・竪穴状遺構・柱穴列などに伴う柱穴等を示し、当該の遺構内でＰ１、Ｐ２、Ｐ３～のように番号を付し各基を指定している。また、竪穴住居跡などに伴う溝跡はＳＤ01、土坑はＳＫ02～などのように当該の遺構内で01から通し番号を付し、個別の遺構の番号とは区別している。この他、遺構図中のＲＰは土器、ＲＭは鉄関連遺物、Ｓは礫を示している。

4　遺構図の縮尺は基本的には１／40であるが、それ以外のものにもそれぞれにスケールを付してある。

5　各遺構の軸方位は、座標北を基準とし、座標北から東側にずれる場合はN―　°―E、西側にず

れる場合はN―　°―Wとした。また、部分的にしか検出できなかった竪穴住居跡については、その壁か壁溝と座標北がなす角度を読み取り記載した。

6　遺構図で用いたスクリーントーンは下記のとおりである。

焼土範囲　　カマド火床　　カマド範囲

7　土層番号は、遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構埋土には算用数字を使用して区別した。また、土層図中の丸数字は、平面のみに確認された土色などを示している。

8　本文および遺物観察表、遺構図等で使用する遺物の番号は、(挿図番号―遺物番号) で示してある。

9　遺物図の縮尺は、基本的に１／３であるが、それ以外のものにもそれぞれにスケールを付してある。

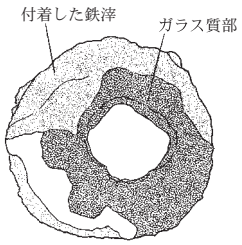
10　図版の遺物写真の縮尺は不同である。

11　遺物図の遺物断面のうち、黒く塗りつぶしたものは須恵器である。

12　遺物観察表の（　）は推定値を示している。

13　鍛冶関連の遺物図についての凡例は下記のとおりである。

羽口



目　次

序
例　言
凡　例
第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経過……1
　第２節　調査要項……1
第２章　遺跡の環境……2
　第１節　遺跡の位置と立地……2
　第２節　歴史的環境……5
第３章　発掘調査の概要……9
　第１節　遺跡の概観……9
　第２節　調査の方法……15
　第３節　調査の経過……16
　第４節　整理作業の方法と経過……17
第４章　調査の記録……18
　第１節　検出遺構の概要……18
　第２節　Ａ区の検出遺構……23
　第３節　Ｂ区の検出遺構……42
　第４節　Ｃ区の検出遺構……62
　第５節　Ｄ区補足調査区……80
　第６節　出土遺物……82
第５章　自然科学的分析……90
　第１節　自然科学的分析成果報告（１）……90
　第２節　自然科学的分析成果報告（２）……98
第６章　まとめ……105
図版
報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……２
第２図　土飛山館跡位置図……３
第３図　地形区分図……４
第４図　周辺遺跡位置図……６
第５図　遺跡周辺地形図……10
第６図　遺跡範囲と調査区……11
第７図　グリッド配置図……12
第８図　調査区の基本層位……13・14
第９図　遺構配置図……19・20
第10図　Ａ区遺構配置図……21・22
第11図　ＳＩ３竪穴住居跡……24
第12図　ＳＩ４・ＳＩ５竪穴住居跡……26
第13図　ＳＩ５カマド……27
第14図　ＳＩ32竪穴住居跡・カマド……29
第15図　ＳＩ65・152竪穴住居跡 ……30
第16図　ＳＩ65カマド……31
第17図　ＳＩ104竪穴住居跡 ……32
第18図　ＳＩ151竪穴住居跡・カマド ……34
第19図　ＳＩ170竪穴住居跡 ……35
第20図　ＳＫ63・157土坑 ……36
第21図　ＳＡ24柱穴列……36
第22図　ＳＤ１溝跡……38
第23図　ＳＤ56・120・156・167・263溝跡……39
第24図　ＳＸ48・50性格不明遺構……40
第25図　Ｂ区遺構配置図……43・44
第26図　ＳＩ131竪穴住居跡 ……46
第27図　ＳＩ131カマド ……47
第28図　ＳＩ132竪穴住居跡、ＳＫ149土坑……48
第29図　ＳＩ133・134・221・222竪穴住居跡、
ＳＫ225・226土坑、ＳＤ267溝跡、
ＳＮ147焼土遺構 ……49・50
第30図　ＳＩ135竪穴住居跡 ……52
第31図　ＳＩ135カマド ……53
第32図　ＳＩ140竪穴住居跡、ＳＫ235土坑……54
第33図　ＳＩ140カマド ……55
第34図　ＳＩ221カマド ……57
第35図　ＳＫ141・149・231～233・236土坑 ……59
第36図　Ｃ区遺構配置図……63
第37図　ＳＩ122竪穴住居跡 ……64
第38図　ＳＩ122竪穴住居跡カマド ……65・66
第39図　ＳＩ124竪穴住居跡 ……68
第40図　ＳＩ251竪穴住居跡、ＳＫＩ121竪穴状
遺構(1) ……69・70
第41図　ＳＫＩ121竪穴状遺構(2)……71
第42図　ＳＡ130柱穴列 ……73
第43図　ＳＡ175柱穴列 ……74
第44図　ＳＡ177・178柱穴列……75
第45図　ＳＤ125・127・128溝跡 ……76
第46図　ＳＮ84焼土遺構、ＳＸ201性格不明遺構
……77・78
第47図　補足調査区……81
第48図　遺構内出土遺物(1) ……83
第49図　遺構内出土遺物(2) ……84
第50図　遺構内出土遺物(3) ……85
第51図　遺構内出土遺物(4) ……86
第52図　遺構内出土遺物(5) ……87
第53図　遺構外出土遺物……89
第54図　土飛山館跡における堆積物の特徴……96
第55図　火山ガラスの屈折率測定結果……96
第56図　調査範囲と空堀(1)……105
第57図　調査範囲と空堀(2)…… 107・108

表　目　次

第１表　土飛山館跡と周辺の遺跡一覧…… ７
第２表　Ａ区検出遺構内ピット観察表……41

第３表　Ａ区検出柱穴様ピット観察表(1) ……41
第４表　Ａ区検出柱穴様ピット観察表(2) ……42
第５表　Ｂ区検出遺構内ピット観察表……61
第６表　Ｂ区検出柱穴様ピット観察表(1) ……61
第７表　Ｂ区検出遺構内ピット観察表(2) ……62
第８表　Ｃ区検出遺構内ピット観察表……79
第９表　Ｃ区検出柱穴様ピット観察表……80
第10表　遺構内出土遺物観察表(1) ……87
第11表　遺構内出土遺物観察表(2) ……88
第12表　遺構外出土遺物観察表……88
第13表　測定試料及び処理……90
第14表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……91
第15表　堆積物の鉱物分析結果一覧……96
第16表　屈折率測定データシート(1) ……97
第17表　屈折率測定データシート(2) ……97
第18表　測定試料及び処理……98
第19表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果……99
第20表　土飛山館跡出土炭化材の樹種同定 ……103

図　版　目　次

図版１　土飛山館跡空中写真１
図版２　土飛山館跡空中写真２
図版３　土飛山館跡空中写真３
図版４　１　Ａ区調査前現況
　　２　Ａ区北側遺構確認状況
図版５　１　ＳＩ４・５確認状況
　　２　ＳＩ５土層断面
　　３　ＳＩ４・５完掘状況
図版６　１　ＳＩ１地表面状況
　　２　ＳＤ１南縁検出状況
　　３　ＳＤ１土層断面
図版７　１　Ｂ区調査状況
　　２　Ｂ区竪穴住居群
図版８　１　ＳＩ133・134確認状況
　　２　ＳＩ131～134調査状況
　　３　ＳＩ１３５カマド遺物出土状況
図版９　１　ＳＩ131・140土層断面
　　２　ＳＩ131・140壁溝断面
　　３　ＳＩ140床面検出状況
図版10　１　Ｃ区調査状況
　　２　ＳＩ122カマド・ＳＮ84確認、ＳＩ124調査状況
図版11　１　ＳＩ122カマド確認状況
　　２　ＳＩ122カマド遺物出土状況
　　３　ＳＩ124調査状況
図版12　１　ＳＫＩ121確認状況
　　２　ＳＫＩ121完掘状況
図版13　１　遺跡見学会風景
　　２　補足調査区法面
　　３　補足調査区土層
図版14　遺物
図版15　遺物
図版16　遺物
図版17　遺物
図版18　遺物
図版19　遺物・自然科学的分析写真
図版20　自然科学的分析写真
図版21　自然科学的分析写真
図版22　自然科学的分析写真
図版23　自然科学的分析写真
図版24　自然科学的分析写真
図版25　自然科学的分析写真
図版26　自然科学的分析写真

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

片山自歩道事業は、一般国道７号大館市豊町・片山町地内の交通の安全と歩行者の円滑な交差、車両の走行性の改善を図ることを目的として計画された事業である。

整備計画区間370ｍのうち、歩道の拡幅等により切り土工事を伴う豊町地内の国道７号北側の、長さ200ｍの区間には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、工事に先立ち、国土交通省東北地方整備局能代河川国道事務所より、文化財保護法に基づいて埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について、秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会は、工事区間内に周知の遺跡である土飛山館跡があることから、平成17年４月28日に試掘調査を実施した。この結果、古代の竪穴住居跡、土坑、土師器等を確認するとともに、調査対象範囲北端に空堀の痕跡が現地表面で確認できることから、本遺跡は中世の城館跡と古代の集落跡が重複するものと推定された。これにより、豊町地内工事区間の掘削範囲については発掘調査等が必要であることを回答した。

これを踏まえ、秋田県埋蔵文化財センターは、工事に先立って平成17年９月14日～11月４日まで土飛山館跡の発掘調査を実施した。また、地形上一連の遺跡であった可能性がある発掘調査区西側の狭小な区域については、平成18年１月11日に補足調査を実施した（第６・７図）。

第２節　調査要項

遺　跡　名　　土飛山館跡（どびやまだてあと）
遺跡略号　　２ＤＢＹＤ
所　在　地　　秋田県大館市豊町90－43外
調査期間　　平成17年９月14日～11月４日、平成18年１月11日（補足調査）
調査目的　　片山自歩道事業に係る埋蔵文化財事前発掘調査
調査面積　　720㎡（補足調査面積20㎡を含む）
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　菊池　　晋（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　学芸主事）
　　加藤　　竜（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　文化財主事）
　　鈴木　健一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
　　長谷川幹子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
　　平野　左近（秋田県埋蔵文化財センター中央調査課　調査・研究員）
総務担当　　藤原　康悦（秋田県埋蔵文化財センター総務課　副主幹）
　　時田　慎一（秋田県埋蔵文化財センター総務課　副主幹）
調査協力機関　　国土交通省東北整備局能代河川国道事務所、大館市教育委員会

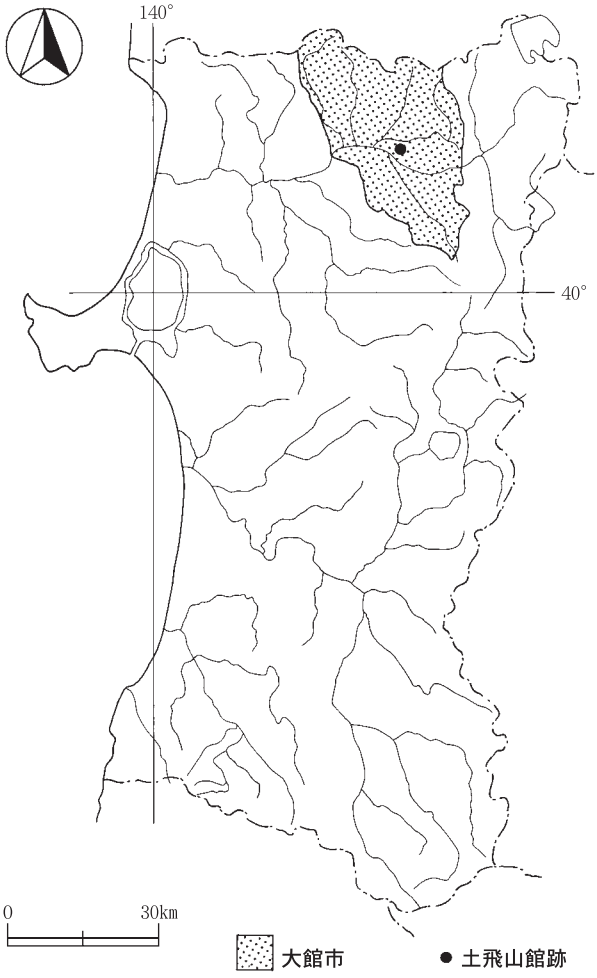
第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

土飛山館跡は、秋田県大館市豊町に所在しており、北緯40°16′11″、東経140°33′21″に位置する。大館市は秋田県の北東部に位置し、その市域は北に青森県南津軽郡、北東を小坂町、南東を鹿角市、北西を藤里町、南西を北秋田市に接している（第１・２図）。

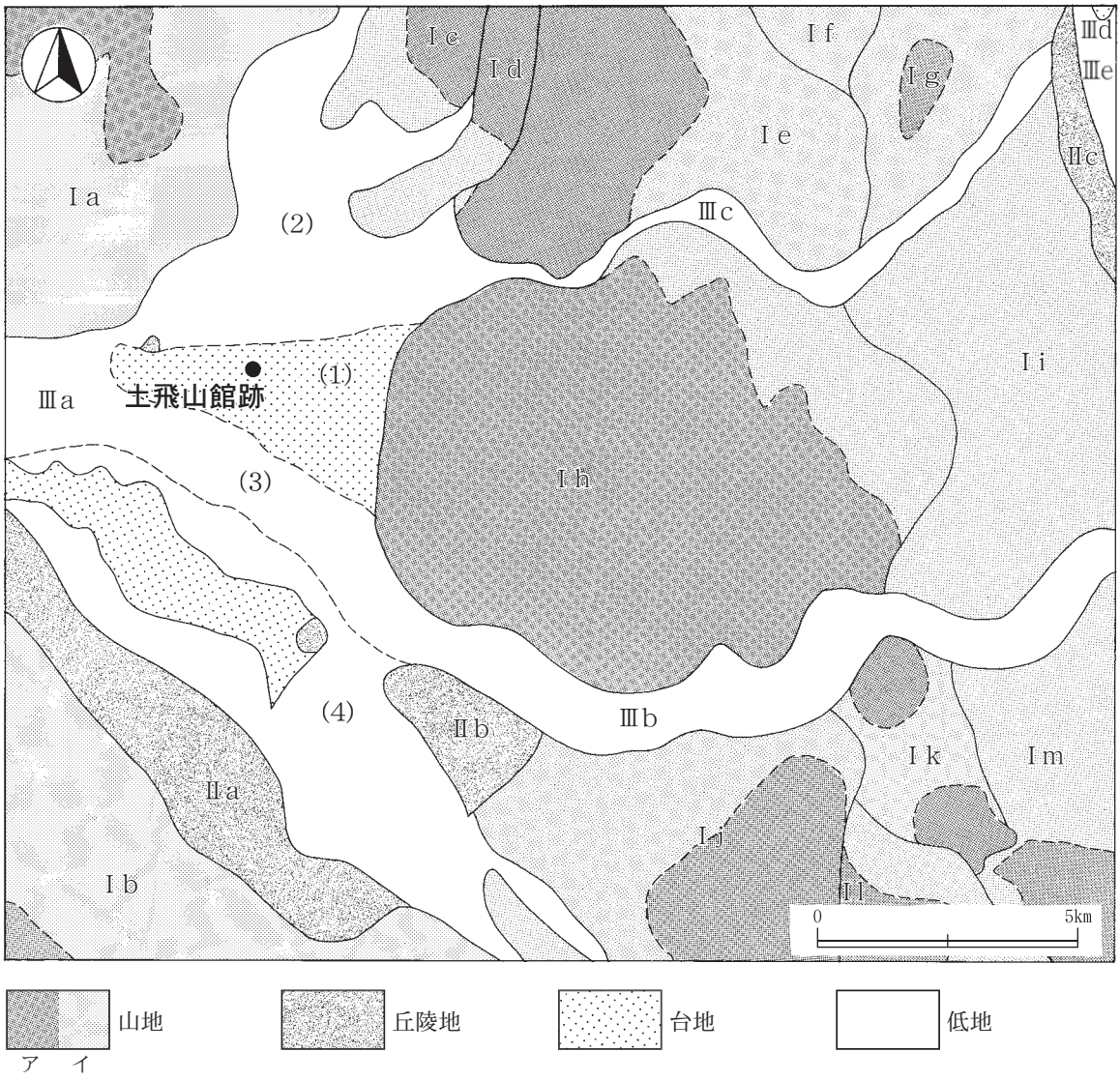
大館市の地形は、奥羽脊梁山脈西側の大館盆地を囲む山地と盆地内に分布する段丘や残丘、山麓沿いに分布する扇状地、川沿いに広がる沖積低地からなる（第３図）。盆地を囲む山地は、北西に白神山地、北東に高森山地、南西側に摩当山地がある。大館市街地に近いところでは、盆地東側に鳳凰山（520m）、秋葉山（329m）、北東側に獅子ヶ森（224m）があり、北西側に花岡地区の山地が南北にのびている。

大館盆地には、県北第一の河川である米代川とその支流が流れている。西流する米代川は南から引欠川、犀川を、北からは長木川、下内川を合わせ沖積低地をつくり、それぞれの河間地には、段丘地が舌状に東から西へ細長く発達している。米代川は岩手県二戸郡から鹿角市を経て大館市に入り、最終的には能代市で日本海に注ぐ。長木川は市内茂内屋敷北方の大川目沢に源を発し、盆地中央部を西流して、市役所の西約５㎞で米代川に合流する。現在の大館市街地は、この長木川によって南北に２分される。その南半部は長木川と本流の米代川に挟まれた西向きの巨大な舌状の段丘（大館段丘地）の上にあり、その南側はいくつもの支谷によって開析され出入りの多い複雑な地形となっている。また段丘北側の地形は長木川の影響を受けており、段丘北縁が長木川の側面浸食によって大きく南側に内湾している箇所も見られる。この内湾した段丘北縁に、北の長木川に向かって突出するところがあり、ここに土飛山館跡が位置している（図版１）。その標高は約64mで、現在、遺跡の北約0.5㎞を流れる長木川の左岸低地との比高は10mほどである。



第１図　遺跡位置図

第２図　土飛山館跡位置図



ア　中起伏山地（起伏量400～200m）
イ　小起伏山地（起伏量200m未満）

Ⅰ　山　　地
- Ⅰａ 大山山地
- Ⅰｂ 比内山地
- Ⅰｃ 城ヶ森山地
- Ⅰｄ 高森山地
- Ⅰｅ 高倉山山地
- Ⅰｆ 羽保屋山山地
- Ⅰｇ 高地山山地
- Ⅰｈ 中央山地
- Ⅰｉ 松森山地
- Ⅰｊ 合窪山山地
- Ⅰｋ 三哲山山地
- Ⅰｌ 合津山地
- Ⅰｍ 尾去沢山地

Ⅱ　丘　　陵
- Ⅱａ 比内丘陵地
- Ⅱｂ 味噌内丘陵地
- Ⅱｃ 小坂丘陵地

Ⅲ　台地、低地
- Ⅲａ 大館盆地
  - （1）大館段丘地
  - （2）長木川、下内川低地
  - （3）米代川低地
  - （4）犀川，引欠川低地
- Ⅲｂ 十二所先行谷低地
- Ⅲｃ 長木川峡谷低地
- Ⅲｄ 元山段丘地
- Ⅲｅ 小坂川谷低地

第３図　地形区分図

第２節　歴史的環境

大館盆地には、旧石器時代から近世までの遺跡が数多く知られているが、ここでは土飛山館跡周辺の遺跡（第４図、第１表）を中心に、歴史的な環境を概観する。

米代川流域は、縄文時代から北と南の「文化圏」の接触地帯であったと言われている。米代川の上・中流域に位置する大館地方（大館盆地）は、古くは「ひない」と呼ばれ、火内、比内、肥内と記述された地域である。

旧石器時代の遺跡としては、大型の石刃が発見された松木高館平（第４図７、以下「第４図」を省略する）のみである。旧石器時代の遺跡・遺物の発見が少ない理由の一つとして、池内遺跡（42）の地表下にも約４ｍの厚さで堆積し、トウヒ属により構成された森林を埋没させた十和田火山灰起源の火砕流をあげる研究者もいる。

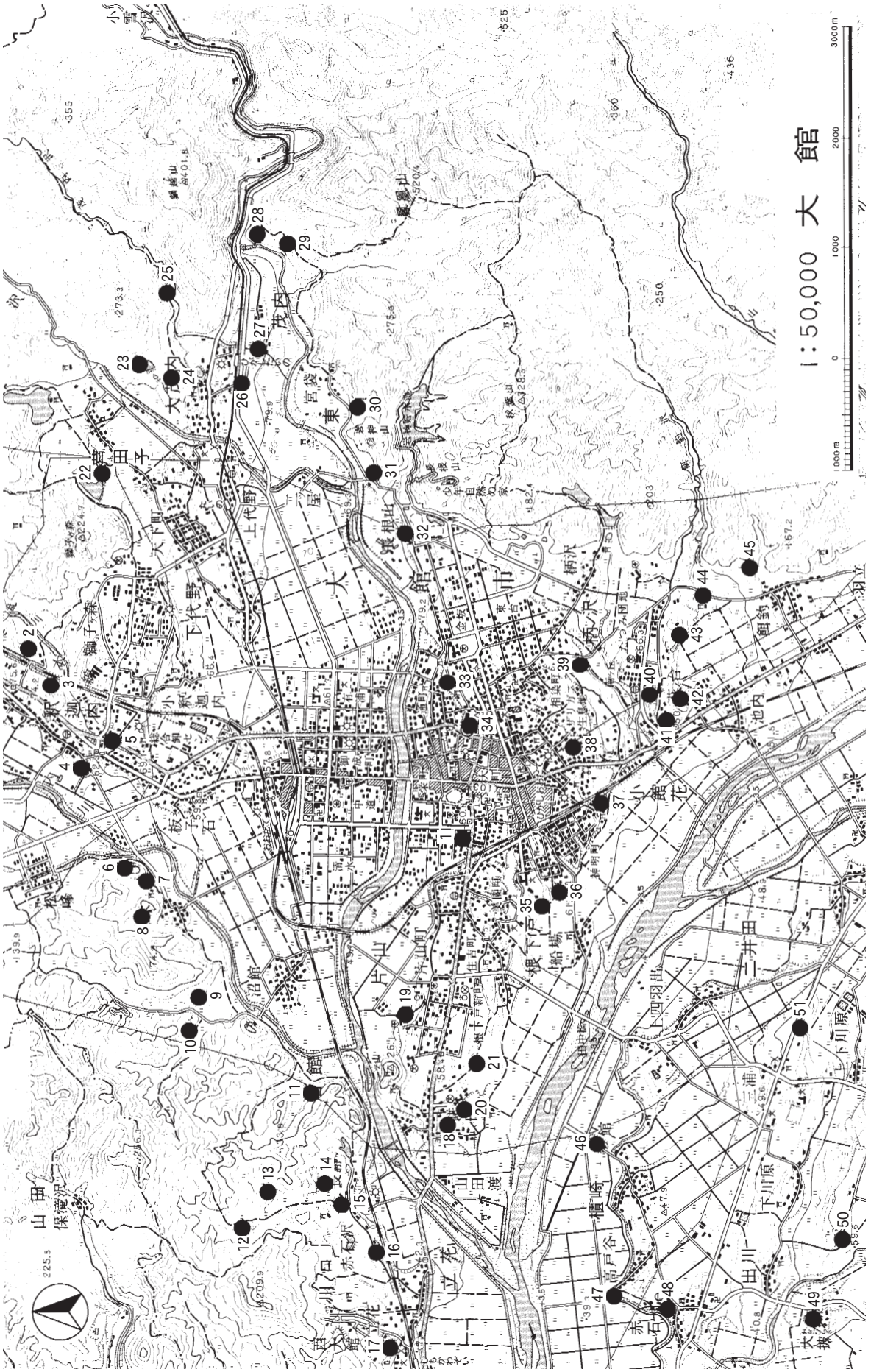
縄文時代の遺跡としては、松木（8）、長瀞Ⅰ（15）、餅田屋敷添（18）、芋掘沢（20）、根下戸道下（21）、諏訪台（24）、塚ノ下（26）、茂内（27）、玉林寺跡（29）、太平山（36）、扇田道下（39）、萩ノ台Ⅰ（40）、萩ノ台Ⅱ（41）、池内、上野（43）、餌釣館（44）、餌釣（45）の各遺跡がある。このうち、これまでに発掘調査され、報告書等が刊行された遺跡は、餅田屋敷添、芋掘沢、根下戸道下、諏訪台、塚ノ下、玉林寺跡、萩ノ台Ⅱ、池内、餌釣館、上野、餌釣の11遺跡である。

縄文時代早期の遺跡は、上記の根下戸道下のほか、図幅の外となるが大館市街地南東の扇田地区を中心とする区域に分布している横沢、寒沢、寒沢Ⅱ、本道端、山館上ノ山、野沢岱、鳶ヶ長根Ⅳ、野沢岱Ⅱがあげられる。横沢、寒沢、本道端、鳶ヶ長根Ⅳ、野沢岱Ⅱでは貝殻腹縁文・貝殻沈線文系の土器が出土しており、鳶ヶ長根Ⅳと寒沢では表裏縄文系の土器も出土している。山館上ノ山では、細い粘土紐を貼り付けた細隆起線による幾何学的な文様の施文された土器が出土している。

縄文時代前期の遺跡としては、松木、餅田屋敷添、芋掘沢、塚ノ下、茂内、萩ノ台Ⅱ、池内があげられる。萩ノ台Ⅱには台地斜面に「捨て場」があり大量の遺物が出土しており、萩ノ台Ⅰでは大木式土器が出土している。芋掘沢では直立させた深鉢土器に偏平な河原石を被せた土器棺が出土している。萩ノ台Ⅱでは谷状地形の中に「捨て場」が確認され、所謂「茂屋下岱式土器群」から中期の円筒上層ｅ式土器まで堆積していた。池内では、縄文時代前期中葉～末葉の集落全域が調査された。萩ノ台Ⅱ、池内からは岩偶が出土している。

縄文時代中期の遺跡としては、長瀞Ⅰ、芋掘沢、諏訪台、塚ノ下、玉林寺跡、扇田道下、萩ノ台Ⅱ、餌釣館、餌釣の各遺跡がある。玉林寺跡では竪穴住居跡が１軒、餌釣館では竪穴住居跡が12軒が調査され、円筒上層式土器とともに大木式土器が出土した。餌釣では竪穴住居跡１軒と焼土遺構１基、横沢では竪穴住居跡１軒、フラスコ状土坑25基、萩ノ台Ⅱでは台地の斜面に「捨て場」があり、円筒上層ａ～ｅ式土器が出土した。

縄文時代後期の遺跡としては、長瀞Ⅰ、諏訪台、塚ノ下、扇田道下、萩ノ台Ⅱ、餌釣館、餌釣などの遺跡がある。塚ノ下では目に天然アスファルトを埋め込んだ土偶などが出土している。諏訪台では竪穴住居跡２軒とフラスコ状土坑３基などを検出した。萩ノ台Ⅱでは台地の斜面に「捨て場」が検出され、十腰内Ⅰ式・Ⅱ式土器とともに翡翠の大珠３点が出土した。餌釣館と餌釣では竪穴住居跡が各１軒検出されている。


1:50,000
大館
1000m
0
1000
2000
3000m
大館市
山田
保滝沢
川口
西大館
赤石
立花
片山
沼館
根下戸新町
船場
根下戸
柄沢
小豊花
四羽出
二井田
上川原
下川原
出川
槇崎
高戸谷
長森
大館
東
茂内
大内
上代野
下代野
大下町
岩瀬
宮袋
小雪沢
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51

第４図　周辺遺跡位置図

縄文時代晩期の遺跡としては、長瀞Ⅰ、諏訪台、太平山、餌釣館の各遺跡がある。餌釣館では、竪穴住居跡とフラスコ状土坑などを検出している。

続縄文（弥生）時代の遺跡としては、片山館コ（19）、諏訪台の各遺跡がある。諏訪台では竪穴住居跡６軒が調査されている。片山館コでは後北式土器が出土した。

古代（奈良・平安時代）の遺跡としては、土飛山館（1）、釈迦内中台Ⅰ（2）、沼館（11）、諏訪台、塚ノ下、金坂（33）、稲荷中岱（35）、池内、上野、餌釣館、餌釣などの各遺跡があげられるが、この時代の遺跡の特徴として、十和田火山起源の降下火山灰との関係があげられる。その火山灰の産状は、遺構の中に凹レンズ状に堆積、霜降り状に混入、火山灰のみの堆積などの状態で確認されており、火山灰との時間的関係を示唆している。上野では谷に火山灰が堆積した後で竪穴住居が構築され、その竪穴住居跡のかまど周辺から土師器とともに擦文土器が出土している。扇田道下では竪穴住居跡群と掘立柱建物跡群が検出されている。これらの他に横沢では細長い独立台地を空堀で２つに区画しており、その一区画から竪穴住居跡群が検出されている。釈迦内中台Ⅰでは、平坦な台地面から数十軒の

第１表　土飛山館跡と周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代
1	土飛山館	大館市字宗福寺後	中
2	釈迦内中台Ⅰ	大館市釈迦内字中台	古
3	釈迦内中台Ⅱ	大館市釈迦内字中台	古
4	釈迦内古館	大館市釈迦内字釈迦内	中
5	釈迦内館	大館市釈迦内字館	中
6	高館	大館市松木字高館平	中
7	松木高館平	大館市松木字高館平	旧
8	松木	大館市松木字家後	縄前
9	鍛治屋敷	大館市沼館字鍛治屋敷	縄・古
10	下堤沢	大館市沼館字下堤沢	古
11	沼館	大館市沼館字細越	古・中
12	赤石沢Ⅰ	大館市川口字上赤石沢	縄
13	赤石沢Ⅱ	大館市川口字下赤石沢	縄
14	長瀞Ⅱ	大館市沼館字長瀞	縄
15	長瀞Ⅰ	大館市沼館字長瀞	縄
16	押館	大館市川口字十三森	中
17	下川沿	大館市川口字隼人岱	不明
18	餅田屋敷添	大館市餅田字中道下屋敷添	縄
19	片山館コ	大館市片山字立坑上岱	続縄・中
20	芋掘沢	大館市餅田字根下戸道下芋掘沢	縄
21	根下戸道下	大館市餅田字根下戸道下芋掘沢	縄・古
22	芦田子上岱	大館市芦田子上岱	縄・古
23	大茂内	大館市大茂内字諏訪台	縄
24	諏訪台	大館市大茂内字諏訪台	縄・弥・古
25	小茂内沢	大館市大茂内字上瘤之木台	縄
26	塚ノ下	大館市大茂内字塚下	縄後・古・中
27	茂内	大館市茂内字膳棚下	縄
28	鬼ヶ城	大館市茂内字鬼ヶ台	中
29	玉林寺跡	大館市茂内字鬼ヶ台	縄・中
30	宮袋	大館市東字宮袋	縄
31	岩神	大館市東字岩神	縄
32	青嵐亭跡	大館市東字山屋敷下	近
33	金坂	大館市字金坂	古・中・近
34	大館城	大館市字中城・三ノ丸・桂城・長倉・片町・上町	近
35	稲荷中岱	大館市稲荷中岱	古・中
36	太平山	大館市神明堂後	縄晩
37	小館花館	大館市小館花	中
38	ザリガニ生息地	大館市	天然記念物
39	扇田道下	大館市字扇田道下	縄・古
40	萩ノ台Ⅰ	大館市小館花字萩ノ台	縄
41	萩ノ台Ⅱ	大館市小館花字萩ノ台	縄
42	池内	大館市池内字上野	縄・古
43	上野	大館市池内字上野	縄・古
44	餌釣館	大館市餌釣字山王岱・柄沢字山王台	縄・古・中
45	餌釣	大館市餌釣字館	縄・古・中
46	櫃崎館	大館市櫃崎字館宅地	中
47	高戸谷館	大館市櫃崎字上坂上	中
48	赤石館	大館市赤石字屋敷	中
49	大披館	大館市大披字大披	中
50	下野	大館市本宮字下野	縄
51	ケラキ森一里塚	大館市二井田ケラキ森	近

竪穴住居跡が、台地裾の斜面部から製鉄遺構、排滓場などが検出され、製鉄工房域を伴う大規模な集落跡であることが分かっている。

中世の遺跡は、土飛山館（1）、釈迦内古館（4）、釈迦内館（5）、高館（6）、沼館、押館（16）、片山館コ、塚ノ下、鬼ヶ城（28）、玉林寺跡、金坂、稲荷中岱、小館花館（37）、餌釣館、餌釣、櫃崎館（46）、高戸谷館（47）、赤石館（48）、大披館（49）の19遺跡を数える。この内、塚ノ下、玉林寺跡、金坂、稲荷中岱を除く15遺跡は館跡である。これらの多くは沖積地や河川をのぞむ段丘の縁や先端部上などに立地している。下内川沿いには、支流乱川の右岸に釈迦内古館、左岸に釈迦内館、花岡川が下内川に合流する西岸に高館、その下内川が長木川に合流する西岸には沼館が位置している。これに対峙するように長木川左岸には、その合流点を北にのぞむ片山館コ、これと同じ大館段丘北縁に土飛山館が、長木渓谷の沖積地への出口付近に鬼ヶ城が位置する。この長木川と米代川の合流点には、これを南方にのぞむ押館、北方にのぞむ米代川左岸の高戸谷館がある。この他、米代川の左岸には赤石館、櫃崎館が、右岸には小館花館、餌釣館、餌釣が位置し、引欠川左岸の沖積地をのぞむ段丘北縁に大披館が位置する。

近世の遺跡としては、池遺構などが見られる庭園跡の青嵐亭跡（32）、集落跡の金坂、近世城館の大館城（34）、ケラキ森一里塚（51）がある。

引用・参考文献

大館市史編さん委員会　『大館市史　第一巻』　1979（昭和54）年

大館市教育委員会　『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』　1990（平成2）年

秋田県　『土地分類基本調査　大館』　1986（昭和61）年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　2006（平成18）年

秋田県教育委員会　『餌釣遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
秋田県文化財調査報告書第210集　1991（平成3）年

秋田県教育委員会　『上野遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』
秋田県文化財調査報告書第222集　1992（平成4）年

秋田県教育委員会　『萩ノ台Ⅱ遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』
秋田県文化財調査報告書第236集　1993（平成5）年

秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書－遺構篇』
秋田県文化財調査報告書第268集　1997（平成9）年

秋田県教育委員会　『根下戸道下遺跡－大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
秋田県文化財調査報告書第297集　2000（平成12）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布報告書』　秋田県文化財調査報告書第413集　2006（平成18）年

第３章　　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

土飛山館跡は前述のように、ＪＲ花輪線東大館駅の北約0.7㎞、大館市の中心部を二分して西流する長木川左岸の大館段丘北縁に立地している。ここは長木川の側面浸食により内湾したところにほぼ北へ突出する舌状の地形となっている（図版１）。

遺跡の範囲は南北（長軸方向）250m、東西（短軸方向）150m、であり、標高は64m前後、段丘北側の長木川左岸低地との比高は10mほどである（第５図）。遺跡は、空堀で区画された郭が連なった中世城館として知られていた。遺跡のほぼ中央部には北西～南～北東へ弧状に延びる幅約10mの空堀が配され、遺跡を南北に区画している。この区画によって広い段丘面から独立した段丘北縁の突出部が主郭とみなされる。主郭は平坦でその面積は6,000㎡ほどになる（第56図、図版２）。

現在、遺跡及びその周辺は市街地化が進み、遺跡も住宅地となっている。空堀は浅い溝状のくぼみとしてその痕跡を現地表面にとどめているが（図版６）、この窪んだ空堀跡の形状に沿っても住宅が建てられている（図版３）。主郭部も稲荷神社の境内と宅地として利用されている。また主郭を成す北西～北～北東の段丘崖面は、西から北側にかけては本来の姿をとどめる箇所も見られるが、東側はコンクリート擁壁に覆われている。また遺跡の南側は、国道７号敷設のため段丘面が東西に開削されその深度は2.5mに達する。国道南側では、宅地造成等のための切り土も見られ、遺跡南東端部にわずかに本来の地形が残るのみである。今回の調査対象範囲は、その北端が上記の空堀南縁（ＳＤ１）に接し、南端ラインが国道７号の北縁と接する位置にある（第６図）。また、調査範囲Ａ区の南側西寄りは、現生活道路建設のため、大きく切り土されている（第８図ｃ－ｂ）。

遺跡はかつて、舌状に張り出す城館主郭部を北端にして、その南側の段丘上に展開していたものと判断される。しかし、主に近代以降の畑作や戦後の都市化・宅地化は段丘上面の表土層だけでなくその下層の地山層にまで及ぶ大きな影響を与え、遺物包含層や遺構が失われている箇所が少なくない。

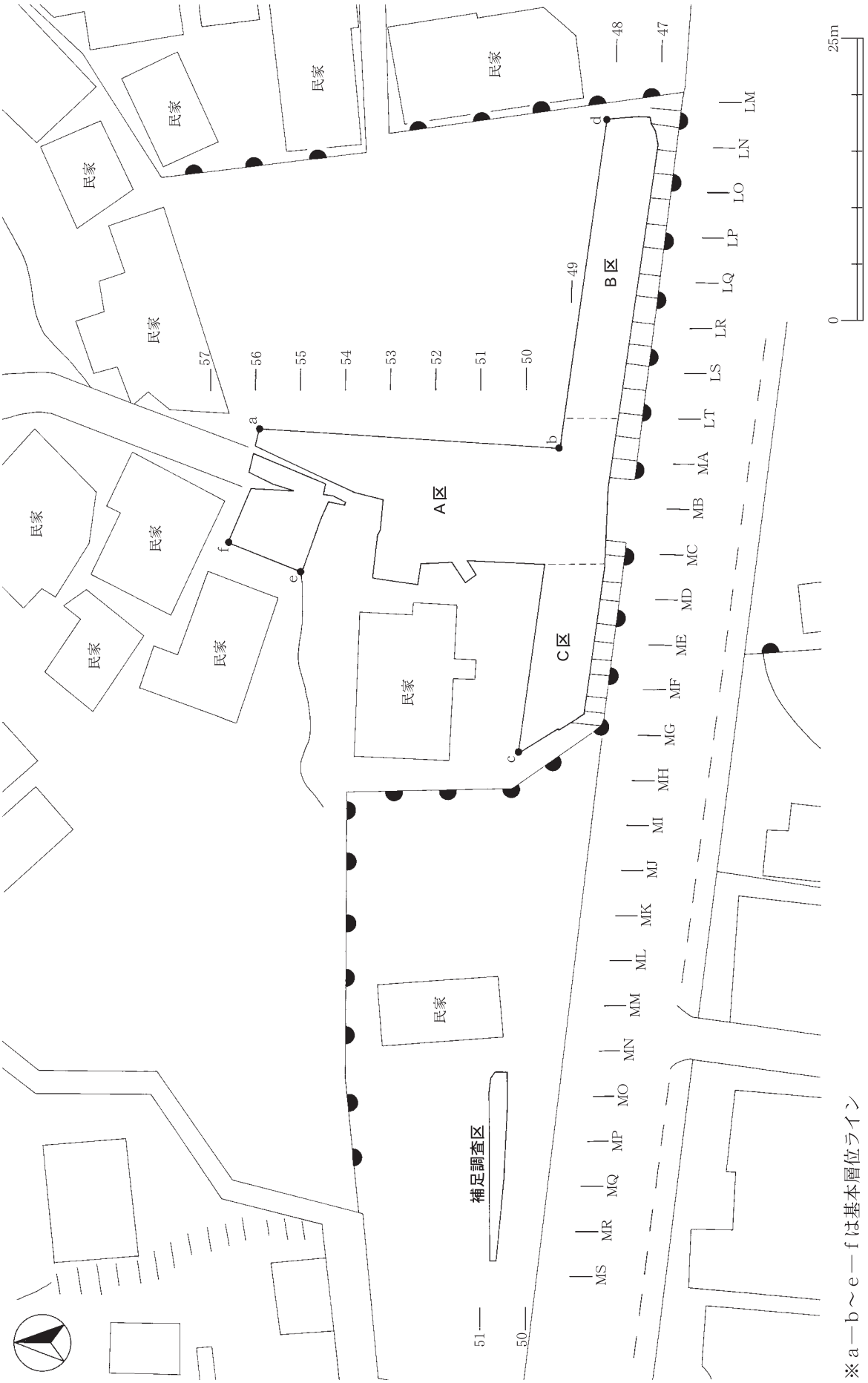
基本層位は、調査範囲Ａ区の東側境界ライン（ａ－ｂ）とＢ区北側境界ライン（ｂ－ｄ）、Ｃ区北側境界ライン（ｃ－ｂ）、Ａ区北側西寄りの民家駐車場部分西側境界ライン（ｅ－ｆ）の４土層ラインで観察した（第７・８図）。基本層位は下記の通りである。また、第Ⅴ層以下が地山層であるが、宅地の攪乱部分を掘り下げて観察した第Ⅵ層以下については、本節末に土色を掲載している。

第Ⅰ層：黒褐色土（10YR2/2）を中心とする現表土層。
第Ⅱ層：黒色土（10YR2/1）の旧表土層。
第Ⅲ層：黒褐色土（10YR2/1.5）の遺物包含層。
第Ⅳ層：暗褐色土（10YR3/3）の地山漸移層。
第Ⅴ層：黄褐色土（10YR5/6）の地山層。

水門町
明間
ボーリング
豊町
市立総合病院
市立総合病院
豊町
大館新橋
美園町
御坂町
幸町
東北電気
保安協会
青色申告会館
遺跡範囲
0
100m

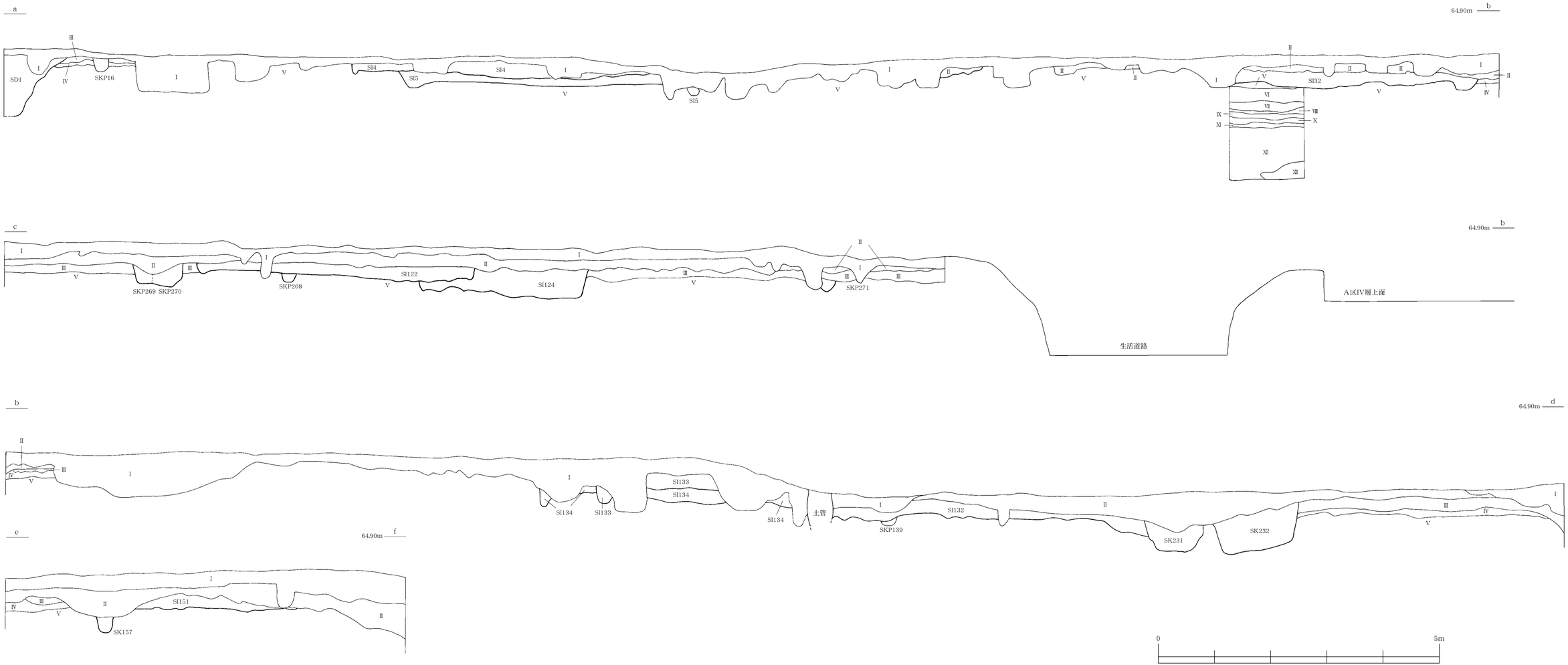
第５図　遺跡周辺地形図

第６図　遺跡範囲と調査区



第７図　グリッド配置図

※ａ—ｂ～ｅ—ｆは基本層位ライン



第８図　調査区の基本層位

現表土層である第Ⅰ層は、戦後の宅地化などによって形成された層である。道路部分はアスファルトや砕石に覆われ、宅地部分にはコンクリートで覆われた部分も見られる。また、水道・下水管の埋設や住居や電柱などの構造物の建て替えや撤去に伴う基礎部や浄化槽の埋め戻しなどによる攪乱も少なくない。地山土と大小の建設用の礫やコンクリートブロック、近現代の遺物などに混じって土師器、須恵器が混入している。

第Ⅱ層は、主に近代以降の耕作によって形成された旧表土層である。十和田火山灰（Ｔｏ－ａ）と推測される白色粒子を含み、近世以降の陶磁器のほかに、土師器、須恵器が混入していることから、当時の耕作が十和田火山灰を含んでいた第Ⅲ層上位を攪拌していたものと推測される。

第Ⅲ層は、白色粒子を含まないことから十和田火山灰（Ｔｏ－ａ）以前の遺物包含層であると推測される。当層は、第Ⅰ・Ⅱ層及び古代の竪穴住居などの遺構の構築によって失われているが、Ｃ区とＢ区東側は比較的良く残存している（第７図、第８図ｃ－ｂ、ｂ－ｄ）。

第Ⅳ層、第Ⅴ層からの遺物の出土はなかった。

なお、遺構の確認は主に第Ⅳ層～第Ⅴ層上面で行った。

第Ⅵ層：明黄褐色土（10YR6/8）
第Ⅶ層：にぶい黄橙色土（10YR6/4）
第Ⅷ層：にぶい黄橙色粘土（10YR7/3）
第Ⅸ層：にぶい黄橙色土（10YR7/4）
第Ⅹ層：浅黄橙色土（10YR8/3.5）
第Ⅺ層：浅黄橙色土（10YR8/4）
第Ⅻ層：浅黄橙色土（10YR8/3）
第ⅩⅢ層：黒褐色粘土（10YR2/2）

第２節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。国家座標第Ｘ系に整合する点（Ｘ＝30,250、Ｙ＝－23,800）を原点（MA50）とし、座標南北方向を南北基線、これに直行する方向を東西基線として、この東西南北基線に沿って４ｍ×４ｍの方眼を組み、その交点にグリッド杭を打設し、グリッド杭には東から西に向かって東西方向を示す・・・・ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ・・・・というアルファベット２文字と、南から北へ向かって昇順する・・・・48・49・50・51・・・・の２桁の数字を組み合わせた記号を記入した。各グリッドの呼称は南東隅の杭の記号を用いた（第７図）。

検出された遺構には、種別を問わず確認した順に１から通し番号を付した。また、番号を登録した後に遺構と判断されなかったものは欠番とした。

遺物は遺構内出土のものは、遺跡名・遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは遺跡名・出土グリッド・出土層位・出土年月日などを記入して取り上げた。

調査の記録は主に図面と写真によった。図面はグリッド杭を基準とした簡易遣り方測量を採用し、平面図・断面図ともに、原則的に１／20の縮尺で作成した。遺物出土状況などの細部の表現が必要なものについては１／10の縮尺で作成した。写真撮影は、35㎜のモノクロ、カラーリバーサルフィルムを中心に、６×4.5㎝中判カメラとデジタルカメラによる撮影を交えて行った。

なお、調査にあたっては、調査範囲を３区に分割して調査を進めた。現生活道路や宅地の駐車場等を含む南北に長い中央部をＡ区（410㎡）、その東側をＢ区（180㎡）、西側をＣ区（110㎡）とした。

この他にＣ区の西約30mほどのところに補足調査区（20㎡）がある（第７図）。

第３節　調査の経過

平成17年９月14日から11月４日まで実施した発掘調査の経過は次のとおりである。なお、発掘調査に先立ち、９月７日より表土除去を行った。

【第１週】９月14日～９月16日

９月14日、発掘器材を搬入し、Ａ区北側東寄り50㎡の調査を行う。基本土層ライン（ａ－ｂなど）を設定し基本土層図の作成もあわせて開始する。

Ａ区北端部より空堀（ＳＤ１）の南縁、その南側から竪穴住居跡など古代の遺構群を検出する。

【第２週】９月20日～９月22日

本週の３日間を通行止めにして、切り回しが不可能なＡ区北端部の生活道路部分約15㎡の調査を行う。ここからは空堀（ＳＤ１）の南縁、古代の竪穴住居跡などが検出され、22日午後精査を終了し、埋め戻しを行い生活道路を復旧した。

【第３週】９月26日～９月30日

Ａ区は、北側東寄り50㎡の精査を完了、南側東寄りの区域からは竪穴住居跡を検出し精査を継続する。Ｃ区は粗掘りを完了し遺構検出作業に移る。ここからは焼土を伴う遺構２基（ＳＮ84、ＳＩ122カマドなど）を検出した。28日、北鹿新聞記者が取材のため来跡。

【第４週】10月３日～10月７日

Ａ区北側西寄りの民家駐車場部分の表土除去を行い、遺構検出作業に入る。Ｂ・Ｃ区の遺構検出作業を行う。Ｂ区より、重複するものを含む竪穴住居跡を計５軒検出し調査を進める。５日、Ａ区東寄り160㎡の調査が終了。これを国交省に引き渡し生活道路の切り回し工事が開始する。

【第５週】10月11日～10月14日

先週開始した生活道路の切り回し工事が完成したため、Ａ区中央を南北に貫く現生活道路部分の表土除去を行い、遺構の確認作業を行う。この間Ｂ・Ｃ区の遺構精査も並行して行う。28日、秋田魁新報記者が取材のため来跡。

【第６週】10月17日～10月21日

Ａ区中程西寄りの民家車庫部分の表土除去を行い、遺構検出作業を行う。また、Ｂ・Ｃ区では、検出された竪穴住居跡などの精査を継続した。21日、調査が終了したＡ区西寄りの民家の駐車場及び車庫部分と大きな切り土により遺構がすでに失われていた現生活道路の南側部分を引き渡し埋め戻しを行う。

【第７週】10月24日～10月29日

Ａ区中程西寄りの民家玄関アプローチ部分の調査を終了し、28日引き渡し埋め戻しを行う。これによりＡ区は調査を終了。Ｂ・Ｃ区は、検出された竪穴住居跡などの精査を継続する。29日、遺跡見学会を行う。雨天にもかかわらず100名以上の見学者が訪れた。

【第８週】10月31日～11月４日

Ｂ・Ｃ区の遺構精査、図面作成を行う。４日、調査を完了し、現場を撤収する。

調査範囲の国交省への引き渡しは、11月７日に行われた。

【補足調査】平成18年１月11日

Ｃ区の西約30mほどのところで、歩道拡幅工事による法面部分20㎡の補足調査を行った。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は17年11月中旬より開始した。現場で作成した遺構の平面図・断面図等より第２原図を作成した。遺物は洗浄、注記、分類、接合を行い、ある程度復元できた土器等については実測図を作成し、中には採拓を行った土器もある。

遺構並びに遺物の図面浄書、報告書本文原稿の作成等を含む、本報告書の編集作業は平成19年１月より開始した。遺物の写真は35㎜モノクロフィルムで撮影した。

報告書の作成にあたって、遺構の記述及び、遺構図については、調査時に３区に分割して調査した関係から、Ａ区、Ｂ区、Ｃ区の順で各区ごとに記載している。遺物については、上記３区から出土した遺物を一括して遺構内出土遺物と遺構外出土遺物に分けて整理を行った。遺物実測図の報告書への掲載にあたっては、遺構の記述の後に、各区検出の遺構から出土した遺構内出土遺物を一括して掲載しているが、各遺物図は遺構の記載と同じ順に並べてある。また、遺構外出土遺物は、遺構内出土遺物の後に一括して掲載している。

県民への公開・報告については、上述、調査期間中の平成17年10月29日に実施した遺跡見学会のほかに、「平成18年度県北地区埋蔵文化財発掘調査地域報告会」（平成18年４月29日：大館市中央公民館）において、菊池が報告し、遺跡・遺構等の写真と出土遺物を展示した。

引用・参考文献

大館市史編さん委員会　『大館市史　第一巻』　1979（昭和54）年

大館市教育委員会　『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』　1990（平成2）年

秋田県　『土地分類基本調査　大館』　1986（昭和61）年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図（県北版）』　2006（平成18）年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布報告書』　秋田県文化財調査報告書第413集　2006（平成18）年

秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報24』　2006（平成17）年

秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報25』　2007（平成18）年

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構の概要（第９図）

本調査により検出された遺構は、竪穴住居跡20軒、竪穴状遺構１基、土坑11基、柱穴列５列、溝跡10条、焼土遺構２基、性格不明遺構３基、柱穴様ピット107基（補足調査区検出の１基を含む）の合計159基である。これらの年代については、竪穴住居跡など集落を構成する遺構群は、遺構の形状や出土遺物などから概ねの遺構が平安時代と判断された。ただし、上記の柱穴列、溝跡、柱穴様ピットの中には、出土遺物が無く時代を明確にできないが、検出状況や埋土の堆積状況などから平安時代以降と推定されるものも含めている。また、Ａ区北側からは石匙（53－33）が出土しているが、調査範囲内からは縄文時代の遺構は検出されなかった。

検出した遺構の分布には明らかな偏りが見られる。調査範囲全体に耕作や宅地化の影響を受けているが、Ｂ区、Ｃ区の分布密度に対し、道路や宅地部を多く含むＡ区の中程から南側にかけては明らかに密度が薄く、特に生活道路の建設のために大きな切り土が行われたＡ区南側西寄りの区域からは遺構の検出が皆無であった（第８図ｃ－ｂ）。本来は、調査範囲全体にほぼ均一な密度で、竪穴住居を中心とする古代の集落を構成した遺構が分布していたものと推定される。

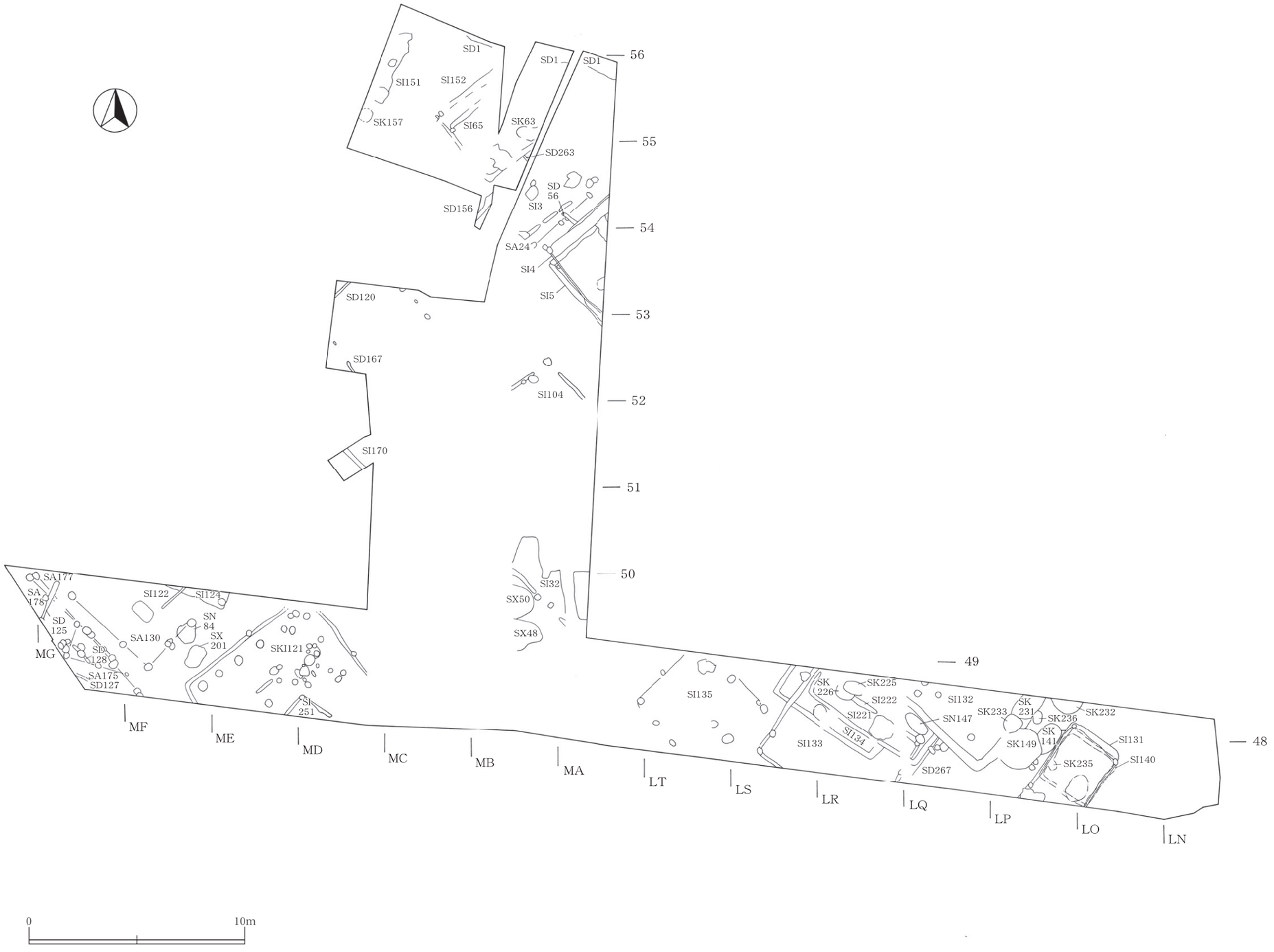
次に検出した遺構を種別に述べる。調査範囲内から検出された20軒の竪穴住居跡の内､19軒が部分確認で、全形が確認できたのはわずかに１軒（ＳＩ140）だけである。これは、上記の耕作や宅地化の影響のほかに調査範囲の形状や規模にもよる。特に竪穴住居の密度が濃いＢ区の南北幅が４ｍほどしかないことも大きな理由である。また、上記の竪穴住居跡の多くが、貼り床土によって床面を整え、壁溝を巡らしているのに対し、地山を床面として、壁溝を持たない方形の竪穴の遺構を竪穴状遺構として、竪穴住居跡と区別した（ＳＫＩ121)。

調査範囲内からは、多様な焼土が検出されているが、住居内のカマドなど遺構に伴うものや遺構内で検出されたものについては、当該の遺構で取り上げている。ただし、性格が不明確で遺構に伴わない単体の焼土を焼土遺構とし、調査範囲内から２基検出している（ＳＮ84・147)。

検出したほとんどの遺構は発掘調査時に現場で遺構の種別、性格、時代等を判断したが、５列の柱穴列はすべて、柱穴様ピットの整理作業において、列を構成する各柱穴の形状・規模・埋土の特徴、柱穴間距離のほか、当該柱穴列の軸方位と近接する竪穴住居跡の軸方位との対応関係をなどを検討して認定したものである（ＳＡ24・130・175・177・178)。

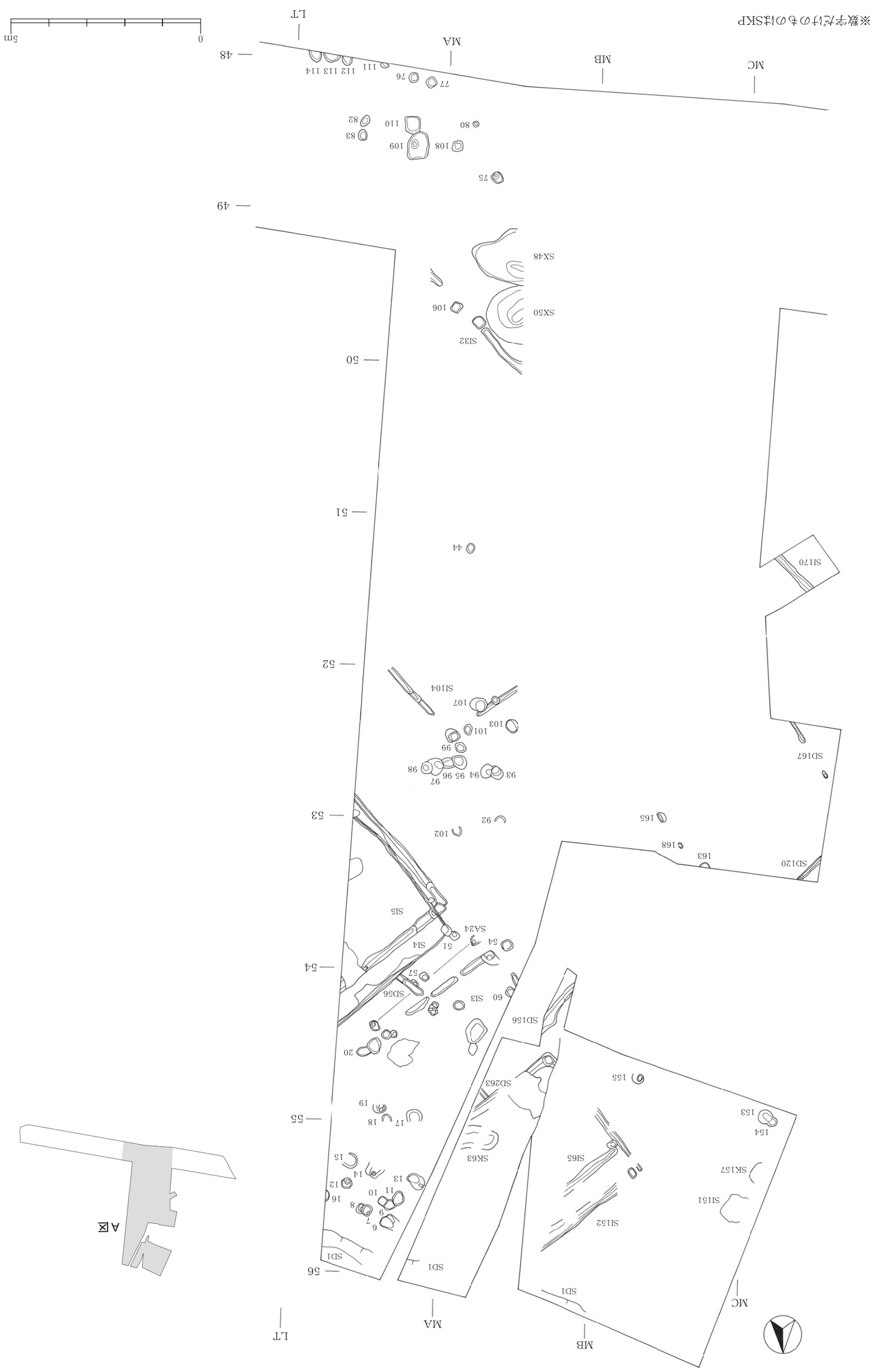
性格が不明で、形状、規模などを検討した結果、上記の種別に属さないと考えられる遺構を性格不明遺構とした。調査範囲内からは３基（ＳＸ48・50・201）が検出されており、検出状況や埋土の堆積状況、出土遺物からいずれも平安時代と判断した。

以上、検出遺構の概要を述べたが、各遺構の詳細については、第２節～第４節で各調査区ごとに述べる。また、補足調査区の調査状況などについては、第５節で、遺構内から出土した遺物については第６節で述べる。


SD1
SD1
SD1
56
SI151
SI152
SK157
SI65
SK63
55
SD263
SD
56
SI3
SD156
54
SA24
SI4
SD120
SI5
53
SD167
SI104
52
SI170
51
50
SI32
SX50
SX48
SA177
SA
178
SI122
SI124
SN
84
SD
125
SA130
SX
201
SD
128
SKI121
MG
SA175
SD127
SI
251
49
SI135
SK
226
SK225
SI222
SI221
SI134
SI133
SI132
SK233
SK
231
SK236
SK232
SN147
SK
141
SK149
SI131
SI140
SK235
SD267
48
MF
ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
0
10m

第９図　遺構配置図

第10図　A区遺構配置図



第２節　Ａ区の検出遺構（第10図）

Ａ区調査範囲の西側及び北端部は出入りの多い複雑な形状をしている。これは、本区西側の調査範囲に民家の駐車場や車庫、玄関アプローチ部分が含まれているためである。また、北端部は、当区を南北に貫く生活道路下を調査する際、生活道路をできるだけ確保するために、北側の調査区を小刻みに切り回して調査を行ったためである。これによりこの区域には若干の未調査部分が生じている。

本区からは、竪穴住居跡９軒、土坑２基、柱穴列１列、空堀の南縁を含む溝跡６条、性格不明遺構２基、柱穴様ピット52基の合計72基の遺構が検出された。ただしこれらの大半は北側に集中している。前述のように本区は、南側西寄りの部分が生活道路の建設のために大きく切り土されており、ここからの遺構の検出は皆無であった。また南側東寄りの区域は、住宅建築とその際の浄化槽等の埋設によって地山層に及ぶ掘削を受けており、検出された遺構は、竪穴住居跡の部分検出などわずかである。

なお、各遺構に伴うピットの規模などについては「第２表　Ａ区検出遺構内ピット観察表」に掲載している。また、単体の柱穴様ピットについては、その配置を「第10図」に、規模などを「第３表　Ａ区検出柱穴様ピット（ＳＫＰ）観察表（１）と第４表　同（２）」に記載している。

１　竪穴住居跡

ＳＩ３（第11図）

《地区》ＬＴ54、ＭＡ53・54グリッドに位置し、南東に１ｍほどの間隔を置きＳＩ４が位置している。

《確認》第Ⅴ層上面の精査中に南東および南西壁の溝、南隅などの柱穴のプランを確認した。

《重複》Ｐ２がＳＫＰ20を切る。また、ＳＫＰ60に床面を切られていたものと推測される。

《規模と平面形》Ｐ１－Ｐ２間3.85ｍを南東辺とする方形の竪穴住居であると推定される。南東辺と南西辺は壁溝が確認できたが、北東辺と北西辺の壁、壁溝は確認できなかった。また、南東辺がＮ－51°－Ｅ、南西辺がＮ－41°－Ｗを指す。

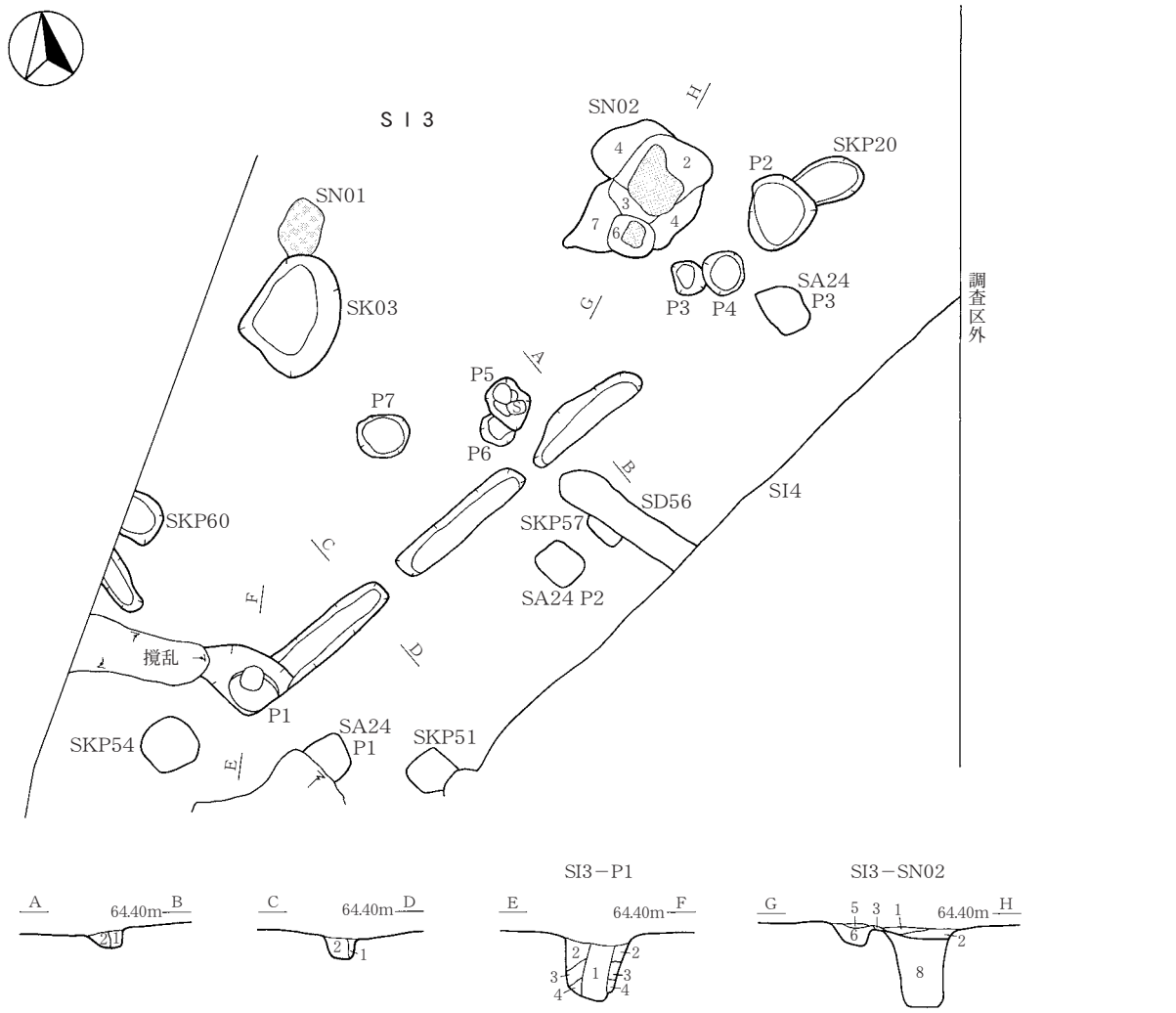
《壁・壁溝》壁は既に失われていた。南東の壁溝は２か所途切れるが2.77ｍにわたって残存している。南西の壁溝は0.5ｍほど確認できた。両者とも深さが12㎝、幅が17～20㎝ほどである。

《埋土》既に床面に及ぶ削平を受けており、埋土は壁溝と柱穴等に残存するのみである。壁溝は２層に、Ｐ１は４層に分層できた。壁溝の第１層が板材の、Ｐ１の第１層が柱材の痕跡であると思われる。

《床面》本来の床面の大半は既に失われているが、部分的に堅く締められている面が残存している。住居域内の２か所から焼土（ＳＮ01・02）が検出された。ＳＮ01はカマドあるいは何かを焼成した炉などの火床部分と推定され、上記の壁溝とほぼ同時に検出された、長軸58㎝　短軸46㎝　深さ22㎝の土坑（ＳＫ01）に切られることから、ＳＮ01は、本住居跡よりも古い可能性がある。また、ＳＮ02は、本住居跡北東壁に敷設されていたカマドである可能性が考えられる。

《柱穴》南側に角を置く掘り形のＰ１が南隅の、東側に角を置く掘り形のＰ２が東隅の柱穴であると推定される。この他に５基（Ｐ３～７）の柱穴が検出された（第２表）。

《出土遺物》本住居跡の精査中に、ＳＮ02などから土師器甕破片14点、鉄滓１点（15ｇ）が出土した。



ＳＩ３
1　黒褐色土(10YR2/2) 地山粒φ1~10㎜混入
2　黒褐色土(10YR3/2) 地山粒φ3~10㎜20% 混入

ＳＩ３－Ｐ１
1　黒色土(10YR2/1) しまり弱　地山粒φ1~10㎜混入
2　暗褐色土(10YR3/3) 地山粒φ1~10㎜混入
3　にぶい黄褐色土(10YR5/4) 地山ブロックφ30~50㎜40% 混入
4　暗褐色土(10YR3/3) しまり弱　地山粒φ1~10㎜混入

ＳＩ３－ＳＮ０１
1　明褐色砂質土(7.5YR5/6) 粘性弱

ＳＩ３－ＳＮ０２
1　赤褐色砂質土(5YR4/6) しまり強　粘性弱　炭化物φ1~5㎜混入
2　赤褐色砂質土(5YR4/6) 粘性弱　炭化物φ1~5㎜20%，焼土粒φ1~3㎜混入
3　明褐色砂質土(7.5YR5/6) 粘性弱
④　黄褐色砂質土(10YR5/6) しまり強　粘性弱　炭化物φ1~5㎜10%，地山ブロックφ10~50㎜20% 混入
5　赤褐色砂質土(2.5YR4/6) 粘性弱　炭化物φ1~3㎜混入
6　暗褐色土(10YR3/3) 炭化物φ1~5㎜20%，焼土粒φ1~3㎜混入
⑦　黄褐色砂質土(10YR5/6) しまり強　粘性弱　炭化物φ5㎜混入
8　黒色土(10YR2/1) 地山粒φ1~5㎜混入　礫まじり

ＳＩ３－ＳＫ０３
1　黒褐色土(10YR2/2) 地山粒φ1~10㎜混入

0　2m

第11図　ＳＩ３竪穴住居跡

ＳＩ４（第12図、図版５）

《地区》ＬＴ53・54、ＭＡ53グリッドに位置する。

《確認》第Ⅰ層除去中にＡ区東境界線の西側にほぼ真西に直角を置く三角形の黒褐色土のプランとして確認した。

《重複》ＳＩ05、ＳＫＰ51、ＳＤ56を切る。

《規模と平面形》本来の平面形は、辺長４ｍ以上の方形と推定されるが、南北の隅及び北東壁、南東壁は調査区外にある。確認された北西壁の長さは3.92m、同じく南西壁は3.95mである。軸方位は、北西壁がＮ－49°－Ｅ、南西壁がＮ－37.5°－Ｗである。

《壁・壁溝》現状では、北東壁で床面から10㎝ほどの高さが確認できる。壁溝が確認された。その幅は最大15㎝、深さは34㎝に達する箇所がある。

《埋土》４層に分層した。ただし、第４層は床面を整えるための貼り床土である可能性がある。第１・２・３層は自然堆積であると判断した。

《床面》北西側は第Ⅴ層の地山面を床面としているが、ＳＩ５と重複する範囲などには、部分的に第４層を貼り土して、この上面を床面としていたと推定される。

《カマド》確認できなかった。

《柱穴》西隅に１基確認した。

《出土遺物》無し。

ＳＩ５（第12・13図、図版５）

《地区》ＬＴ52・53・54、ＭＡ53グリッドに位置する。

《確認》ＳＩ４の床面下層より検出した。

《重複》ＳＩ04と重複する。本住居跡が古い。

《規模と形状》ＳＩ04北西壁の南西0.6mに本住居北西壁が位置し、ＳＩ04と同様、辺長４ｍ以上の方形と推定されるが、南北の隅及び北東壁、南東壁は調査区外にある。北西壁は3.57m、南西壁は3.80m確認した。軸方位は北西壁がＮ－50°－Ｅ、南西壁がＮ－41°－Ｗを指す。

《壁・壁溝》現状では、北東壁で床面から15㎝ほどの高さがある。壁溝の幅は16～29㎝、深さは最大で39㎝である。

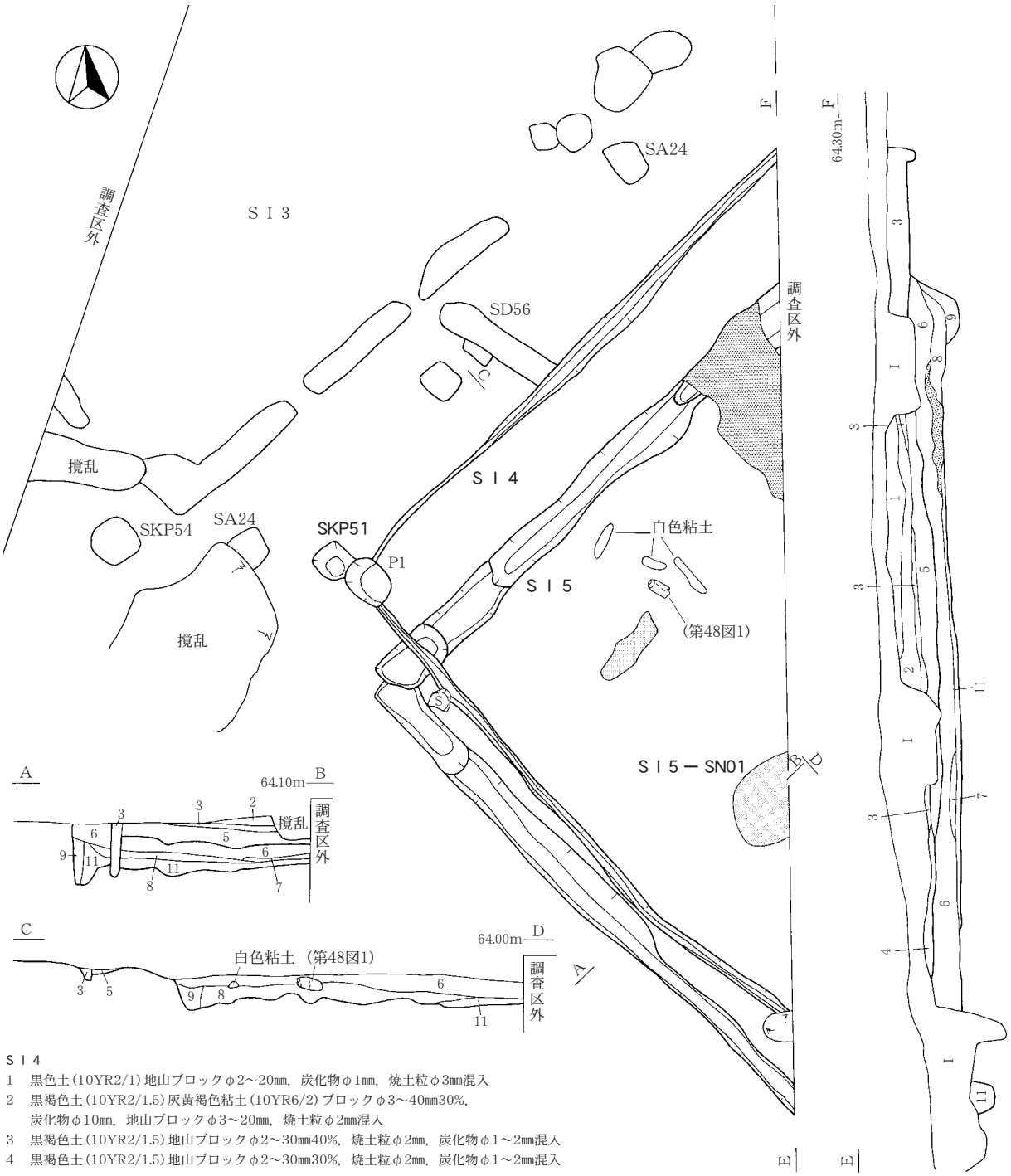
《埋土》７層（第12図、第５～11層）に分層した。ただし、第11層は床面を整えるための貼り床土である。また、第５層は、ＳＩ４構築時に人為的に埋められた可能性がある。第７層は第11層直上の焼土層である。第８・９層は、カマド敷設時に壁溝を埋めた人為堆積である。

《床面》第11層上面および第Ⅴ層の地山面を床面としており、平坦で堅く締められている。中央南西寄りの床面直上より焼土範囲（ＳＮ01）を検出した。

《カマド》北西壁北寄りに付設されていた。８層に分層した。西側の袖部（第８層）と火床（第７層）を検出したが、東側の袖は調査区外にある。

《柱穴》確認できなかったが、北西壁溝の西端部と南西壁溝の西端部が深く掘削されていた。

《出土遺物》埋土やカマドから土師器甕の破片が多数出土したが器形を復元できるものは無かった。また、床面直上からはフイゴの羽口が出土し図化した（第48図１）。



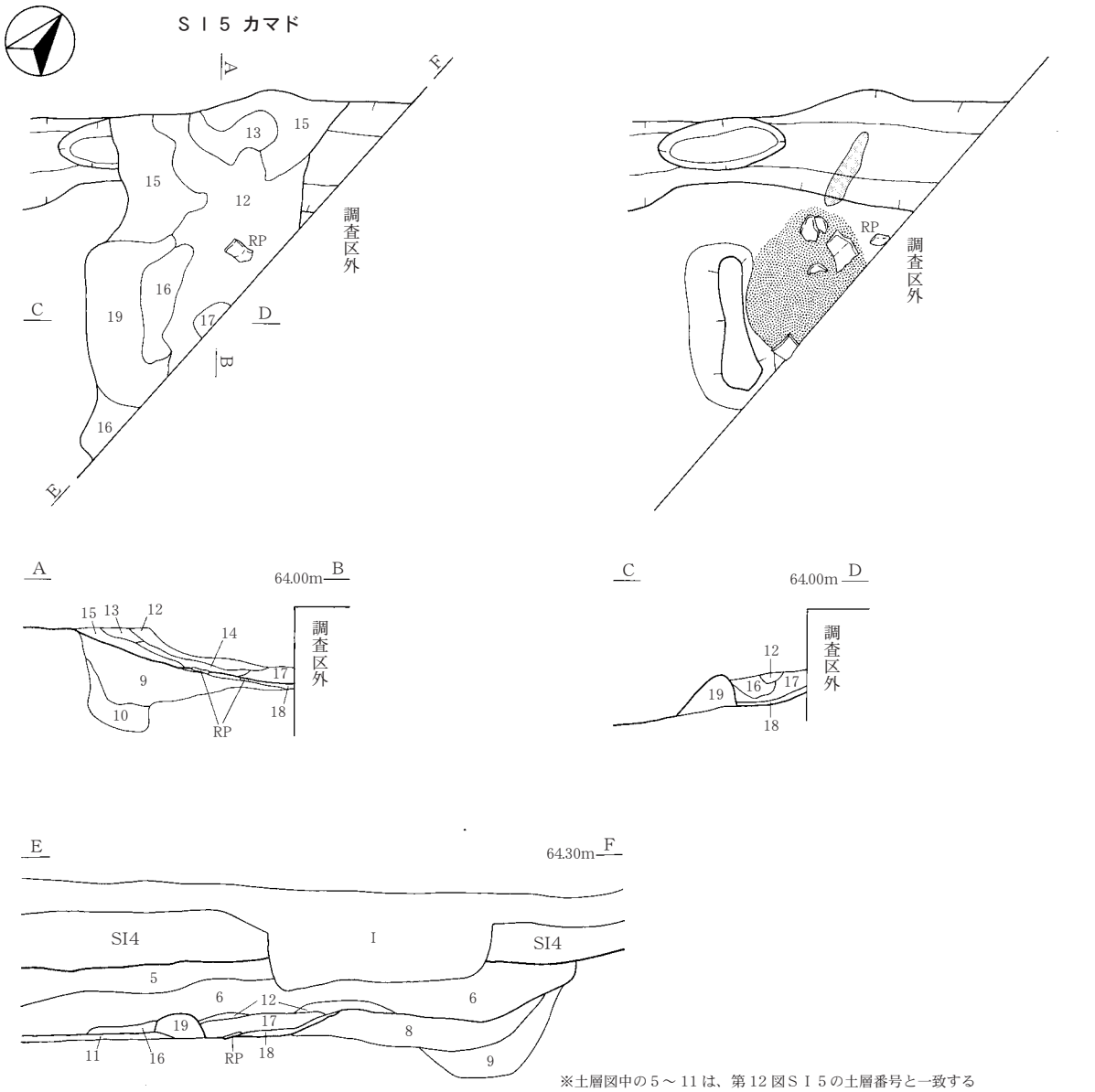
ＳＩ４
1　黒色土(10YR2/1)地山ブロックφ2～20㎜，炭化物φ1㎜，焼土粒φ3㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/1.5)灰黄褐色粘土(10YR6/2)ブロックφ3～40㎜30%，
　炭化物φ10㎜，地山ブロックφ3～20㎜，焼土粒φ2㎜混入
3　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ2～30㎜40%，焼土粒φ2㎜，炭化物φ1～2㎜混入
4　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ2～30㎜30%，焼土粒φ2㎜，炭化物φ1～2㎜混入

ＳＩ５
5　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ1～70㎜20% 混入
6　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ2～15㎜混入
7　明赤褐色土(5YR5/6)しまり強 粘性弱 焼土ブロックφ10～30㎜50%，炭化物φ1～5㎜10% 混入
8　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強 地山ブロックφ5～50㎜40% 混入
9　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ30㎜混入
10　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強 地山粒φ5～10㎜混入
11　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強 地山ブロックφ5～15㎜25%，テフラ混入

ＳＩ５－ＳＮ01
7　明赤褐色土(5YR5/6)しまり強 粘性弱 焼土ブロックφ10～30㎜50%，炭化物φ1～5㎜10% 混入

0　2m

第12図　ＳＩ４・ＳＩ５竪穴住居跡



※土層図中の５～11は、第12図ＳＩ５の土層番号と一致する

ＳＩ５カマド
12　黄褐色土(10YR5/6)
13　暗赤褐色土(5YR3/2)粘性弱　炭化物φ5~10㎜,
　　地山粒φ5~10㎜混入
14　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱　暗赤褐色焼土
　　(5YR3/2.5)ブロック混入
15　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ1~5㎜,　炭化物φ1~3㎜,
　　焼土粒φ1~3㎜混入
16　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱　地山粒φ5~10㎜,
　　炭化物φ1~5㎜混入
17　黒褐色土(10YR3/2)炭化物φ1~3㎜,　焼土粒φ5~10㎜,
　　地山粒φ1~5㎜混入
18　にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまり弱　粘性弱
19　にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)しまり強　粘性強
　　白粘土ブロックφ10~30㎜混入

第13図　ＳＩ５カマド

ＳＩ32（第14図）

《地区》ＬＴ49、ＭＡ49・50グリッドに位置する。

《確認》住宅建設時の掘削により大半が失われていたが、第Ⅴ層上面で南西側の壁溝の一部と貼り床の一部、柱穴を確認した。また、基本土層ａ－ｂにて、柱穴とカマドの断面を確認した。

《重複》床面をＳＫＰ106に切られる 。

《規模と平面形》本来の平面形は方形であると推定されるが、確認されたのは南西側の壁溝だけである。南西壁溝は3.67ｍにわたり確認、深さは13㎝である。南西壁溝の軸方位はＮ－44.5°－Ｗである。

《埋土》柱穴や壁溝の埋土を含め、９層に分層できた。第９層が床面を整えるための貼り床土である。また、第６・７・８層はカマド構築の際に第９層上に貼った土である。

《床面》第９層上面を床面にしているが、住宅建築などにより南西側を除き既に失われていた。第２層上面も床面であった可能性がある。

《カマド》断面（基本土層ａ－ｂ）で確認した。南東壁の南寄りに付設されていたものと推定される。５層に分層できた。第３層が袖部、第４層が火床であると推定される。

《柱穴》南西壁溝に１基（Ｐ１）、断面（基本土層ａ－ｂ）に１基（Ｐ２）確認した。Ｐ２は南西壁溝に比べやや幅が広いため柱穴と推定したが、南東壁溝である可能性もある。

《出土遺物》カマドなどから土師器甕の破片が出土した。器形を復元できるものは無かった。

ＳＩ65・152（第15・16図）

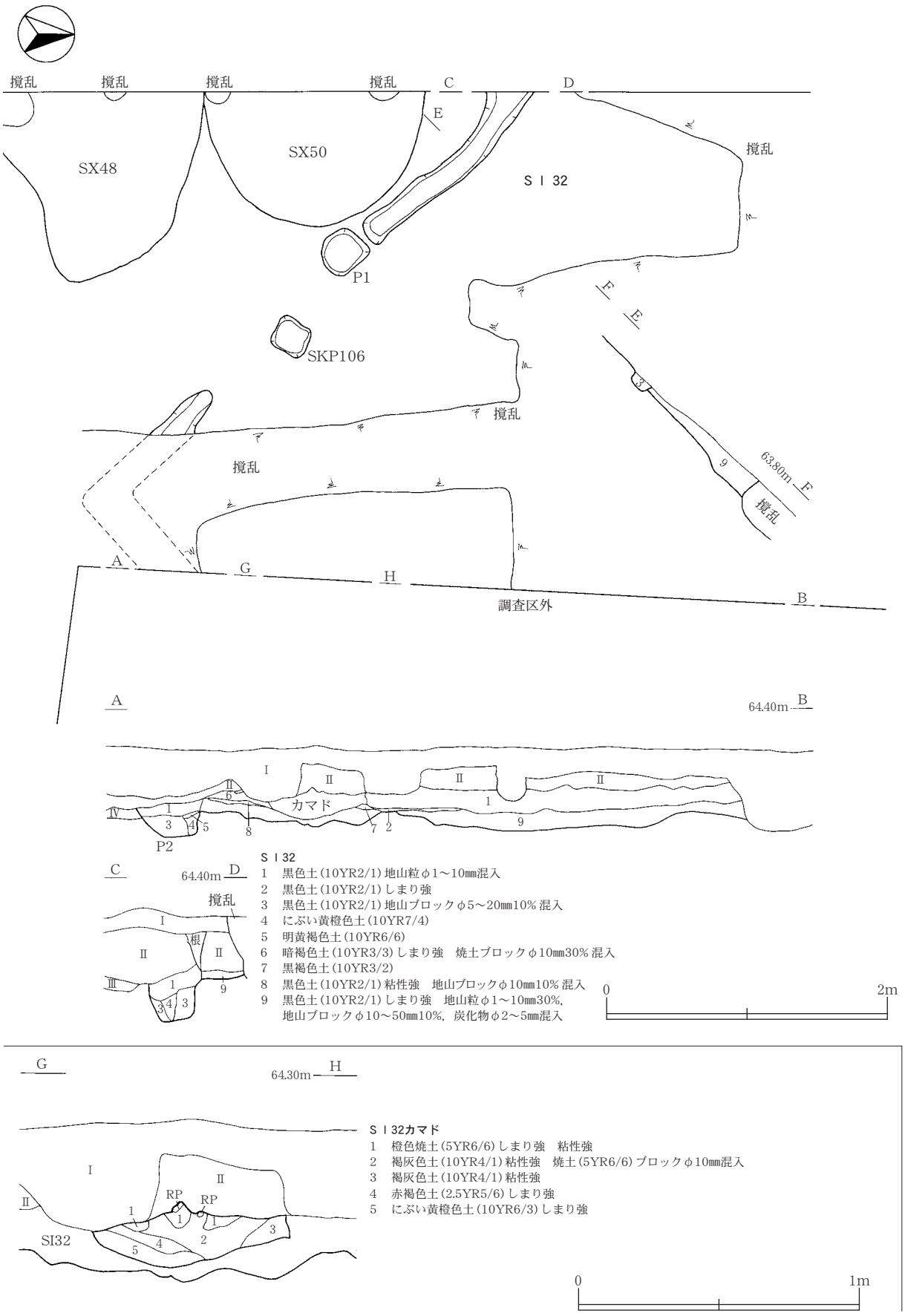
《地区》ＭＡ54・55、ＭＢ54・55グリッドに位置する。

《確認》本区北側の生活道路面下を精査中に、南東側の壁溝と南隅の柱穴（ＳＩ65－Ｐ２）、カマドを検出した。この後、その西側の民家駐車場部より、南東壁溝と直交する南西壁溝、さらにこれと直交する２条の北西壁溝と２基の柱穴（ＳＩ65－Ｐ１、ＳＩ152－Ｐ１）を検出した。２条の北西壁溝は約0.5ｍの間隔をおいて平行しており、内（南東）側の北西壁溝で構成される住居跡をＳＩ65、外（北西）側の北西壁溝で構成される住居跡をＳＩ152とした。この区域は、以前の耕作による攪乱や宅地造成に伴う水道管の埋設などによる掘削が遺構の低面まで及んでいる。これらによって失われたためか両住居跡の北東壁は確認できなかった。

《重複》ＳＩ65とＳＩ152は、南東辺と南西辺の南側を共有していると判断した。両者の新旧関係は、後者の北西側の床面を前者の北西壁溝が切ることから、ＳＩ65が新しい。ＳＩ152を減築したものがＳＩ65であると考えられる。また、少なくともＳＩ65はＳＤ263を切る。ＳＫ63は、検出状況から、ＳＩ65より古いと判断した。

《規模と平面形》ＳＩ65の規模は、両端が確認されている南西辺が3.30ｍであることから、これを辺長とする方形であったと推定される。その他については、南東辺を2.70m、北西辺を1.94m を確認した。ＳＩ152の規模は、両端が確認されている南西辺が4.05ｍであることから、これを辺長とする方形であったと推定される。南西辺はＳＩ65と共通であり、北西辺は2.69m 確認できた。また、南西辺がＮ－38.5°－Ｗ、南東辺がＮ－52°－Ｅ、ＳＩ65の北西辺がＮ－50°－Ｅ、ＳＩ152の北西辺がＮ－50.5°－Ｅを指す。

《壁・壁溝》両住居跡とも壁は既に失われており、南西・南東・北西の壁溝も、水道管等宅地造成時



第14図　ＳＩ32竪穴住居跡・カマド

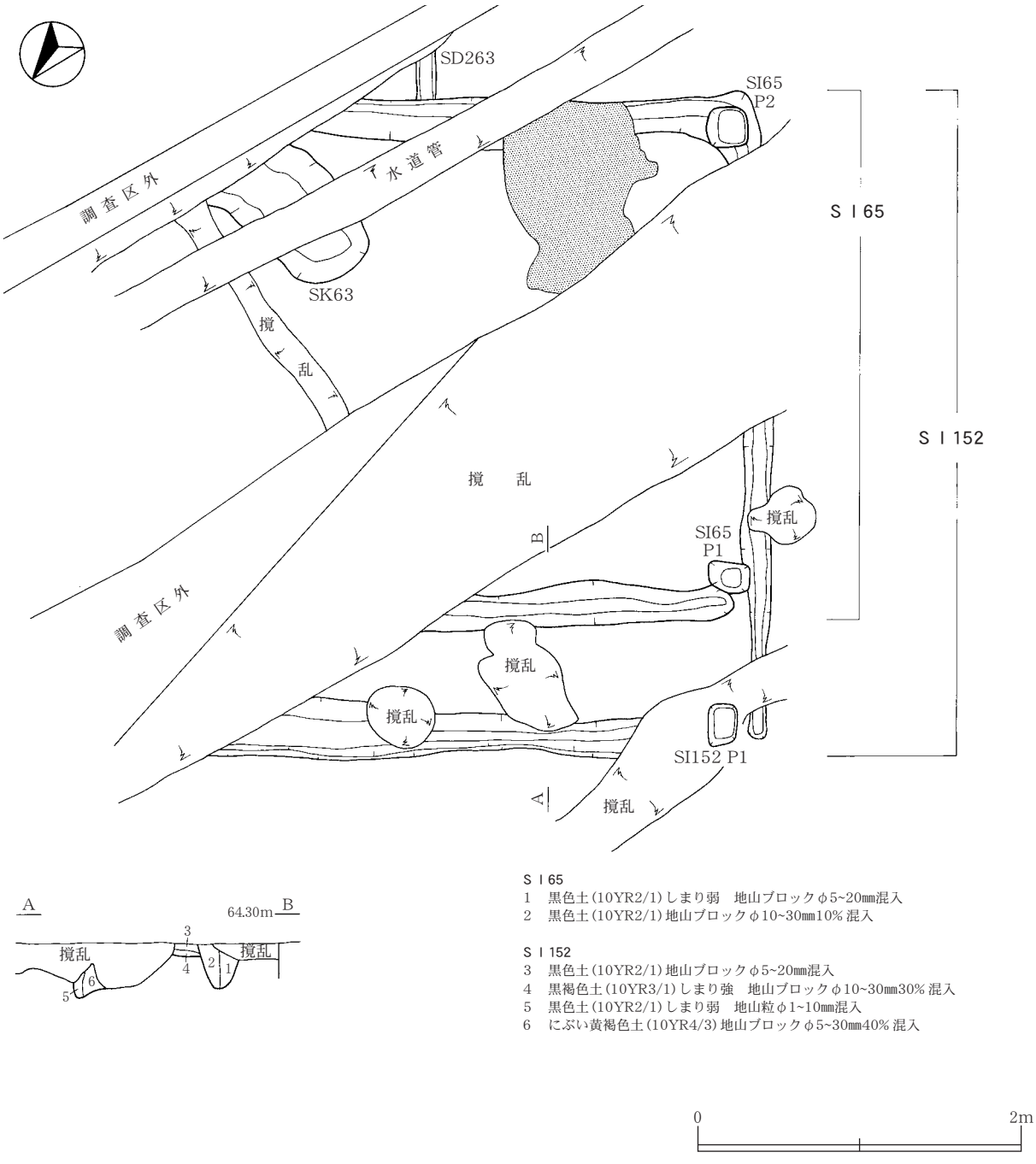
の４本の南北方向の掘削により分断されている。残存する南東壁溝は幅30cm、深さ15cm、南西壁溝は幅20cm、深さ18cm、北西壁溝は、ＳＩ65が幅28cm、深さ28cm、ＳＩ152が幅39cm、深さ22cmである。

《埋土》ＳＩ65は２層に、ＳＩ152は４層に分層できた。

《床面》残存する部分の床面は、平坦で堅く締められていた。

《カマド》南東壁に付設されており、ＳＩ65のものと判断した。火床部、東側袖部が確認できた。

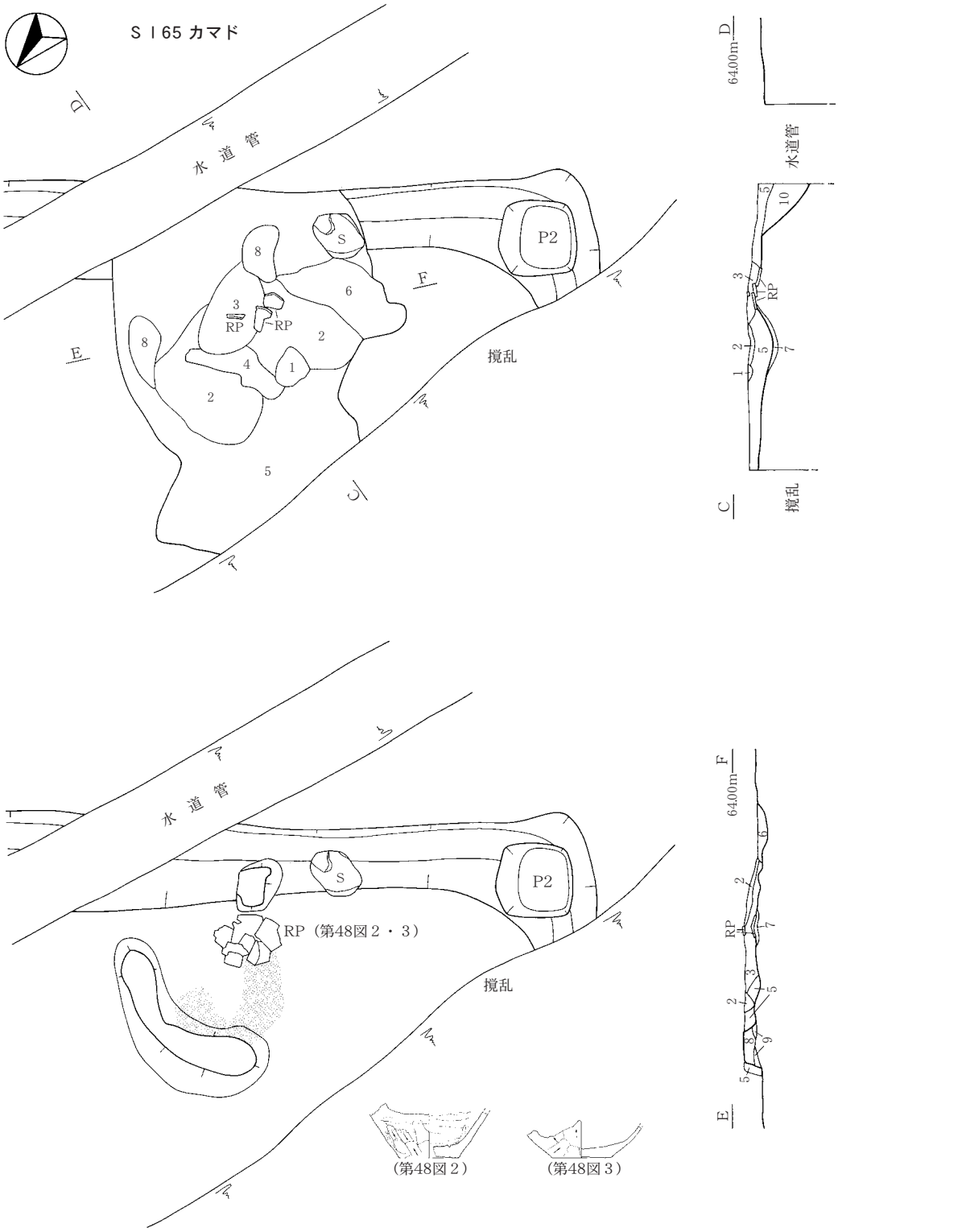
《出土遺物》両住居跡から土師器が出土した。この内、ＳＩ65カマドから出土した土師器甕２点を図化した（第48図２・３）。



ＳＩ65
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山ブロックφ5~20㎜混入
2　黒色土(10YR2/1)地山ブロックφ10~30㎜10% 混入

ＳＩ152
3　黒色土(10YR2/1)地山ブロックφ5~20㎜混入
4　黒褐色土(10YR3/1)しまり強　地山ブロックφ10~30㎜30% 混入
5　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ1~10㎜混入
6　にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山ブロックφ5~30㎜40% 混入

第15図　ＳＩ65・152竪穴住居跡



ＳＩ65カマド
1　褐色土(10YR4/4)しまり弱　粘性弱　焼土混入
2　褐色焼土(7.5YR4/6)粘性弱　黒褐色土(10YR2/2)20% 混入
3　褐色土(7.5YR4/4)しまり弱　粘性弱　焼土混入
4　黒色土(10YR1.7/1)粘性弱　焼土ブロックφ10㎜混入
5　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱　地山粒φ5~10㎜20% 混入
6　褐色土(10YR4/4)しまり弱　粘性弱　炭化物φ5~7㎜，赤褐色焼土(5YR4/8)粒φ3~5㎜混入
7　褐色土(7.5YR4/6)しまり弱
8　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱　にぶい黄褐色粘土(10YR7/2)ブロック混入
9　黒褐色土(10YR3/2)褐色地山質粘土(10YR4/6)10% 混入
10　暗褐色土(10YR3/3)地山ブロックφ10~30㎜20% 混入

0　1m

第16図　ＳＩ65カマド

ＳＩ104（第17図）

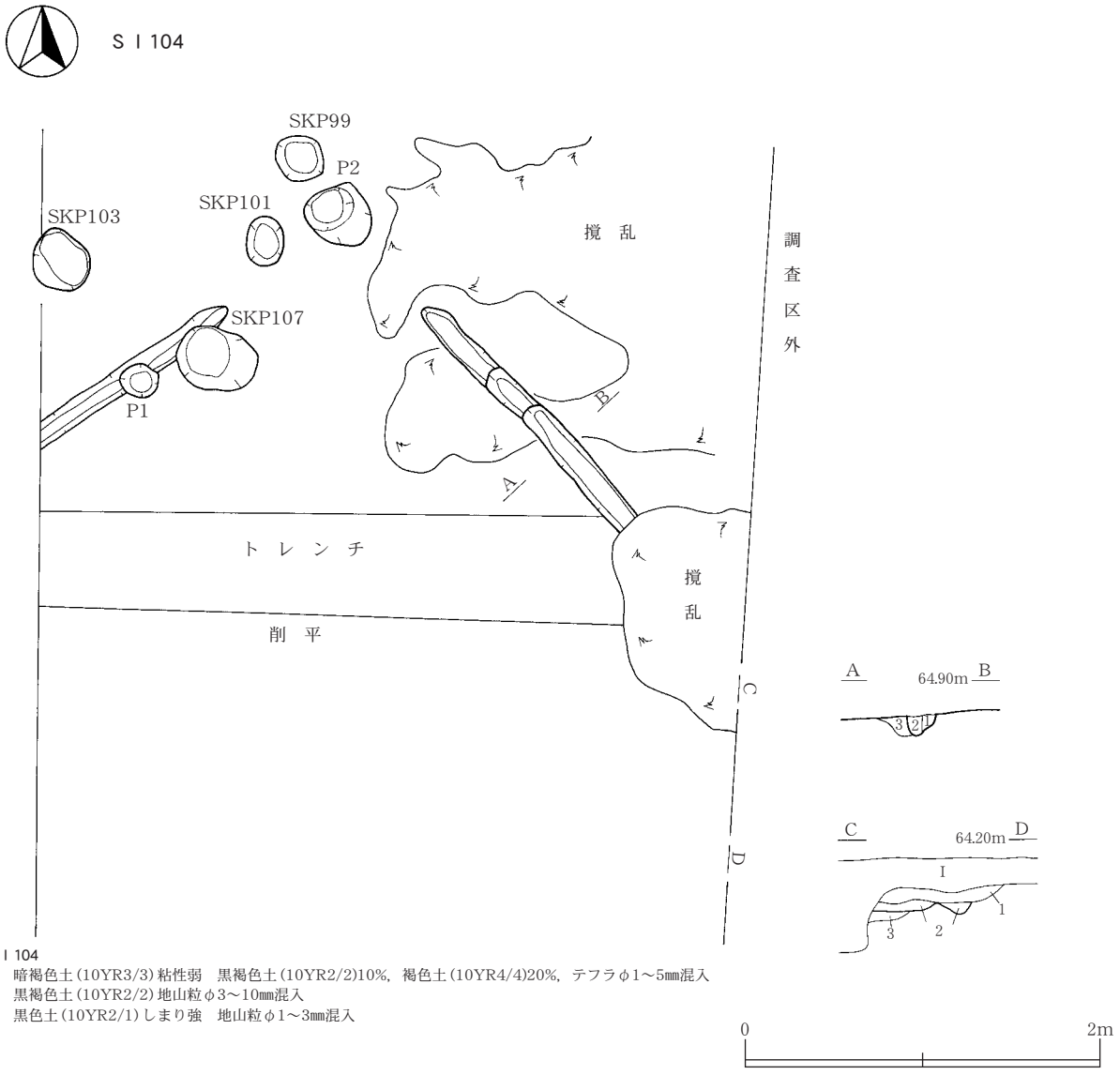
《地区》ＬＴ・ＭＡ52グリッドに位置している。この地区は、現代の住宅建築による掘削の影響を強く受けている。また、この西側は、現生活道路建設により大きく切り土されている。

《確認》第Ｉ層下面の地山層を精査中に、北隅の柱穴（Ｐ２）と北東と北西側の壁溝を確認した。

《重複》ＳＫＰ107に切られる。

《規模と形状》竪穴住居の南側が住宅建設の削平により、西側が生活道路建設の切り土により既に失われていた。また、東隅が調査区外にあるため規模は不明であるが、断面（第17図Ｃ－Ｄ）の観察から、１辺が４ｍ前後であると推定される。北東と北西側の壁溝の確認状況から、Ｐ２を北隅の柱穴とする方形の竪穴住居跡であると判断した。

《壁・壁溝》壁は既に失われていた。確認した北東側の壁溝は、長さ1.58m、幅16㎝、深さ12㎝、北西側の壁溝は、長さ1.33m、幅0.14、深さ10㎝である。また、それぞれの軸方位は北東壁溝がＮ－44.5°－W、北西壁溝がＮ－50.5°－Ｅである。



ＳＩ104
1　暗褐色土(10YR3/3)粘性弱　黒褐色土(10YR2/2)10%，褐色土(10YR4/4)20%，テフラφ1～5㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ3～10㎜混入
3　黒色土(10YR2/1)しまり強　地山粒φ1～3㎜混入

0　2m

第17図　ＳＩ104竪穴住居跡

《覆土》３層に分層した。

《床面》床面は既に失われていた。

《カマド》検出できなかった。

《柱穴》北西壁溝に１基（Ｐ１）、北隅に１基（Ｐ２）確認した。

《出土遺物》遺物の出土は無かった。

ＳＩ151（第18図）

《地区》ＭＢ55・56、ＭＣ55グリッドに位置する。この地区はかつての耕作（第Ⅱ層）の影響を強く受けている区域である。

《確認》はじめ、旧耕作土である第Ⅱ層下面を精査中に、カマドと推定される土師器が混入する焼土の範囲を検出し、その後、住居床面の一部と推定される締められた範囲を検出した。しかし、壁や壁溝、柱穴は検出できなかった。

《重複》現状では無い。

《規模と形状》不明。

《壁・壁溝》検出できなかった。

《埋土》２層に分層した。第２層上面が床面であると判断した。

《床面》カマドの北側に2.6m×0.6mの範囲で、平坦な堅く締められた部分を確認した。床の大部分は、かつての耕作等で既に失われたものと推定される。

《カマド》上述のようにカマド北側に床面の一部が存在することから、住居の南側に付設されていたものと推定される。11層に分層したが、遺存状況が不良で明確に火床や袖を検出することはできなかった。

《出土遺物》カマドから土師器甕の破片が出土したが、器形を復元できるものは無かった。

ＳＩ170（第19図）

《地区》ＭＤ52グリッドに位置する。この地区は、民家玄関に続くアプローチ部分にあたり、東側は大きく切り土されている現生活道路部分となる。

《確認》はじめ、第Ⅰ層下面を精査中に、黒褐色土の範囲が確認され、掘り下げた結果、北東側の壁溝と推定される溝と床面と推定される堅く締められた範囲を検出し、これに断面の観察を加味し、上記壁溝の南西側に展開する竪穴住居跡であると判断した。

《重複》現状では無い。

《規模と形状》検出した北東壁が直線であることから周辺の竪穴住居跡と同様に方形と推定されるが、北西・南東・南西壁を含む竪穴住居の大部分は、南西側の調査区外に遺存しているものと推定される。規模は不明である。また、確認した範囲内からは柱穴は検出されなかった。

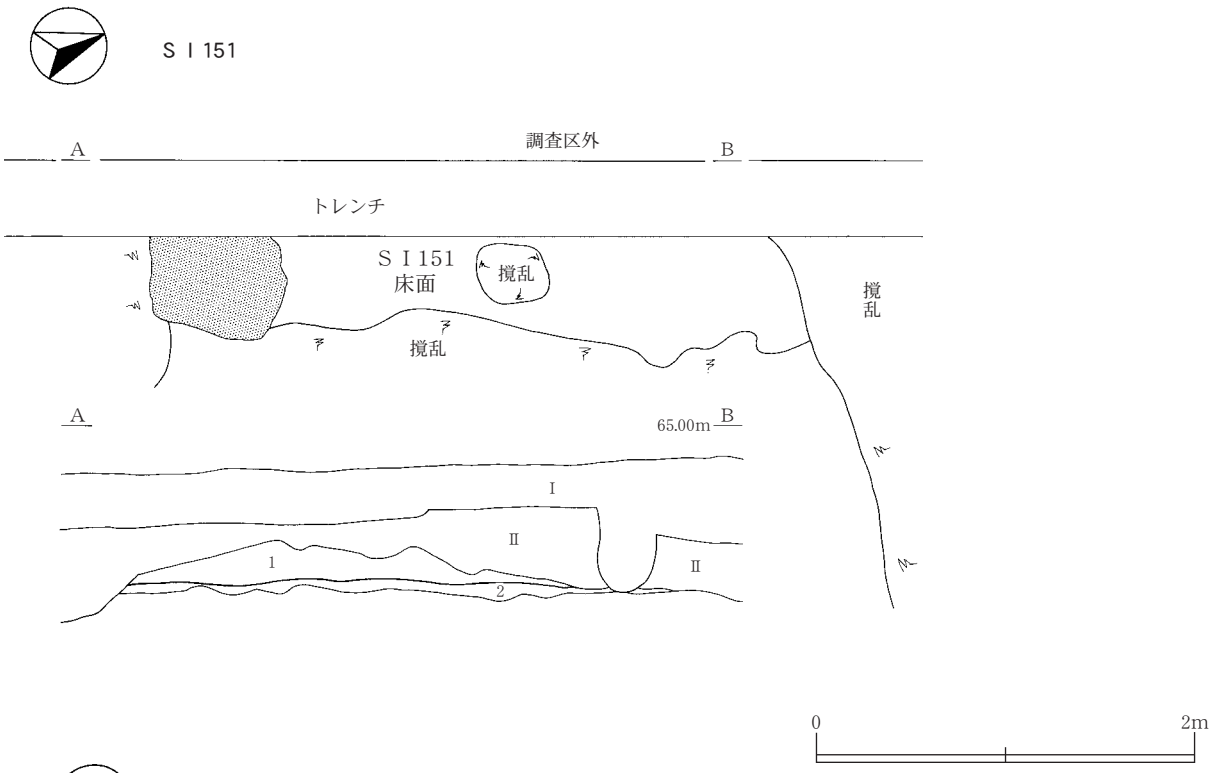
《壁・壁溝》北東壁は現状で高さ10㎝、長さ1.27m確認され、軸方位はＮ－46°－Ｗである。また、これに付随する壁溝の幅は22㎝、深さは17㎝である。

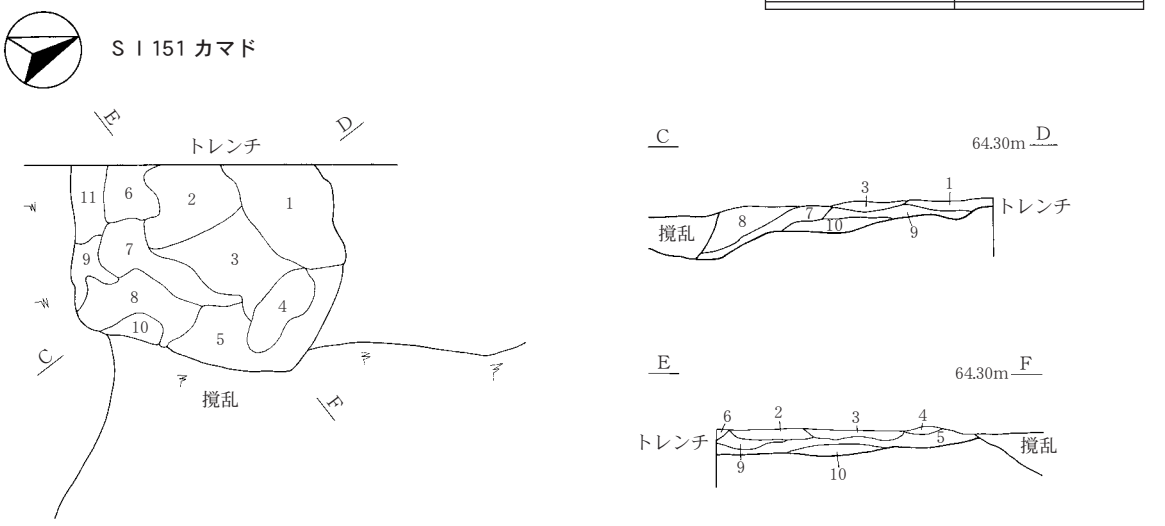
《埋土》３層に分層した。第３層上面が床面であると判断した。

《床面》検出した範囲では、平坦で堅く締められた。

《カマド》検出できなかった。

《出土遺物》第１層より土師器甕の破片と鉄滓１点（166ｇ）が出土した。



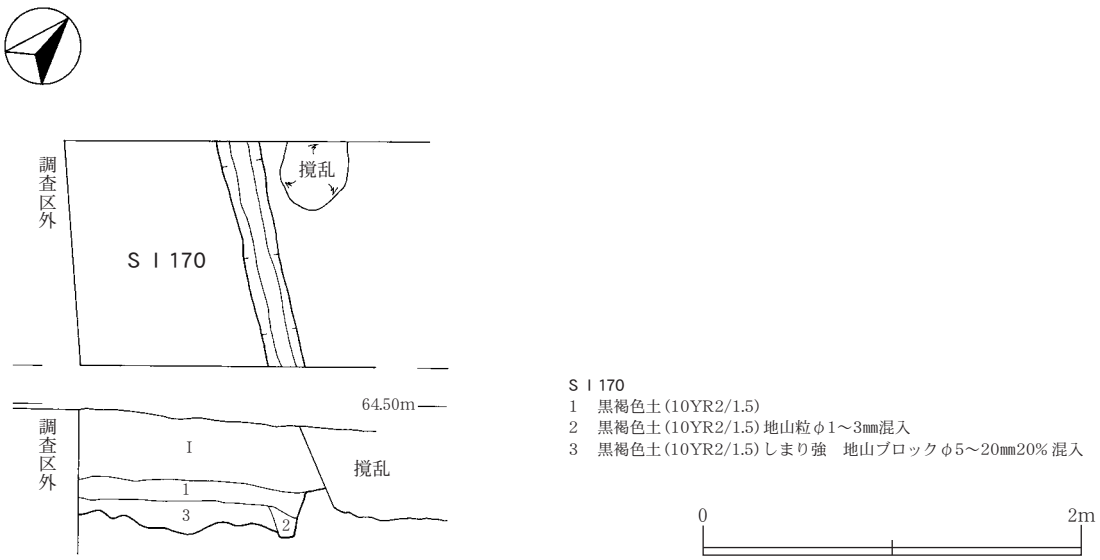


ＳＩ151
1　黒色土(10YR2/1)地山ブロックφ5～20㎜，テフラφ1～2㎜混入
2　黒褐色土(10YR3/1)しまり強　地山ブロックφ10～20㎜20% 混入

ＳＩ151カマド
1　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ3～10㎜，焼土粒φ1～5㎜混入
2　黒褐色土(10YR3/1)地山粒φ1～5㎜，焼土粒φ1～3㎜，炭化物φ1～3㎜，粘土ブロックφ10～30㎜混入
3　黒色土(10YR1.7/1)しまり弱　地山粒φ1～3㎜，焼土粒φ1～2㎜混入
4　にぶい赤褐色粘土(5YR4/4)しまり強　粘性強　粘土ブロックφ10～20㎜40%
5　黒褐色土(7.5YR3/1)地山粒φ3～10㎜，焼土粒φ1～3㎜，炭化物φ1～2㎜，粘土粒φ5～10㎜混入
6　にぶい赤褐色土(5YR4/3)しまり強　粘土粒φ3～7㎜混入
7　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ1～5㎜，焼土粒φ1～2㎜混入
8　にぶい赤褐色土(5YR4/3)焼土粒φ1～10㎜30%，粘土ブロックφ5～20㎜混入
9　黒褐色土(10YR3/2)粘性弱　地山粒φ1～3㎜，粘土粒φ5～10㎜混入
10　黒褐色土(10YR3/2)しまり弱　焼土粒φ5～10㎜，粘土ブロックφ3～20㎜，炭化物φ1～2㎜，灰混入
⑪　黒色土(10YR2/1)しまり強　地山ブロックφ5～30㎜20% 混入

0　1m

第18図　ＳＩ151竪穴住居跡・カマド



第19図　ＳＩ170竪穴住居跡

２　土　　坑

ＳＫ63（第20図）

ＭＡ55グリッドに位置している。ＳＩ65竪穴住居跡の床面下層を精査中に検出した。ＳＩ65の域内に存在するが、本土坑が古いと判断した。水道管埋設の南北方向の掘削により、約25㎝の幅で中央部が失われている。東側は一部未確認であるが、攪乱によって失われていると推定される。平面形は楕円形で、長軸（東－西）が87㎝確認され、短軸（南－北）は58㎝、確認面からの深さは26㎝である。底面は平坦であり、壁は急傾斜で立ち上がっている。埋土はほぼ水平に堆積する３層に分層できた。土師器甕の破片が出土したが器形を復元できるものは無かった。

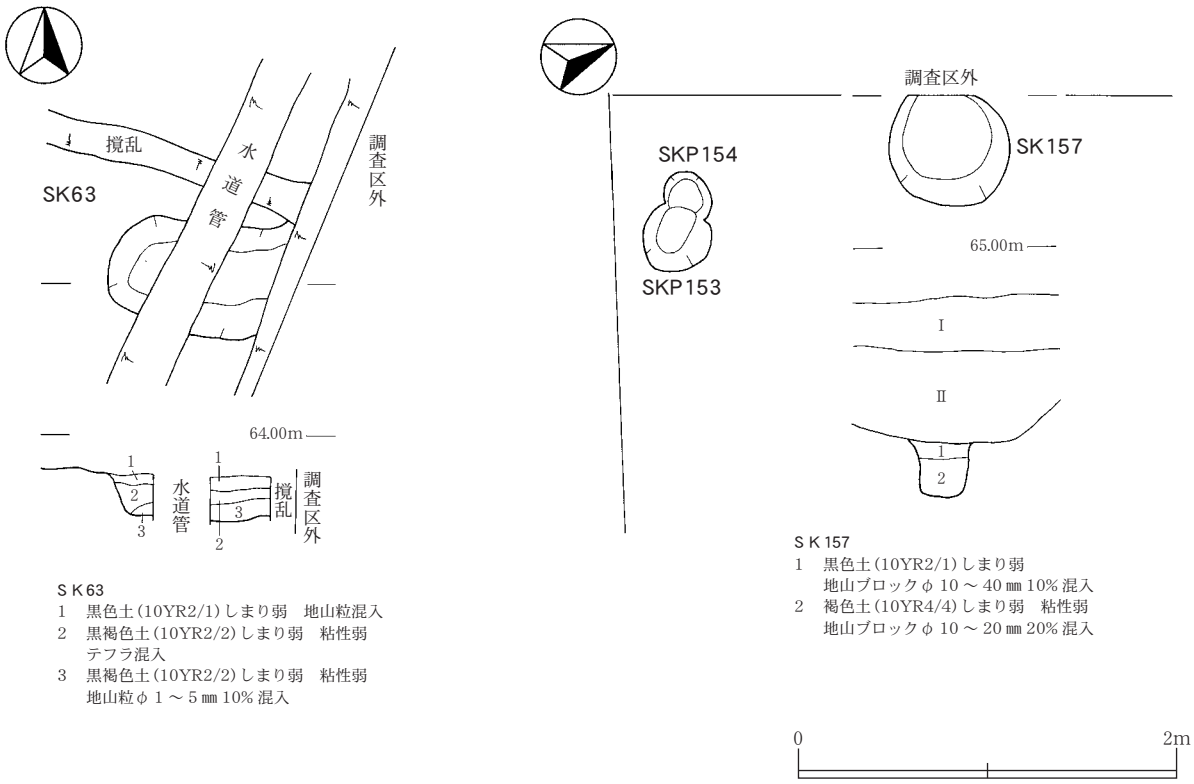
ＳＫ157（第20図）

ＭＣ55グリッドに位置している。第Ⅱ層下面の地山層上面を精査中に検出した。北北東45㎝にＳＩ151竪穴住居跡のカマドが存在することから、ＳＩ151と関係する可能性がある。平面形は、西端部が調査区外となるが、ほぼ円形で、現状では径が64㎝、確認面からの深さは29㎝である。底面はほぼ円形で、壁は垂直ぎみに立ち上がっている。土師器甕が出土し図化した（第48図４）。

３　柱　穴　列

ＳＡ24（第21図）

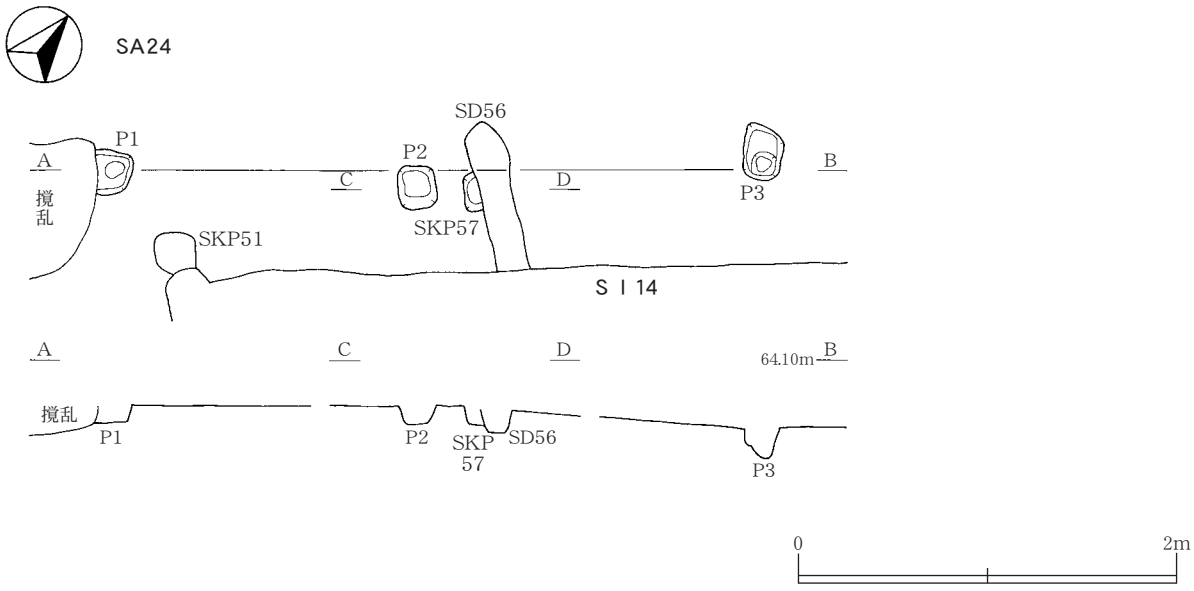
ＬＴ54、ＭＡ53・54グリッドに位置している。長さ3.43ｍにわたり３基の柱穴が、ＳＩ３竪穴住居跡南東壁とＳＩ４竪穴住居跡北西壁の中間にこれらとほぼ平行（Ｎ－50°－Ｅ）して並んでいることなどから、上記２軒の住居跡とほぼ同じ時期の柱穴列の可能性が高いと考えられる。ただし、中央のＰ２は、軸線上からやや南東に位置しており、各柱穴間の距離は、心々間でＰ１－Ｐ２間が1.60ｍ、Ｐ２－Ｐ３間が1.85ｍである。何れの柱穴からも遺物の出土は無かった。各柱穴の規模等については、第２表に記載してある。



ＳＫ63
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒混入
2　黒褐色土(10YR2/2)しまり弱　粘性弱
　テフラ混入
3　黒褐色土(10YR2/2)しまり弱　粘性弱
　地山粒φ１～５㎜10%混入

ＳＫ157
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱
　地山ブロックφ10～40㎜10%混入
2　褐色土(10YR4/4)しまり弱　粘性弱
　地山ブロックφ10～20㎜20%混入

第20図　ＳＫ63・157土坑



第21図　ＳＡ24柱穴列

４　溝　　跡

ＳＤ１（第22図、図版６）

本遺構は、遺跡名にある「館跡」を構成していたとされる空堀である。空堀は、調査範囲北西方向の段丘崖から段丘面上を南東に向かってほぼ直線に100mほど延び、調査範囲北端付近で大きく湾曲し、ここから北東方向へ50mほど延び東側の段丘崖に達している（第56図、図版２）。現表土面においても、空堀の平面形状は幅10mの浅いくぼみとしてその存在を確かめることができる。今回の調査では、調査範囲の北端部であるＬＴ55・56、ＭＡ56、ＭＢ56グリッドの第Ⅴ層上面において、空堀湾曲部の南縁を検出した。ただし、断面からは、第Ⅲ層以上から掘り込まれていた可能性が考えられる。検出した空堀南縁の長さは、ＬＴ55南東側から1.42m、ＬＴ55北西側から0.41m、ＭＡ56から1.36mの総延長7.30mにわたり、その方位はＮ－75.5°－Ｗである。確認面から深さは、調査範囲の関係で１mほどまでしか確認できなかった。このため底面は検出できなかったが、現状では壁は急傾斜で立ち上がっている。埋土は５層に分層できた。第３層にテフラが霜降り状に混入していた（第５章、第１節の４）。遺物は土師器甕の破片が14点出土したが、器形を復元できるものは無かった。この他に流動滓を含め15点（計978ｇ）の鉄滓が出土している（図版19）。

ＳＤ56（第23図）

ＬＴ54グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。ＳＩ４竪穴住居跡北西壁に切られ、ＳＡ24Ｐ３を切る。確認された長さは84㎝、幅は22㎝、確認面からの深さは18㎝である。断面形はＵ字形で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。軸方位はＮ－52.5°－Ｗである。埋土は２層に分層した。土師器が出土した。

ＳＤ120（第23図）

ＭＣ53グリッドに位置する。民家車庫部コンクリート下の削平された第Ⅴ層上面で確認した。確認された長さは91㎝、幅は13㎝、確認面からの深さは11㎝である。軸方位はＮ－45.5°－Ｅである。北東方向と南西方向の調査範囲外にさらに延びているものと推定される。現状では他遺構との重複は無い。断面形は逆台形状で、南東側の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。遺物の出土は無い。

ＳＤ156（第23図）

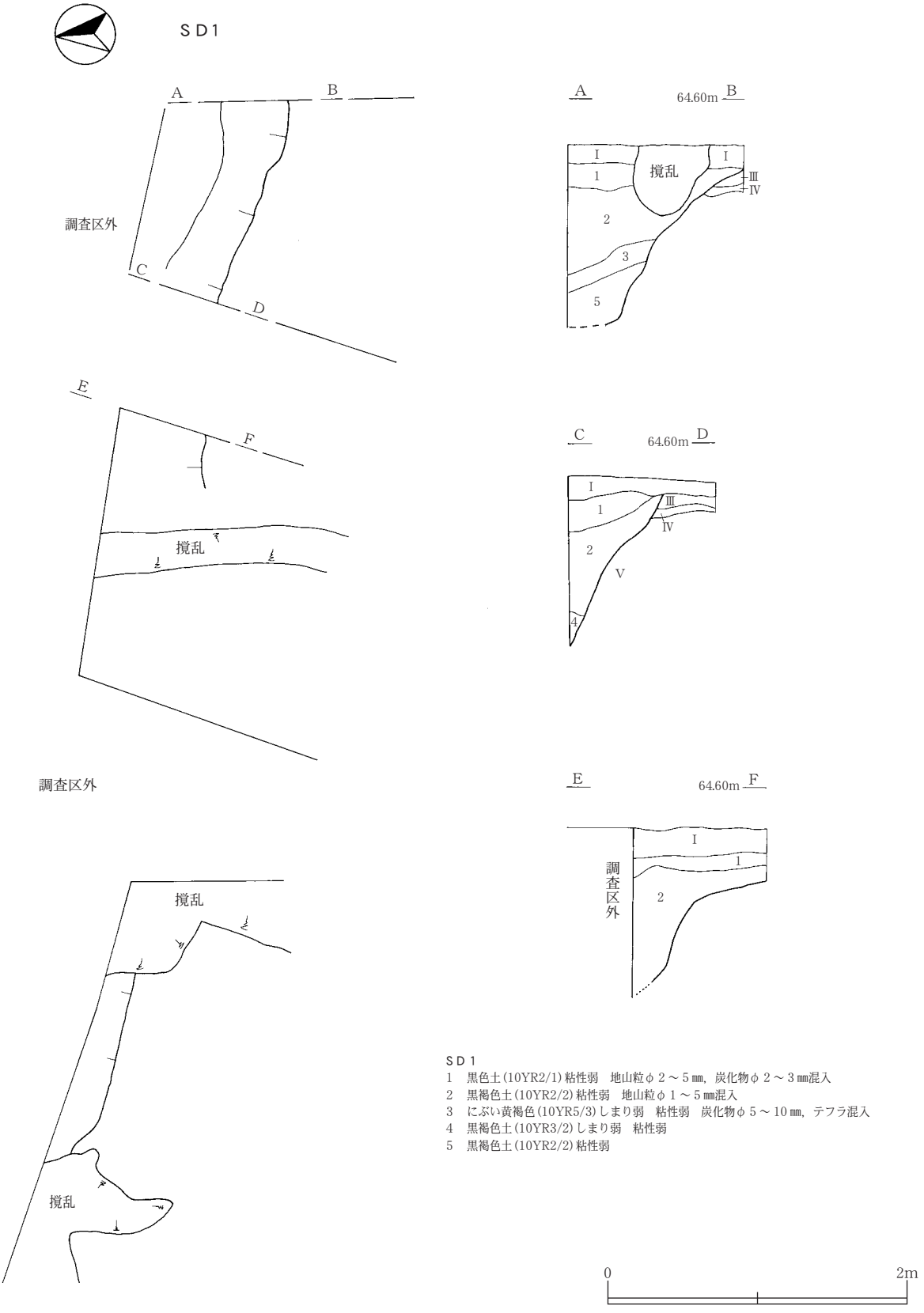
ＭＡ54グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。確認された長さは1.58m、幅は16～40㎝、確認面からの深さは11㎝である。断面形は逆台形状で壁は緩く立ち上がっている。軸方位はＮ－39°－Ｅである。埋土は２層に分層できた。遺物は出土しなかった。

ＳＤ167（第23図）

ＭＣ52グリッドに位置する。民家車庫部コンクリート下の削平された第Ⅴ層上面で確認した。確認された長さは、南東側に67㎝とその北西側に89㎝の間隔をおいて22㎝、延長1.78mにわたる。幅は９～14㎝、確認面からの深さは７㎝である。軸方位はＮ－32°－Ｗである。北西方向と南東方向の調査範囲外にさらに延びている可能性がある。現状では他遺構との重複は無い。断面形は逆台形状で、南東側の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は単層である。遺物の出土は無かった。

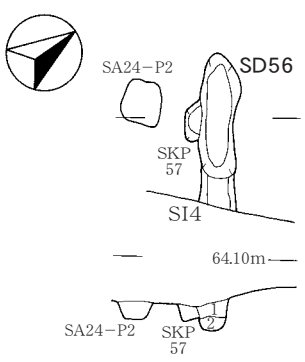
ＳＤ263（第23図）

ＭＡ55グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。ＳＩ65竪穴住居跡南東壁に切られる。確認された長さは32㎝、幅は13㎝、確認面からの深さは８㎝である。断面形は逆台形状で壁は急傾斜で立ち上がっている。軸方位はＮ－38.5°－Ｅである。埋土は単層である。遺物は出土しなかった。

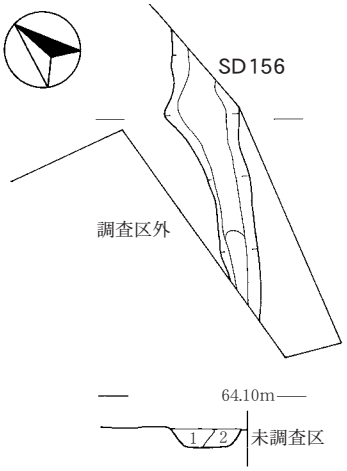


ＳＤ１
1　黒色土(10YR2/1)粘性弱　地山粒φ２～５㎜，炭化物φ２～３㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱　地山粒φ１～５㎜混入
3　にぶい黄褐色(10YR5/3)しまり弱　粘性弱　炭化物φ５～10㎜，テフラ混入
4　黒褐色土(10YR3/2)しまり弱　粘性弱
5　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱

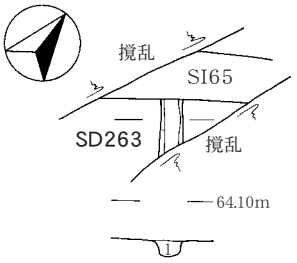
第22図　ＳＤ１溝跡



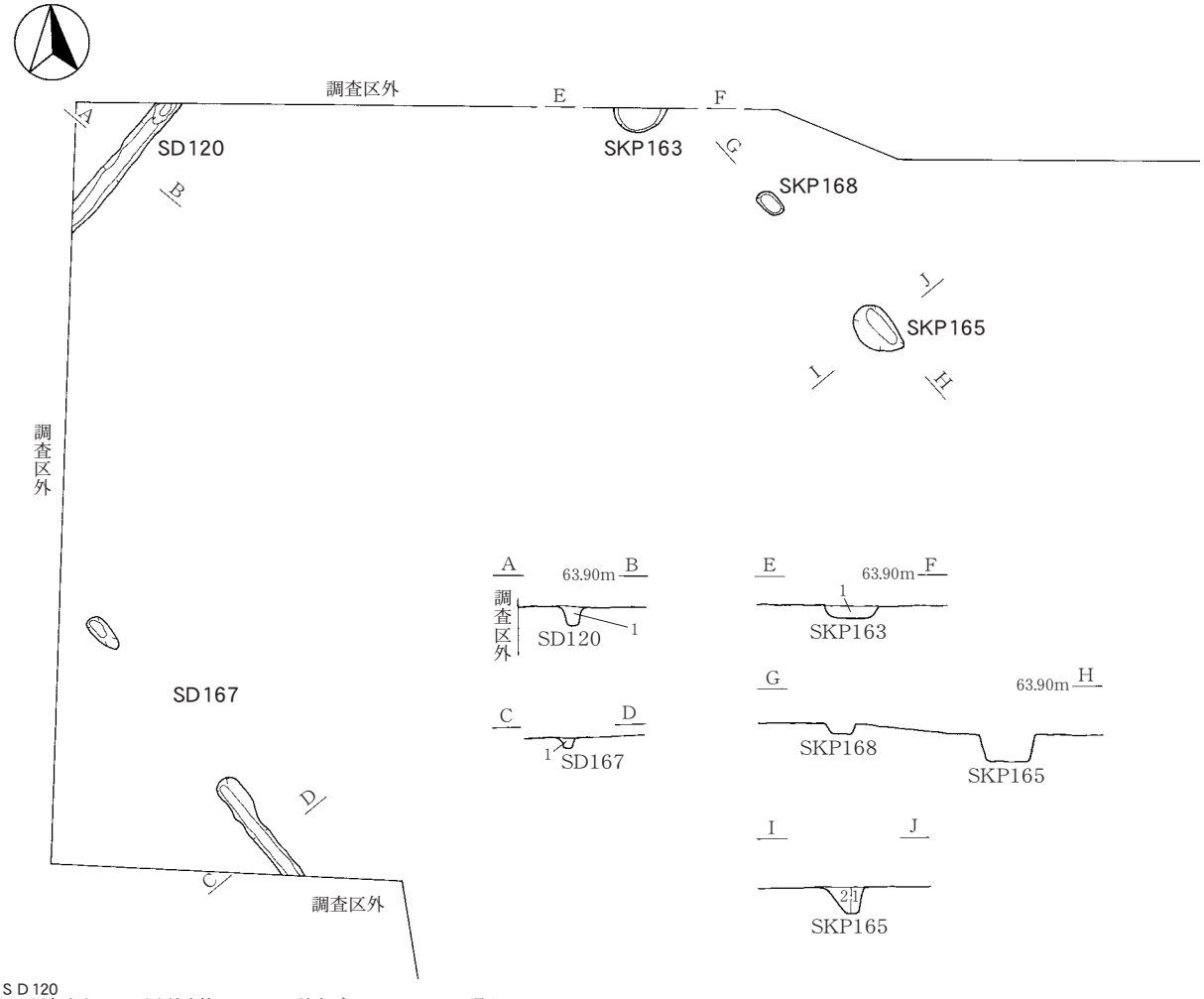
ＳＤ56
1　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ1～3㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～7㎜10% 混入



ＳＤ156
1　黒色土(10YR2/1)地山粒φ3～10㎜混入
2　黒褐色土(10YR3/1)地山ブロックφ5～20㎜10% 混入



ＳＤ263
1　黒褐色土(10YR2/1.5)



ＳＤ120
1　黒色土(10YR2/1)地山粒φ1～3㎜，地山ブロックφ5～25㎜混入

ＳＤ167
1　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ5～30㎜15%，地山粒混入

ＳＫＰ163
1　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～7㎜混入

ＳＫＰ165
1　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ5～7㎜混入
2　黒色土(10YR2/1)地山土25% 混入

0　2m

第23図　ＳＤ56・120・156・167・263溝跡

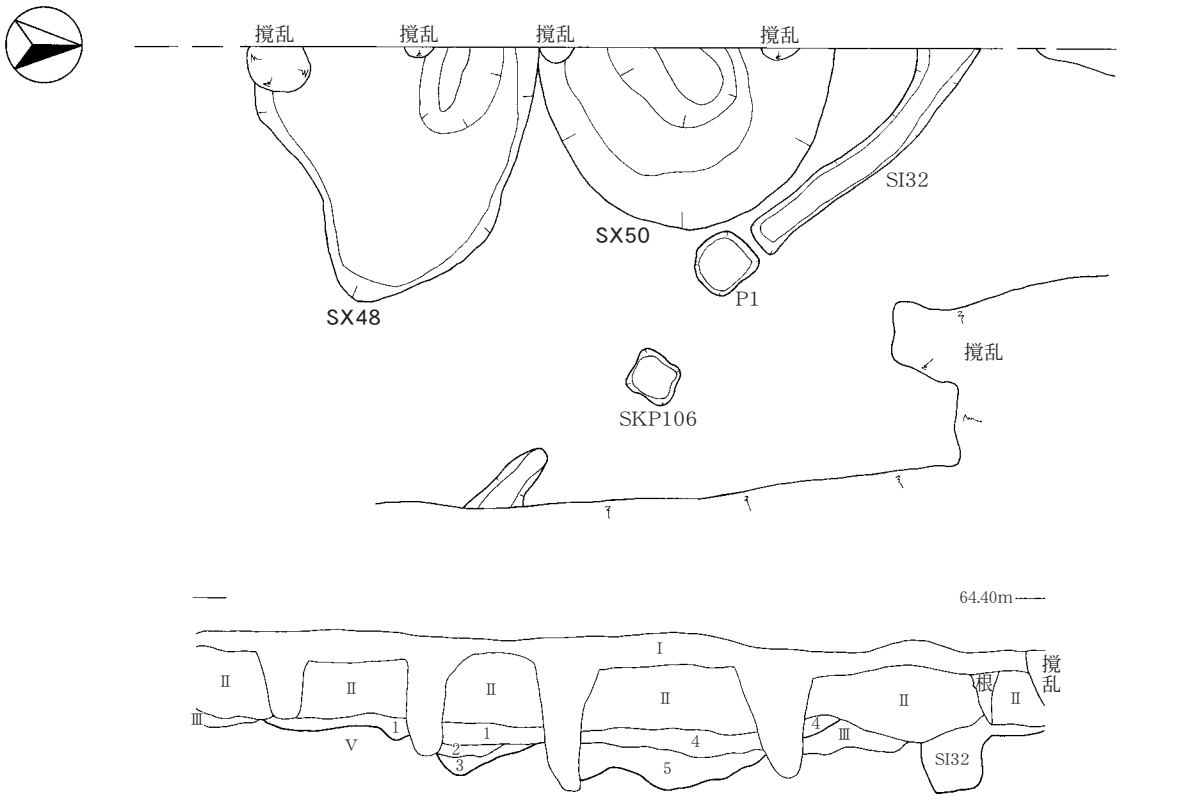
５　性格不明遺構

ＳＸ48（第24図）

ＭＡ49グリッドの第Ⅲ層上面で確認した。北側のＳＸ50を切る。西側は現生活道路建設の切り土により失われている。平面形は楕円形であったと推定される。現況では、南北1.49m、東西1.35mの範囲が確認されている。底面は地山層に達しており、底面北側にやや深いところがある。その深さは確認面から30㎝である。しっかりとした壁は無く、底面からだらだらと立ち上がり上端に至っている。埋土は３層に分層できた。土師器甕が出土している。

ＳＸ50（第24図）

ＭＡ49グリッドの第Ⅲ層上面で確認した。南側のＳＸ48に切られるが、埋土の状況からはあまり時期差は無いと考えられる。ＳＸ48と同様に西側は現生活道路建設の切り土により失われている。平面形は円形であったと推定される。現況では、南北1.56m、東西97㎝の範囲が確認されている。底面は地山層に達しており、その深さは確認面から33㎝である。壁は起伏が多い底面から緩く立ち上がり上端に至っている。埋土は２層に分層できた。遺物は出土しなかった。



ＳＸ48
1　黒色土(10YR2/1)しまり強　地山ブロックφ 15 ㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/1)地山ブロックφ 3 ～ 100 ㎜ 30% 混入
3　にぶい黄橙色土(10YR6/4)黒色土(10YR2/1)混入

ＳＸ50
4　黒色土(10YR2/1)しまり強　地山ブロックφ 15 ㎜混入
5　黒色土(10YR2/1)しまり強　地山ブロックφ 30 ㎜ 15% 混入

第24図　ＳＸ48・50性格不明遺構

第２表　Ａ区検出遺構内ピット観察表

遺構番号 ピット番号	地区	平面形	規模（ｍ）			底面標高（ｍ）	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ			
ＳＩ３								
Ｐ１	MA53	楕円形	(0.43)	0.34	0.36	63.52	第11図参照	
Ｐ２	LT54	楕円形	0.39	0.35	0.24	63.51	1 黒色(10YR2/1)	SKP20 を切る。
Ｐ３	LT54	楕円形	0.21	0.18	0.18	63.58	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ３－Ｐ4 に切られる。
Ｐ４	LT54	円形	0.22	0.22	0.09	63.63	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ３－Ｐ3 を切る。
Ｐ５	LT・MA54	隅丸方形	0.25	0.20	0.18	63.60	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ３－Ｐ6 を切る。
Ｐ６	LT54	楕円形	0.20	(0.12)	0.11	63.77	1 黒褐色(10YR2/3)	ＳＩ３－Ｐ5 に切られる。
Ｐ７	MA54	楕円形	0.31	0.24	0.22	63.71	1 黒色(10YR2/1)	
ＳＩ４								
Ｐ１	MA53	楕円形	0.30	0.24	0.49	63.22	1 黒色(10YR2/1) 2 褐色(10YR4/4)	SKP51 を切る。
ＳＩ３２								
Ｐ１	MA49	隅丸方形	0.31	0.29	0.13	63.44	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２	LT49	断面のみ	0.46	－	0.22	63.48	第14図参照	
ＳＩ６５								
Ｐ１	MB55	楕円形	0.25	0.18	0.18	63.74	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ２	MA54	隅丸方形	0.25	0.24	0.29	63.62	1 黒色(10YR2/1)	
ＳＩ１０４								
Ｐ１	MA52	楕円形	0.22	0.19	0.19	63.59	1 黒褐色(10YR2/2)	
Ｐ２	MA52	円形	0.37	0.32	0.19	63.49	1 黒色(10YR2/1)	
ＳＩ１５２								
Ｐ１	MB55	楕円形	0.25	0.19	0.30	63.71	1 褐色(10YR4/4)	
ＳＡ２４								
Ｐ１	MA53	隅丸方形	0.24	(0.17)	0.01	63.77	1 黒褐色(10YR2/1.5) 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)	
Ｐ２	LT54	隅丸方形	0.23	0.20	0.14	63.70	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ３	LT54	隅丸方形	0.28	0.20	0.21	63.54	1 黒色(10YR2/1)	

第３表　Ａ区検出柱穴様ピット（SKP）観察表（1）

ＳＫＰ番号	地区	平面形	単位（ｍ）			底面標高(m)	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ			
6	LT55	楕円形	(0.42)	0.38	0.24	63.68	1 黒褐色(10YR2/2)	
7	LT55	隅丸方形	0.27	0.24	0.25	63.66	1 黄褐色(10YR5/8)と 黒色(10YR2/1)	SKP8 を切る。
8	LT55	隅丸方形	0.25	(0.15)	0.15	63.77	1 黄褐色(10YR5/6) 2 黒色(10YR2/1)	SKP7 に切られる。
9	LT55	楕円形	(0.26)	0.20	0.08	63.88	1 黒褐色(10YR3/2)	SKP11 と SKP10 に切られる。
10	LT55	隅丸方形	0.26	0.21	0.21	63.87	1 黒褐色(10YR2/2)	SKP9 を切る。
11	LT55	楕円形	0.33	0.31	0.03	63.75	1 黒色(10YR2/1)	SKP9 を切る。
12	LT55	円形	0.28	0.27	0.05	63.87	1 暗褐色(10YR3/3)	
13	LT55	楕円形	0.46	0.35	0.15	63.75	1 黒褐色(10YR3/1)	
14	LT55	楕円形	0.35	0.20	0.46	63.45	1 黒褐色(10YR3/2)	
15	LT55	円形	0.40	(0.30)	0.37	63.53	1 黒褐色(10YR2/2)	
16	LT55	円形	0.31	(0.11)	0.06	63.86	1 黒色(10YR2/1)	
17	LT54･55	楕円形	0.40	(0.31)	0.17	63.73	1 黒褐色(10YR3/2)	
18	LT54･55	楕円形	0.23	(0.20)	0.12	63.83	1 黒色(10YR2/1)	
19	LT54	円形	0.34	(0.20)	0.28	63.67	1 黒褐色(10YR2/2)	
20	LT54	楕円形	(0.33)	0.23	0.04	63.69	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ３－Ｐ2 に切られる。
44	MA51	円形	0.24	0.21	0.10	63.58	1 黒色(10YR1.7/1)	
51	MA53	隅丸方形	(0.23)	0.23	0.18	63.58	1 黒色(10YR2/1) 2 黒褐色(10YR2/2)	ＳＩ４－Ｐ1 に切られる。
54	MA53	円形	0.29	0.28	0.01	63.77	1 黒色(10YR2/1)	
57	LT54	隅丸方形	0.21	(0.08)	0.08	63.77	1 黒褐色(10YR2/1.5)	SD56 に切られる。
60	MA54	楕円形	0.24	(0.20)	0.35	63.56	1 黒色(10YR1.7/1)	ＳＩ３を切る。
75	MA48	隅丸方形	0.40	0.27	0.40	63.27	1 黒色(10YR2/1)	
76	LT48	円形	0.26	(0.18)	0.11	63.52	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
77	LT48	隅丸方形	0.23	0.23	0.36	63.27	1 黒褐色(10YR2/1.5)	

第４表　Ａ区検出柱穴様ピット（SKP）観察表（2）

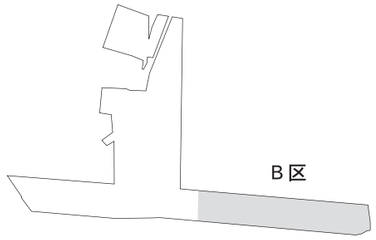
ＳＫＰ番号	地区	平面形	単位（m）			底面標高（m）	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ			
80	MA48	楕円形	0.19	0.18	0.11	63.51	1 黒褐色（10YR2/1.5）	
82	LT48	楕円形	0.31	0.19	0.35	63.43	1 黒褐色（10YR2/1.5）	土師器２片出土。
83	LT48	楕円形	0.29	0.22	0.19	63.55	1 黒褐色（10YR2/2）	土師器１片出土。
92	MA52･53	円形	0.27	(0.17)	0.15	63.56	1 黒褐色（10YR3/1）	
93	MA52	楕円形	0.36	0.28	0.16	63.48	1 黒色（10YR1.7/1）	SKP94 を切る。
94	MA52	楕円形	0.38	0.32	0.48	63.18	1 黒色（10YR2/1）	SKP93 に切られる。
95	MA52	楕円形	0.43	0.34	0.41	63.26	1 黒色（10YR2/1）	SKP96 を切る。
96	MA52	楕円形	(0.25)	0.30	0.16	63.51	1 黒色（10YR2/1） 2 暗褐色（10YR3/3）	SKP95 と SKP97 に切られる。
97	LT・MA52	楕円形	0.44	(0.30)	0.31	63.39	1 黒色（10YR2/1） 2 にぶい黄褐色（10YR5/4）	SKP96 を切り SKP98 に切られる。
98	LT52	円形	0.34	0.30	0.12	63.71	1 黒褐色（10YR2/2）	SKP97 を切る。
99	MA52	円形	0.30	0.27	0.10	63.57	1 暗褐色（10YR3/4）	
101	MA52	楕円形	0.28	0.22	0.07	63.62	1 暗褐色（10YR3/3）	
102	MA53	楕円形	(0.24)	0.22	0.06	63.76	1 黒色（10YR2/1）	
103	MA52	楕円形	0.36	0.32	0.13	63.53	1 黒色（10YR2/1）	
106	MA49	隅丸方形	0.26	0.24	0.21	63.39	1 黒褐色（10YR2/1.5）	ＳＩ32 を切る。
107	MA52	楕円形	0.47	0.35	0.28	63.48	1 黒色（10YR2/1）	ＳＩ104 を切る。
108	MA48	隅丸方形	0.28	0.28	0.11	63.52	1黒褐色土（10YR2/2）	
109	LT48	隅丸方形	0.74	0.57	0.48	63.20	1 黒褐色（10YR2/2）	SKP110 を切る。土師器２片出土。
110	LT48	隅丸方形	0.46	0.39	0.21	63.33	1 暗褐色（10YR3/4）	SKP109 に切られる。
111	LT48	楕円形	0.20	(0.12)	0.23	63.47	1 黒褐色（10YR2/2）	
112	LT48	楕円形	0.25	(0.23)	0.11	63.47	1 黒褐色（10YR2/2）	
113	LT47･48	円形	0.36	(0.22)	0.35	63.34	1 黒褐色（10YR2/2）	
114	LT47･48	楕円形	(0.29)	0.30	0.09	63.59	1 黒褐色（10YR2/2）	
153	MC54	円形	0.37	(0.35)	0.05	63.94	1 黒褐色（10YR2/2）	新旧不明
154	MC54･55	円形	0.25	(0.22)	0.20	63.99	1 黒褐色（10YR2/2）	
155	MB54	円形	0.31	(0.28)	0.40	63.76	1 黒褐色（10YR3/1） 2 黒色（10YR2/1）	
163	MB53	円形	0.29	(0.13)	0.05	63.69	1 黒褐色（10YR2/1.5）	
165	MB52・53	楕円形	0.41	0.20	0.14	63.50	1 黒褐色（10YR2/1.5） 2 黒色（10YR2/1）	
168	MB53	楕円形	0.16	0.09	0.06	63.66	1 黒褐色（10YR2/2）	

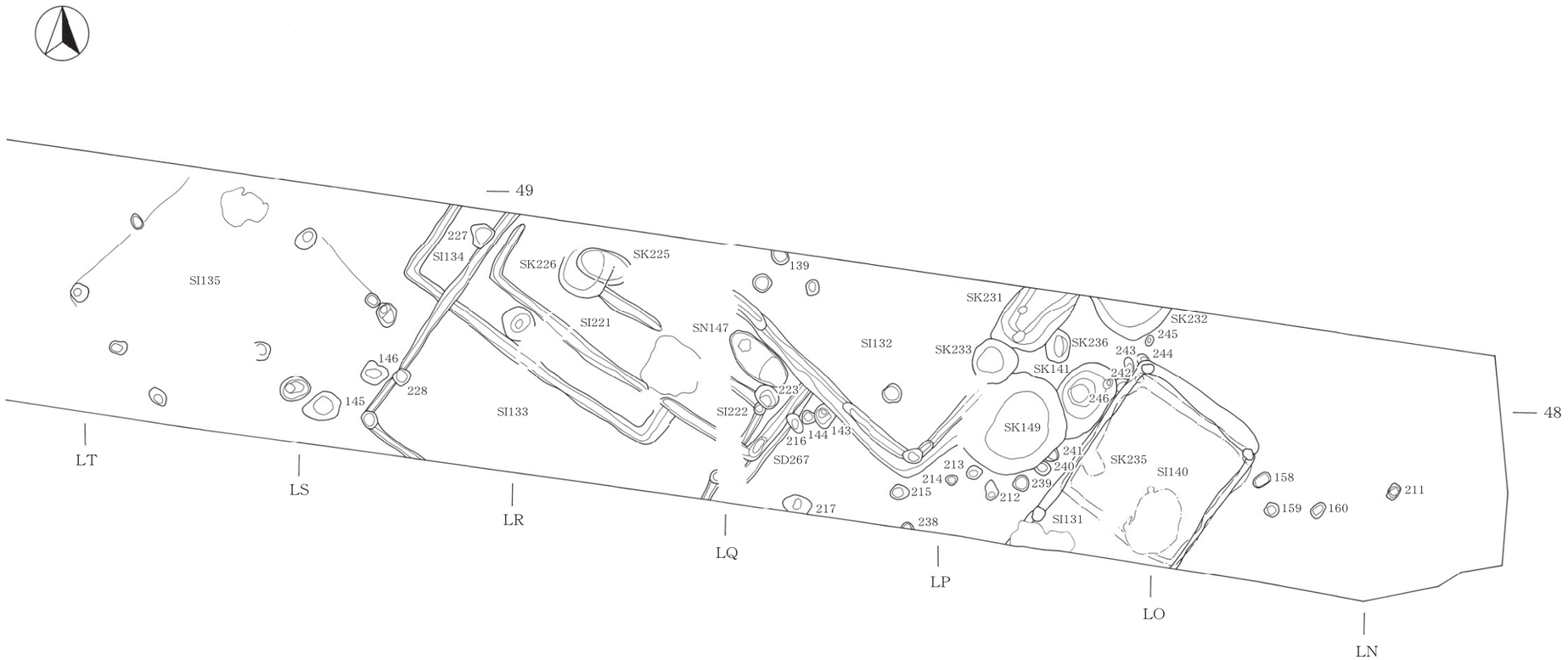
第３節　Ｂ区の検出遺構（第25図）

Ｂ区の調査範囲はＡ区南端部の東側にあり、その南端ラインは国道７号の歩道に接している。現歩道の拡幅工事により切り土される、東西約28m、幅6.5mほどの細長い調査区である。ただし、国道と接する南側は、歩道との高低差が２m以上の法面である。このため、調査範囲南端ラインの幅1.5mほどの法面部分は調査ができなかった。しかし本区から検出された遺構の底面標高などから、この法面部分の遺構は既に大半が失われているものと推定される。

本区からは、竪穴住居跡８軒、土坑９基、溝跡１条、焼土遺構１基、柱穴様ピット28基の合計47基の遺構が検出された。また、検出された８軒の竪穴住居跡の内７軒が竪穴住居同士で切り合い、住居跡が非常に密集している。遺構の遺存状況は、地山面の標高が低い東側ほど良好である。

なお、各遺構に伴うピットの規模などについては「第５表　Ｂ区検出遺構内ピット観察表」に掲載している。また、単体の柱穴様ピットについては、その配置を「第25図」に、規模などを「第６表　Ｂ区検出柱穴様ピット（ＳＫＰ）観察表（１）と第７表　同（２）」に記載している。





※数字だけのものはSKPである

第25図　Ｂ区遺構配置図

１　竪穴住居跡

ＳＩ131（第26・27図、図版８・９）

《地区》ＬＮ47・48、ＬＯ47・48グリッドに位置している。

《確認》第Ⅳ層上面で黒褐色の方形プランを確認した。また同時にカマドの構築材と思われる白色粘土を住居北西壁西寄りに検出した。

《重複》ほぼ真下にＳＩ140が存在する。また、ＳＫＰ242とＳＫＰ244を切る。

《規模と平面形》全長が確認されたのは北東壁だけで、その長さは2.73ｍである。北西壁と南東壁は部分確認である。南西壁は確認できなかった。現国道７号の歩道建設により既に失われているものと推定される。北西壁は現状で4.29ｍの長さが確認されていることから、平面形は、北西・南東壁を長辺とする長方形であると判断される。南東壁は2.67ｍ確認できた。各壁の軸方位は北東壁がＮ－51°－Ｗ、北西壁がＮ－36.5°－Ｅ、南東壁がＮ－36°－Ｅである。

《壁・壁溝》壁は現状で、床面から確認面まで34㎝の高さがあり、ほぼ垂直に立ち上がっている。確認された北東、北西、南東壁には、壁溝が巡っていた。壁溝の幅は11～44㎝、深さは15㎝である。

《埋土》７層に分層できた。第１，２層は自然堆積と推定される。第４層上面が床面であると判断した。第７層は、本住居跡よりも古い時期の遺構の埋土である可能性もある。

《床面》東隅部と中央西寄りの部分が攪乱によって床面が失われていた。残存する床面はやや起伏が見られる。

《カマド》北西壁西寄りに付設されていた。東袖と火床が残存していた。断面からは、住居の壁溝を掘削後カマドが付設されたことが分かる。また。第３層上面が火床で、第４層が袖部である。

《柱穴》北隅と東隅、北西壁のカマド東側の３基を検出した。

《出土遺物》埋土から土師器甕の破片が出土した。第４層の貼り床土から出土した土師器甕の破片は、本住居跡のほぼ真下に存在するＳＩ140カマドから出土した土師器甕と接合（第49図７・８）することから、本住居構築の際に下層のＳＩ140の埋土を巻き込んだものと推定される。この他には、フイゴの羽口１点（101ｇ）、流動滓を含む鉄滓18点（計986ｇ）とこれらの鉄関連遺物と関連するの推定される木炭６点（計69ｇ）が出土し、カマドからは鉄製品が出土した。これらの内、流動滓１点（第48図５）と棒状鉄製品（第49図６）を図化した。また、本住居跡と下層のＳＩ140の断面を精査する際に掘削したサブトレンチ内から炭化米（図版23）が出土した。

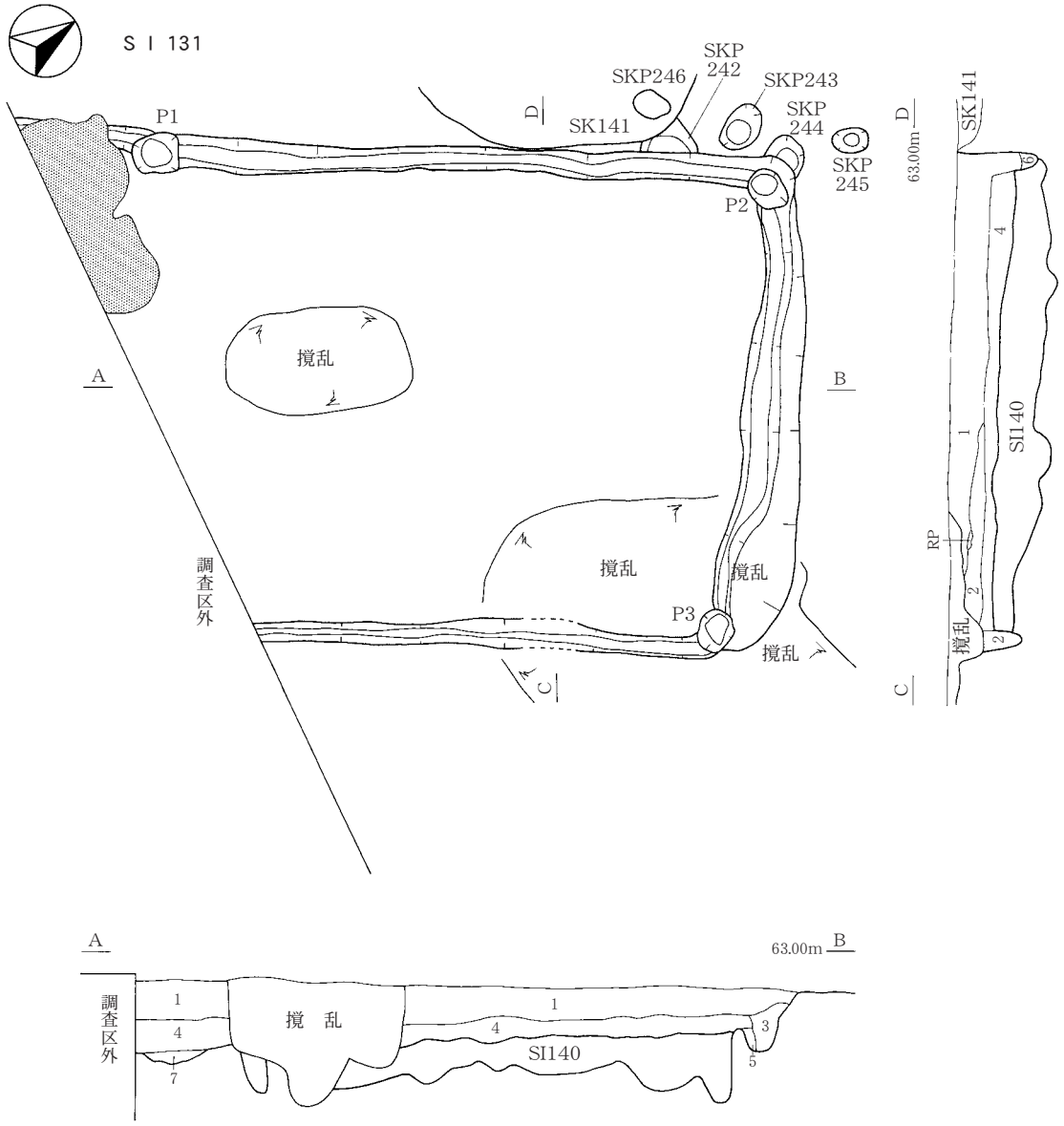
ＳＩ132（第28図、図版８）

《地区》ＬＯ47・48・ＬＰ47・48グリッドに位置している。

《確認》第Ⅰ層及び第Ⅱ層を掘り下げ、その下面を精査中に、南隅と南西壁、南東壁を確認し、竪穴住居跡の南側部分と判断した。

《重複》本住居跡を含む、ＬＯ47・48西側からＬＰ・ＬＱ・ＬＲ／47・48グリッドの範囲には、５軒の竪穴住居跡（ＳＩ132・133・134・221・222）が互いに重複しながら存在している。本竪穴住居跡はこれら５軒の中で最も新しいものである。ＳＩ221、ＳＤ267、ＳＫＰ139・143を切る。ＳＫ149・231・233に切られる。

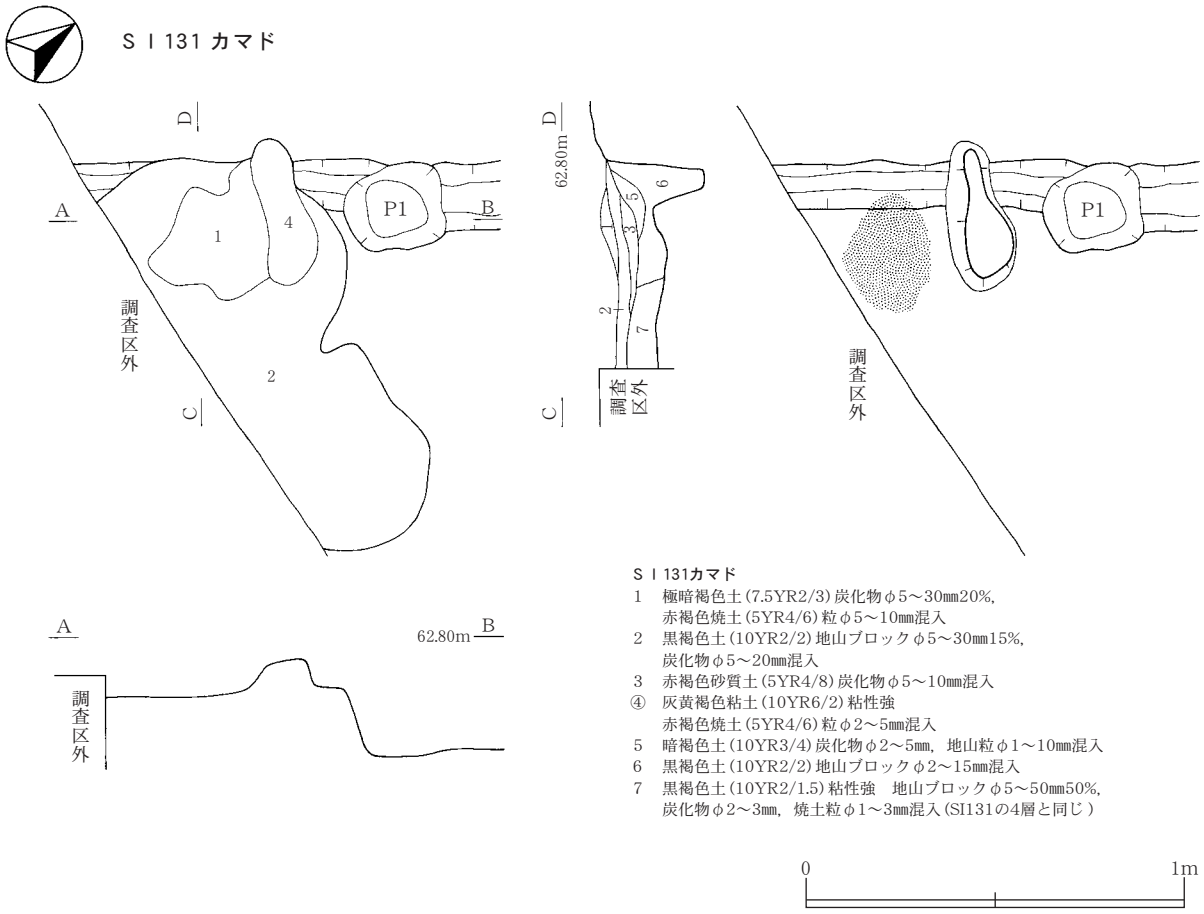
《規模と平面形》北、東、西の３隅と北東、北西の壁は北側の調査区外にあり確認できなかった。こ



ＳＩ131
1　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ2～5㎜，地山ブロックφ10～40㎜，礫φ2～3㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ3～7㎜混入
3　黒褐色土(10YR2/2)地山ブロックφ2～15㎜混入
4　黒褐色土(10YR2/1.5)粘性強　地山ブロックφ5～50㎜40%，炭化物φ2～3㎜，焼土粒φ1～3㎜混入
5　黒褐色粘土(10YR2/2)粘性強　地山ブロックφ10～30㎜混入
6　明黄褐色土(10YR6/8)暗褐色土(10YR3/4)混入
7　暗褐色粘土(10YR3/4)粘性強　焼土ブロックφ10～50㎜30% 混入

0　2m

第26図　ＳＩ131竪穴住居跡



第27図　ＳＩ131カマド

のため規模は不明である。南西壁の西側は土管埋設の掘削により失われている。確認した長さは4.80mである。南東壁は東側を３基の土坑（ＳＫ149・231・233）に切られているが、3.50mにわたり確認できた。本来は、辺長５ｍ前後の方形であると推定される。壁の軸方位は南東壁がＮ－44.5°－Ｅ、南西壁がＮ－47°－Ｗである。

《埋土》６層（第28図：第12～17層）に分層できた。第16・17層土を竪穴の掘り形に充填して床を形成し、第16層上面を床面としていたものと推測した。

《壁・壁溝》確認面までの壁の高さは現況で10㎝ほどで、外傾して立ち上がっている。壁沿いに壁溝を確認した。その幅は30～47㎝、床面からの深さは９～35㎝である。

《カマド》検出できなかった。

《柱穴》南隅１基と域内に３基の計４基を検出した。

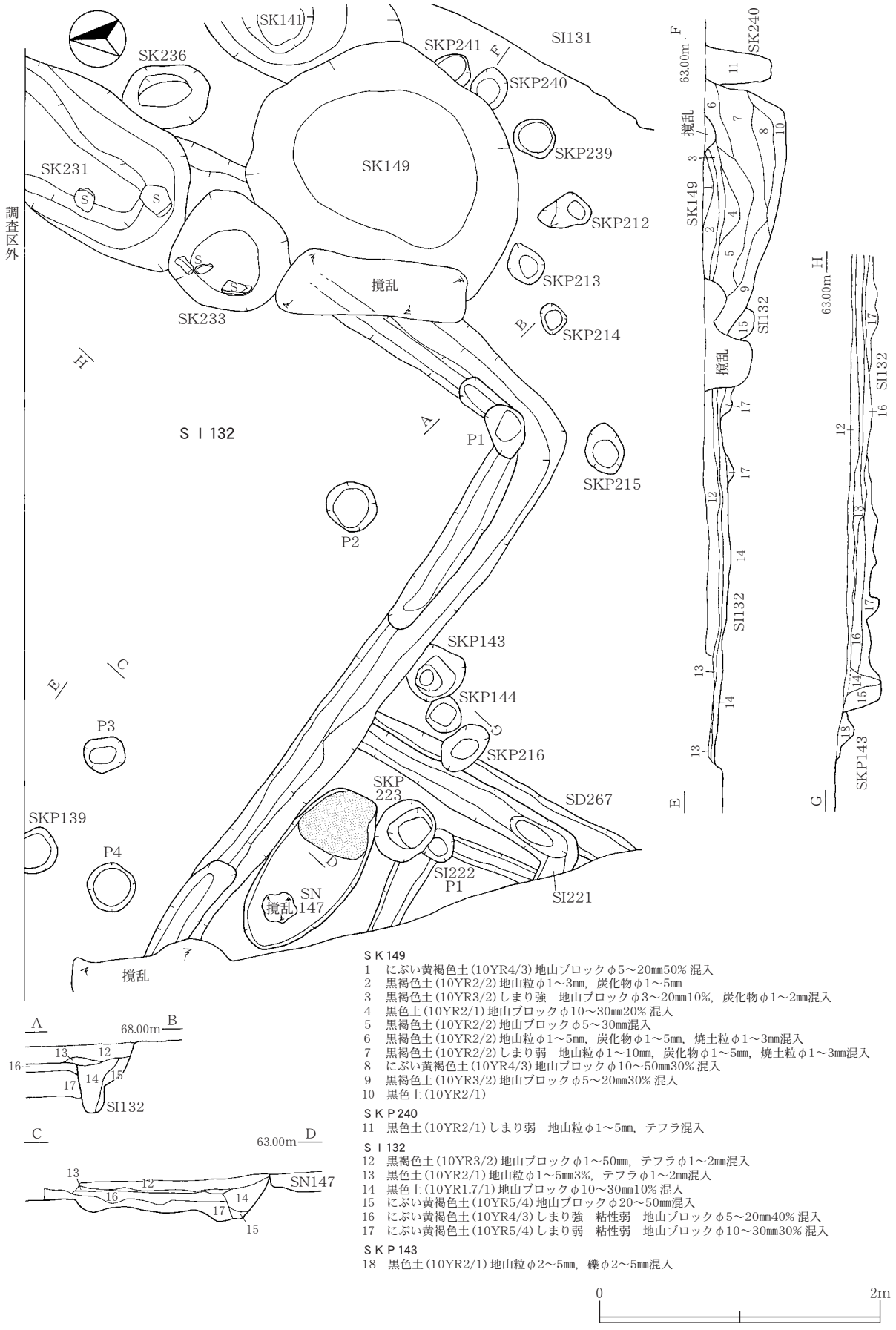
《出土遺物》須恵器甕破片１点、土師器破片多数、流動滓を含む８点の鉄滓（計177ｇ）が出土した。この内、須恵器甕を図化（第48図９）した。また、Ｐ２から炭化米（図版23）が出土している。

ＳＩ133（第29図、図版８）

《地区》ＬＱ48、ＬＲ47・48グリッドに位置している。

《確認》第Ⅰ層下面を精査中に、北西壁、西隅、南西壁を検出した。

《重複》ＳＩ221・222、ＳＫＰ227・228に切られ、ＳＩ134を切る。また、北東側はＳＩ132によっ



ＳＫ149
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山ブロックφ5～20㎜50% 混入
2　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ1～3㎜，炭化物φ1～5㎜
3　黒褐色土(10YR3/2)しまり強　地山ブロックφ3～20㎜10%，炭化物φ1～2㎜混入
4　黒色土(10YR2/1)地山ブロックφ10～30㎜20% 混入
5　黒褐色土(10YR2/2)地山ブロックφ5～30㎜混入
6　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ1～5㎜，炭化物φ1～5㎜，焼土粒φ1～3㎜混入
7　黒褐色土(10YR2/2)しまり弱　地山粒φ1～10㎜，炭化物φ1～5㎜，焼土粒φ1～3㎜混入
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山ブロックφ10～50㎜30% 混入
9　黒褐色土(10YR3/2)地山ブロックφ5～20㎜30% 混入
10　黒色土(10YR2/1)

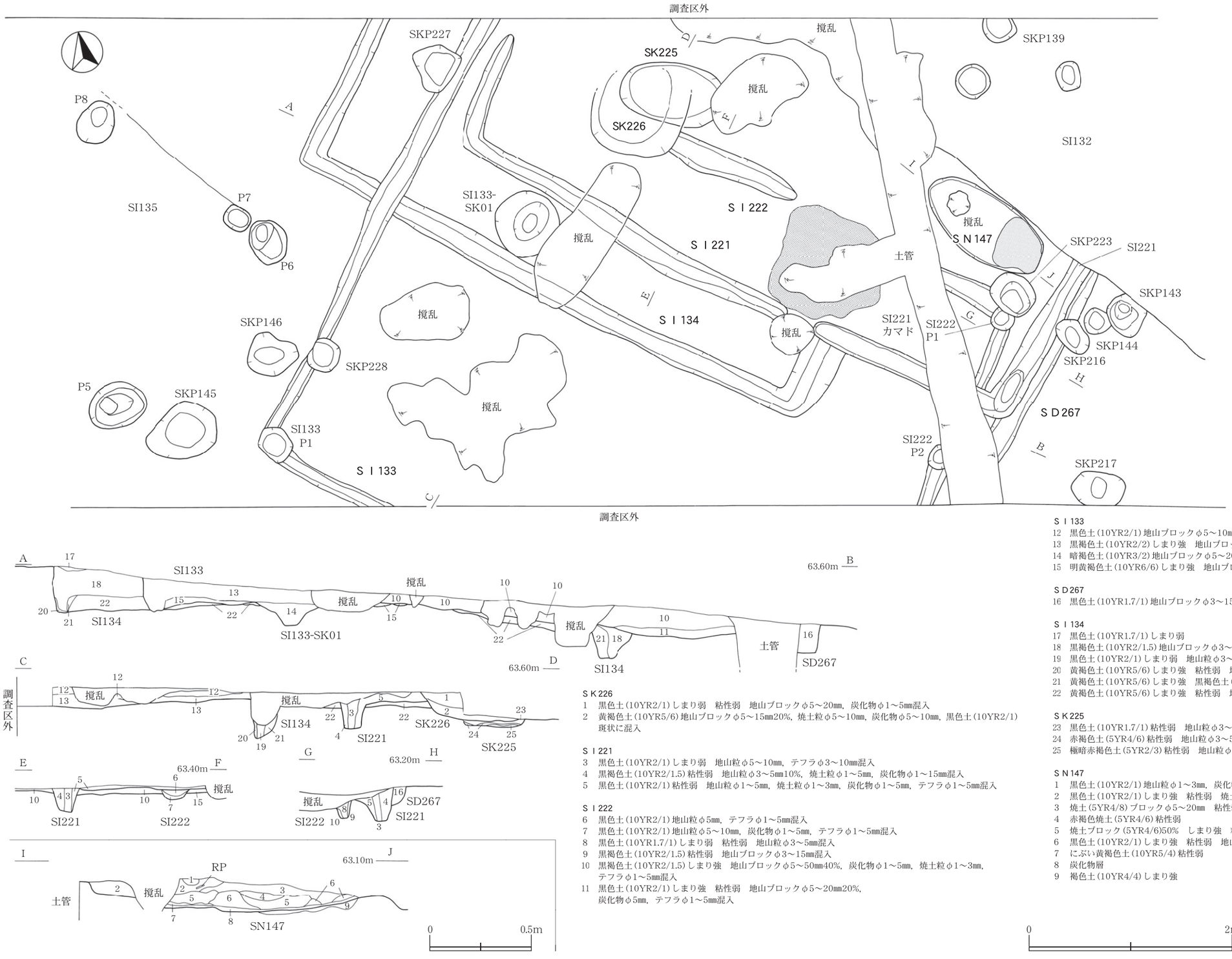
ＳＫＰ240
11　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ1～5㎜，テフラ混入

ＳＩ132
12　黒褐色土(10YR3/2)地山ブロックφ1～50㎜，テフラφ1～2㎜混入
13　黒色土(10YR2/1)地山粒φ1～5㎜3%，テフラφ1～2㎜混入
14　黒色土(10YR1.7/1)地山ブロックφ10～30㎜10% 混入
15　にぶい黄褐色土(10YR5/4)地山ブロックφ20～50㎜混入
16　にぶい黄褐色土(10YR4/3)しまり強　粘性弱　地山ブロックφ5～20㎜40% 混入
17　にぶい黄褐色土(10YR5/4)しまり弱　粘性弱　地山ブロックφ10～30㎜30% 混入

ＳＫＰ143
18　黒色土(10YR2/1)地山粒φ2～5㎜，礫φ2～5㎜混入

0　2m

第28図　ＳＩ132竪穴住居跡、ＳＫ149土坑



ＳＩ133
12　黒色土(10YR2/1)地山ブロックφ5～10mm，炭化物φ3～5mm，焼土粒φ1～5mm，テフラφ2～5mm混入
13　黒褐色土(10YR2/2)しまり強　地山ブロックφ5～15mm20%，炭化物φ1～5mm，焼土粒φ1～3mm混入
14　暗褐色土(10YR3/2)地山ブロックφ5～20mm15%，炭化物φ1～3mm，焼土粒φ1～3mm混入
15　明黄褐色土(10YR6/6)しまり強　地山ブロックφ1～20mm20% 混入

ＳＤ267
16　黒色土(10YR1.7/1)地山ブロックφ3～15mm％，炭化物φ5～10mm，焼土粒φ5～10mm混入

ＳＩ134
17　黒色土(10YR1.7/1)しまり弱
18　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ3～30mm15%，炭化物φ1～5mm，テフラφ1～5mm混入
19　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ3～5mm，炭化物φ1～5mm混入
20　黄褐色土(10YR5/6)しまり強　粘性弱　地山ブロックφ5～15mm混入
21　黄褐色土(10YR5/6)しまり強　黒褐色土(10YR2/1.5)，地山ブロックφ5～15mm混入
22　黄褐色土(10YR5/6)しまり強　粘性弱　地山ブロックφ5～15mm20% 混入

ＳＫ225
23　黒色土(10YR1.7/1)粘性弱　地山粒φ3～5mm，焼土粒φ3～5mm，炭化物φ3～5mm混入
24　赤褐色土(5YR4/6)粘性弱　地山粒φ3～5mm，炭化物混入
25　極暗赤褐色土(5YR2/3)粘性弱　地山粒φ3～5mm，焼土粒φ3～10mm20%，炭化物φ3～5mm混入

ＳＮ147
1　黒色土(10YR2/1)地山粒φ1～3mm，炭化物φ1～3mm混入
2　黒色土(10YR2/1)しまり強　粘性弱　焼土(5YR4/8)ブロックφ3～30mm20% 混入
3　焼土(5YR4/8)ブロックφ5～20mm　粘性弱　黒色土(10YR1.7/1)30％混入
4　赤褐色焼土(5YR4/6)粘性弱
5　焼土ブロック(5YR4/6)50%　しまり強　粘性弱　地山ブロックφ10～20mm混入
6　黒色土(10YR2/1)しまり強　粘性弱　地山ブロックφ10mm混入
7　にぶい黄褐色土(10YR5/4)粘性弱
8　炭化物層
9　褐色土(10YR4/4)しまり強

ＳＫ226
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱　粘性弱　地山ブロックφ5～20mm，炭化物φ1～5mm混入
2　黄褐色土(10YR5/6)地山ブロックφ5～15mm20%，焼土粒φ5～10mm，炭化物φ5～10mm，黒色土(10YR2/1)斑状に混入

ＳＩ221
3　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ5～10mm，テフラφ3～10mm混入
4　黒褐色土(10YR2/1.5)粘性弱　地山粒φ3～5mm10%，焼土粒φ1～5mm，炭化物φ1～15mm混入
5　黒色土(10YR2/1)粘性弱　地山粒φ1～5mm，焼土粒φ1～3mm，炭化物φ1～5mm，テフラφ1～5mm混入

ＳＩ222
6　黒色土(10YR2/1)地山粒φ5mm，テフラφ1～5mm混入
7　黒色土(10YR2/1)地山粒φ5～10mm，炭化物φ1～5mm，テフラφ1～5mm混入
8　黒色土(10YR1.7/1)しまり弱　粘性弱　地山粒φ3～5mm混入
9　黒褐色土(10YR2/1.5)粘性弱　地山ブロックφ3～15mm混入
10　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強　地山ブロックφ5～50mm40%，炭化物φ1～5mm，焼土粒φ1～3mm，テフラφ1～5mm混入
11　黒色土(10YR2/1)しまり強　粘性弱　地山ブロックφ5～20mm20%，炭化物φ5mm，テフラφ1～5mm混入

第29図　ＳＩ133・134・221・222竪穴住居跡、ＳＫ225・226土坑、ＳＤ267溝跡、ＳＮ147焼土遺構

て切られていると推定される。

《規模と平面形》西隅と北西壁は4.83m、南西壁は1.49m 確認できたが、北隅は、北側の調査区外にあり、北東壁の大部分は、ＳＩ132の構築により既に失われていると推定される。さらに南西壁の大半と南隅は、現国道７号歩道の建設によって失われている。このため規模は不明であるが、形状は周囲と同様に方形であるものと判断される。北西壁の約6.2m南東にこれとほぼ平行するＳＤ267溝跡が存在し、ＳＩ132・221との切り合い関係から本住居跡の南東側の壁溝である可能性がある。残存する壁の軸方位は北西壁がＮ－35°－Ｅ、南西壁がＮ－52.5°－Ｗである。

《埋土》４層（第29図：第12～15層）に分層できた。第15層土を貼り床を形成し、この層の上面を床面としていたものと推測した。また、第14層は、床に掘削された土坑（SK-01）の埋土である。

《壁・壁溝》確認面までの壁の高さは現況で16㎝ほどで、ほぼ垂直に立ち上がっている。北西と南西の壁沿いに壁溝を確認した。その幅は25㎝、床面からの深さは12㎝である。

《カマド》検出できなかった。ただし、ＳＮ147が、掘り込みの軸方位や周辺住居跡との位置関係から本住居跡南東壁に付設されていたカマドの火床である可能性が考えられる。

《柱穴》西隅の柱穴（Ｐ1）を確認した。また、西側の床面からは、径63㎝、深さ23㎝の円形の土坑（SK-01）を検出した。

《出土遺物》土師器、須恵器の破片が多数出土したが、器形を復元できるものは無かった。また、流動滓を含む４点の鉄滓（計159ｇ）が出土した。

ＳＩ134（第29図、図版８）

《地区》ＬＱ47・48、ＬＲ48グリッドに位置している。

《確認》ＳＩ133とほぼ同時に、133に東側の大半を切られる状況で北西壁と西隅、南西壁を検出した。

《重複》ＳＩ133・221・222に切られ、重複する５軒の住居跡の中では最も古い。他には、ＳＫ226、ＳＫＰ227にも切られる。ＳＫ225は域内にあるが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》ＳＩ133床下層を精査したところ、南西壁溝の全部と南隅が検出された。これにより、南西壁が5.68mである方形の竪穴住居跡であることが判明した。北西壁は1.64m、南東壁は79㎝確認できた。北西壁は北側の調査区外へ続いているものと推定されるが、北東側の大半は、ＳＩ221などの構築により既に失われていた。各壁の軸方位は、南西壁がＮ－55.5°－Ｗ、北西壁がＮ－34°－Ｅ、南東壁がＮ－32.5°－Ｅである。

《埋土》６層（第29図：第17～22層）に分層できた。第22層土を竪穴の掘り形に充填し床を形成し、この層の上面を床面としていたものと判断した。ただし、床面が検出できたのは、重複が無かった西隅部分のみである。

《壁・壁溝》確認面までの壁の高さは現況で20㎝ほどで、ほぼ垂直に立ち上がっている。北西と南西、南東の壁沿いに壁溝を確認した。その幅は19～41㎝、床面からの深さは18㎝以上である。また、本住居跡の東側から地山層の標高が低くなるためか、現状では、南東壁溝の底面標高は北西壁溝に比べ約30㎝低い。

《その他》カマドは検出できなかった。本住居跡に付属する柱穴等も検出できなかった。また、遺物の出土も無かった。

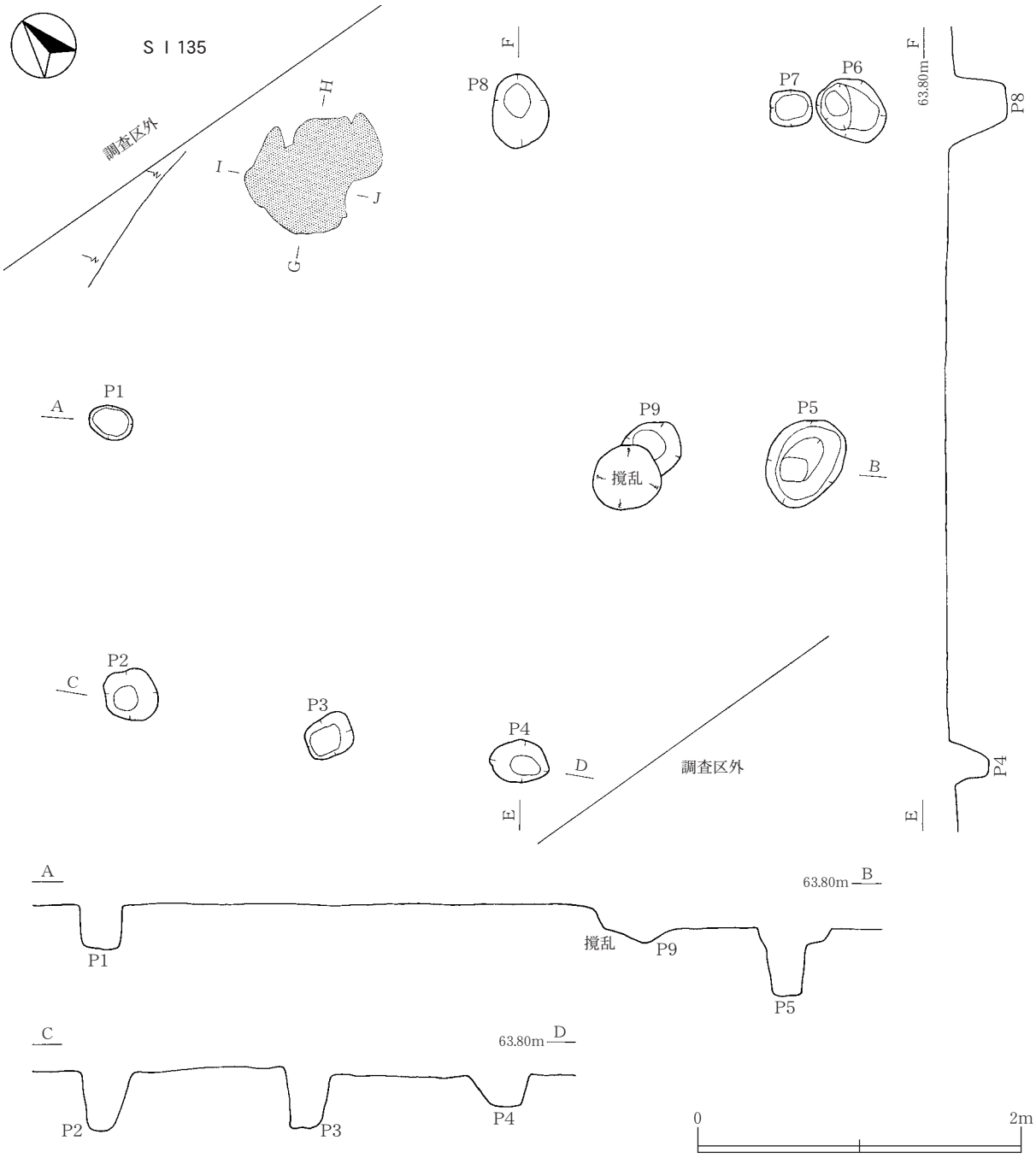
ＳＩ135（第30・31図、図版８）

《地区》ＬＲ48、ＬＳ47・48、ＬＴ48グリッドに位置している。

《確認》第Ⅴ層上面を精査中に、北側にカマドの焼土範囲とその南側から住居の壁に沿って並ぶと推定される８基と域内から１基の計９基の柱穴を検出した。既に床面に及ぶ削平を受けており、竪穴の形状を示す様なプラン、竪穴の壁は確認できなかったが、規模やカマドからの出土遺物から周辺と同様の竪穴住居跡である可能性が高いと判断した。

《重複》無い。

《規模と平面形》北隅と南隅は検出できなかったが、Ｐ２が西隅の、Ｐ６が東隅の柱穴であると判



第30図　ＳＩ135竪穴住居跡

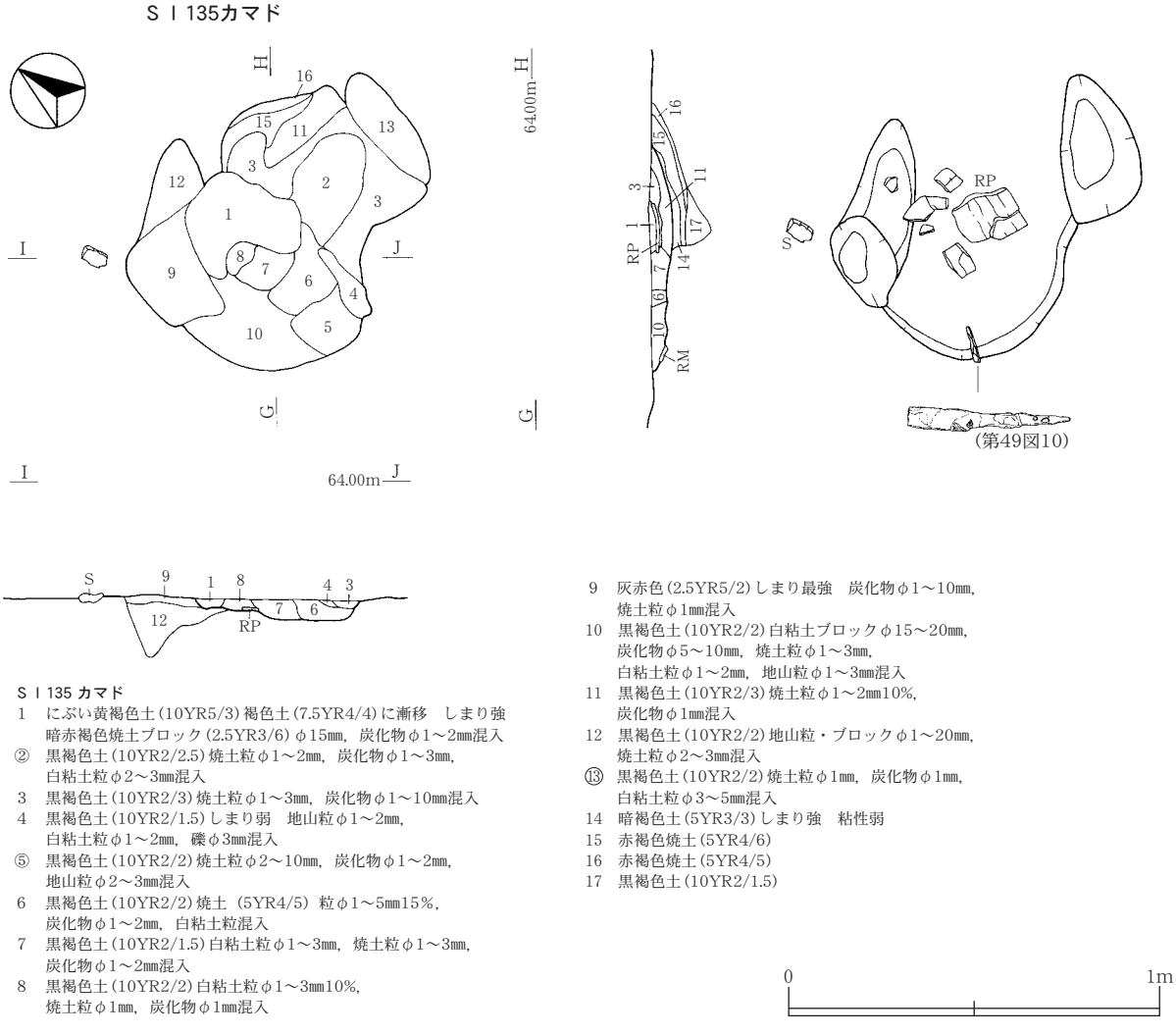
断し、一辺４ｍほどの方形の住居跡であると推定した。

《柱穴》計９基を検出した。この内、Ｐ１・２が北西壁の、Ｐ２～４が南西壁の、Ｐ５・６が南東壁の、Ｐ６～８が北東壁の軸線上あるいはその周辺に穿たれていた柱穴であると推測した。各柱穴間の距離は、心々間でＰ１－Ｐ２間が1.72m、Ｐ２－Ｐ３間が1.28m　Ｐ３－Ｐ４間が1.22m、Ｐ５－Ｐ６間が2.28m、Ｐ６－Ｐ７間が0.28m、Ｐ７－Ｐ８間が1.69mである。それぞれの軸方位は北西側のＰ１－Ｐ２がＮ－47°－Ｅ、南西側のＰ２～４がＮ－38°－Ｗ、南東側のＰ５－Ｐ６がＮ－49°－Ｅ、北東側のＰ６～８がＮ－41.5°－Ｗである。

《カマド》削平により上部は既に失われていた。北側と南側に長軸を北東方向とする掘り込みがあり、ここに両袖部の心材となる礫が埋設されていた可能性がある。また南西側は浅く掘り込まれておりここに焚き口があり、その北東側に堆積する第14層が火床である可能性が考えられる。以上のことから本カマドは北東壁に付設されていたものと推測した。

《遺物》カマド中央部から土師器甕が、南西端部から刀子１点（第49図10）が出土した。

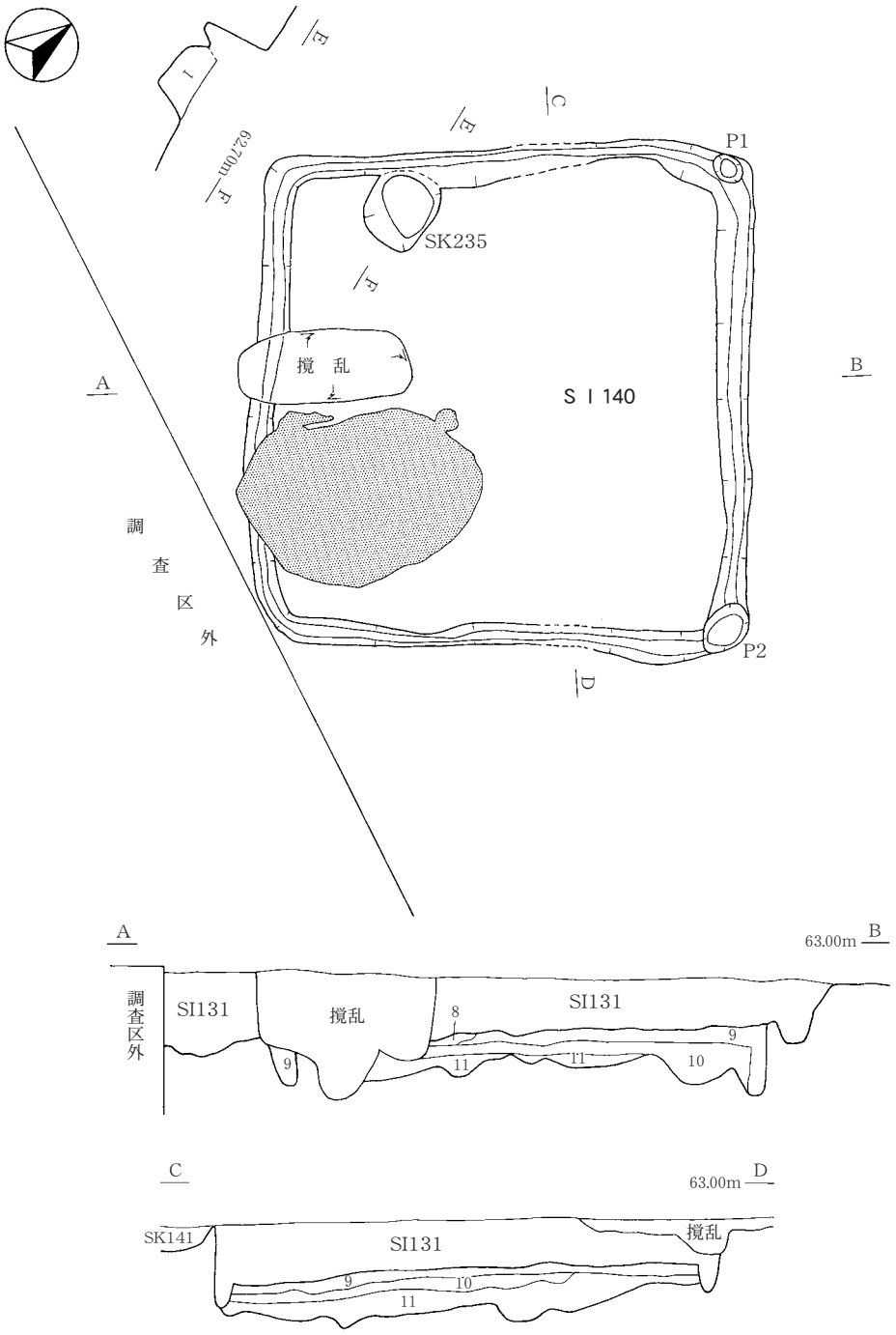
《その他》壁と壁溝は検出できなかった。また、第Ⅴ層上面からわずかにカマド下部が検出された状況から、既に床面に達する削平を受けているものと考えられる。



ＳＩ135 カマド
1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)褐色土(7.5YR4/4)に漸移　しまり強
暗赤褐色焼土ブロック(2.5YR3/6)φ15㎜，炭化物φ1～2㎜混入
②　黒褐色土(10YR2/2.5)焼土粒φ1～2㎜，炭化物φ1～3㎜，
白粘土粒φ2～3㎜混入
3　黒褐色土(10YR2/3)焼土粒φ1～3㎜，炭化物φ1～10㎜混入
4　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり弱　地山粒φ1～2㎜，
白粘土粒φ1～2㎜，礫φ3㎜混入
⑤　黒褐色土(10YR2/2)焼土粒φ2～10㎜，炭化物φ1～2㎜，
地山粒φ2～3㎜混入
6　黒褐色土(10YR2/2)焼土（5YR4/5）粒φ1～5㎜15%，
炭化物φ1～2㎜，白粘土粒混入
7　黒褐色土(10YR2/1.5)白粘土粒φ1～3㎜，焼土粒φ1～3㎜，
炭化物φ1～2㎜混入
8　黒褐色土(10YR2/2)白粘土粒φ1～3㎜10%，
焼土粒φ1㎜，炭化物φ1㎜混入
9　灰赤色(2.5YR5/2)しまり最強　炭化物φ1～10㎜，
焼土粒φ1㎜混入
10　黒褐色土(10YR2/2)白粘土ブロックφ15～20㎜，
炭化物φ5～10㎜，焼土粒φ1～3㎜，
白粘土粒φ1～2㎜，地山粒φ1～3㎜混入
11　黒褐色土(10YR2/3)焼土粒φ1～2㎜10%，
炭化物φ1㎜混入
12　黒褐色土(10YR2/2)地山粒・ブロックφ1～20㎜，
焼土粒φ2～3㎜混入
⑬　黒褐色土(10YR2/2)焼土粒φ1㎜，炭化物φ1㎜，
白粘土粒φ3～5㎜混入
14　暗褐色土(5YR3/3)しまり強　粘性弱
15　赤褐色焼土(5YR4/6)
16　赤褐色焼土(5YR4/5)
17　黒褐色土(10YR2/1.5)

0　1m

第31図　ＳＩ135カマド



S I 140
8　黒褐色粘土(10YR2/2)にぶい黄橙色土(10YR7/4)20%，炭化物φ2～5㎜板状に混入
9　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ5～30㎜混入
10　明黄褐色粘土(10YR6/8)粘性強　炭化物φ3～10㎜，にぶい黄橙色土(10YR7/4)斑状に混入
11　明黄褐色粘土(10YR6/8)しまり強　炭化物ブロックφ10～40㎜10%混入

S K235
1　黒褐色土(7.5YR3/2)しまり弱　地山粒φ5～10㎜10%，炭化物φ1～5㎜，焼土粒φ3～10㎜混入

第32図　S I 140竪穴住居跡、S K235土坑

ＳＩ140（第32・33図、図版９）

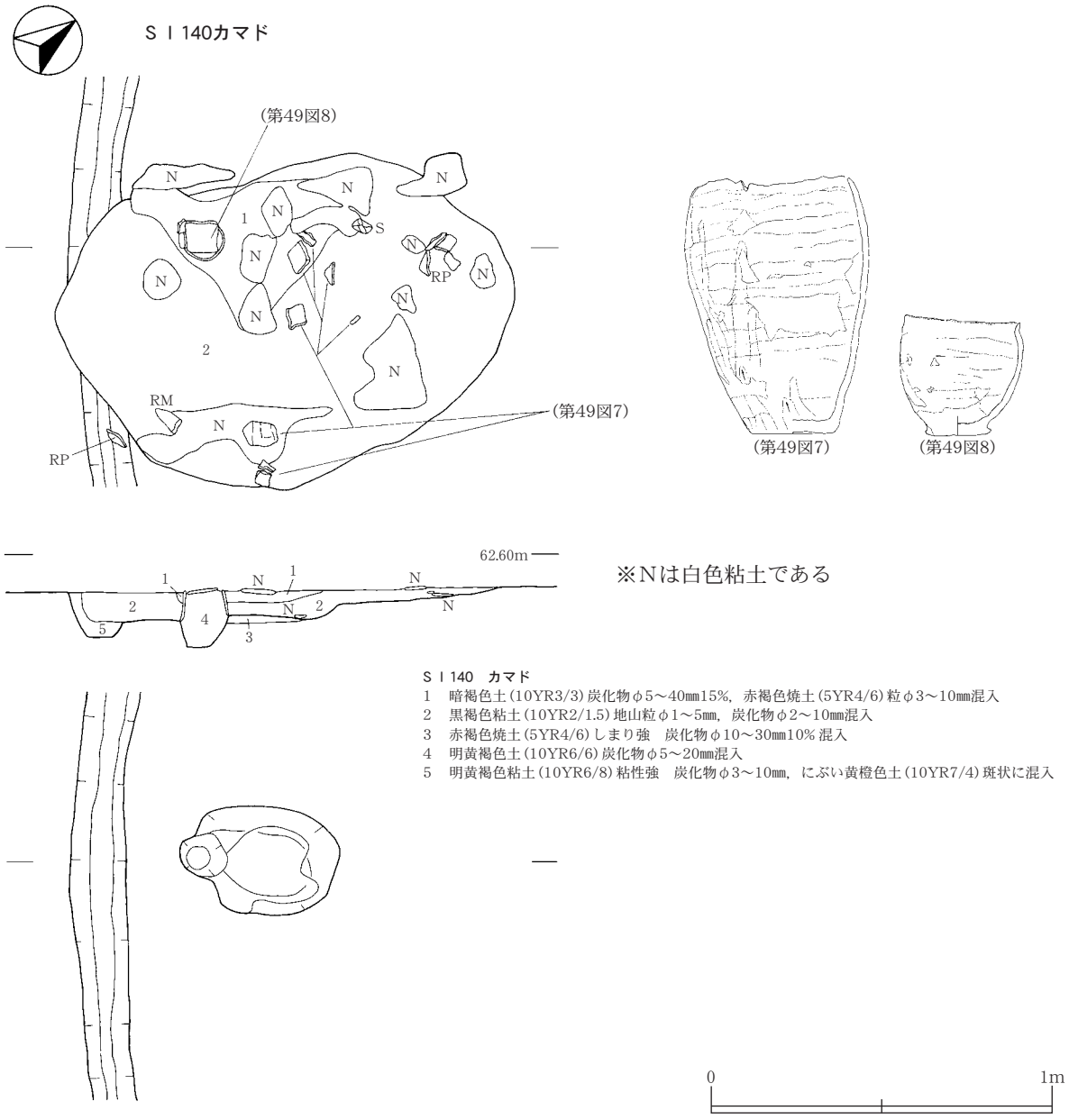
《地区》ＬＮ47・48、ＬＯ47・48グリッド、ＳＩ131のほぼ真下に重複して位置している。

《確認》ＳＩ131下層を精査中に確認した。

《重複》真上にＳＩ131が存在する。住居内西側北西壁寄りにＳＫ235が存在し、本住居跡に付属していた可能性も考えられるが、新旧関係は不明である。

《規模と平面形》北西壁長2.58m、北東壁長2.63m、南東壁長2.58m、南西壁長2.52mの方形の竪穴住居跡である。各壁の軸方位は北東壁がＮ－53.5°－Ｗ、北西壁がＮ－34.5°－Ｅ、南東壁がＮ－36°－Ｅ、南西壁がＮ－54°－Ｗである。

《壁と壁溝》本住居跡の北東壁と南西壁は、ＳＩ131のものとは別に確認されたが、北西壁と南東壁については、明確に検出できなかった。ＳＩ131構築の際、本住居跡の北西壁と南東壁を再利



第33図　ＳＩ140カマド

用したものと推測される。壁の高さは北東壁で10㎝ほど残存しており、現況ではほぼ垂直に立ち上がっている。また、壁溝の幅は21㎝、床面からの深さは20㎝である。

《埋土》４層（第32図：第８～11層）に分層した。第10・11層を竪穴の掘り形に充填し、第10層及び第11層上面を整えて、床面としていたと推測される。

《カマド》南西壁南寄りに付設されていた。第３層上面が火床であると判断した。また、支脚と考えられる倒立した土師器甕がこの南西側から検出された。カマドの範囲には構築材と思われる白色の粘土塊が見られるが、袖部は検出できなかった。

《柱穴》北隅と東隅から計２基検出した。

《出土遺物》埋土とカマドから土師器甕の破片が多数出土し、この内カマドなどから出土した３個体を図化（第49図７・８、第50図11）した。この他に、流動滓を含む鉄滓８点（計587ｇ）、羽口１点（39ｇ）が出土した（図版19）。

ＳＩ221（第29・34図）

《地区》ＬＰ47・48、ＬＱ47・48、ＬＲ48グリッドに位置している。

《確認》第Ⅰ層下面を精査中に、ＳＩ132・133・134と重複する状況で、南西壁溝と西隅、南西壁溝さらに南隅と南東壁溝を検出した。

《重複》ＳＩ133・134・222を切り、ＳＩ132、ＳＫ226に切られる。ＳＫ225との新旧関係は不明。

《規模と平面形》北東側の大半をＳＩ132の構築によって失っているが、南西壁溝5.91ｍを一辺とする方形の竪穴住居跡であると判断した。北西壁溝は現状では北側が消失しているが1.18ｍ確認できた。南東壁溝は北側をＳＩ132に切られている。その残存長は1.71ｍである。各壁溝の軸方位は、南西壁溝がＮ－55.5°－Ｗ、北西壁溝がＮ－30.5°－Ｅ、南東壁溝がＮ－37°－Ｅである。

《壁と壁溝》壁と床は既に失われ、壁溝が残存する状態である。現状では、壁溝の幅は17～28㎝、深さは24㎝である。

《埋土》壁溝の埋土は３層（第29図：第３～５層）に分層できた。

《カマド》やや明確さに欠けるが、位置関係から本住居跡南西壁に取り付いていた可能性が高いと判断した。東側が攪乱により崩落していたが構築材が馬蹄形に確認され、火床（第34図：第７層上面）も検出できた。

《遺物》カマド及びその周辺から土師器甕破片、フイゴの羽口の破片２点（計111ｇ）、鉄製品１点、鉄滓２点（計14ｇ）が出土した。この内、土師器甕（第50図12）と棒状鉄製品（第50図13）を図化した。

ＳＩ222（第29図）

《地区》ＬＰ47・48、ＬＱ47・48グリッドに位置している。

《確認》ＳＩ221床面下層を精査中に北東壁溝を検出し、その東側から、東隅と南東壁溝を検出した。

《重複》ＳＩ221, ＳＫ226, ＳＫＰ223に切られる。また、北東壁溝はＳＩ133の埋土を切っている。

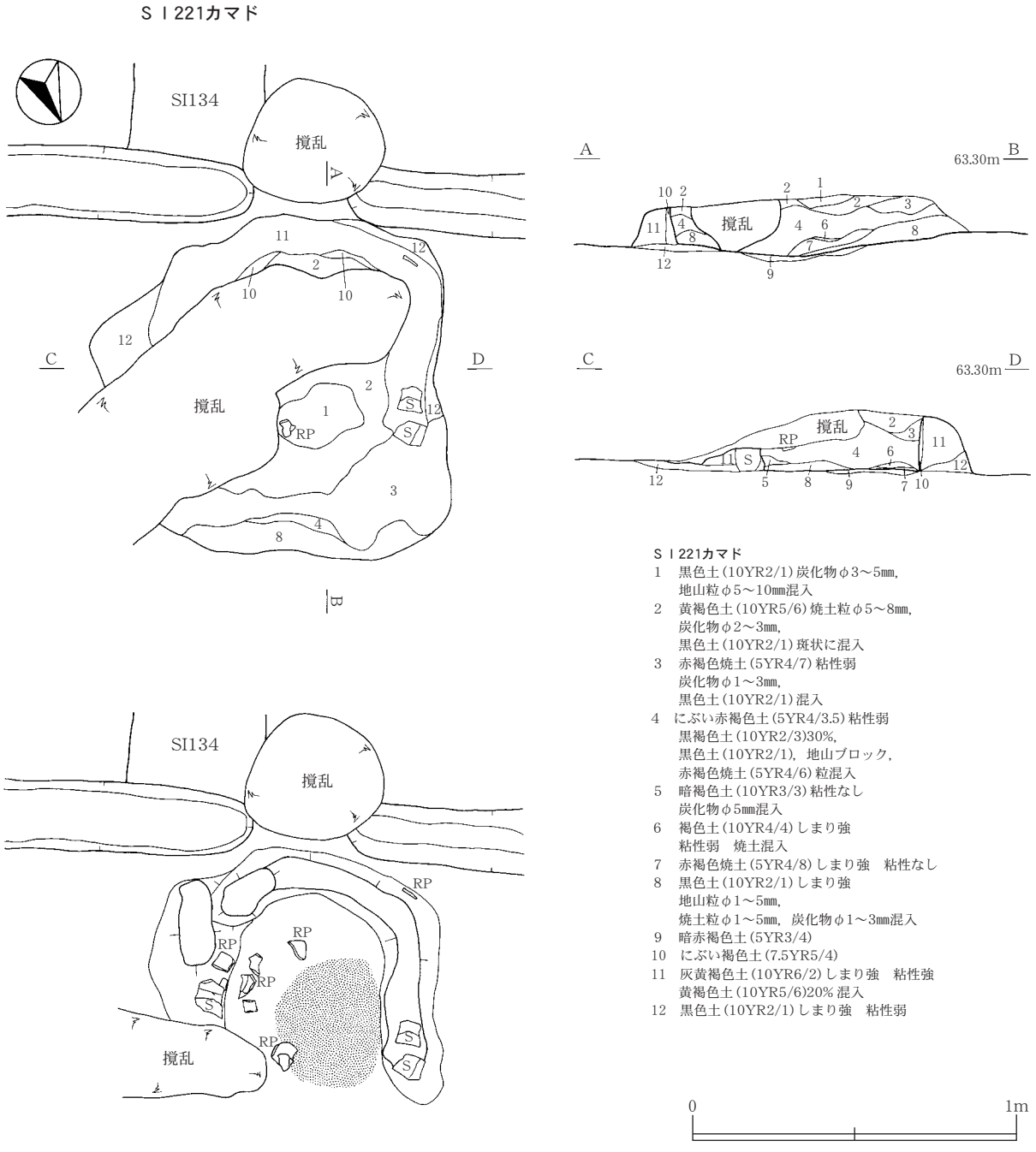
《規模と平面形》規模は不明であるが、東隅と北東壁溝、南東壁溝が検出されたことから、方形であると判断した。壁溝の残存長は、北東側は一部途切れるが3.59ｍ、南東側も一部失われているが2.09ｍ確認できた。北東壁溝の軸方位はＮ－56°－Ｗ、南東壁溝がＮ－31.5°－Ｅである。

《壁と壁溝》壁は既に失われていた。壁溝の幅は現状で13～29㎝、深さは18㎝ある。

《埋土》６層（第29図：第６～11層）に分層できた。第６～９層は壁溝の埋土である。第10・11層は床面を形成するために掘り形に充填した土であると推定される。ただし、本来の床面は既に失われている。

《柱穴》東隅と南東壁溝に穿たれていた。

《その他》カマドは検出できなかった。また、埋土から遺物の出土は無かった。



第34図　ＳＩ221カマド

２　土　　坑

ＳＫ141（第35図）

ＬＯ47・48グリッドに位置している。第Ⅴ層上面を精査中に検出した。ＳＫ149・ＳＫＰ246に切られ、ＳＫＰ242を切る。平面形は楕円形で、南西側をＳＫ149に切られているが、現状で長軸（北東－南西）が1.50m、短軸（北西－南東）は0.98m、確認面からの深さは19㎝である。底面は円形で中央部が窪んでいる。壁は北側が急傾斜で立ち上がっている。埋土は４層に分層できた。自然堆積であると思われる。土師器甕の破片が出土したが器形を復元できるものは無かった。

ＳＫ149（第28・35図）

ＬＯ47・48グリッドに位置している。第Ⅴ層上面を精査中に検出した。ＳＩ132・ＳＫ141・ＳＫＰ240・241を切り、ＳＫ233に切られる。西側が攪乱によって失われているが、平面形は径２ｍほどの円形である。確認面からの深さは63㎝である。底面は楕円形で壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は10層に分層できた。土層にやや乱れが見られる。土師器甕の破片が出土したが器形を復元できるものは無かった。他に鉄滓１点（7g）が出土している。

ＳＫ225（第29図）

ＬＱ48グリッドに位置している。ＳＫ226を精査中にその下層から検出した。ＳＫ226に切られる。ＳＩ134・221の域内にあるが、これらの住居跡との新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、現状で長軸（北西－南東）が91㎝、短軸（北東－南西）は60㎝、確認面からの深さは８㎝である。底面は楕円形で壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は３層に分層できた。土師器甕の破片が出土した。

ＳＫ226（第29図）

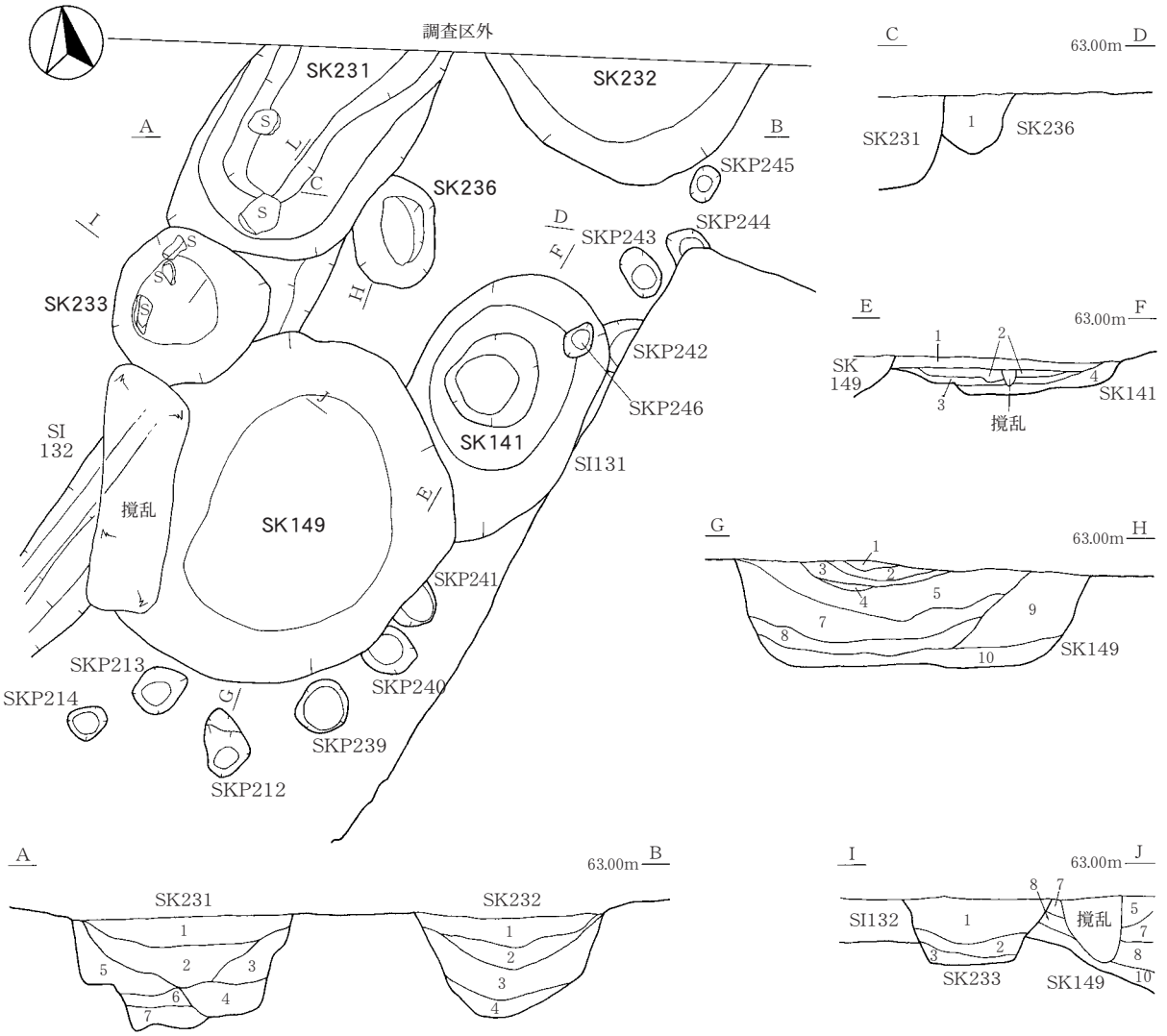
ＬＱ48グリッドに位置している。第Ⅰ層下面を精査中に、ＳＩ133・134・221と重複する状況で、検出した。ＳＩ222の北東壁溝とＳＫ225を切る。また、ＳＩ134・221の埋土を切る。北側を調査用のトレンチによって失っている。平面形は隅丸方形に近い形状であったものと推定した。現状では東－西が89㎝、南－北は70㎝ほどが残存している。確認面からの深さは30㎝である。底面は楕円形で壁は緩く立ち上がる。埋土は２層に分層した。土師器甕の破片が出土した。

ＳＫ231（第35図）

ＬＯ48グリッドに位置している。第Ⅱ層下面を精査中に検出した。ＳＩ132・ＳＫ236を切り、ＳＫ233に切られる。北側部分は調査区外にある。平面形は長い楕円形であると推定される。長軸（北東－南西）は、現状で1.30mが確認された。短軸（北西－南東）は、1.01mである。確認面からの深さは63㎝である。断面形は逆台形状で壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は７層に分層できた。土層観察からは、一度埋没した後、再度掘削した可能性が考えられる。土師器甕が出土し図化（第50図14）した。他に鉄滓１点（66g）が出土している。

ＳＫ232（第35図）

ＬＮ・ＬＯ48グリッドに位置している。第Ⅱ層下面を精査中に検出した。北側の大半は調査区外にある。平面形は、径1.5mほどの円形であると推定される。確認面からの深さは現状で58㎝である。断面形はＵ字状で丸底である。壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は４層に分層できた。土師器甕が出土したが器形を復元できるものは無かった。



ＳＫ231
1　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ2～10㎜，礫φ3～20㎜，炭化物φ2㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/3)地山ブロックφ30～50㎜20%混入
3　黒褐色砂質土(10YR2/3)しまり強　地山ブロックφ10～50㎜30%，炭化物φ5～10㎜混入
4　黄褐色粘土(10YR5/6)黒色土(10YR2/1)が斑状に20%混入
5　暗褐色土(10YR3/3)地山ブロックφ10～70㎜40%混入
6　明褐色土(7.5YR5/6)地山ブロックφ10～30㎜20%混入
7　黒褐色土(10YR2/1.5)地山ブロックφ10～30㎜40%混入

ＳＫ232
1　黒褐色土(10YR2/2)しまり強　地山粒φ2～5㎜，礫φ2～10㎜混入
2　暗褐色土(10YR3/4)地山ブロックφ10～40㎜20%，炭化物φ5～20㎜混入
3　暗褐色土(10YR3/4)地山ブロックφ10～30㎜30%，炭化物φ3～10㎜混入
4　黄褐色土(10YR5/8)地山粒φ5～20㎜，炭化物φ3～5㎜混入

ＳＫ233
1　黒褐色土(10YR2/2)地山ブロックφ10～50㎜，テフラφ1～2㎜混入
2　黒褐色土(10YR3/1)粘性弱　地山粒φ3～10㎜，テフラφ1～2㎜混入
3　灰黄褐色土(10YR4/2)粘性弱　地山粒φ1～7㎜，テフラφ1～2㎜混入

ＳＫ236
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山ブロックφ5～20㎜混入

ＳＫ141
1　黒褐色土(10YR2/1.5)炭化物混入
2　暗褐色土(10YR3/4)炭化物混入
3　赤褐色土(5YR4/6)炭化物混入
4　黒色土(10YR2/1)炭化物混入

ＳＫ149
1　にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山ブロックφ5～20㎜50%混入
2　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ1～3㎜，炭化物φ1～5㎜
3　黒褐色土(10YR3/2)しまり強　地山ブロックφ3～20㎜10%，炭化物φ1～2㎜混入
4　黒色土(10YR2/1)地山ブロックφ10～30㎜20%混入
5　黒褐色土(10YR2/2)地山ブロックφ5～30㎜混入
6　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ1～5㎜，炭化物φ1～5㎜，焼土粒φ1～3㎜混入
7　黒褐色土(10YR2/2)しまり弱　地山粒φ1～10㎜，炭化物φ1～5㎜，焼土粒φ1～3㎜混入
8　にぶい黄褐色土(10YR4/3)地山ブロックφ10～50㎜30%混入
9　黒褐色土(10YR3/2)地山ブロックφ5～20㎜30%混入
10　黒色土(10YR2/1)

0　2m

第35図　ＳＫ141・149・231・232・233・236土坑

ＳＫ233（第35図）

ＬＯ48グリッド位置している。第Ⅱ層下面を精査中に検出した。ＳＩ132、ＳＫ149・231を切る。平面形は、径80㎝の円形である。確認面からの深さは現状で61㎝である。断面形は逆台形で底面は平坦である。壁は北西側が急傾斜で立ち上がるが、南東側はやや開き気味に立ち上がり上端に至る。埋土は３層に分層できた。鉄滓１点（78g）が出土した。

ＳＫ235（第32図）

ＬＯ47グリッド、ＳＩ140西側床面の北西壁寄りに位置している。ＳＩ140の床面精査中に確認した。ただし、ＳＩ140との新旧関係は不明である。平面形は、径38㎝の円形で、確認面であるＳＩ140の床面からの深さは21㎝である。断面形は逆台形で底面は平坦である。壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は単層である。埋土より鉄滓１点（13g）が出土した。

ＳＫ236（第35図）

ＬＯ48グリッド位置している。第Ⅱ層下面を精査中に検出した。ＳＫ231に切られる。平面形は、楕円形で、長軸（南－北）が63㎝、短軸（東－西）が45㎝で、確認面からの深さは現状で33㎝である。断面形はＵ字形で底面は丸底である。壁は東側が急傾斜で立ち上がる。埋土は単層である。遺物の出土は無かった。

３　溝　　跡

ＳＤ267（第29図）

ＬＰ47・48グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。ＳＩ132・221、ＳＫＰ216に切られる。本来は北東と南西方向に延びていたものと推定されるが、北東側をＳＩ132に切られ、南西側を現代の土管埋設の掘削により失われている。確認した長さは2.10m、幅は25㎝、確認面からの深さは現状で29㎝である。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。軸方位はＮ－35.5°－Ｅである。埋土は単層で、遺物は出土しなかった。本溝跡は、軸方向やＳＩ221との新旧関係等からＳＩ133の南東壁溝である可能性が考えられる。

４　焼土遺構

ＳＮ147（第29図）

ＬＰ48グリッド位置している。第Ⅱ層下面を精査中に検出した。ＳＩ132、ＳＫＰ223に接するが、新旧関係は不明である。確認面から12㎝の深さで掘り込まれており、その平面形は楕円形である。長軸（北西－南東）が1.31m、短軸（北東－南西）が63㎝である。底面は平坦で、北西側の壁は急傾斜で立ち上がるが、南東側はほとんど立ち上がりが見られない。埋土は９層に分層できた。第３・４・５層は焼土あるいは焼土ブロックを主体とする層である。住居のカマドか、何かを焼成するための炉などの天井部を持つ構造であった可能性が考えられる。埋土より土師器甕の破片と鉄滓１点（12g）が出土した。

第５表　Ｂ区検出遺構内ピット観察表

遺構番号 ピット番号	地区	平面形	規模（ｍ）			底面標高（ｍ）	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ			
ＳＩ１３１								
Ｐ１	LO47	隅丸方形	0.26	0.23	0.60	62.15	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ２	LN・LO48	楕円形	0.24	0.19	0.35	62.35	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ３	LN47	楕円形	0.24	0.20	0.44	62.32	1 黒色(10YR2/1)	
ＳＩ１３２								
Ｐ１	LP47	楕円形	0.35	0.27	0.63	62.16	1 黒褐色(10YR3/2)	
Ｐ２	LP48	楕円形	0.36	0.33	0.77	62.00	1 黒褐色(10YR3/2) 2 黒色(10YR1.7/1)	炭化米出土。
Ｐ３	LP48	楕円形	0.28	0.23	0.18	62.69	1 黒褐色(10YR2/2)	
Ｐ４	LP48	円形	0.35	0.34	0.19	62.68	1 黒褐色(10YR3/2)	
ＳＩ１３３								
Ｐ１	LR47	楕円形	0.35	0.29	0.30	63.18	1 黒色(10YR2/1)	
ＳＩ１３５								
Ｐ１	LS48	楕円形	0.26	0.22	0.25	63.41	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２	LS・LT48	円形	0.31	0.30	0.39	63.28	1 黒色(10YR2/1)	土師器２片出土。
Ｐ３	LS48	隅丸方形	0.30	0.25	0.40	63.27	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ４	LS47・48	楕円形	0.37	0.25	0.63	63.39	1 黒褐色(10YR2/2)	
Ｐ５	LR・LS48	楕円形	0.57	0.45	0.42	63.16	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ６	LR48	楕円形	0.45	0.32	0.37	63.11	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ７	LR48	隅丸方形	0.26	0.23	0.35	63.15	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ８	LR・LS48	楕円形	0.46	0.34	0.35	63.29	1 黒褐色(10YR2/2)	
Ｐ９	LS48	楕円形	0.34	(0.22)	0.37	63.25	1 黒色(10YR2/1)	
ＳＩ１４０								
Ｐ１	LO48	楕円形	0.18	0.13	0.55	61.98	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２	LN47	楕円形	0.32	0.20	0.38	62.31	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
ＳＩ２２２								
Ｐ１	LP47・48	楕円形	0.22	(0.18)	0.38	62.35	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２	LQ47	円形	0.24	(0.14)	0.35	62.46	1 黒色(10YR2/1)	

第６表　Ｂ区検出柱穴様ピット（SKP）観察表（1）

ＳＫＰ番号	地区	平面形	単位（ｍ）			底面標高(m)	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ			
139	LP48	円形	0.30	(0.25)	0.07	62.83	1 黒褐色(10YR2/2)	ＳＩ132に切られる
143	LP47・48	楕円形	0.39	0.36	0.15	62.80	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ132に切られＳＫＰ144を切る 土師器１片出土
144	LP47	円形	0.26	0.26	0.13	62.83	1 黒褐色(10YR2/1.5)	ＳＫＰ143に切られる
145	LR47・48	楕円形	0.72	0.56	0.33	63.19	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
146	LR48	楕円形	0.51	0.45	0.28	63.26	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
158	LN47	隅丸方形	0.33	0.22	0.22	62.49	1 黒褐色(10YR2/2)	
159	LN47	円形	0.27	0.27	0.13	62.66	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
160	LN47	隅丸方形	0.32	0.21	0.20	62.58	1 黒褐色(10YR2/1.5)	土師器１片出土
211	LM47	隅丸方形	0.31	0.21	0.15	62.44	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
212	LO47	楕円形	0.38	0.23	0.33	62.54	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
213	LO47	楕円形	0.27	0.23	0.15	62.74	1 黒褐色(10YR2/3)	
214	LO47	隅丸方形	0.20	0.18	0.01	62.81	1 黒褐色(10YR2/3)	
215	LP47	楕円形	0.36	0.28	0.36	62.59	1 黒色(10YR2/1)	
216	LP47	楕円形	0.38	0.25	0.17	62.79	1 黒褐色(10YR2/3)	ＳＤ267・ＳＩ221を切る。
217	LP47	楕円形	0.53	0.31	0.20	62.77	1 黒褐色(10YR2/2)	
223	LP47・48	楕円形	0.46	0.39	0.61	62.29	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ222を切る。土師器1片、鉄滓1点出土。
227	LR48	楕円形	0.46	0.45	0.20	63.05	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ133を切る。
228	LR48	円形	0.33	0.29	0.51	63.02	1 黒色(10YR2/1)	ＳＩ133を切る。
238	LP47	楕円形	(0.14)	0.22	0.08	62.86	1 黒褐色(10YR3/1)	
239	LO47	円形	0.29	0.28	0.21	62.58	1 黒褐色(10YR2/1) 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)	

第７表　Ｂ区検出柱穴様ピット（SKP）観察表（２）

ＳＫＰ番号	地区	平面形	単位（ｍ）			底面標高（m）	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ			
240	LO47	楕円形	(0.23)	0.26	0.21	62.60	1 黒色（10YR2/1）	ＳＫ149に切られる。
241	LO47	楕円形	(0.17)	0.26	0.34	62.60	1 黒色（10YR2/1）	ＳＫ149に切られる。
242	LO48	楕円形	0.31	0.17	0.54	62.23	1 黒褐色（10YR2/2）	ＳＫ141・ＳＩ131・ＳＩ140に切られる。
243	LO48	楕円形	0.28	0.20	0.18	62.54	1 黒色（10YR2/1） 2 にぶい黄褐色（10YR4/3）	
244	LO48	円形	0.22	(0.14)	0.13	62.62	1 黒色（10YR2/1）	
245	LO･LN48	楕円形	0.21	0.15	0.22	62.52	1 黒色（10YR1.7/1）	
246	LO48	楕円形	0.21	0.16	0.21	62.42	1 黒色（10YR2/1）	ＳＫ141を切る。

第４節　Ｃ区の検出遺構（第36図）

Ｃ区の調査範囲はＡ区南端部の西側にあり、その南端ラインは国道７号の歩道に接している。現歩道の拡幅工事により切り土される、東西約17m、幅6.5mほどの細長い調査区である。Ｂ区と同様に、国道と接する南側は、歩道との高低差が２m以上の法面である。このため、調査範囲南端ラインの幅1.5mほどの法面部分は調査ができなかった。しかし本区から検出された遺構の底面標高などから、この法面部分の遺構は既に大半が失われているものと推定される。

本区からは、竪穴住居跡３軒、竪穴状遺構１基、柱穴列４列、溝跡３条、焼土遺構１基、性格不明遺構１基、柱穴様ピット26基の合計39基の遺構が検出された。

また、本区は民家の庭木が繁茂する庭園部であった。このため遺構の検出面は、樹木根や井戸の掘削等による攪乱を受けている。

なお、各遺構に伴うピットの規模などについては「第８表　Ｃ区検出遺構内ピット観察表」に掲載している。また、単体の柱穴様ピットについては、その配置を「第36図」に、規模などを「第９表　Ｃ区検出柱穴様ピット（ＳＫＰ）観察表」に記載している。

１　竪穴住居跡

ＳＩ122（第37・38図、図版11）

《地区》ＭＥ49グリッドに位置している。

《確認》第Ⅲ層上面を精査中にカマドを検出し、その北東から南東壁溝を検出した。

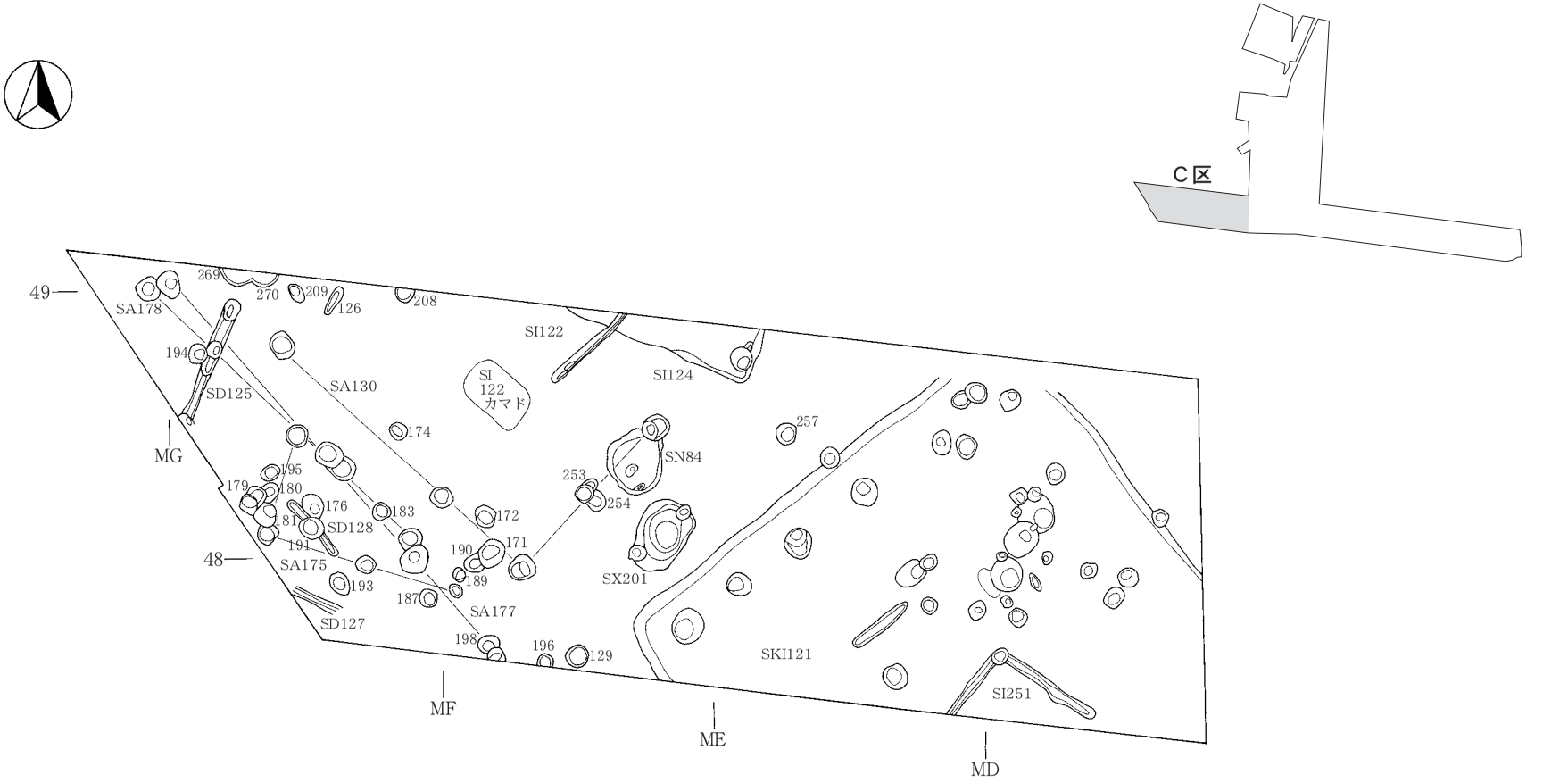
《重複》ＳＩ124、ＳＫＰ208を切る。

《規模と平面形》南東壁溝が直線であることから方形の住居跡であると推定され、規模は一辺が４m以上と推定される。南東壁溝の軸方位はＮ－48.5°－Ｅである。

《壁と壁溝》壁の高さは、断面において10cmほどが確認された。南東壁溝は1.50m確認され、壁溝の幅は13cm、深さは10cmほどである。南西壁は検出できなかった。

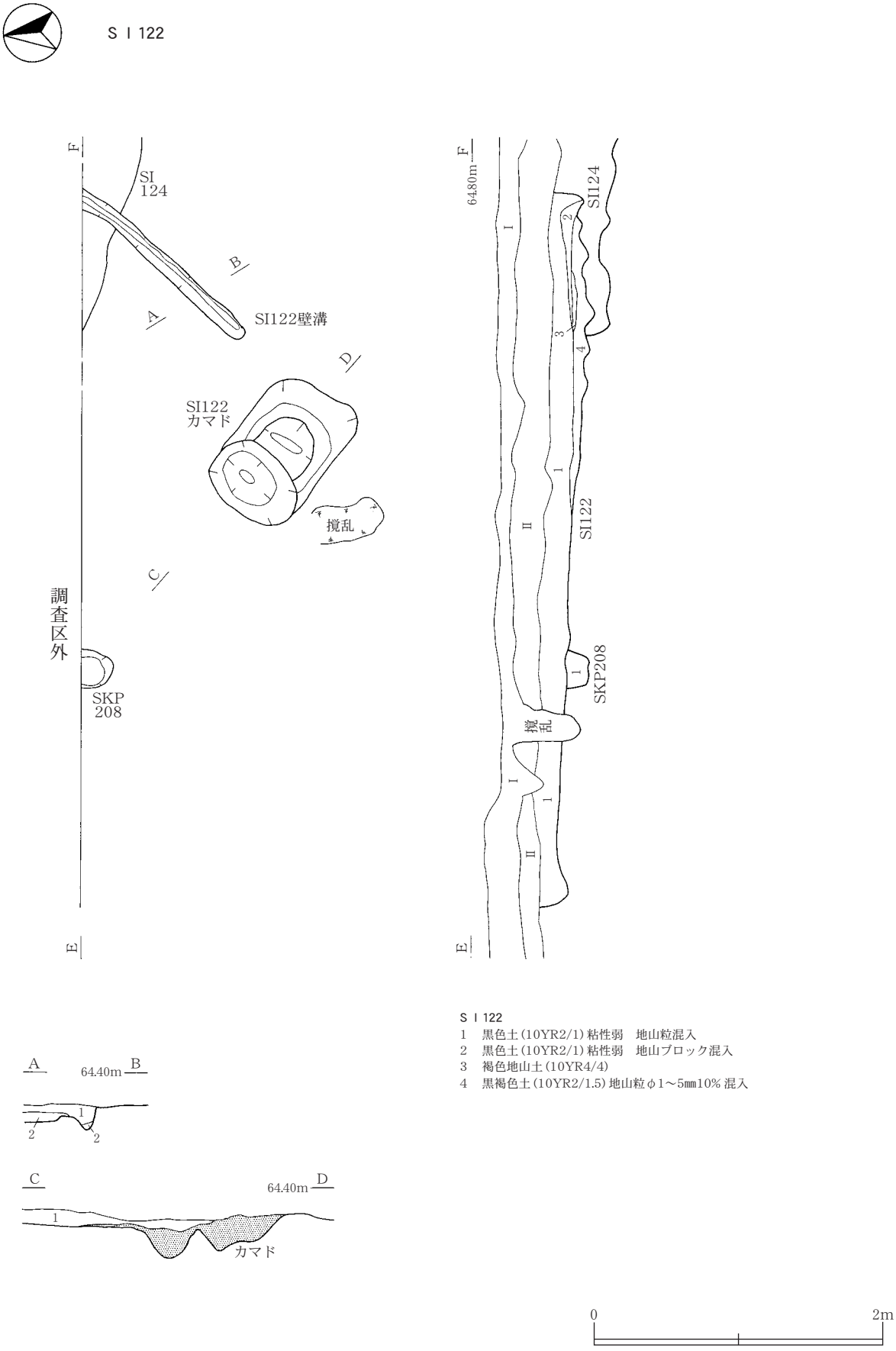
《埋土》４層に分層できた。第２・３・４層は、床面を整えるために貼った土の層であると思われる。

《床面》断面からは、第Ⅴ層上面などが床面であると考えられるが、南西壁が検出できなかったことから明確な床面の範囲は確認できなかった。



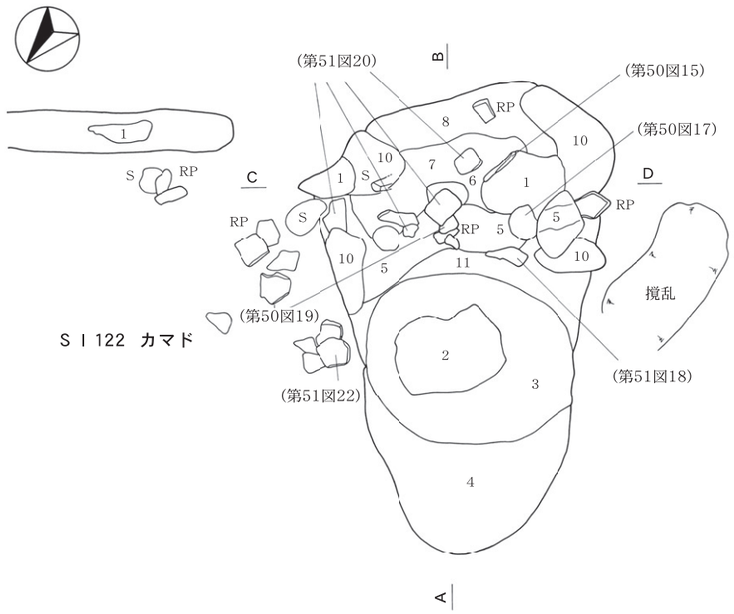
※数字だけのものはSKP

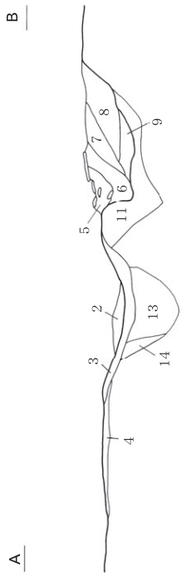
第36図　Ｃ区遺構配置図



ＳＩ122
1　黒色土(10YR2/1)粘性弱　地山粒混入
2　黒色土(10YR2/1)粘性弱　地山ブロック混入
3　褐色地山土(10YR4/4)
4　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～5㎜10%混入

第37図　ＳＩ122竪穴住居跡



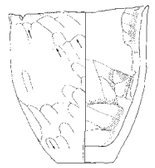


(第50図15)

(第50図17)

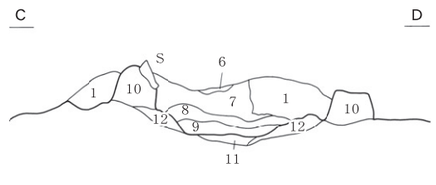
(第51図18)

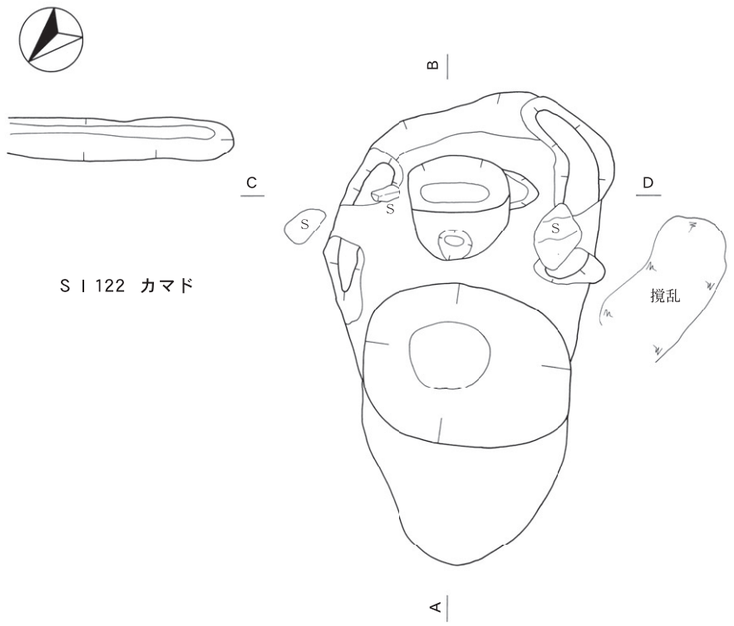
(第51図19)



(第51図20)

(第51図22)





Ｓ Ｉ 122　カマド

Ｓ Ｉ 122　カマド

1　カマド袖部の崩落土（第10層）
2　黒色土（10YR2/1）地山粒φ5～10mm50% 混入
3　明黄褐色土（10YR7/6）しまり強　粘性弱
4　黒色土（10YR2/1）しまり強
5　黒色土（10YR2/1）地山粒φ1～5mm，焼土粒φ1～5mm15% 混入
6　暗褐色土（10YR3/3）しまり弱　粘性弱　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）粒φ5mm50% 混入
7　暗褐色土（10YR3/3）粘性弱　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）粒φ2～5mm20% 混入
8　暗褐色土（10YR3/3）粘性弱　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）ブロックφ5～20mm10% 混入
9　暗褐色土（10YR3/3）粘性弱　にぶい赤褐色焼土（5YR4/4）粒φ1～3mm混入
10　にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）しまり強
11　暗褐色砂質土（10YR3/4）しまり弱　粘性弱　黒色土（10YR2/1）粒φ1～5mm混入
12　黒褐色土（10YR2/1.5）焼土粒φ1～5mm混入
13　黒色土（10YR1.7/1）しまり弱　炭化物φ1～10mm50% 混入
14　褐色土（10YR4/6）

0　1m

第38図　Ｓ Ｉ 122竪穴住居跡カマド

《柱穴》ＳＫＰ208などが本住居跡に付属する柱穴である可能性もある。

《カマド》南東壁に付設されていたものと推定される。13層に分層できた。第10層が袖部にあたる。カマド平面図の第37図は完掘を、第38図下は推定される使用状況を示している。

《出土遺物》主にカマドから土師器甕の破片を中心に、流動滓１点を含む鉄滓３点（計81g）と椀形滓１点（278g）が出土した。この内、土師器甕を８個体図化（第50図15～17、第51図18～22）した。

ＳＩ124（第39図、図版11）

《地区》ＭＤ・ＭＥ49グリッドに位置している。

《確認》第Ⅲ層上面を精査中に、竪穴住居南隅と思われる黒褐色土の落ち込みとして確認した。

《重複》ＳＩ122に切られる。

《規模と平面形》南西壁と南東壁の一部が確認され、方形の竪穴住居跡であると判断した。住居北側の大半が調査区外にあるため、規模は不明である。確認された壁の長さは、南西壁が2.83m、南東壁が0.87mである。それぞれの軸方位は南西壁がＮ－66°－W、南東壁がＮ－24.5°－Ｅである。

《埋土》13層（第39図：第５～17層）に分層できた。竪穴の掘り形に第17層を充填し、さらに第13～16層をその上層に貼り、床面を整えたと推測される。

《壁と壁溝》壁の高さは、断面において26cmほどが確認された。その立ち上がりはほぼ垂直である。また、明確さに欠けるが、断面の第12層は壁溝に堆積した土層と考えられ、その幅は、上端で20cmほど、深さも20cmほどである。

《柱穴》南隅付近に１基検出した。

《カマド》検出できなかったが、土師器甕の破片や白色粘土塊、焼土ブロックが出土し、断面にも焼土粒層あるいは焼土ブロック層（第８・９層）が見られることから、付近にカマドが付設されている可能性がある。

《遺物》土師器甕が出土し、１個体を図化（第51図23）した。他にトチノキ（図版19）が出土した。

ＳＩ251（第40図）

《地区》ＭＣ・ＭＤ48グリッド、ＳＫＩ121の域内に位置している。

《確認》ＳＫＩ121の床面を精査中に、北隅の柱穴と北西壁溝、北東壁溝を検出した。

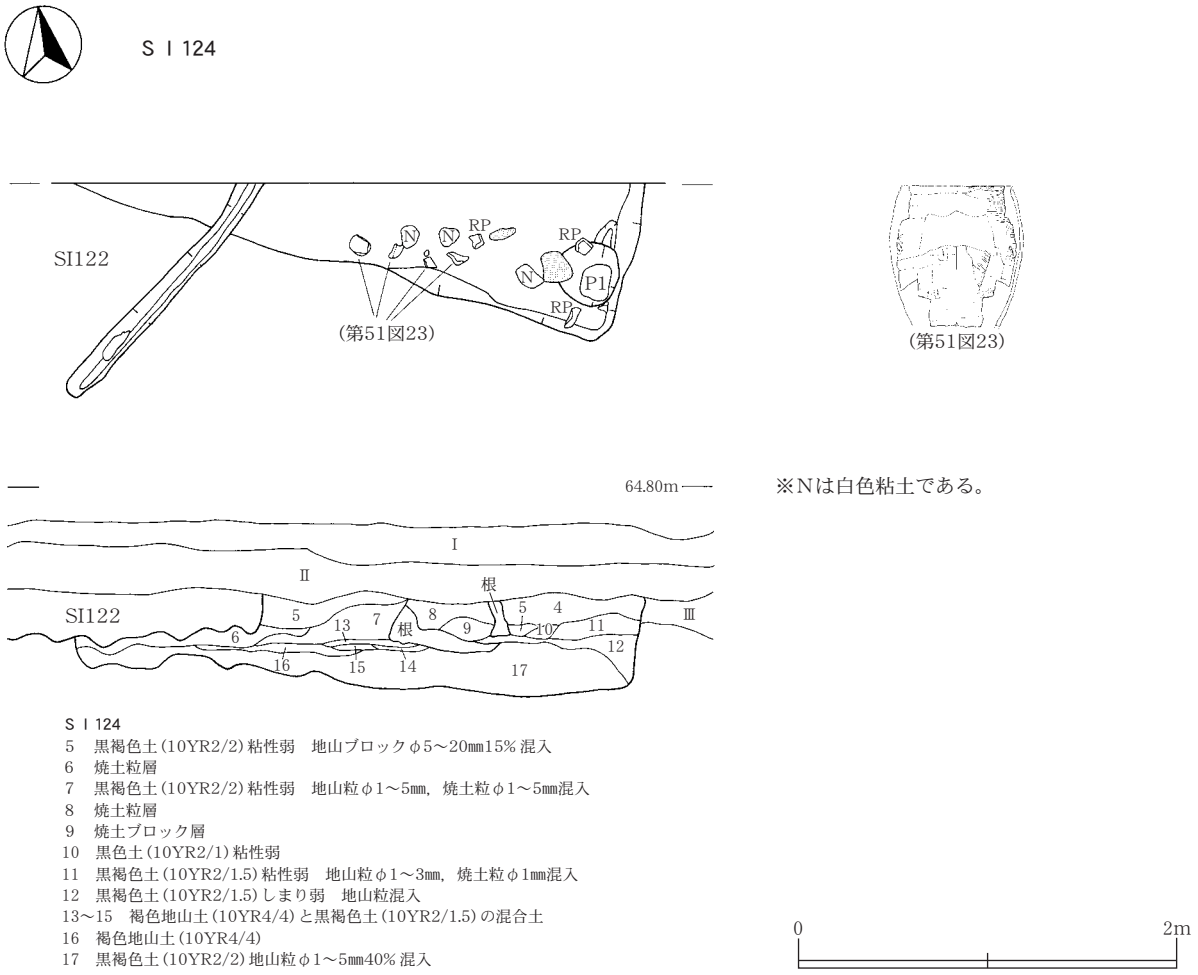
《重複》ＳＫＩ121と重複する。本住居跡が古いものと考えられる。

《規模と平面形》北西壁溝と北東壁溝の一部、北隅の柱穴が確認され、方形の竪穴住居跡であると判断した。住居南側の大半が調査区外にあり、既に失われているものと推定されるため、規模は不明である。確認された壁溝の長さは、北西壁が1.21m、北東壁が1.68mである。それぞれの軸方位は北西壁がＮ－39.5°－Ｅ、北東壁がＮ－54.5°－Wである。

《壁と壁溝》壁は、ＳＫＩ121の構築により既に失われていた。確認された壁溝の幅は21cm、深さは現状で15cmである。

《埋土》２層（第40図：第26・27層）に分層できた。第27層は床を整えるために掘り形に充填した土であると推定されるが、本来の床面は既に失われていると考えられる

《柱穴他》柱穴は北隅に１基検出した。カマドは検出できなかった。また、出土遺物も無かった。



ＳＩ124
5　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱　地山ブロックφ5～20㎜15%混入
6　焼土粒層
7　黒褐色土(10YR2/2)粘性弱　地山粒φ1～5㎜，焼土粒φ1～5㎜混入
8　焼土粒層
9　焼土ブロック層
10　黒色土(10YR2/1)粘性弱
11　黒褐色土(10YR2/1.5)粘性弱　地山粒φ1～3㎜，焼土粒φ1㎜混入
12　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり弱　地山粒混入
13～15　褐色地山土(10YR4/4)と黒褐色土(10YR2/1.5)の混合土
16　褐色地山土(10YR4/4)
17　黒褐色土(10YR2/2)地山粒φ1～5㎜40%混入

第39図　ＳＩ124竪穴住居跡

2　竪穴状遺構

ＳＫＩ121（第40・41図、図版12）

《地区》ＭＣ48・49、ＭＤ48・49、ＭＥ48グリッドに位置する。

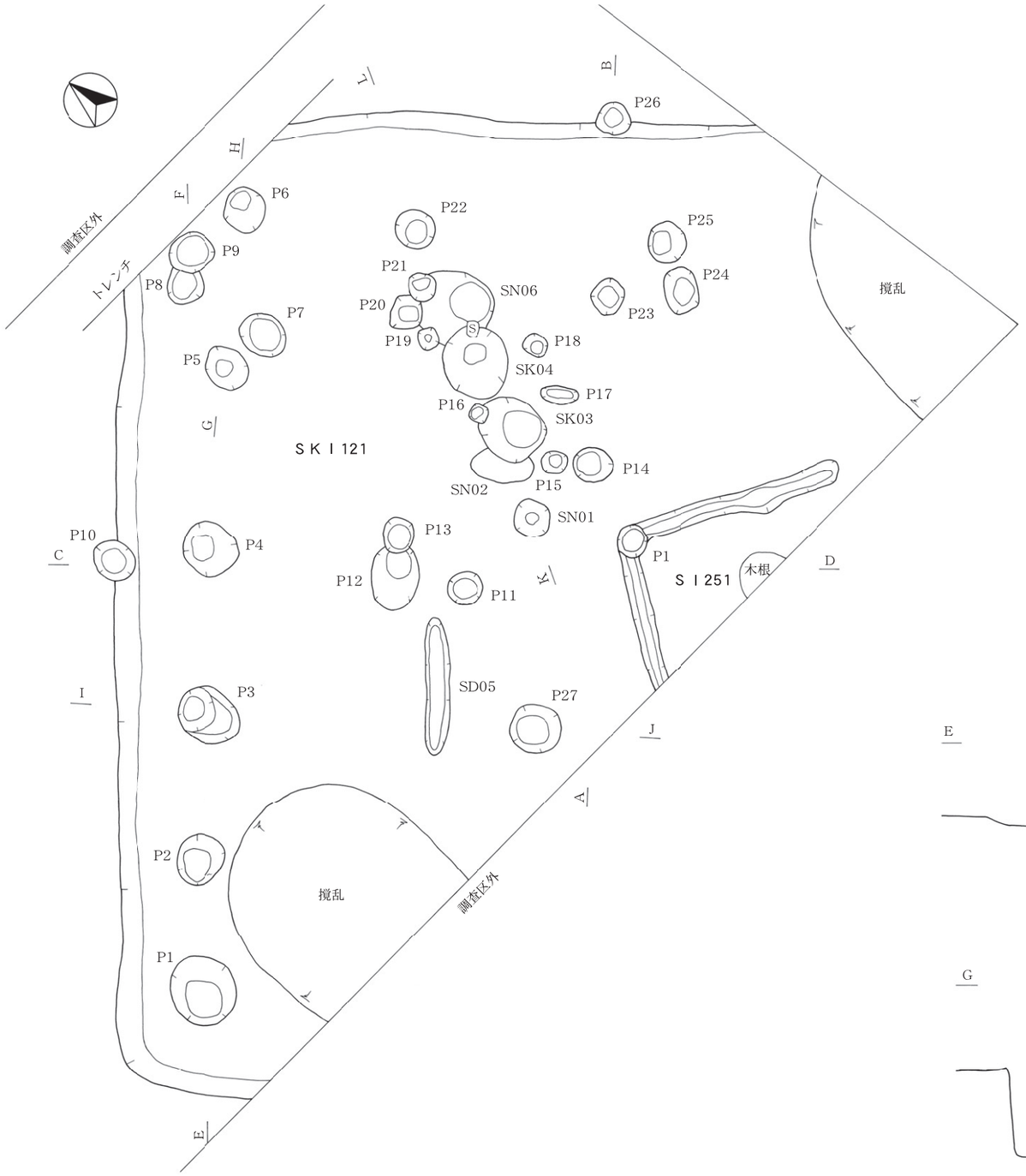
《確認》第Ⅴ層上面を精査中に黒色土の方形の落ち込みとして確認した。

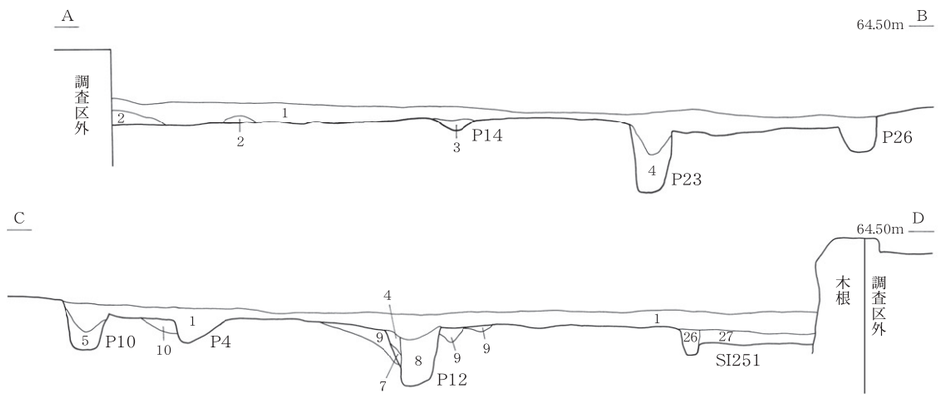
《重複》ＳＩ251を切ると推定した。

《規模と平面形》北西壁を７ｍほどとする隅丸方形であると推定される。北東壁との関係から北西壁は大部分が検出されていると判断できるが、南西壁の大部分と南東壁の全部が未確認である。国道７号に沿う現歩道の建設により、既に失われていると判断した。確認した各壁の長さは、北西壁が約６ｍ、北東壁が3.69m、南西壁が0.94mである。それぞれの軸方位は、北西壁がＮ－52.5°－Ｅ、北東壁がＮ－36°－Ｗ、南西壁がＮ－31.5°－Ｗである。床面から確認面までの壁の高さは、現状で10㎝ほどで、その立ち上がりは緩傾斜である。また、壁溝は確認できず、周辺の住居跡とは構造的に異なる特徴が認められる。

《埋土》付属する柱穴や土坑、焼土の埋土を合わせ､25層に分層できた。

《床面》主に第Ⅴ層の地山土を床面としており、平坦で堅く締められていた。床面では、柱穴の他に３基の焼土範囲（ＳＮ01・02・06）と２基の土坑（ＳＫ03・04)、１条の溝跡（ＳＤ05）を検

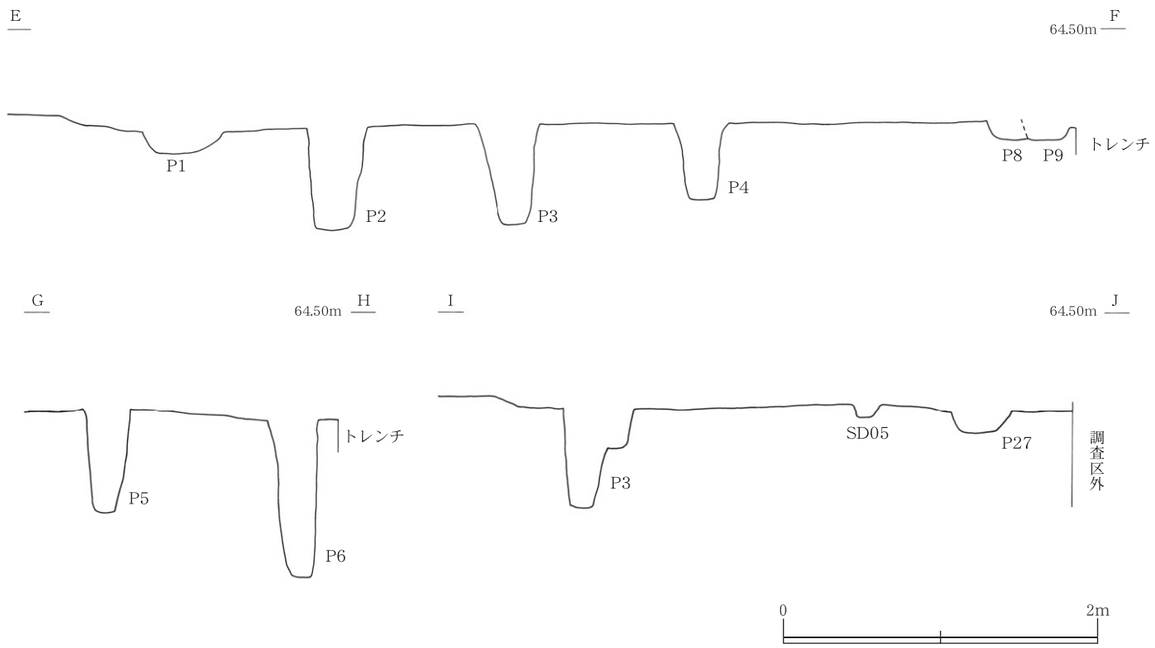




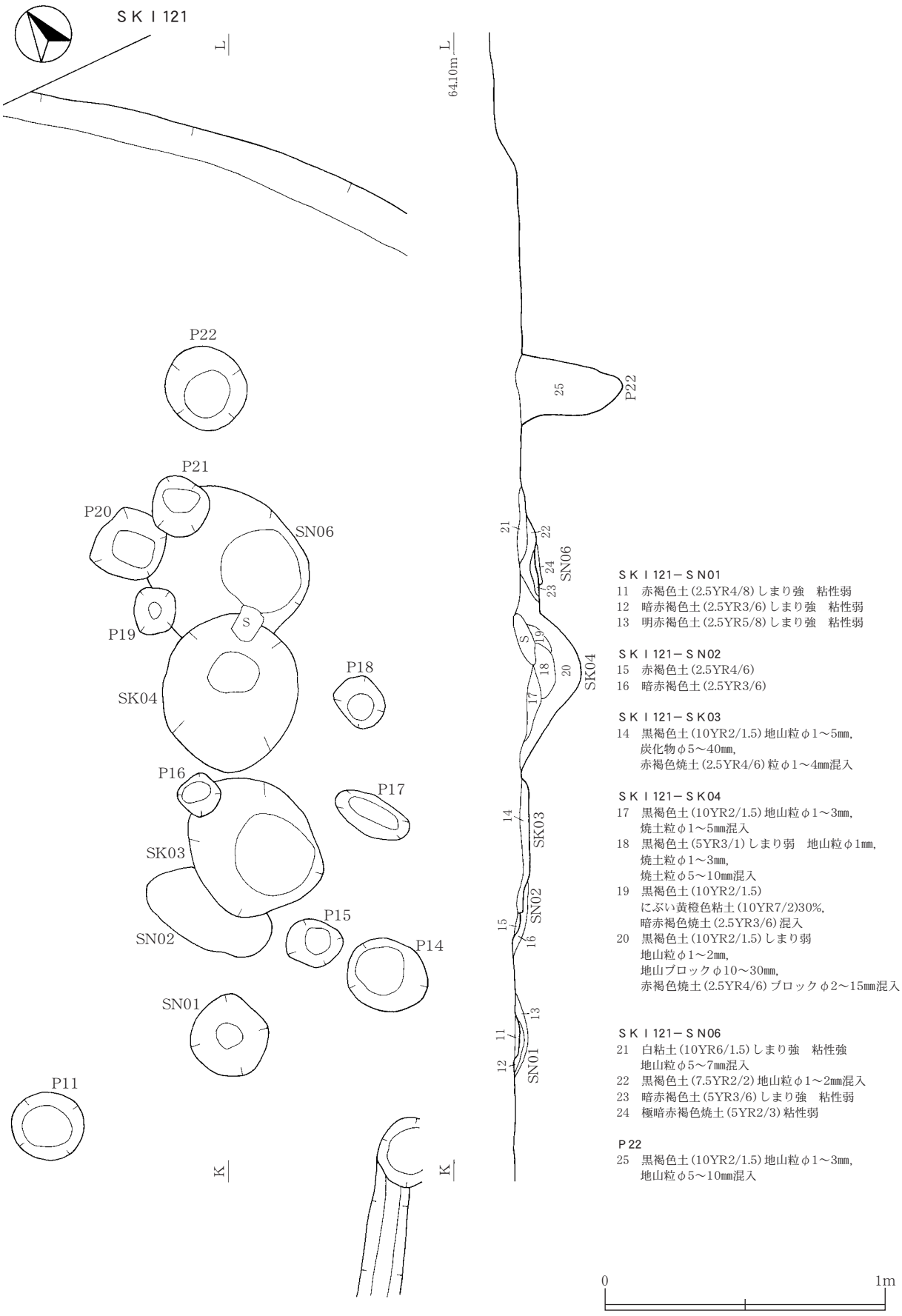
ＳＫⅠ121
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ1～5㎜混入(P26)
2　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ1㎜50% 混入
3　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ5～10㎜30% 混入(P14)
4　黒色土(10YR2/1)地山粒φ5～10㎜混入　P23
5　黒色土(10YR2/1)しまり強　地山粒φ5～10㎜15% 混入
6　褐色地山土(10YR4/4)しまり強　黒褐色土(10YR2/1.5)40% 混入
7　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり弱　地山(10YR4/4)粒25% 混入
8　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～7㎜混入(P12)
9　褐色地山土(10YR4/4)黒褐色土(10YR2/2)40%，焼土(5YR3/6)粒混入
10　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強　地山(10YR4/4)粒φ1～10㎜30%，
　褐色粘土(10YR4/6)ブロックφ20㎜10% 混入

ＳＩ251
26　黒褐色土(10YR2/1.5)
27　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強

ＳＫⅠ121－ＳＤ05
1　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～3㎜，地山粒φ5～10㎜混入



第40図　ＳＩ251竪穴住居跡、ＳＫⅠ121竪穴状遺構(1)



ＳＫＩ121－ＳＮ01
11　赤褐色土(2.5YR4/8)しまり強　粘性弱
12　暗赤褐色土(2.5YR3/6)しまり強　粘性弱
13　明赤褐色土(2.5YR5/8)しまり強　粘性弱

ＳＫＩ121－ＳＮ02
15　赤褐色土(2.5YR4/6)
16　暗赤褐色土(2.5YR3/6)

ＳＫＩ121－ＳＫ03
14　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～5㎜,
炭化物φ5～40㎜,
赤褐色焼土(2.5YR4/6)粒φ1～4㎜混入

ＳＫＩ121－ＳＫ04
17　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～3㎜,
焼土粒φ1～5㎜混入
18　黒褐色土(5YR3/1)しまり弱　地山粒φ1㎜,
焼土粒φ1～3㎜,
焼土粒φ5～10㎜混入
19　黒褐色土(10YR2/1.5)
にぶい黄橙色粘土(10YR7/2)30%,
暗赤褐色焼土(2.5YR3/6)混入
20　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり弱
地山粒φ1～2㎜,
地山ブロックφ10～30㎜,
赤褐色焼土(2.5YR4/6)ブロックφ2～15㎜混入

ＳＫＩ121－ＳＮ06
21　白粘土(10YR6/1.5)しまり強　粘性強
地山粒φ5～7㎜混入
22　黒褐色土(7.5YR2/2)地山粒φ1～2㎜混入
23　暗赤褐色土(5YR3/6)しまり強　粘性弱
24　極暗赤褐色焼土(5YR2/3)粘性弱

Ｐ22
25　黒褐色土(10YR2/1.5)地山粒φ1～3㎜,
地山粒φ5～10㎜混入

第41図　ＳＫＩ121竪穴状遺構(2)

出した。遺構内の各遺構の規模は、ＳＮ01は径29㎝の円形である。ＳＮ02はＳＫ03に東側を切られる。平面形は楕円形で、長軸（北西－南東）が48㎝、短軸は20㎝ほど確認された。ＳＮ06は、径57㎝の円形で、床面から５㎝ほど掘り込まれており、南側をＳＫ04に、北西側をＰ19・20・21に切られる。ＳＫ03は、長軸（南－北）50㎝、短軸43㎝の楕円形で、床面から４㎝ほど掘り込まれている。ＳＮ02を切り、Ｐ16に切られる。ＳＫ04は、長軸（北東－南西）56㎝、短軸47㎝の楕円形で、床面からの深さは18㎝である。ＳＮ06を切る。ＳＤ05は、長さが1.01m、幅が18㎝、床面からの深さが７㎝である。なお、床面の西側と東側には、井戸の掘削等による攪乱があり、その部分の床面は既に失われていた。

《柱穴》域内、壁際から計27基の柱穴を検出した。Ｐ１～６・22・25などが上屋を支えていた可能性が考えられる。これらの柱穴間の距離は、心々間でＰ１－２間が1.01m、Ｐ２－３間が1.17m、Ｐ３－４間が1.20m、Ｐ４－５間が1.25m、Ｐ５－６間が1.26m、Ｐ６－22間が1.34m、Ｐ22－25間が1.81mである。

《出土遺物》第１層より須恵器、土師器甕、鉄滓が、Ｐ13より土師器甕と須恵器が、ＳＫ04、Ｐ４、Ｐ６、Ｐ９、Ｐ11より土師器甕が出土した。これらの内、第１層より出土した須恵器坏（第52図24）、須恵器壺（第52図25）、椀形滓（第52図26）を図化した。土師器甕は破片が多数出土したが器形を復元できるものは無かった。なお、鉄関連遺物は、第１層より上記の椀形滓１点（789g）のほか、鉄滓が11点（計132g）、Ｐ５より鉄滓１点（５g）、Ｐ７より流動滓１点（６g）、Ｐ12よりフイゴの羽口の破片１点（26g）が出土している。

３　柱　穴　列

ＳＡ130（第42図）

ＭＥ48・49・ＭＦ49グリッドに位置している。Ｐ１・２・３が北西－南東（Ｎ－46°－W）、Ｐ３・４・５が北東－南西（Ｎ－43°－Ｅ）にＬ字状に並ぶ柱穴列である。それぞれの長さは、Ｐ１～Ｐ３が4.89m、Ｐ３～Ｐ５が2.81mである。各柱穴間の距離は、心々間でＰ１－２間が3.27m、Ｐ２－３間が1.62mＰ３－４間が1.43m、Ｐ４－Ｐ５が1.38mである。Ｐ４がＳＫＰ253・254を切る。Ｐ５がＳＮ84に切られる。Ｐ３の北約２mにＳＩ122のカマドが位置し、本遺構Ｐ３～５とＳＩ122の南東壁溝の軸方位はほぼ平行している。また、ＳＩ122との新旧関係は不明であるが、本遺構は、その形状から、ＳＩ122の構築によって北側を失った掘立柱建物跡であった可能性も考えられる。

ＳＡ175（第43図）

ＭＥ48・ＭＦ48・49グリッドに位置している。Ｐ１・２・３が西北西－東南東（Ｎ－72.5°－W）、Ｐ１・４が北北東－南南西（Ｎ－17.5°－Ｅ）にＬ字状に並ぶ柱穴列である。それぞれの長さは、Ｐ１～Ｐ３が2.93m、Ｐ１－４が1.54mである。Ｐ１～Ｐ３の各柱穴間の距離は、心々間でＰ１－２間が1.57m、Ｐ２－３間が1.36mである。

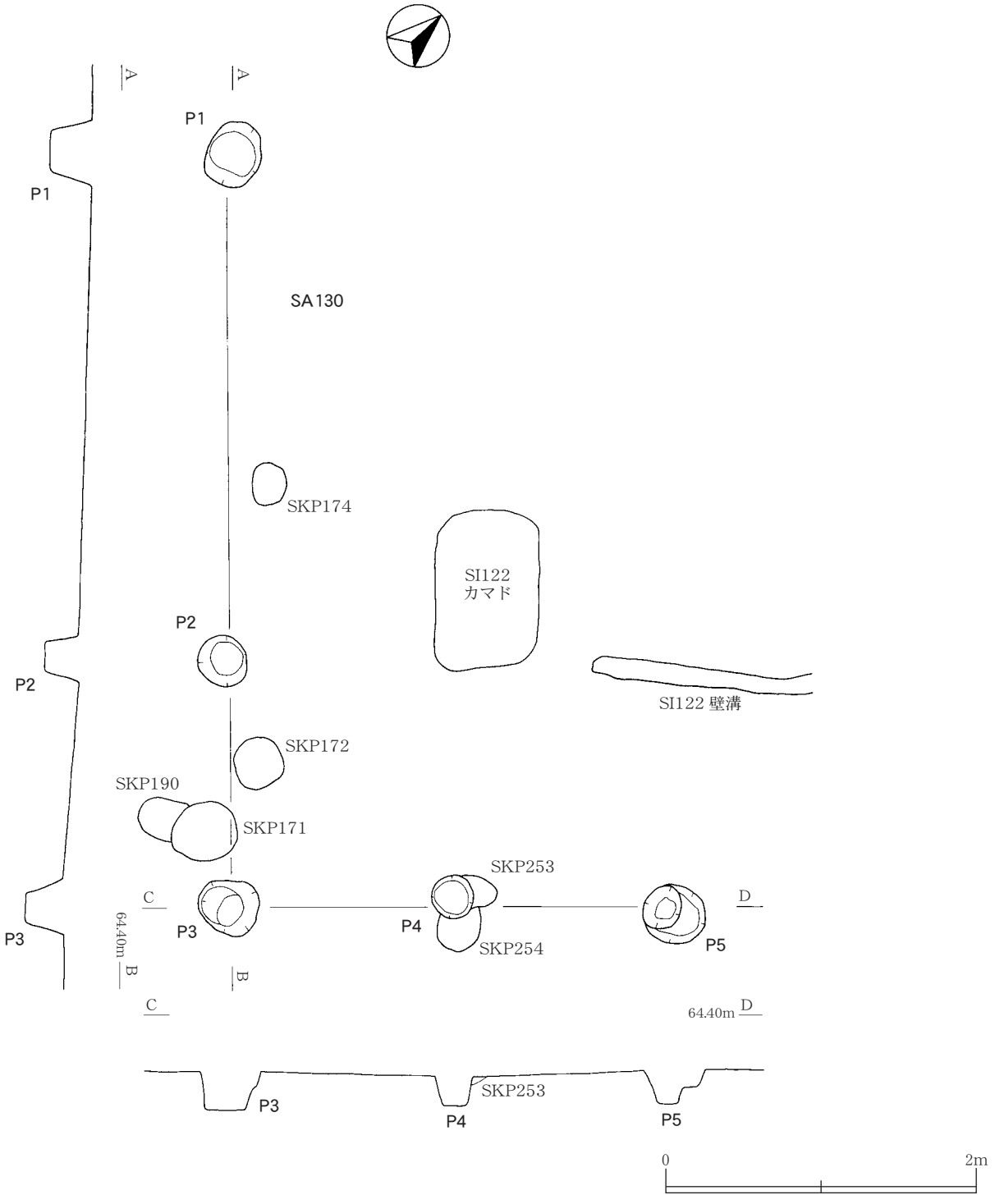
ＳＡ177（第44図）

ＭＥ48・ＭＦ48・49・50・ＭＧ49・50に位置する、北西－南東方向（Ｎ－40°－W）に並ぶ、４基の柱穴である。全長（Ｐ１～４）が7.35m、各柱穴間の距離は、心々間でＰ１－２間が3.44m、Ｐ２－Ｐ３間が1.99m、Ｐ３－Ｐ４間1.93mである。ＳＡ178のＰ１・Ｐ２・Ｐ３を本遺構のＰ１・Ｐ

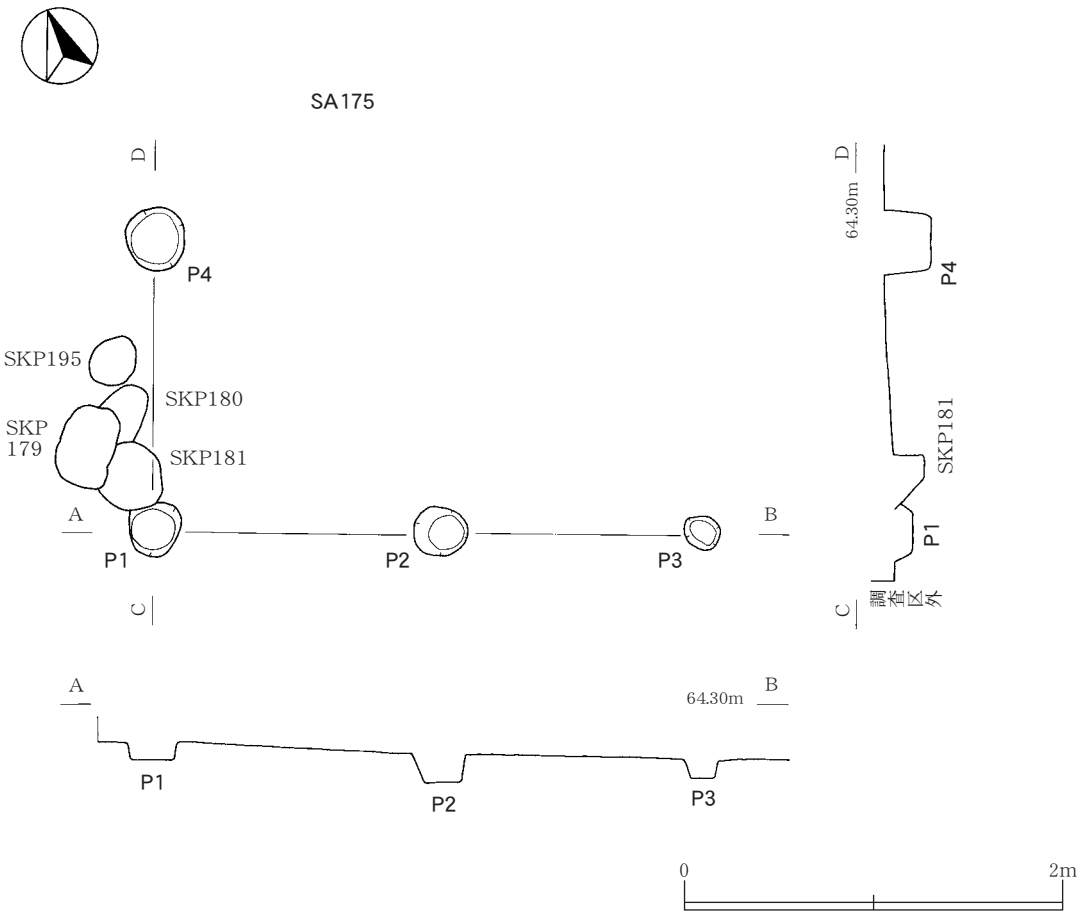
２・Ｐ３がそれぞれ切る。

ＳＡ178（第44図）

ＭＦ49・ＭＧ49・50に位置する、北西－南東方向（Ｎ－45°－Ｗ）に並ぶ、３基の柱穴である。全長（Ｐ１～３）が7.35m、各柱穴間の距離は、心々間でＰ１－２間が3.44m、Ｐ２－Ｐ３間が1.99m、Ｐ３－Ｐ４間5.36mである。Ｐ１－２間に柱穴が１基存在した可能性が考えられる。ＳＡ177のＰ１・Ｐ２・Ｐ３に本遺構のＰ１・Ｐ２・Ｐ３がそれぞれ切られる。



第42図　ＳＡ130柱穴列



第43図　ＳＡ175柱穴列

４　溝　　跡

ＳＤ125（第45図）

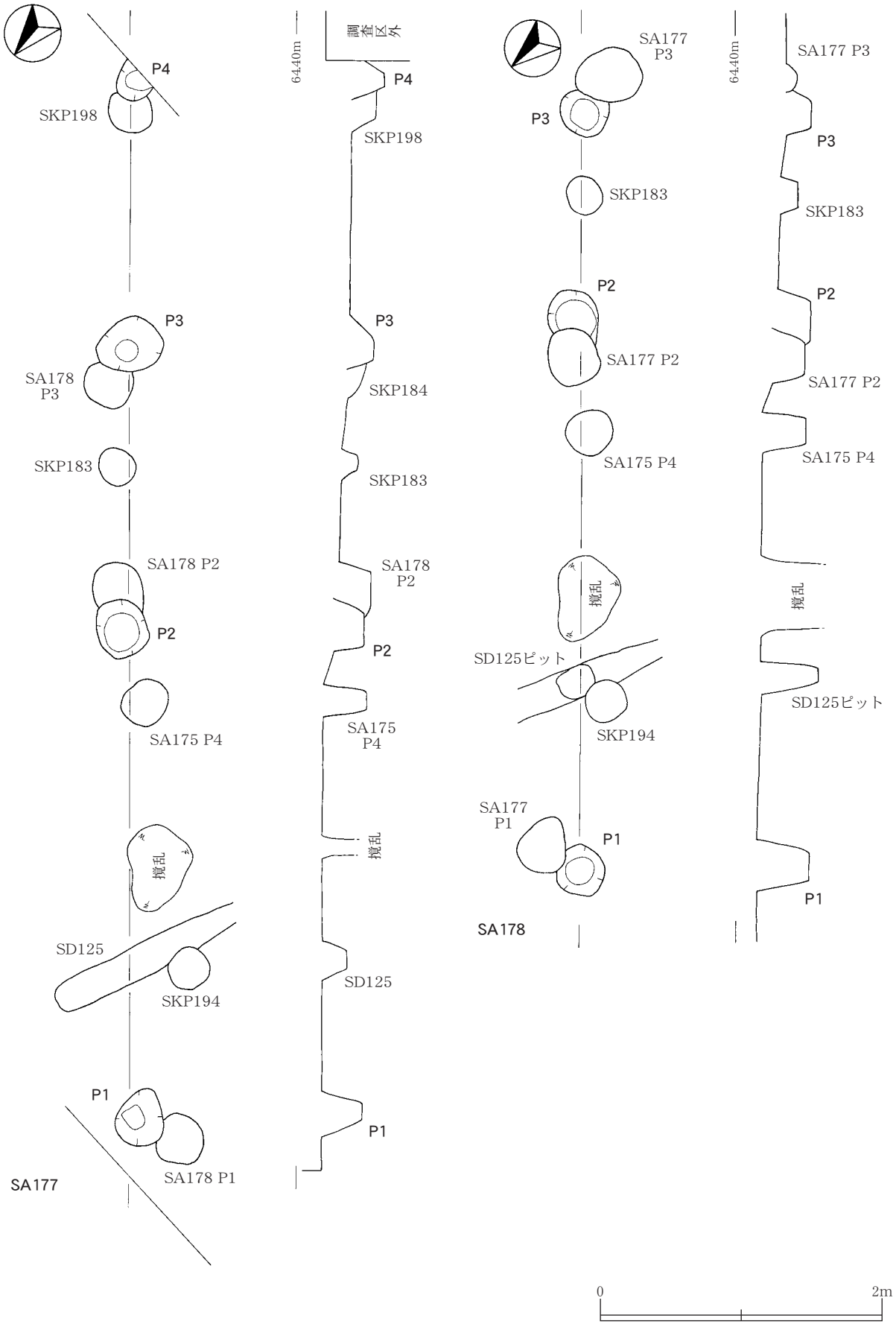
ＭＦ48グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。軸方位はＮ－22.5°－Ｅである。確認された長さは2.01m、幅は24㎝、確認面からの深さは20㎝である。断面形はＵ字状で壁は急傾斜で立ち上がっている。埋土は単層で、遺物は出土しなかった。ＳＫＰ194に切られる。中央部に確認面からの深さ40㎝のピットがある（第44図）。

ＳＤ127（第45図）

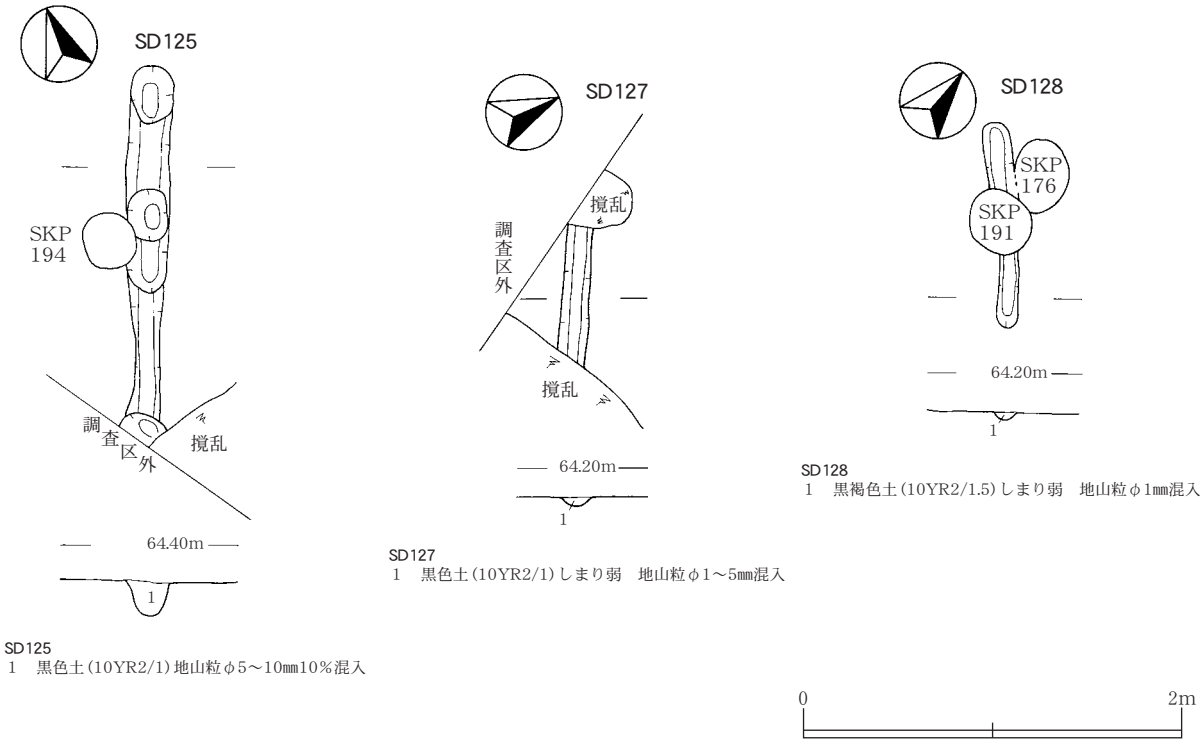
ＭＦ47グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。軸方位はＮ－62.5°－Ｗである。両端は攪乱によって失われており、残存する長さは77㎝、幅は17㎝、確認面からの深さは５㎝である。断面形は緩いＵ字状で、埋土は単層である。遺物の出土は無い。

ＳＤ128（第45図）

ＭＦ48グリッドの第Ⅴ層上面で確認した。ＳＫＰ191に切られ、ＳＫＰ176を切る。長さは1.10m、幅は14㎝、確認面からの深さは４㎝で、軸方位はＮ－40.5°－Ｗである。断面形は緩いＵ字状である。埋土は単層で、遺物は出土しなかった。



第44図　ＳＡ177・178柱穴列



SD125
1　黒色土(10YR2/1)地山粒φ5～10㎜10％混入

SD127
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱　地山粒φ1～5㎜混入

SD128
1　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり弱　地山粒φ1㎜混入

第45図　ＳＤ125・127・128溝跡

5　焼土遺構

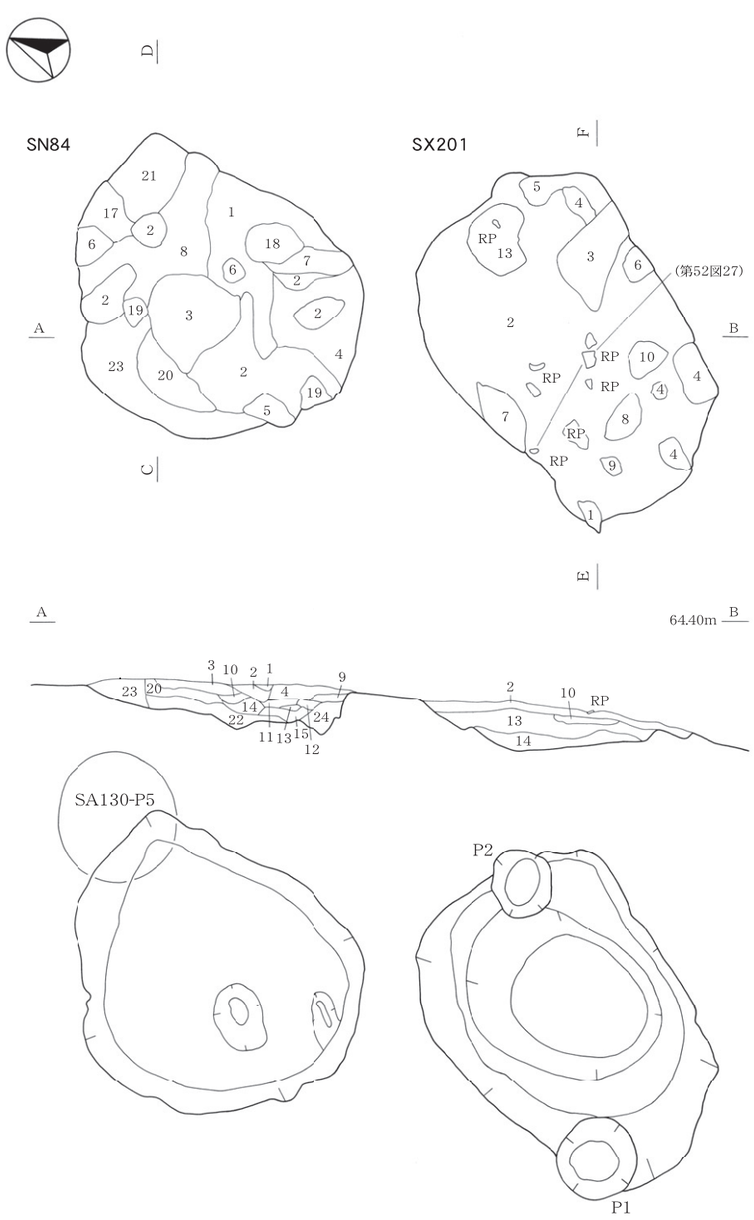
ＳＮ84（第46図、図版10）

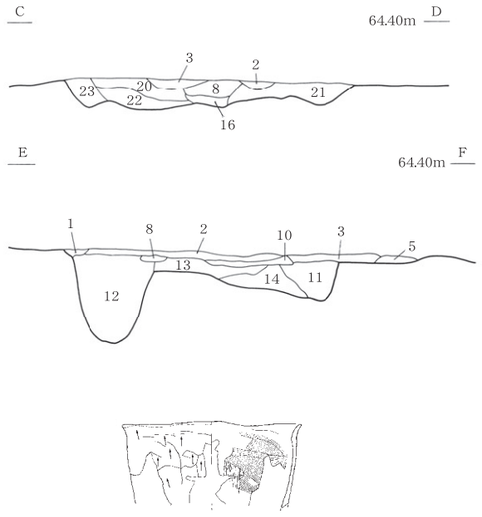
ＭＥ49グリッドの第Ⅲ層上面で確認した、埋土に焼土層を含む土坑状の遺構である。北端部がＳＡ130－Ｐ５と重複するが、本遺構が新しい。また、南に25㎝ほどの間隔をおきＳＸ201が位置する。平面形は長軸（南－北）103㎝、短軸92㎝の楕円形で、確認面から底面までの深さは現状で23㎝である。壁は南側が急傾斜で立ち上がるが、北側は立ち上がりがほとんど無く、底面から緩い傾斜で上端に至る。埋土は24層に分層できた。ほとんどの層が焼土や焼土ブロック、灰を含み、何かしらを焼成した炉である可能性が考えられるが、明確な火床は検出できなかった。土師器甕の破片、鉄滓１点（９g）が出土した。

6　性格不明遺構

ＳＸ201（第46図）

ＭＥ48・49グリッドの第Ⅲ層上面で確認した。北に25㎝ほどの間隔をおきＳＮ84が位置する。平面形は、長軸（北東－南西）が115㎝、短軸が75㎝の楕円形で、確認面から底面までの深さは26㎝である。北東側と南西側に１基ずつピットがある。埋土は14層に分層した。ほとんどの層に灰が混入していた。埋土から土師器甕（第52図27）、ミニチュア土器（第52図28）が出土し図化した。このほかに、焼けた粘土塊と土師器の破片・細片が、層状に剥離したものや黒変したものも交え多数出土した。土師器の焼成等に関連した遺構である可能性が考えられる。





(第52図27)

S N84
1　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR4/2)40%，明赤褐色焼土(5YR5/8)混入
2　黒褐色土(10YR2/2)赤褐色焼土(5YR4/8)粒φ2～5㎜，地山混入
3　黒褐色土(10YR2/2)灰(10YR4/2)30%，明赤褐色焼土(5YR5/8)粒φ1～5㎜混入
4　黒褐色焼土(10YR2/2)粒φ1～4㎜，明赤褐色焼土(5YR5/8)ブロックφ5～15㎜，灰45%混入
⑤　黒褐色土(10YR2/2)赤褐色焼土(5YR4/7)粒φ1～10㎜15%，にぶい黄橙色灰(10YR6/4) 25%混入
⑥　黒褐色土(10YR2/2)赤褐色焼土(5YR4/6) 15%，明赤褐色焼土(5YR5/8)粒φ2～5㎜15%，灰混入
⑦　黒褐色土(10YR2/2)黄褐色焼土(10YR5/8)粒φ1～2㎜，灰混入
8　灰黄褐色灰(10YR4/2)赤褐色焼土(5YR4/6)混入
9　赤褐色焼土(5YR4/6)粘性弱
10　褐色土(10YR4/4)粘性弱　赤褐色焼土(2.5YR4/6) 10%，灰(10YR4/2)混入
11　褐色土(10YR4/4)粘性弱　赤褐色焼土(2.5YR4/6)30%，灰(10YR4/2)混入
12　褐色土(10YR4/4)粘性弱　灰(10YR4/2)混入
13　赤褐色焼土(2.5YR4/6)粘性弱
14　黒褐色土(10YR2/1.5)暗赤褐色焼土(5YR3/6) 15%混入
15　褐色灰(10YR4/4)粘性弱　赤褐色焼土(2.5YR4/6)混入
16　黒褐色土(10YR2/1.5)赤褐色焼土(2.5YR4/6)粒φ2～4㎜混入
⑰　黒褐色土(10YR2/1.5)赤褐色焼土(5YR4/6)，明赤褐色焼土(5YR5/8)粒φ2～10㎜，灰(10YR4/2)混入
⑱　赤褐色焼土(5YR4/8)粘性弱　黒褐色土(10YR2/2)40%，灰(10YR4/2)混入
⑲　赤褐色焼土(5YR4/8)ブロックφ10～25㎜40%　しまり強　粘性弱　灰(10YR4/2) 30%，黒褐色土(10YR2/2) 30%混入
20　赤褐色土(5YR4/7)粘性弱　赤褐色焼土(2.5YR4/8)15%，黒褐色土(10YR2/2) 20%，灰10%混入
21　黒褐色土(10YR2/1.5)赤褐色焼土(5YR4/6)，明赤褐色焼土(5YR5/8)粒φ2～10㎜，灰(10YR4/2)混入
22　黒褐色土(10YR2/1.5)褐色灰(10YR4/4)20%混入
23　黒褐色土(10YR2/1.5)赤褐色焼土(5YR4/7) 20%，灰(10YR4/2)混入
24　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり弱　粘性弱　褐色灰(10YR4/4)30%混入

S X201
1　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2) 40%，焼土(5YR5/6)粒φ1～3㎜混入
2　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2)，焼土(5YR5/6)混入
3　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2) 30%，地山粒φ1㎜，焼土(5YR5/6)粒φ1～2㎜混入
④　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強　粘性弱　灰混入
5　黒褐色土(10YR2/1.5)しまり強　灰(10YR8/2)，焼土(5YR5/6)粒φ2～5㎜混入
⑥　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2) 20%混入
⑦　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2)，焼土(5YR5/6)粒φ1～7㎜，炭化物φ1～3㎜混入
8　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2) 25%，炭化物φ1～5㎜，地山粒φ1～2㎜，焼土(5YR5/6)粒φ2㎜混入
⑨　黒褐色土(10YR2/1.5)粘性弱　灰(10YR8/2) 30%，焼土(5YR5/6)粒φ1～3㎜，焼土(5YR5/6)粒φ7㎜混入
10　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2) 30%，地山土混入
11　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2)混入
12　黒褐色土(10YR2/1.5)地山土15%混入
13　黒褐色土(10YR2/1.5)灰(10YR8/2)，暗赤褐色焼土(5YR3/6)ブロックφ50㎜混入
14　黒褐色土(10YR2/2)地山粒10%混入

0　1m

第46図　ＳＮ84焼土遺構、ＳＸ201性格不明遺構

第８表　Ｃ区検出遺構内ピット観察表

遺構番号 ピット番号	地区	平面形	規模（ｍ）			底面標高（ｍ）	埋土	備考
			長軸	短軸	深さ			
ＳＩ１２４								
Ｐ１	ME49	円形	0.35	0.33	0.71	63.40	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
ＳＩ２５１								
Ｐ１	MC48	円形	0.25	0.23	0.11	63.77	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
ＳＫＩ１２１								
Ｐ１	ME48	楕円形	0.54	0.48	0.11	63.74	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２	MD48	楕円形	0.38	0.36	0.63	63.23	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ３	MD48･49	楕円形	0.48	0.36	0.62	63.26	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ４	MD49	隅丸方形	0.42	0.37	0.63	63.42	1 黒褐色(10YR2/2)	土師器１片出土。
Ｐ５	MD49	楕円形	0.34	0.29	0.55	63.24	1 黒褐色(10YR2/1.5)	鉄滓１点出土。
Ｐ６	MC49	楕円形	0.34	0.25	0.63	63.23	1 黒褐色(10YR2/1.5)	土師器３片出土。
Ｐ７	MD49	楕円形	0.36	0.30	0.09	63.80	1 黒褐色(10YR2/1.5)	鉄滓１点出土。
Ｐ８	MD49	楕円形	0.27	(0.25)	0.12	63.81	1 黒褐色(10YR2/1.5)	Ｐ９に切られる。
Ｐ９	MC･MD49	楕円形	0.33	0.29	0.08	63.80	1 黒褐色(10YR2/1.5)	Ｐ８を切る。土師器７片出土。
Ｐ１０	MD49	楕円形	0.33	0.27	0.30	63.76	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ１１	MD48	円形	0.26	0.24	0.13	63.76	1 黒褐色(10YR2/1.5)	土師器１片出土。
Ｐ１２	MD48	楕円形	(0.42)	0.34	0.45	63.59	1 黒褐色(10YR2/1.5)	Ｐ13に切られる。羽口出土。
Ｐ１３	MD48	楕円形	0.27	0.23	0.07	63.81	1 黒褐色(10YR2/1.5)	Ｐ12を切る。土師器17片須恵器1片、被熱粘土塊1点出土。
Ｐ１４	MC48	円形	0.28	0.27	0.04	63.85	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ１５	MC48	隅丸方形	0.19	0.16	0.05	63.82	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ１６	MC48	隅丸方形	0.14	0.14	0.08	63.79	1 黒褐色(10YR2/2)	ＳＫ03を切る。
Ｐ１７	MC48	楕円形	0.29	0.15	0.10	63.78	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ１８	MC48	隅丸方形	0.19	0.16	0.09	63.80	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ１９	MC49	隅丸方形	0.16	0.14	0.06	63.81	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２０	MC49	隅丸方形	0.25	0.24	0.10	63.76	1 黒色(10YR2/1)	Ｐ21に切られる。
Ｐ２１	MC49	円形	0.21	0.20	0.08	63.78	1 黒褐色(10YR2/1.5)	Ｐ20を切る。
Ｐ２２	MC49	円形	0.30	0.28	0.37	63.50	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２３	MC48	隅丸方形	0.24	0.24	0.37	63.44	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ２４	MC48	楕円形	0.34	0.26	0.34	63.52	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２５	MC48	円形	0.30	0.29	0.49	63.36	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２６	MC49	円形	0.26	0.25	0.23	63.71	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ２７	MD48	隅丸方形	0.38	0.36	0.15	63.74	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
ＳＡ１３０								
Ｐ１	MF49	楕円形	0.43	0.35	0.27	63.94	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２	ME･MF49	円形	0.34	0.32	0.03	63.91	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ３	ME48	楕円形	0.39	0.35	0.25	63.79	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ４	ME49	円形	0.28	0.27	0.19	63.82	1 黒色(10YR2/1)	ＳＫＰ253・ＳＫＰ254を切る。
Ｐ５	ME49	円形	0.42	0.37	0.22	63.83	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
ＳＡ１７５								
Ｐ１	MF49	円形	0.31	0.27	0.11	64.00	1 黒褐色(10YR2/2)	ＳＫＰ181に切られる。
Ｐ２	MF48･49	円形	0.29	0.26	0.16	63.88	1 黒色(10YR2/1)	土師器１片出土。
Ｐ３	ME48	楕円形	0.20	0.17	0.05	63.96	1 黒色(10YR2/1)	
Ｐ４	MF49	円形	0.34	0.31	0.25	63.90	1 黒褐色(10YR2/1.5)	土師器２片出土。
ＳＡ１７７								
Ｐ１	MF49･50 MG49･50	楕円形	0.36	0.34	0.32	63.93	1 黒褐色(10YR2/1.5)	ＳＡ178－Ｐ1を切る。
Ｐ２	MF49	楕円形	0.41	0.36	0.22	63.92	1 黒褐色(10YR2/1.5)	ＳＡ178－Ｐ2を切る。
Ｐ３	MF48･49	楕円形	0.49	0.38	0.20	63.85	1 黒褐色(10YR2/1.5)	ＳＡ178－Ｐ3を切る。
Ｐ４	ME48	楕円形	0.28	(0.21)	0.21	63.78	1 黒色(10YR2/1)	ＳＫＰ198を切る。土師器1片出土。
ＳＡ１７８								
Ｐ１	MG49･50	円形	0.35	(0.31)	0.39	63.88	1 黒褐色(10YR2/1.5)	ＳＡ177-Ｐ1に切られる。土師器4片出土。
Ｐ２	MF49	楕円形	0.36	(0.27)	0.23	63.87	1 黒褐色(10YR2/1.5)	ＳＡ177－Ｐ2に切られる。
Ｐ３	MF49	円形	0.35	(0.27)	0.18	63.86	1 黒褐色(10YR2/1.5)	ＳＡ177-Ｐ3に切られる。土師器1片出土。
ＳＸ２０１								
Ｐ１	ME48･49	円形	0.26	0.25	0.29	63.83	1 黒褐色(10YR2/1.5)	
Ｐ２	ME49	円形	0.21	0.20	0.25	63.73	1 黒褐色(10YR2/1.5)	

第９表　Ｃ区検出柱穴様ピット（SKP）観察表

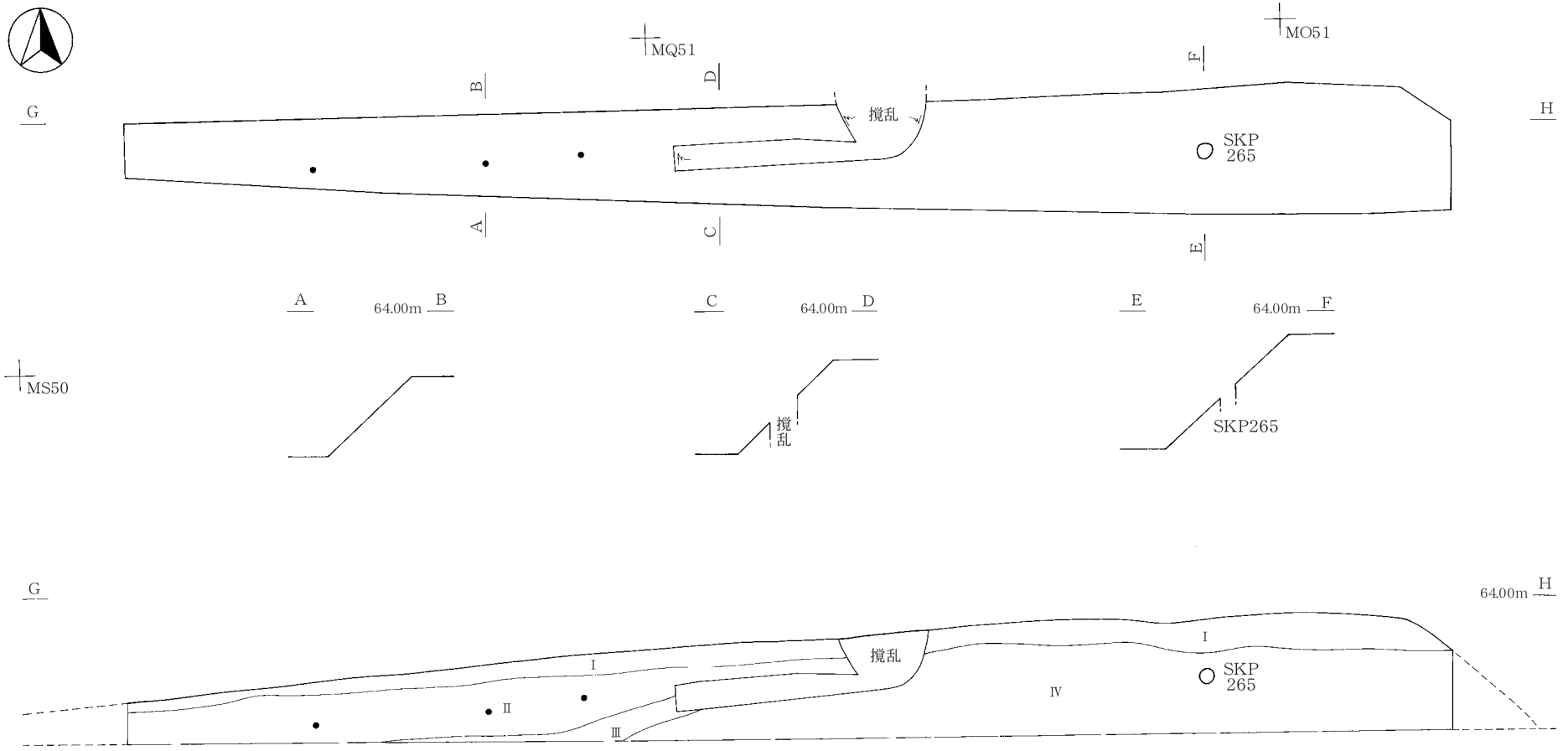
ＳＫＰ番号	地区	平面形	単位（m）			底面標高（m）	土色	備考
			長軸	短軸	深さ			
126	MF49	楕円形	0.45	0.16	0.04	64.07	1 黒褐色（10YR2/1.5）	
129	ME48	円形	0.33	0.31	0.25	63.72	1 黒色（10YR2/1）	土師器１片出土。
171	ME48・49	円形	0.44	0.38	0.17	63.87	1 黒色（10YR2/1）	SKP190 を切る。
172	ME49	円形	0.32	0.31	0.41	63.63	1 黒色（10YR2/1）	
174	MF49	楕円形	0.27	0.23	0.33	63.80	1 黒色（10YR2/1）	
176	MF49	楕円形	0.39	0.30	0.11	63.91	1 黒褐色（10YR2/1.5）	SD128 と SKP191 に切られる。
179	MF49	隅丸方形	0.44	0.30	0.37	63.77	1 黒褐色（10YR2/2）	SKP180 と SKP181 を切る。
180	MF49	楕円形	(0.21)	0.22	0.10	64.03	1 黒褐色（10YR2/2）	SKP179 と SKP181 に切られる。
181	MF49	楕円形	(0.32)	0.36	0.18	63.94	1 黒褐色（10YR2/2）	SKP179 に切られ、SKP180 と SA175 － P1 を切る。
183	MF49	円形	0.29	0.26	0.82	63.27	1 黒褐色（10YR2/1.5）	
187	MF48	円形	0.29	0.27	0.26	63.75	1 黒色（10YR2/1）	鉄滓１点出土。
189	ME48	円形	0.22	0.20	0.09	63.92	1 黒色（10YR2/1）	
190	ME48・49	楕円形	0.26	(0.24)	0.12	63.91	1 黒色（10YR2/1）	SKP171 に切られる。
191	MF49	円形	0.37	0.32	0.18	63.91	1 黒色（10YR2/1）	SKP176 と SD128 を切る。
193	MF48	楕円形	0.36	0.29	0.73	63.71	1 黒褐色（10YR2/1.5）	鉄滓１点出土。
194	MF49	円形	0.30	0.29	0.15	64.07	1 黒色（10YR2/1）	SD125 を切る。土師器１片出土。
195	MF49	楕円形	0.30	0.23	0.18	63.96	1 黒褐色（10YR2/1.5）	
196	ME48	円形	0.22	(0.18)	0.18	63.75	1 黒色（10YR2/1）	土師器１片出土。
198	ME48	円形	0.35	0.31	0.16	63.84	1 黒色（10YR2/1）	SA177 － P4 に切られる。
208	MF49	楕円形	0.26	(0.20)	0.10	63.99	1 黒褐色（10YR2/1.5）	SI122 に切られる。土師器１片出土。
209	MF49	楕円形	(0.29)	0.21	0.38	63.72	1 黒褐色（10YR2/1.5）	
253	ME49	楕円形	(0.15)	0.20	0.07	63.94	1 黒色（10YR2/1）	SKP254 を切り、SA130 － P4 に切られる。
254	ME49	楕円形	0.28	(0.21)	0.09	63.93	1 黒褐色（10YR2/1.5）	SKP253 と SA130 － P4 に切られる。
257	MD49	円形	0.33	0.31	0.15	63.90	1 黒褐色（10YR2/1.5）	
269	MF50	円形	(0.43)	(0.24)	0.20	63.98	1 黒褐色（10YR2/3）	
270	MF50	円形	(0.39)	(0.20)	0.21	63.94	1 黒褐色（10YR2/3）	

第５節　補足調査区（第47図）

補足調査区は、Ｃ区の西端から約30mほどのところにある。規模は、東西約17.6m、南北約1.2mの狭小な調査区である。調査時の現状は、国道７号線に沿う歩道の拡幅工事によって切り土された法面であった。

本調査区の基本土層は、法面から次のように観察できた。第Ⅰ層が黒褐色土を中心とする表土層、第Ⅱ層が黒色の遺物包含層、第Ⅲ層が黒色の自然堆積層、第Ⅳ層が褐色砂質の地山層である。ただし、東側では、第Ⅱ・Ⅲ層が地山面に及ぶ削平によって既に失われていた。遺構は、調査区東側の地山面から、径15㎝の柱穴様ピット１基（ＳＫＰ265）が検出された。遺物は第Ⅱ層から土師器片が３点出土した。また、本調査区中央やや西寄りでは地山層の落ち込みが見られ、この落ち込みに第Ⅱ層とⅢ層が堆積している。

本調査区の北側では大館市による確認調査が行われており、竪穴住居跡とともに、ほぼ南北に走る空堀が検出されている。本調査区の地山の落ち込みはこの空堀に関係する可能性があるものと考えられる。



補足調査区
Ⅰ　黒褐色土(10YR3/1)粘性弱　礫混入
Ⅱ　黒色土(10YR2/1)テフラφ1～10㎜混入
Ⅲ　黒色土(10YR1.7/1)テフラφ1～5㎜混入
Ⅳ　褐色砂質土(10YR4/6)しまり弱　粘性弱　地山層

SKP265
1　黒色土(10YR2/1)しまり弱　粘性弱
2　黒褐色土(10YR3/2)粘性弱　地山粒φ5～10㎜混入

●は土師器の出土地点である。

0　4m

第47図　補足調査区

第６節　出土遺物

ここでは、遺構内と遺構外の出土遺物をまとめて述べる。今調査における遺物の総出土量は、整理用コンテナ（54×34×10㎝）に換算して合計30箱である。その内訳は、土師器、須恵器、土製品、鉄製品、鉄関連遺物などである。ただし、出土した遺物のほとんどは土師器の甕で、十和田ａ火山灰降下後の10世紀頃のものと推定される。

出土した土師器の甕は、非ロクロ整形で粘土紐巻き上げ痕を留める砂底のものが多く、内面ナデ・外面ケズリ、指頭オサエ等によって調整されている。また、形状は、頸部でくびれ、口縁部が直線的に大きく外傾するもの（第50図15・16）、頸部で小さくくびれ、口縁部が小さく外傾するもの（第49図８、第51図18・19・21など）、頸部のくびれがほとんど無く、口縁部がほぼ直立するもの（第48図４、第51図20）、口縁部が内湾するもの（第49図７、第51図23）が見られる。土師器で甕以外に確認できた器種は坏だけであるが、図化できたのは、遺構外から出土した、底部無調整で回転糸切りによる底部切り離しのもの１点（第53図29）のみである。

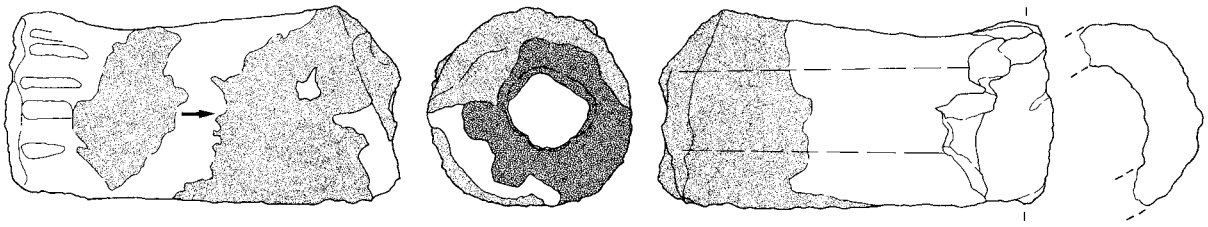
須恵器は、外面にタタキ目が見られる接合しない甕の体部の破片（第49図９など）がほとんどを占める。甕の口縁部と底部の出土は無かった。他には、坏の口縁部１点（第52図24）と凍害の見られる壺の頸部１点（第52図25）がＳＫＩ121から出土している。

土製品は、ミニチュア土器１点（第52図28）がＳＸ201より、フイゴの羽口７点が竪穴住居跡や竪穴状遺構などから出土し、ＳＩ５から出土した羽口はほぼ完形（第48図１）であった。また、土製の支脚や支脚と認められる破片の出土は無かった。

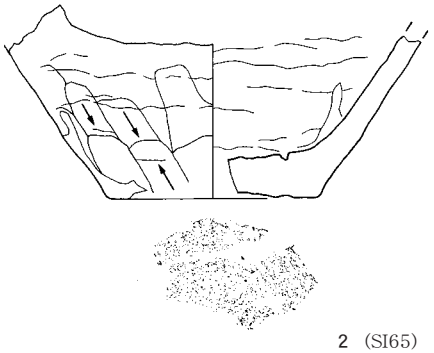
鉄製品は刀子が１点（第49図10）と棒状の製品が２点（第49図６、第50図13）出土しているが、何れも竪穴住居跡のカマドから出土している。他に、鉄関連遺物としては、上記のフイゴの羽口７点（計965g）の他、椀形滓が２点（計1065g）、流動滓は、ＳＩ131から出土したもの（第48図５）をはじめ全調査範囲から38点（計1840g）、その他の鉄滓が61点（計2737g）が出土した。また、砥石が、遺構外（Ｂ区）から１点（第53図32）出土している。

古代以外の遺物としては、Ａ区北側の遺構外から縄文時代の石匙１点（第53図33）が出土しているが、調査範囲内からは、縄文時代の遺構は検出されなかった。また、館跡に伴うとされる空堀の南縁が調査範囲の北端部で検出されたが、今調査の範囲内では中世に属する遺物は出土していない。また、民家の庭園部であったＣ区では、第Ⅰ・Ⅱ層より、近現代の陶磁器に混じり近世の銭貨や土製品の出土も見られた。

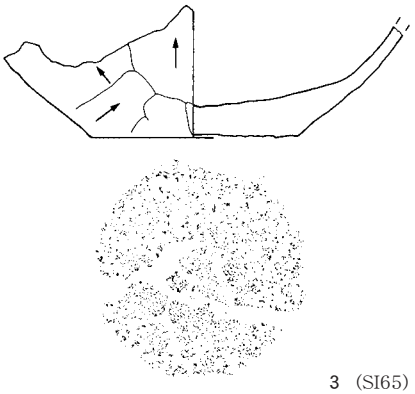
竪穴住居跡などの遺構内から出土した遺物については、本節において、Ａ・Ｂ・Ｃの調査区の順で主な遺構内出土遺物を図示（第48～52図）し、これらの法量等を観察表（第10・11表）に記載している。また、遺構外出土の遺物については、その主なものを第53図に示し、これらの法量等を第12表に記載している。



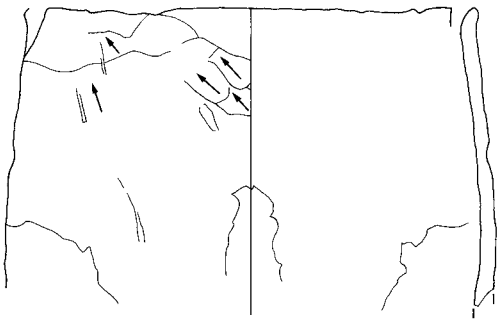
1 (SI5)



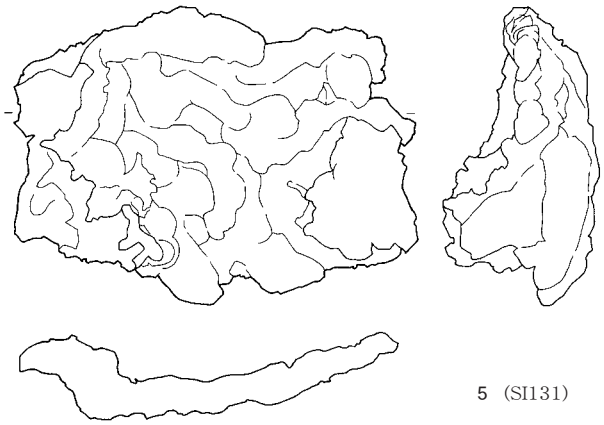
2 (SI65)



3 (SI65)



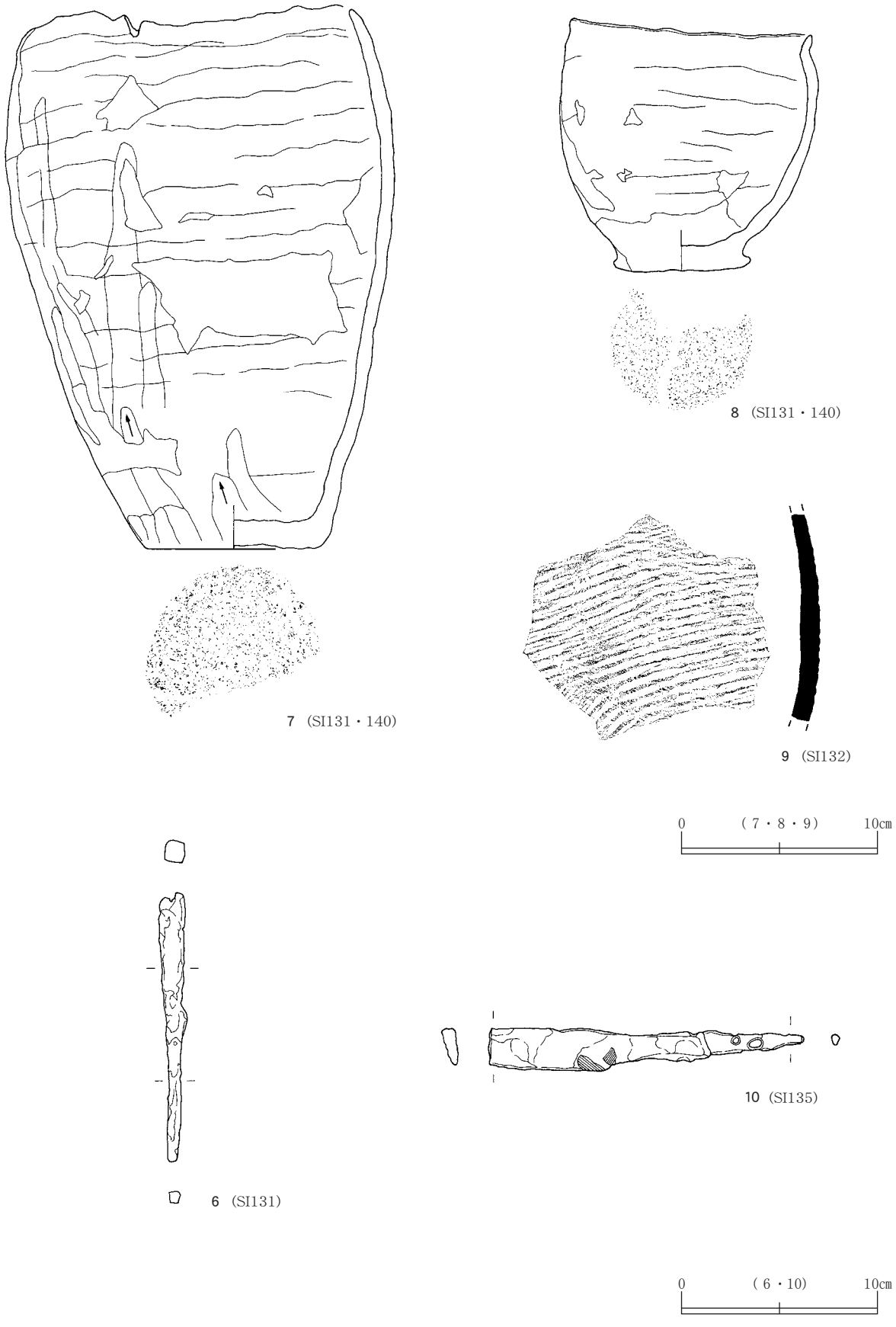
4 (SK157)



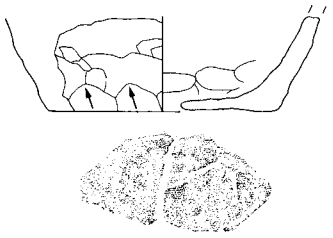
5 (SI131)

0　10cm

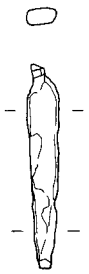
第48図　遺構内出土遺物(1)



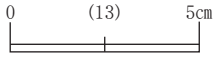
第49図　遺構内出土遺物(2)

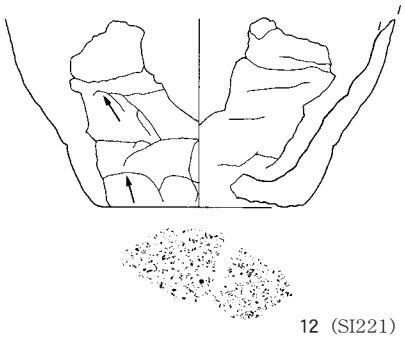


11（SI140）

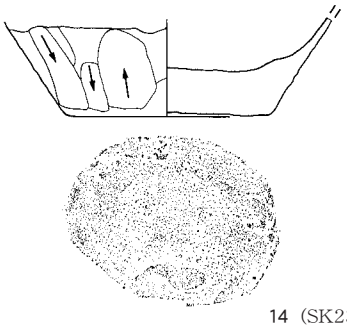


13（SI221）

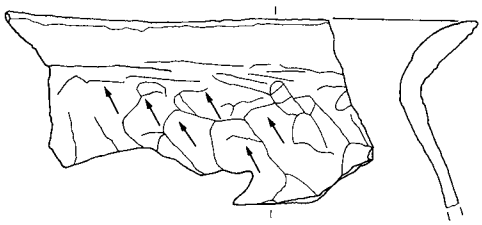




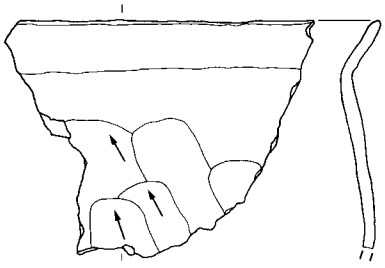
12（SI221）



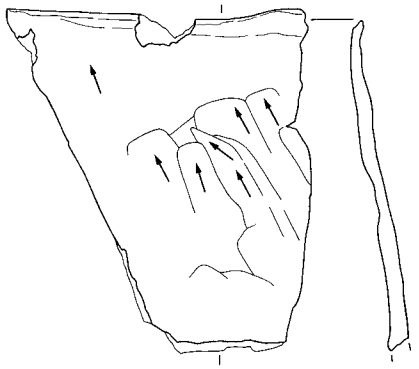
14（SK231）



15（SI122）

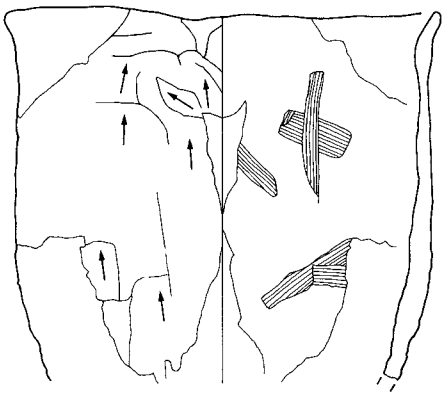


16（SI122）

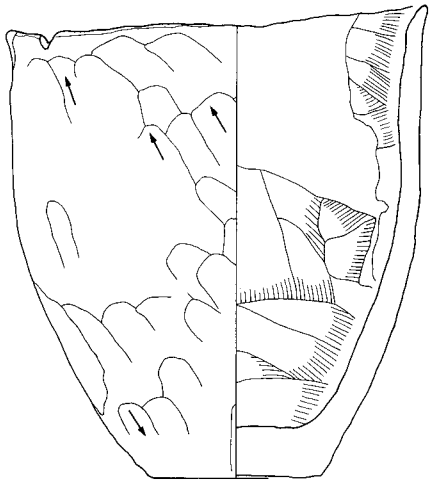


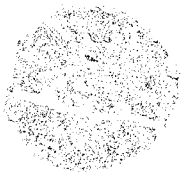
17（SI122）

第50図　遺構内出土遺物（3）

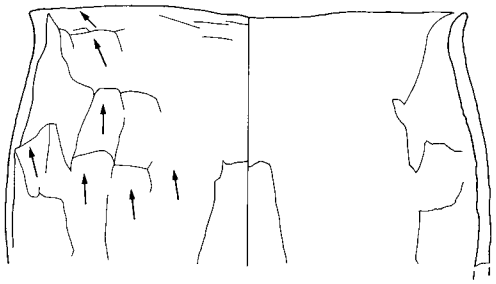


18（SI122）

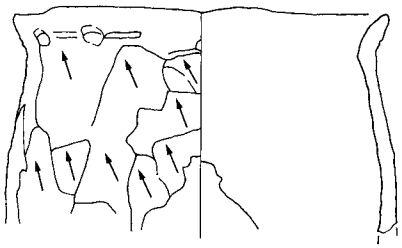




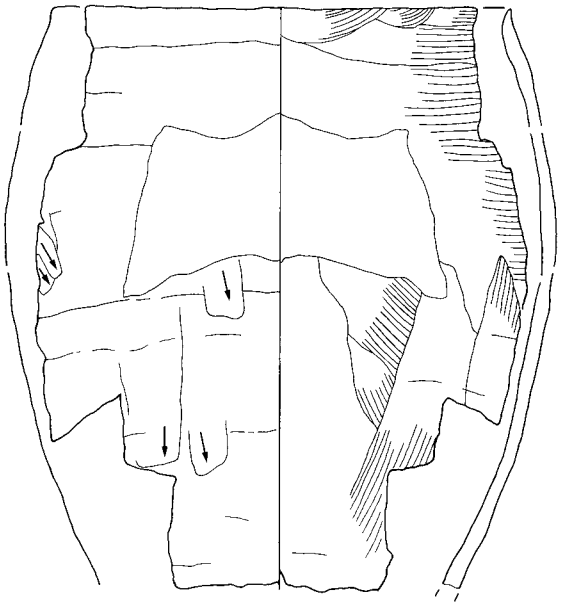
20（SI122）



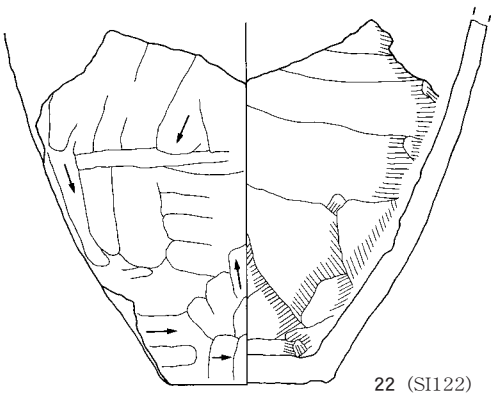
19（SI122）



21（SI122）



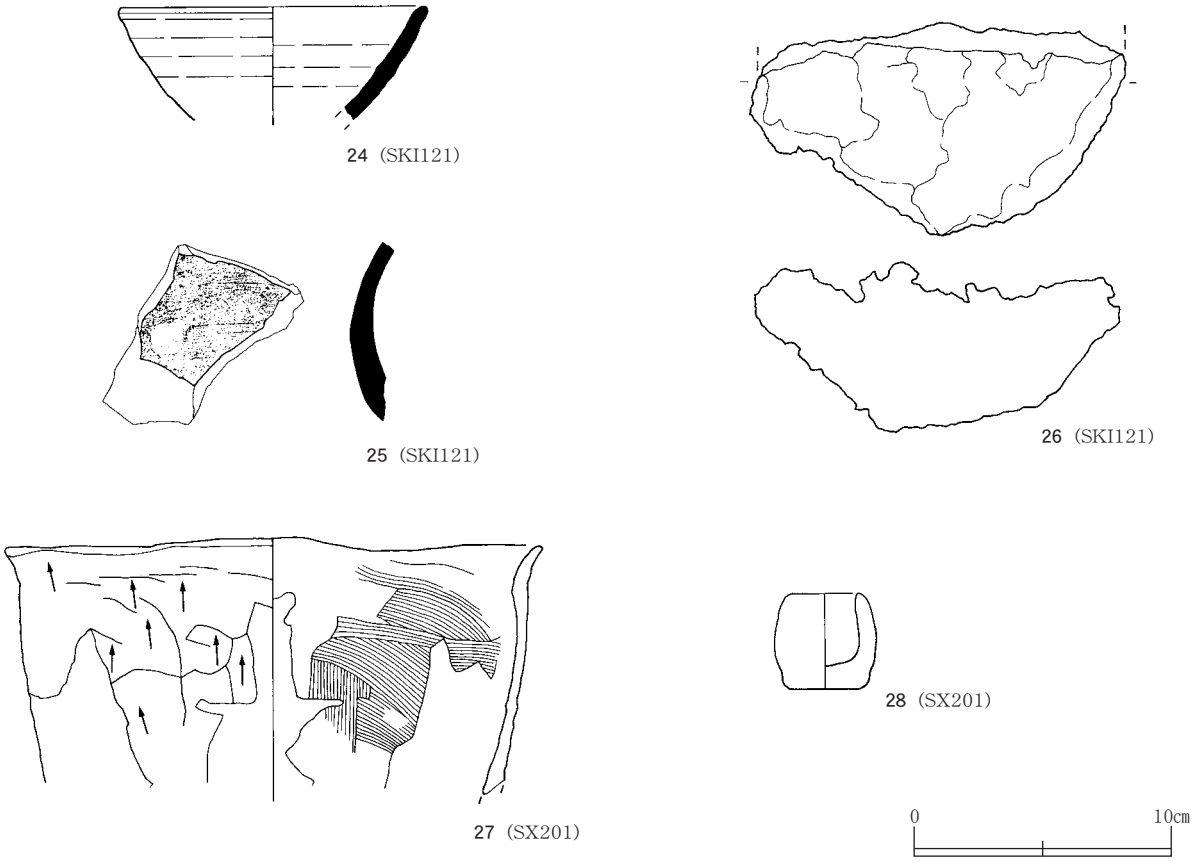
23（SI124）



22（SI122）

0　10cm

第51図　遺構内出土遺物（4）



第52図　遺構内出土遺物（5）

第10表　遺構内出土遺物観察表（1）

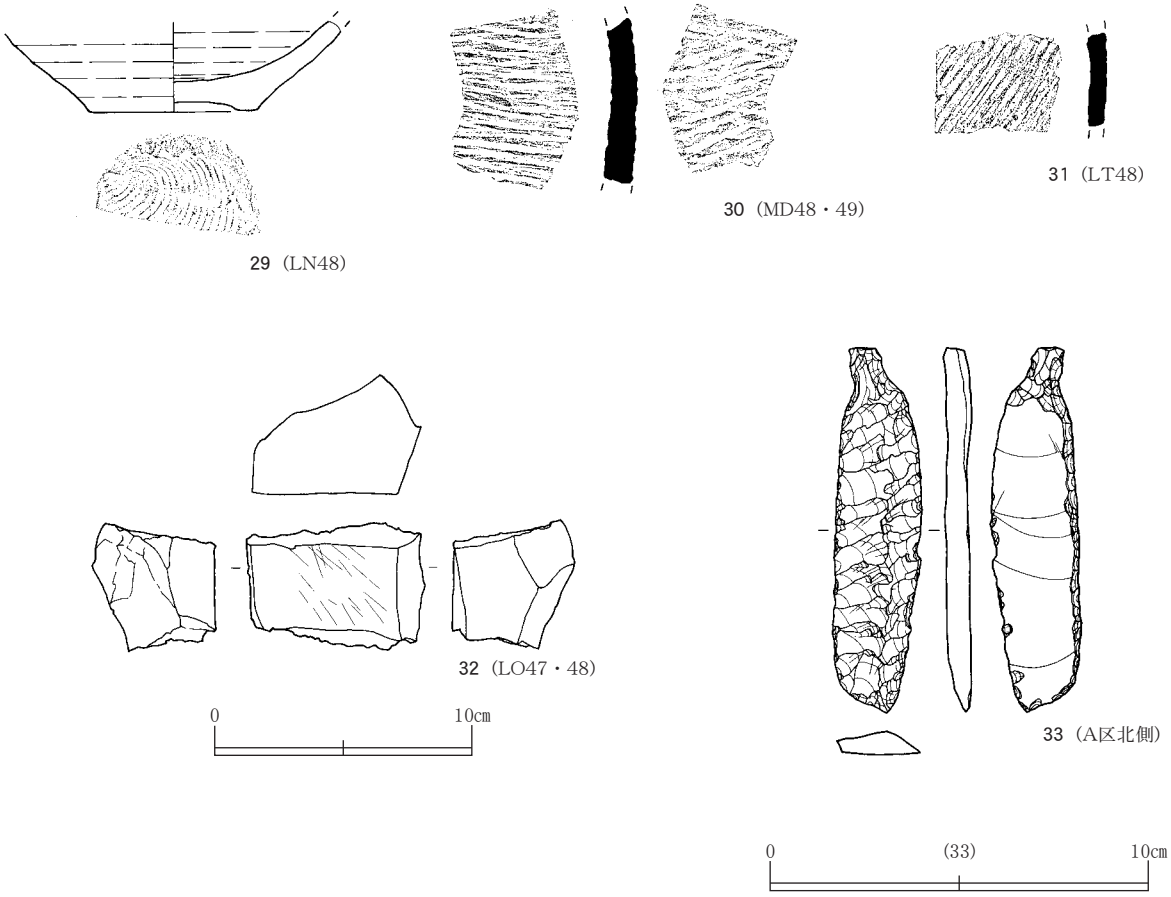
挿図番号	出土位置	種別	器種	部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	外底部	器面調整	備考
48- 1	SI 5	土製品	羽口	ほぼ完形	長さ 15.5 cm	最大幅 8.1 cm	孔径 3.2 cm	重量 663.2g	ナデ、基部に棒状器具によるオサエ	図中の矢印は送風方向、基部の一部が欠損
48- 2	SI65	土師器	甕	体部～底部	－	(8.2)	－	砂底	内面ナデ、外面ケズリ	粘土紐巻き上げ
48- 3	SI65	土師器	甕	体部～底部	－	8.0	－	砂底	内面ナデ、外面ケズリ	
48- 4	SK157	土師器	甕	口縁～体部	(17.5)	－	－		内外面ナデ	
48- 5	SI131	鉄滓	流動滓		長さ 11.7 cm	最大幅 15.8 cm	厚さ 6.1 cm	重量 666.0g		
49- 6	SI131	鉄製品	棒状		長さ 9.3 cm	最大幅 0.9 cm	－	重量 7.9g		
49- 7	SI131・140	土師器	甕	口縁～底部	20.3 cm	9.0 cm	27.5 cm	砂底	内外面ナデ、外面下部ケズリ	粘土紐巻き上げ
49- 8	SI131・140	土師器	甕	口縁～底部	12.3 cm	7.0 cm	13.0 cm	砂底	内外面ナデ	粘土紐巻き上げ 外底下端がくびれている
49- 9	SI132	須恵器	甕	体部	－	－	－		外面タタキ目	
49-10	SI135	鉄製品	刀子	刃部	長さ 10.9 cm	最大幅 1.5 cm	厚さ 0.7 cm	重量 12.3g		

第11表　遺構内出土遺物観察表（2）

挿図番号	出土位置	種別	器種	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	外底部	器面調整	備考
50-11	SI140	土師器	甕	体部～底部	－	(9.0)	－	ナデ	内面指頭オサエ・ナデ、外面下端ケズリ	
50-12	SI221	土師器	甕	体部～底部	－	(8.0)	－	砂底	内面ナデ、外面ケズリ	粘土紐巻き上げ
50-13	SI221	鉄製品	棒状		長さ 5.4 cm	最大幅 0.9 cm	厚さ 0.5 cm	重量 4.1g		
50-14	SK231	土師器	甕	体部～底部	－	(8.0)	－	砂底・ナデ	内面指頭オサエ・ナデ、外面下端ケズリ	外面に煤状炭化物付着、外底部に粘土粒付着
50-15	SI122	土師器	甕	口縁～体部	－	－	－		内面ナデ、外面ケズリ	口縁内側に煤状炭化物付着
50-16	SI122	土師器	甕	口縁～体部	－	－	－		内面ナデ、外面ケズリ	粘土紐巻き上げ
50-17	SI122	土師器	甕	口縁～体部	－	－	－		内外面ナデ	
51-18	SI122	土師器	甕	口縁～体部	(17.0)	－	－		内面ナデ、外面ケズリ	
51-19	SI122	土師器	甕	口縁～体部	(14.6)	－	－		内面ナデ、外面ケズリ、口縁指頭オサエ	外面に煤状炭化物付着
51-20	SI122	土師器	甕	ほぼ完形	16.4 cm	6.6 cm	18.4 cm	砂底	内面ナデ、外面ケズリ	外面に煤状炭化物付着
51-21	SI122	土師器	甕	口縁～体部	(17.0)	－	－		内面ナデ、外面ケズリ	
51-22	SI122	土師器	甕	体部～底部	－	6.2 cm	(14.2)	ケズリ	内面ナデ、外面ケズリ	
51-23	SI124	土師器	甕	口縁～体部	(17.8)	－	－		内面ナデ、外面ケズリ	粘土紐巻き上げ
52-24	SKI121	須恵器	坏	口縁～体部	12.0 cm	－	－		内外面ロクロナデ	
52-25	SKI121	須恵器	壺	頸部	－	－	－		内外面ロクロナデ	内外面暗灰色（N3）、内外面に凍害、内面上部に自然釉五所川原産か？
52-26	SKI121	鉄滓	碗形滓	部分	長さ 8.3 cm	最大幅 14.6 cm	厚さ 6.6 cm	重量 786.9g		
52-27	SX201	土師器	甕	口縁～体部	(21.0)	－	－		内面ナデ、外面ケズリ	
52-28	SX201	土製品	ﾐﾆﾁｭｱ	ほぼ完形	2.7 cm	2.6 cm	3.7 cm			口縁一部欠損

第12表　遺構外出土遺物観察表

挿図番号	出土位置	種別	器種	部位	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	外底部	器面調整	備考
53-29	LN48	土師器	坏	体部～底部	－	6.6 cm	－	回転糸切	内外面ロクロナデ	
53-30	MD48・49	須恵器	甕	体部	－	－	－		内面アテ具痕、外面タタキ目	
53-31	LT48	須恵器	甕	体部	－	－	－		外面タタキ目	外面に自然釉
53-32	LO47・48	石製品	砥石	部分	残存長 5.0 cm	幅 6.9 cm	残存厚 4.6 cm	重量 15.5g		
53-33	A区北側	石器	石匙	完形	長さ 9.6 cm	幅 2.4 cm	厚さ 0.8 cm	重量 16.1g		打面調整剥離技法



第53図　遺構外出土遺物

引用・参考文献

秋田県教育委員会　『餌釣遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　秋田県文化財調査報告書第210集　1991（平成3）年

秋田県教育委員会　『上野遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』　秋田県文化財調査報告書第222集　1992（平成4）年

秋田県教育委員会　『池内遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書 - 遺構篇』　秋田県文化財調査報告書第268集　1997（平成9）年

秋田県教育委員会　『狼穴Ⅳ遺跡－一般国道７号大館西道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』　秋田県文化財調査報告書第391集　2005（平成17）年

第５章　自然科学的分析

本章では、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した自然科学分析成果報告を掲載する。第１節　自然科学分析成果報告（１）には、平成18年２月報告分の放射性炭素年代測定、種実同定、樹種同定、テフラ分析の成果を、第２節　自然科学分析成果報告（２）には、平成18年10月報告分の放射性炭素年代測定、種実同定、樹種同定の成果を記載している。

第１節　自然科学的分析成果報告（１）

１　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根　久

(1) はじめに

土飛山館跡より検出された炭化物試料について、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行った。

第13表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5256	遺構：SI ４埋土 遺物 No：試料1	試料の種類：炭化材（スギ） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5257	遺構：SI ５ カマド 遺物 No：試料2	試料の種類：炭化材（同定不能） 試料の性状：不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5258	遺構：SI65 カマド 遺物 No：試料3	試料の種類：炭化材（スギ） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：wet カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5259	遺構：SI122 カマド 前庭部 遺物 No：試料4	試料の種類：炭化材（ヤマグワ） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5260	遺構：SI124 遺物 No：試料5 層位：床面直上	試料の種類：炭化種実（トチノキ炭化子葉） 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5261	遺構：SI131 カマド 遺物 No：試料6	試料の種類：炭化材（カエデ属） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5262	遺構：SI135 カマド 遺物 No：試料7	試料の種類：炭化材（ツガ属） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5263	遺構：SI140 カマド 遺物 No：試料8	試料の種類：炭化材（ヤナギ属） 試料の性状：最外以外部位不明 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第13表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第14表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には、^{14}Cの半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正には OxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、第14表中に下線で示してある。

第14表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ13C（‰）	^{14}C 年代（yrBP ±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代（yrBP ±1σ）
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-5256	-24.01±0.13	1260±20	690AD(59.7%)750AD 760AD(8.5%)775AD	670AD(93.2%)780AD 790AD(2.2%)810AD	1261±21
PLD-5257	-29.26±0.14	1105±25	895AD(27.2%)925AD 940AD(41.0%)980AD	890AD(95.4%)990AD	1103±23
PLD-5258	-24.86±0.11	1255±20	690AD(57.5%)750AD 760AD(10.7%)775AD	670AD(94.3%)820AD 840AD(1.1%)860AD	1255±21
PLD-5259	-25.19±0.14	1025±20	990AD(68.2%)1025AD	980AD(95.4%)1030AD	1025±21
PLD-5260	-25.35±0.14	1025±20	990AD(68.2%)1025AD	980AD(95.4%)1030AD	1024±20
PLD-5261	-32.02±0.16	1050±20	985AD(68.2%)1020AD	900AD(5.8%)920AD 960AD(89.6%)1030AD	1052±21
PLD-5262	-25.81±0.15	13205±40	13850BC(68.2%)13500BC	14050BC(95.4%)13350BC	13205±42
PLD-5263	-26.66±0.15	1085±20	895AD(23.9%)920AD 950AD(44.3%)995AD	890AD(95.4%)1020AD	1085±21

(4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

調査の知見等では、これらの遺構は、いずれも10世紀ころと予想されている。

試料１（PLD-5256）および試料３（PLD-5258）は、ほぼ同様の年代範囲を示し、１σ歴年代範囲において7世紀末～8世紀中頃、２σ歴年代範囲において7世紀中頃～8世紀末または7世紀中頃～9世紀始めである。

一方、試料２（PLD-5257）および試料８（PLD-5263）では、ほぼ同様の年代範囲を示し、１σ歴年代範囲において10世紀中頃～10世紀末、２σ歴年代範囲において9世紀末～10世紀末または9世紀末～11世紀始めである。

また、試料４（PLD-5259）～試料６（PLD-5261）では、ほぼ同様の年代範囲を示し、１σ歴年代範囲において10世紀末～11世紀始め、２σ歴年代範囲において10世紀末～11世紀始めである。

試料７（PLD-5262）は、10世紀後半～11世紀始めと予想されていたが、旧石器時代の年代が測定された。樹種同定の結果では同定できないものの針葉樹のツガ属であることを考慮すると古い地層中の炭化材が紛れ込んだ可能性が考えられる。

なお、木材は、複数年輪から構成されるため最外年輪を測定した場合には、少なくとも木材の伐採年代を示すが、これ以外の年輪部の測定では年代が古くなる。試料５以外は、炭化材であり最外年輪部を測定していないことから、測定された年代値が木材の成長年数程度に古いことが考えられる。

２　土飛山館跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

土飛山館跡は、秋田県大館市豊町90-43外に所在し、大館盆地を西流する長木川左岸の河岸段丘上（標高約64m）に立地する。本遺跡は、平安時代の集落跡であり、竪穴住居跡、須恵器、土師器、鍛冶に関連する遺物が検出された。また、調査区北端部では、城館に関わると見られる大規模な空掘が検出された。ここでは、ＳＩ124床面直上から出土した炭化種実を検討し、利用植物を明らかにすることを試みた。

(2) 試料と方法

炭化種実の検討は、試料５の１試料について行った。試料は抽出済みであり、乾燥保存されていた。同定･計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。なお、本試料は、放射性炭素年代測定の試料として使用された。その結果、１σ歴年代範囲においてcal AD990-1025年（68.2%）、２σ歴年代範囲においてcal AD980-1030年（95.4%）と測定され、平安時代の年代であった（第13・14表）。

(3) 結果および若干の考察

同定されたのは、トチノキ，Aesculus turbinata Blume炭化子葉（図版19）であった。出土個数は、完形が１個、1/3～1/4程度の破片が2個であった。完形は、長径20㎜、短径15㎜程度の扁球形であった。トチノキは、落葉広葉樹であり、種子は食用可能な有用植物である。住居跡から出土し

たことから、人が利用するために持ち込んだものと考えられ、断片的ではあるが、平安時代の利用植物の一端を知ることができた。

３　土飛山館跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

土飛山館跡は、大館市豊町に所在し、長木川左岸の標高約64mの河岸段丘上に立地する中世の城館に関る遺構と推定されている。平安時代は集落跡であり、ここでは、10世紀ころの竪穴住居跡６軒（ＳＩ４･65･122･131･135･140）と竪穴状遺構（ＳＫＩ121）から出土した炭化材７点（試料１・３・４、６～８､11）の樹種同定結果を報告する。試料１は住居跡埋土から、試料３・４、６～８は住居跡カマドから出土した炭化材で、試料11は竪穴状遺構内土坑から出土した炭化材である。
試料11以外は、同一炭化材を用いてＡＭＳ法により年代測定が実施されている。また、試料２は樹種同定を行っていない（第13・14表)。

(2) 試料と方法

同定は、まず炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に接線断面と放射断面を片刃の剃刀を用いて各方向に沿って軽く弾くように割り、この3断面を走査電子顕微鏡で拡大して材組織を観察する。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５㎜角以下の大きさに整え、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った（図版20・21)。

同定した炭化材の残り破片は、秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

(3) 結果

検出された分類群は、スギ（試料１・３)･ツガ属（試料７）の針葉樹２分類群、ヤナギ属（試料８)･クリ（試料11)･ヤマグワ（試料４)･カエデ属（試料６）の落葉広葉樹４分類群であった（第13表)。住居跡（ＳＩ４）埋土から出土した炭化材（試料１）はスギが、竪穴状遺構の土坑（ＳＫＩ121－SK03）からはクリが検出された。住居跡（ＳＩ65･122･131･135･140）５軒のカマドから出土し燃料材と考えられる炭化材は、スギ・ヤマグワ・カエデ属・ツガ属・ヤナギ属であった。各住居跡カマドからは異なる分類群が検出された。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を分類配列順に記載し、材組織の写真を提示した。

①ツガ属　Tsuga　マツ科　図版20　1a-1c（試料７）

主な軸方向要素は仮道管である針葉樹材。年輪幅は非常に狭い材であった。垂直と水平の樹脂道は無い。放射断面において、放射柔細胞の壁は厚く細胞壁に数珠状肥厚がみられ、放射柔組織の上下端に有縁壁孔を持つ放射仮道管がある。分野壁孔は小型で、１分野に２～４個ある。

②スギ Cryptomeria japonica D.Don　スギ科　図版20　2a-2c（試料３）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は大型、孔口は楕円形に大きく開いたスギ型で、１分野に主に2個ある。

③ヤナギ属　Salix　ヤナギ科　図版20　3a-3c（試料８）

やや小型の管孔が単独または２～４個が複合し分布している散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は

単穿孔である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在にする。

ヤナギ属は暖帯から温帯の水湿地や丘陵地の日当りのよい所に生育する落葉高木または低木で多くの種類があるが、材からは樹種を特定することはできない。

④クリ　Castanea-crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版21　4a-4c（試料11）

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性である。

⑤ヤマグワ　Morus austoralis Poiret　クワ科　図版21　5a-5c（試料４）

年輪の始めに大型の管孔が配列し除々にまたは急に径を減じ、晩材部では小型から非常に小型の管孔が集合し斜状・塊状に分布する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースがある。放射組織は異性、１～８細胞幅、上下や縁辺部に方形細胞や直立細胞が多く、結晶を含む。

⑥カエデ属　Acer　カエデ科　図版21　6a-6c（試料６）

小型の管孔が単独または２～３個が放射方向に複合して散在し年輪界は不明瞭な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはシャープな線を引いたようならせん肥厚がある。放射組織は同性、１～３細胞幅、細胞高が高いものもある。

(4) 考察

ＳＩ４埋土から出土した炭化材はスギであった。ＳＩ65カマドからもスギが検出されている。スギは県内に多く分布する主要な針葉樹であり、県内の遺跡からも多く出土することが知られている。当遺跡の平安時代においても、利用されていたことが確認された。

住居跡５軒のカマドから出土し燃料材と考えられる炭化材５試料の樹種は、スギ･ツガ属の針葉樹２分類群とヤナギ属･ヤマグワ･カエデ属の落葉広葉樹３分類群であった。燃料材としての樹種選択性は低く、多種類を利用していたようである。またこれらの樹種は入手容易で、遺跡から近い森林に生育していた樹種とも考えられる。ただし試料７（ＳＩ135カマド）のツガ属から得られた^{14}Ｃ年代値は、13205±20 yrBP であり、旧石器時代の値であった。炭化材の形状は、放射径４㎜･接線径1.2㎜の薄い板状の小破片で、年輪数は８年輪と非常に年輪幅は狭い材であった。この炭化材がほかの炭化材試料と異なる点としては、鉄分が浸透していたことであるが、この点が年代測定値と関連するかは不明である。ツガ属には、本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは２種を区別することはできない。試料７のツガ属は、分布から亜高山に生育するコメツガと推測されるが、標高64m の当遺跡周辺に生育していたとは考えにくいので、いずれにしても遠方からの持込や、流入の可能性があるのではないだろうか。

４　土飛山館跡のテフラ分析

黒澤 一男・中村 賢太郎（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

ここでは秋田県大館市の土飛山館跡の検出されたテフラ層の分析をおこなう。

(2) 試料と分析方法

土飛山館跡より採取された試料を用いて、テフラ分析をおこなった。分析にはＳＤ１の第３層（試料⑨）と、ＳＩ５の第11層（試料⑩）の２試料を用い、これらについて以下の分析をおこなった。

①各試料について自然含水状態で約80g 程度秤量し、分析試料とした。また、乾燥試料重量を求めるために別途試料を10g 程度秤量し、乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。

②３φ（0.125㎜：120メッシュ）と４φ（0.063㎜：250メッシュ）の2枚のふるいを重ね、流水下湿式ふるい分けをおこなった。

③４φの残渣（粒径0.125～0.063㎜）を用いてプレパラートを作成し、偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、その組成を求めた。火山ガラスについては、町田・新井（2003）の分類基準に従い形態分類をおこなった。

④火山ガラスの屈折率測定をおこなった。測定方法は、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率を測定し、その結果を範囲であらわした。

(3) 分析結果

本地域においてテフラ検出分析をおこなった結果を第15表、第54・55図に示す。

含砂率は、概ね50% 強である。粗粒ものにはそれぞれパミスが含まれており、試料⑨には１㎜弱の灰白色パミスを含み、試料⑩には１㎜以上の黄褐色パミスを微量含む。

鉱物組成については両試料とも80% 前後を火山ガラスが占め、長石が残りの20% 前後となる。重鉱物は少ないが、試料⑩では角閃石が見られる（図版22)。

火山ガラス屈折率測定の結果は、試料⑨では範囲1.5001-1.5092、平均1.5048、試料⑩では範囲1.5010-1.5092、平均1.5049となる。

(4) テフラ同定の検討

今回の分析により土飛山館跡において十和田ａテフラ、十和田八戸テフラが検出された。それらの特徴と噴出起源及び年代について述べる。

【十和田ａテフラ（To-a)】

試料⑨は、軽石型火山ガラスを中心とし、測定した屈折率の値、灰白色の軽石を含むことから十和田ａテフラ(大池, 1972) と考えられる。その火山ガラスを用いた屈折率測定結果は範囲1.500-1.509, 平均1.505となり，従来の十和田ａテフラの値（範囲1.500-1.508；町田・新井, 2003）とほぼ重なることから，十和田ａテフラに同定される.

十和田ａテフラは秋田県と青森県の県境にある十和田カルデラを噴出源とし、東北地方に広く分布している。その噴出時代は、西暦915年（平安時代前期）であり、年代指標として非常に重要なテフラである。

【十和田八戸テフラ（To-H)】

試料⑩に認められる軽石型（スポンジ状・繊維状）を中心とした火山ガラスおよび黄褐色パミスは，その形態的特長，屈折率の値から十和田八戸テフラを起源とするものと考えられる。

町田・新井（2003）によると十和田八戸テフラは、火山ガラスの形態が軽石型であり、また重鉱物中には角閃石が含まれることが特徴である。ここで見られる火山ガラスの多くが軽石型であり、少量ではあるが角閃石を含むこと、火山ガラスの屈折率測定結果が範囲1.501-1.509，平均1.505となり、従来

の値（範囲1.502～1.509；町田・新井, 2003）とほぼ重なることから，十和田八戸テフラと考えられる。

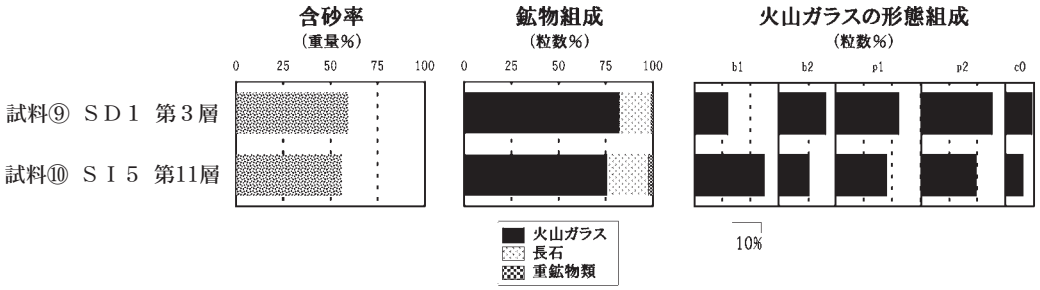
十和田八戸テフラは前述の十和田ａテフラと同様に十和田カルデラを噴出源とし，給源の東方および南方に広く分布しており、遠くは太平洋の三陸沖海底コアからも検出されている（青木･新井, 2000）。その噴出年代はテフラ中の有機物を用いた^{14}Ｃ年代測定などから約15,000年前という年代が妥当とされている。(町田・新井, 2003).

(5) まとめ

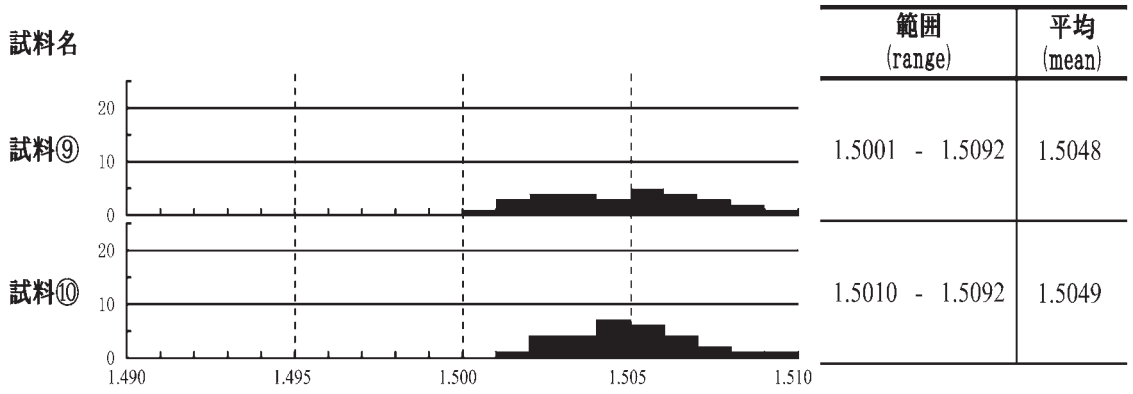
土飛山館跡の堆積物を用いて鉱物分析および火山ガラス屈折率測定をおこなった結果、十和田ａテフラ、十和田八戸テフラが確認された。ＳＤ１の第３層（試料⑨）の灰白色パミスを含むガラス質テフラは、平安時代前期の西暦915年に噴火した十和田ａテフラであり、ＳＩ５の第11層（試料⑩）の黄褐色パミスを含むガラス質テフラは、約15,000年前に噴火した十和田八戸テフラと考えられる。

第15表　堆積物の鉱物分析結果一覧

試料採取 地点、層位	含水率 (重量％)	含砂率 (重量％)	軽鉱物組成（粒数）		火山ガラス形態分類（粒数）					重鉱物組成（粒数）		
			長石 Pl	火山ガラス Vg	平板状 b1	Ｙ字状 b1	繊維状 p1	スポンジ状 p2	破砕型 c0	単斜輝石 Cpx	斜方輝石 Opx	角閃石 Hor
試料⑨ ＳＤ１ 第３層	43.7	59.4	34	169	24	31	45	51	18	1	1	-
試料⑩ ＳＩ５ 第11層	73.6	56.2	39	135	43	17	31	34	10	1	-	3



第54図　土飛山館跡における堆積物の特徴



第55図　火山ガラスの屈折率測定結果（縦軸：測定粒数、横軸：屈折率）

第16表　屈折率測定データシート(1)

遺跡名　　：土飛山館跡
試料名　　：試料⑨
対象物　　：glass(pm)

		測定値				
測定粒数	30	1.5018	1.5020	1.5024	1.5017	1.5030
測定値 (Min.)	1.5001	1.5092	1.5071	1.5068	1.5052	1.5040
測定値 (Max.)	1.5092	1.5038	1.5048	1.5051	1.5056	1.5082
範囲	0.0091	1.5082	1.5073	1.5059	1.5045	1.5031
平均 (Mean)	1.5048	1.5001	1.5022	1.5027	1.5033	1.5066
		1.5076	1.5066	1.5058	1.5038	1.5063

*** Histogram ***　　* = 1

		0 10 20 30 40 50 60
1.490 =<Nd< 1.491	0	
1.491 =<Nd< 1.492	0	
1.492 =<Nd< 1.493	0	
1.493 =<Nd< 1.494	0	
1.494 =<Nd< 1.495	0	
1.495 =<Nd< 1.496	0	
1.496 =<Nd< 1.497	0	
1.497 =<Nd< 1.498	0	
1.498 =<Nd< 1.499	0	
1.499 =<Nd< 1.500	0	
1.500 =<Nd< 1.501	1	*
1.501 =<Nd< 1.502	3	***
1.502 =<Nd< 1.503	4	****
1.503 =<Nd< 1.504	4	****
1.504 =<Nd< 1.505	3	***
1.505 =<Nd< 1.506	5	*****
1.506 =<Nd< 1.507	4	****
1.507 =<Nd< 1.508	3	***
1.508 =<Nd< 1.509	2	**
1.509 =<Nd< 1.510	1	*

第17表　屈折率測定データシート(2)

遺跡名　　：土飛山館跡
試料名　　：試料⑩
対象物　　：glass(pm)

		測定値				
測定粒数	30	1.5082	1.5074	1.5060	1.5040	1.5038
測定値 (Min.)	1.5010	1.5022	1.5064	1.5060	1.5058	1.5047
測定値 (Max.)	1.5092	1.5044	1.5010	1.5034	1.5074	1.5060
範囲	0.0082	1.5045	1.5045	1.5041	1.5028	1.5024
平均 (Mean)	1.5049	1.5022	1.5033	1.5035	1.5054	1.5092
		1.5060	1.5063	1.5063	1.5056	1.5044

*** Histogram ***　　* = 1

		0 10 20 30 40 50 60
1.490 =<Nd< 1.491	0	
1.491 =<Nd< 1.492	0	
1.492 =<Nd< 1.493	0	
1.493 =<Nd< 1.494	0	
1.494 =<Nd< 1.495	0	
1.495 =<Nd< 1.496	0	
1.496 =<Nd< 1.497	0	
1.497 =<Nd< 1.498	0	
1.498 =<Nd< 1.499	0	
1.499 =<Nd< 1.500	0	
1.500 =<Nd< 1.501	0	
1.501 =<Nd< 1.502	1	*
1.502 =<Nd< 1.503	4	****
1.503 =<Nd< 1.504	4	****
1.504 =<Nd< 1.505	7	*******
1.505 =<Nd< 1.506	6	******
1.506 =<Nd< 1.507	4	****
1.507 =<Nd< 1.508	2	**
1.508 =<Nd< 1.509	1	*
1.509 =<Nd< 1.510	1	*

第２節　自然科学的分析成果報告（２）

１　放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・瀬谷薫
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根　久

(1) はじめに

大館市豊町地内に所在する土飛山館跡より検出された炭化物試料について、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、考察は藤根が担当した。

(2) 試料と方法

測定試料の情報、調整データは第18表のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}Ｃ年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第19表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}Ｃ）、同位体分別効果の補正を行った^{14}Ｃ年代、^{14}Ｃ年代を暦年代に較正した年代範囲、暦年較正に用いた年代値を示す。暦年較正に用いた年代値は、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}Ｃ年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}Ｃ年代（yrBP）の算出には、^{14}Ｃの半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は、測

第18表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-6009	土飛山館跡 遺構：SI ３カマド 試料 No：①	試料の種類：炭化材（ツガ属） 試料の性状：最外年輪以外 状態：dry、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム0.1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6010	土飛山館跡 遺構：SKI121-SK04 試料 No：②	試料の種類：炭化材（ニレ属） 試料の性状：不最外年輪以外 状態：dry、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6011	土飛山館跡 遺構：SX201 試料 No：③	試料の種類：炭化材（ヤナギ属） 試料の性状：最外年輪 状態：dry、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6012	土飛山館跡 遺構：SK231 試料 No：④	試料の種類：炭化材（針葉樹） 試料の性状：最外年輪以外 状態：dry、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6013	土飛山館跡 遺構：SI131・140 試料 No：⑤	試料の種類：炭化種実（イネ胚乳） 状態：dry、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-6014	土飛山館跡 遺構：SI132-P2 試料 No：⑥	試料の種類：炭化種実（イネ穎果(塊)） 状態：dry、カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクト AMS・1.5SDH

第19表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ13C（‰）	^{14}C 年代（yrBP ±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代（yrBP ±1σ）
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-6009	-24.52±0.12	12855±40	13330BC(68.2%)13090BC	13490BC(95.4%)13000BC	12854±39
PLD-6010	-25.56±0.14	980±20	1010AD(55.1%)1050AD 1100AD(13.1%)1120AD	1010AD(59.5%)1050AD 1080AD(35.9%)1160AD	982±19
PLD-6011	-27.41±0.12	925±20	1040AD(43.5%)1100AD 1110AD(24.7%)1160AD	1030AD(95.4%)1170AD	925±22
PLD-6012	-27.30±0.14	1205±20	775AD(43.4%)830AD 835AD(24.8%)870AD	770AD(95.4%)890AD	1204±20
PLD-6013	-23.90±0.15	945±20	1030AD(15.7%)1050AD 1080AD(52.5%)1160AD	1020AD(95.4%)1160AD	946±19
PLD-6014	-25.37±0.14	885±20	1050AD(18.3%)1080AD 1150AD(49.9%)1210AD	1040AD(26.9%)1090AD 1120AD(68.5%)1220AD	887±19

定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は、上記、第１節の１を参照のこと。

(4) 考察

PLD-6009のＳＩ３カマドの炭化材（ツガ属）は、２σ暦年代範囲において13490-13000 cal BC (95.4%) であり、縄文時代草創期に相当する年代値である。遺跡の基盤層は、十和田八戸火砕流（To-H、15,000年前；町田・新井、2003）が堆積する段丘面であることから、この火砕流に伴って焼けた炭化材と思われる。

PLD-6010のＳＫＩ121-SK04の炭化材（ニレ属）は、２σ暦年代範囲において1010-1050 cal AD（59.5%）、PLD-6013のＳＩ131・140の炭化種実（イネ胚乳）は、２σ暦年代範囲において1020-1160 cal AD（95.4%）、PLD-6014のＳＩ132-P2の炭化種実（イネ穎果（塊））は、２σ暦年代範囲において1040-1090 cal AD（26.9%）および1120-1220 cal AD（68.5%）であり、11世紀初め～終わりにかけての年代範囲を示している。PLD-6011のＳＸ201の炭化材（ヤナギ属）は、２σ暦年代範囲において1030-1170 calAD（95.4%）であり、11世紀初め～12世紀終わりにかけてのやや広い年代範囲を示しているが、１σ暦年代範囲において1040-1100 cal AD（43.5%）の年代範囲を示す。

なお、PLD-6012のＳＫ231の炭化材（針葉樹）は、２σ暦年代範囲において770-890 cal AD (95.4%) であり、８世紀終わり～９世紀終わりの年代範囲であり、その他の遺構の年代に比べて古い年代範囲であった。

２　土飛山館跡から出土した炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

土飛山館跡は、秋田県大館市豊町90-43外に所在し、大館盆地を西流する長木川左岸の河岸段丘上（標高約64m）に立地する。本遺跡は、平安時代の集落跡であり、竪穴住居跡、須恵器、土師器、鍛冶に関連する遺物が検出された。また、調査区北端部では、城館に関わると見られる大規模な空掘が検出された。ここでは、ＳＩ131･140（試料№.：⑤）およびＳＩ132-P2（試料№.：⑥）から出土した炭化種実を検討し、利用植物の一端を明らかにすることを試みた（第18表）。

(2) 試料と方法

炭化種実の検討は、試料№.：⑤（ＳＩ131･140出土）および試料№.：⑥（ＳＩ132-P2出土）の合計２試料について行った。試料№.：⑤は、本来樹種同定用試料であったが、含まれていたのは炭化種実であったため、検討を行った。試料は抽出済みであり、タッパーに乾燥保存されていた。同定･計数などは、肉眼および実体顕微鏡下で行った。なお、検討した試料の一部は、放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）の試料として使用された。その結果、試料№.：⑤は1σ歴年代範囲においてcal AD1080-1160年（52.5%）、2σ歴年代範囲においてcal AD1020-1160年（95.4%）と測定され、平安時代中期～後期の年代であった。また、試料№.：⑥は1σ歴年代範囲においてcal AD1150-1210年(49.9%)、2σ歴年代範囲においてcal AD1120-1220年（68.5%）と測定され、平安時代後期～鎌倉時代前期の年代であった（第19表）。

(3) 出土した炭化種実

同定されたのは、試料№.：⑤はイネ炭化胚乳、コムギ炭化胚乳、試料№.：⑥はイネ炭化穎果であった。以下に、各試料の炭化種実を記載する。

試料№.：⑤（ＳＩ131･140）：含まれていたのは、イネ炭化胚乳の完形が42個（このうち３個を年代試料とした）と破片が４個、コムギ炭化胚乳の完形が５個であった。イネは、種皮や胚が残存したものが稀に見られたが、明らかに穎が付着したものはなく、脱穀された状態であった。

試料№.：⑥（ＳＩ132-P2）：同定されたのはイネ炭化穎果のみであった。試料中には、炭化種実の塊が16個含まれており、表面観察から判断する限りでは全てがイネと考えられた。塊のおよその大きさは、大きいもので長径４㎝、短径２～３㎝、厚さ1.5～２㎝のものが１個と長径３㎝、短径２㎝のものが１個であり、その他はいずれも長径１～２㎝の小さなもの（このうち１塊を年代試料とした）であった。なお、これら塊から剥がれ落ちたとみられる炭化胚乳が２～３個含まれており、そのうち１個は欠損や発泡のない状態が良好なものであった。この胚乳１個の重量は6.6㎎であり、塊16個全体の重量は5.10g であった。このことから、穎の重量を考慮して、塊全体はおよそ700個前後の炭化穎果から構成されていると推定される。

(4) 形態記載（図版23）

①イネ　Oryza sativa Linn.　炭化穎果、炭化胚乳

穎の表面には規則的に配列する独特の顆粒状突起がある。炭化胚乳は、側面観･上面観共に楕円形。両面の表面には、縦方向の２本の筋が入り、３等分される。これの真ん中は隆起し、両端は一段下がる。欠損箇所があるものや焼け膨れしたものも含まれていた。

②コムギ　Triticum aestivum Linn.　炭化胚乳

側面観・上面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る１本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。

(5) 考察

ＳＩ131・140（試料№：⑤）からは、イネとコムギの炭化胚乳が出土した。これらは、平安時代中期～後期の食糧として住居内に保存されていたものと考えられる。一方、平安時代後期～鎌倉時代前期のＳＩ132-P2（試料№：⑥）から出土した炭化種実の塊は、いずれもイネであった。このイネは、穎（籾殻）の一部が剥がれ落ちているものも見られるが、状態からして脱穀された胚乳ではなく、炭化穎果（籾）の集合と考えられる。また、塊の中には茎のような部位は含まれていなかった。これらのことは、ＳＩ132-P2の性格を多少なりとも反映していると思われるので、いくつか検討してみる。１つには貯蔵されていたものである可能性が考えられ、貯蔵されていたものだとすれば、その方法に指摘できる点がある。それは、単一種であることから、他の利用植物とは混ぜて貯蔵していなかったことと、茎遺体などが含まれてないことから、株や穂ごと貯蔵されていたのではなく、穂から外された状態のものであったことである。もう１つは、祭祀的意味合いを持っていた可能性が考えられるが、それならば、穎果ではなく、脱穀された胚乳を使用しても良さそうにも思える。他に考えられるのは、ゴミとして投棄されたことであるが、可能性は低いように思われる。それは、出土部位が籾殻のような不要な部位だけではなく、食用部位（胚乳）を含む穎果であったからである。また、ゴミ穴のような性格の遺構であれば、イネ以外の分類群や様々な部位が出土する可能性が高いのではないだろうか。

(6) おわりに

平安時代中期～後期には、イネとコムギが食用とされていた。平安時代後期～鎌倉時代前期のＳＩ132-P2から出土したイネ炭化穎果（籾）の塊は、穂から外された後、脱穀されないまま、イネ単独で貯蔵されていたか、祭祀的意味合いで投棄されたものである可能性が考えられた。

３　土飛山館跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

土飛山館跡は秋田県大館市豊町に位置し、長木川左岸の標高64m の河岸段丘上に立地する平安時代の集落跡であるとされている。ここでは土飛山館跡で発掘された炭化材４試料について樹種同定を行い、その報告を行う。

(2) 炭化材樹種同定の方法

炭化材の同定を行なうにあたって、複数の炭化材片が認められるものについては形状や色つやが異なるものを実体顕微鏡下で観察し、それらのうち横断面の模様が異なるものについて枝番号（－Ａ・－Ｂ・－Ｃ）を付して分類した。クリは実体顕微鏡下で同定できるため、この時点で同定を行った。次に、走査電子顕微鏡写真を撮影するため材の３方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成し、材組織を観察、撮影した。走査電子顕微鏡用の試料は３断面を５㎜角程度の大きさに整形し、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定したあと試料を乾燥させた。その後試料に金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で撮影を行った。同定を行った試料のうち、各分類

群を代表する試料については写真図版（図版24～26）を添付し同定結果を記述した。同定した試料は秋田県埋蔵文化財センターに保管されている。

(3) 結果

今回の同定により、４個の試料中からツガ属・ヤナギ属・オニグルミ・イヌシデ節・ブナ属・クリ・ニレ属・モクレン属の８分類群が同定された。ヤナギ属については小破片であったために１年輪を持つ試料を得ることができなかった。なお、放射断面の分野壁孔の観察を行うことが不可能であったために科以下の同定が不可能であった針葉樹が１点と、保存状態が悪く材組織が観察できなかった広葉樹の１点が認められた。各試料の同定結果は第20表に示した。

次に、同定された樹種の材組織について記載を行う（第18表）。

ツガ属　Tsuga　マツ科　図版24（1a-1c）試料№.：①

仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹材である。放射柔細胞には数珠状肥厚が発達し、放射柔組織の上下端には放射仮道管がある。日本で自生するツガ属には高さ25m程になる常緑高木のコメツガとツガの２種があり、山地に生育する。コメツガはツガより高所に生育し亜高山帯に分布する。

ヤナギ属　Salix　ヤナギ科　図版24（2a-2c）試料№.：③

小径の道管が単独、または２～３個複合し分布する散孔材である。放射組織は単列で上下に直立細胞を持つ異性である。道管は単穿孔、道管と放射組織の壁孔は蜂の巣状の交互状に分布する。ヤナギ属には高木から低木まで様々な種があり、日本では約40種類が報告されている。

オニグルミ　Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis（Miyabe et Kudo）Kitamura　クルミ科　図版24（3a-3c）試料№.：②-C

柔細胞が短接線状に連なり、単独で大径の道管が散在する散孔材である。放射組織は同性で1～3細胞幅、道管は単穿孔で交互壁孔を持つ。道管の内腔にはチロースが発達する。オニグルミは北海道・本州・四国・九州の川沿いの湿気の多い場所に生育する、高さ７～10m の落葉高木である。

クマシデ属イヌシデ節　Carpinus sect. Eucarpinus　カバノキ科　図版25（4a-4c）試料№.：④-A

小径の道管が散在し、集合放射組織が存在する散孔材である。放射組織は同性で１～３列、集合放射組織も形成する。道管の穿孔は単穿孔である。イヌシデ節には岩の多い乾いた山稜に生育する低木のイワシデ、山地に生育する高さ10m になる落葉高木のイヌシデ、アカシデの３種がある。

ブナ属　Fagus　ブナ科　図版25（5a-5c）試料№.：②-B

小径の道管が散在し、集合放射組織を伴う散孔材である。放射組織は同性で単列、または細胞幅の広い集合放射組織を形成する。道管は単穿孔または階段穿孔である。ブナ属には落葉高木であるブナ、イヌブナがあり、両種ともに温帯から冷温帯林を代表する樹種である。

クリ Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版25（6a-6c）試料№.：②-A

大型の道管が年輪界で一列に並び、それ以外の部分では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。放射組織は単列で同性である。道管の穿孔は単穿孔であり、放射組織と道管の壁孔は柵状である。クリは北海道（石狩・日高地方以南）・本州・四国・九州の丘陵から山地に分布する落葉高木で高さ20m ほどになる。材は耐久性強く、水湿に耐え、保存性きわめて高い。

ニレ属　Ulmus　ニレ科　図版26（7a-7c）試料№.：②

大型の道管が年輪界で並ぶ環孔材で、孔圏外の小道管は花束状、斜線状、接線状に複合する。放射組織は同性で細胞幅６～７列位の紡錘形になる。道管の穿孔は単穿孔で放射組織と道管の壁孔は交互壁である。小道管にはらせん肥厚がある。ニレ属には落葉高木で山地に生育するハルニレとオヒョウ、そして同じく落葉高木で川原や荒地に多いアキニレの3種がある。

モクレン属　Magnolia　モクレン科　図版26（8a-8c）試料№.：①-B

小径の道管が単独、または放射方向に２～３個複合して連なる散孔材である。放射組織は同性で２列、道管は単穿孔で側壁には対列状～階段状の壁孔を持つ。モクレン属にはホオノキ、オオヤマレンゲ、シデコブシ、コブシ、タムシバの５種があり、低地から山地に生育する落葉高木である。

第20表　土飛山館跡出土炭化材の樹種同定結果

試料番号	検出遺構	樹種	年代測定番号
①	ＳＩ３ カマド	ツガ属	PLD-6009 (12854±39yrBP)
①－Ａ		広葉樹	
①－Ｂ		モクレン属	
②	ＳＫＩ121－SK04	ニレ属	PLD-6010 (982±19yrBP)
②－Ａ		クリ	
②－Ｂ		ブナ属	
②－Ｃ		オニグルミ属	
③	ＳＸ201	ヤナギ属	PLD-6011 (925±22yrBP)
③－Ａ		ツガ属	
④	ＳＫ231	針葉樹	PLD-6012 (1204±20yrBP)
④－Ａ		イヌシデ節	

(4) まとめ

今回同定された８樹種のうちオニグルミは河川域に多く生育する代表的な樹種であり、またイヌシデ節・ブナ属・クリ・ニレ属・モクレン属の多くは低地から山地域に多く生育する種が含まれる分類群である。現在、これらの樹種は秋田県内の低地域から山地域において広く分布しており本遺跡周辺でも容易に得ることのできる樹種であることから、樹種選択性は低く様々な樹種が用いられていたものと考えられる。

なお、ＳＩ３カマドから出土した試料№.：①の樹種はツガ属であり、その^{14}Ｃ年代値は12,854±39yrBP（PLD-6009）であった。得られた年代値が予想された年代よりも古い年代値であったことは、遺跡基盤層が十和田八戸火砕流（To-H、15,000年前；町田・新井、2003）が堆積する段丘面であることから、検出されたツガ属炭化材はこの火砕流により炭化した古い材であることが示唆される。米代川右岸の段丘上に位置する秋田県大館市池内には十和田八戸火砕流によって埋積された埋没林が存

在し、その樹種同定の結果はトウヒ属を主としモミ属を交えるものであることが明らかにされており（寺田1999）、現在の植生状況とは大きく異なって寒冷な気候であったことが示されている。ツガ属は現在の分布状況からみると亜高山帯など山岳上部に生育するコメツガであると考えられ、約千年前の温暖期に平地に存在したとは考えにくく、十和田八戸火砕流からの混入であると考える

参考文献

第１節１・第２節１

Bronk Ramsey C.（1995）Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37（2）, 425-430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43（2A）, 355-363.

町田　洋・新井房夫（2003）新編　火山灰アトラス－日本列島とその周辺－. 東京大学出版会、336p.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}C年代 , 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer.（2004）Radiocarbon 46, 1029-1058.

第１節４

青木かおり・新井房夫（2000）三陸沖海底コアKH94-3, LM-8の後期更新世テフラ層序. 第四紀研究, 39, 107-120.

町田 洋・新井房夫（2003）「新編　火山灰アトラス」. 東京大学出版会 ,336p.

大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年. 第四紀研究, 11, 228-235.

第２節３

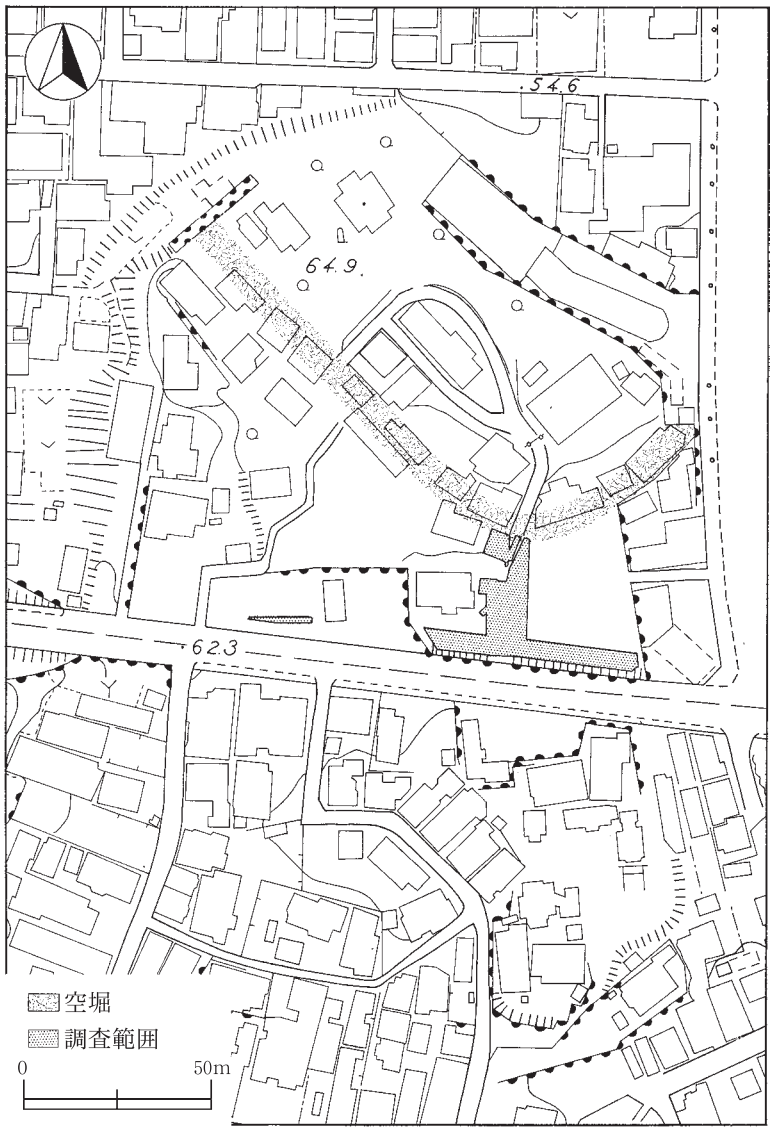
町田　洋・新井房夫（2003）新編　火山灰アトラス－日本列島とその周辺－. 東京大学出版会、336p.

寺田和雄・辻誠一郎（1999）秋田県大館市池内における十和田八戸テフラに埋積した森林植生と年輪年代学の適用 . 植生史研究 ,6（2）：39-47.

第６章　まとめ

土飛山館跡は、空堀で区画された郭が連なる中世城館として知られていた。遺跡の規模は、南北約250m、東西約150m、面積は25,000㎡に達するものと推定される。遺跡の中央北寄りには北西～南～北東へ弧状に延びる幅10mほどの空堀が配され、遺跡を南北に区画している。この区画によって広い段丘面から独立した段丘北縁の平坦な突出部が主郭とみなされ、その主郭部の面積は6,000㎡ほどになる。今回は、片山自歩道事業に伴い、遺跡の南側を東西に走る国道７号線北側歩道の北縁に沿う部分と７号線と住宅地を結ぶ生活道路部分などを範囲とする720㎡の調査を行った。なお、調査範囲生活道路部の北端は上記の空堀の南縁（ＳＤ１）に達している（第56図、図版２・６）。

調査の結果、竪穴住居跡20軒、竪穴状遺構１基などの集落を構成する遺構群（第57図）が検出され、出土遺物などからこれらの所属する時期は平安時代（10世紀頃）であると判断される。一方、中世城館を構成すると言われている空堀（ＳＤ１）の精査範囲は、その全体規模から見ると極々僅かな部分に過ぎず、また、今回の調査範囲は、本遺跡の核心部分と予想されるＳＤ１北側の主郭部には及んでいない。このため、今調査範囲内の結果から遺跡全体の性格や時期等について推し量ることには、やや憚られる状況にあると考える。よって、ここでは、今回の調査範囲から検出した主な遺構の特徴等について触れ、まとめとしたい。



第56図　調査範囲と空堀（1）

（１）竪穴住居跡について

調査範囲から20軒の竪穴住居跡を検出した。この内カマド、あるいはカマドと推定される焼土範囲が検出された住居跡は10軒である。また、カマドが取り付く壁は、不明瞭なものを除くと、南東壁が３軒、南西壁が２軒、北西壁が２軒、北東壁が１軒で、カマドの位置に関しては規則性などが見られないものと考える。

これに対し各住居の四壁は、大まかに言うと、検出された全住居跡が南東、南西、北東、北西を

向いていると言える。地形等の住居の向きに関しての規制が集落の存続期間を通して働いていたものと考えられ、ほぼ同じ向きに整然と住居が建ち並ぶ古代集落の様相が浮かび上がってくる。調査からは、集落を構成する住居跡等が所属する時期は10世紀頃であると判断されるが、ＳＩ124から検出されたトチノキの炭化種実の放射性炭素年代測定では、10世紀末～11世紀はじめという暦年代範囲の結果を、ＳＩ131と140に関わる炭化米は、11世紀はじめから12世紀半ばという結果を得ていることなどから、集落の存続期間が広がる可能性がある。

（2）生産に関わると推定される遺構について

住居跡などの遺構からは、土師器などの土器の他に、鉄滓などの鉄関連の遺物が多数出土しており、調査範囲周辺で鍛冶炉などが操業されていたことを示している。ただし、今調査範囲内からは、鍛冶関連などの遺構は検出されていない。Ｃ区から検出したＳＫＩ121竪穴状遺構は、他の住居跡とは構造が異なることや床面から複数の火床と推定される焼土範囲が検出されたことから、何か生産に関わる工房等の遺構である可能性があると考えられる。ただし、その床面からメッシュで採取した土や焼土からは、鍛造薄片や鉄滓、砂鉄などが全く検出されなかったことから鉄や鉄製品に関わる遺構ではないと判断される。また、同じくＣ区から検出したＳＸ201性格不明遺構からは、剥離した多数の土師器片が出土したことから、土師器の生産に関わる遺構であるものと推定される。

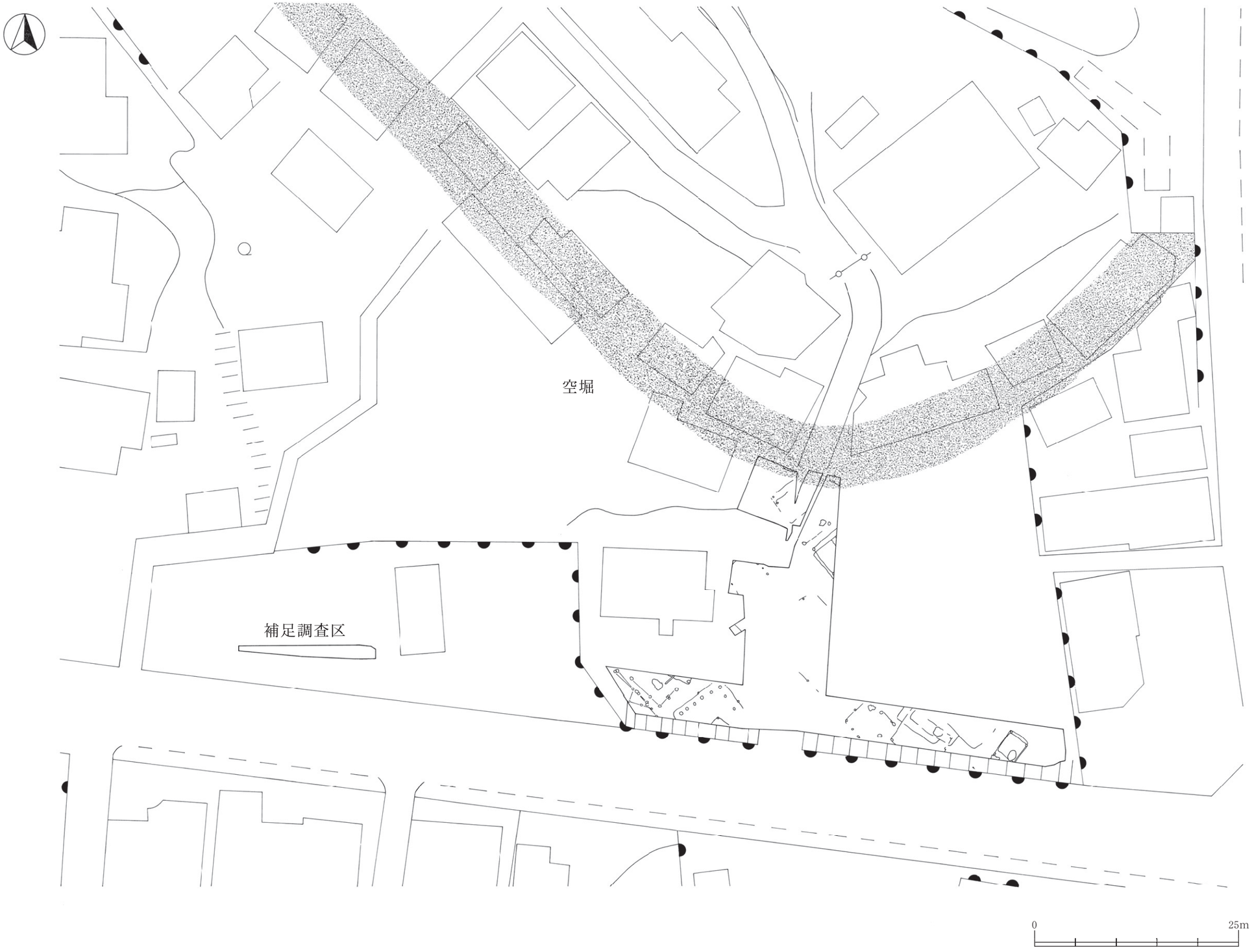
（3）ＳＤ１空堀について

本遺構は、館跡を構成していたとされる空堀である。空堀は、北に突出した段丘の上面北東側の高位面を囲んでいるものと推定され、調査範囲北西方向の段丘崖から段丘面上を南東（Ｎ-52°-Ｗ）に向かってほぼ直線に100mほど延び、調査範囲北端付近で大きく湾曲し、ここから北東方向（Ｎ-48°-Ｅ）へ50mほど延び東側の段丘崖に達している。今回の調査では、調査範囲の北端部において、空堀湾曲部の南縁を検出した。埋土からは土師器甕と鉄滓が出土し、埋土第３層に霜降り状に混入していたテフラは十和田ａであるとの分析結果を得ている。しかし、その調査範囲は、長さ7.30m、深さは１mほどに過ぎず、上記の竪穴住居跡との切り合い関係なども確認できなかった。さらに、空堀南縁付近に近年の宅地造成あるいはそれ以前の耕作等による攪乱が見られたことや、宅地造成以前は空堀の痕跡がかなりの深さを有していた可能性が高い（図版２）ことなどから、出土した遺物や検出されたテフラが必ずしも遺構の年代を示しているという状況にはないと判断せざるを得ない。本遺構の詳細を明らかにするためには、少なくとも底面に及ぶ調査が必要であると思われる。

今調査範囲の限りでは、古代の集落跡であるという性格が強調されるが、古代・中世を通じて遺跡の核心部であったと推定される主郭部に調査が及んでいないことから、遺跡の全容は未だ明らかになってはいないのが現状である。本遺跡の古代集落と空堀を含む館跡との時期的な関係や遺跡の性格的な変遷などについては、北東北各地の、所謂防御制集落を含む古代集落や中世城館との比較検討と、今後の周辺地域の調査が進むことによって、解明されていくものと考える。

引用・参考文献

秋田県教育委員会　『餌釣遺跡－国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　秋田県文化財調査報告書第210集　1991（平成3）年



第57図　調査範囲と空堀（2）

土飛山館跡空中写真 1 （1948年米軍撮影）

図版2

土飛山館跡空中写真２（1948年米軍撮影）

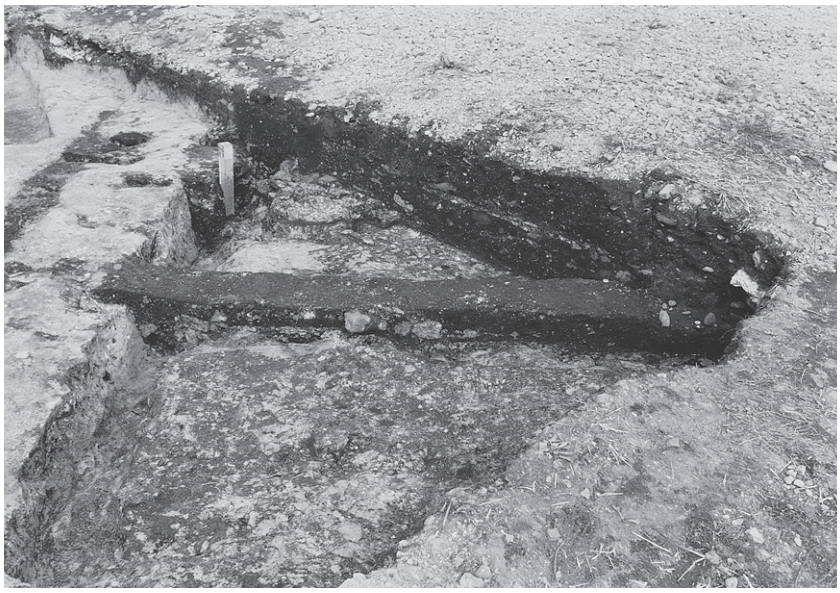
土飛山館跡空中写真３（1975年国土地理院撮影）

図版4

1　A区調査前現況（北→）

2　A区北側遺構確認状況（南→）

1　ＳＩ４・５確認状況
（南西→）



2　ＳＩ５土層断面
（南西→）

3　ＳＩ４・５完掘状況
（南東→）

図版6

1　ＳＤ１地表面状況

2　ＳＤ１南縁検出状況
（西→）

3　ＳＤ１土層断面
（西→）

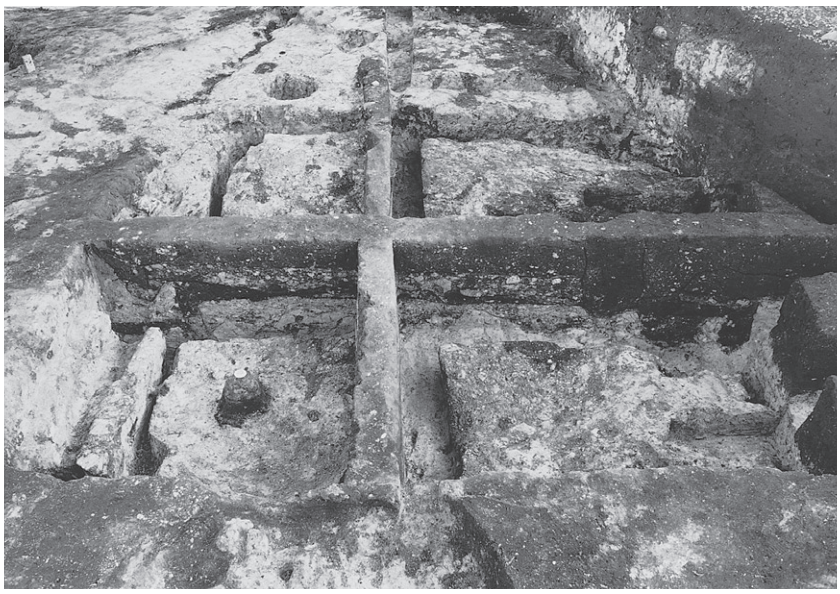
1　B区調査状況（北西→）

2　B区竪穴住居群（北西→）

1　ＳＩ133・134確認状況
（上：南）

2　ＳＩ131～134調査状況
（北西→）

3　ＳＩ135カマド遺物出土状況　（上：北東）

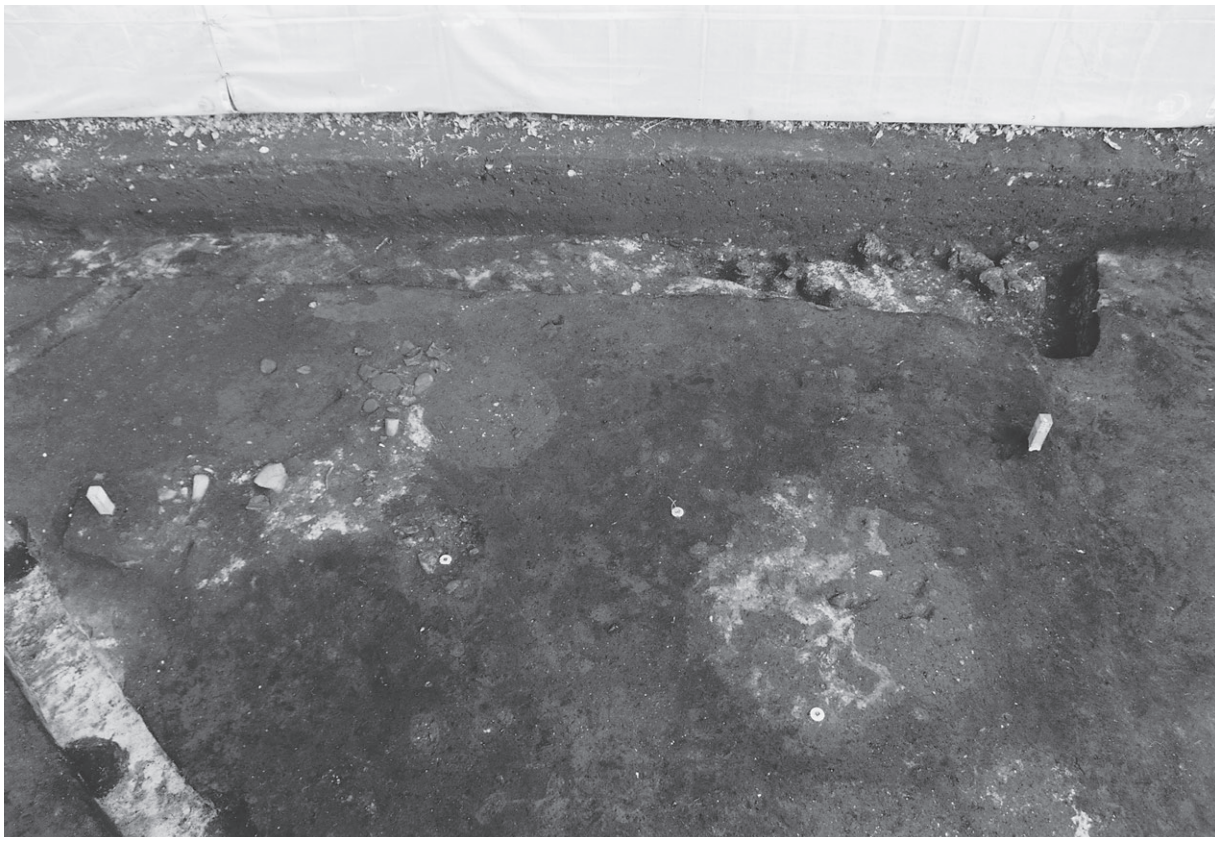


1　ＳＩ131・140土層断面
（北西→）

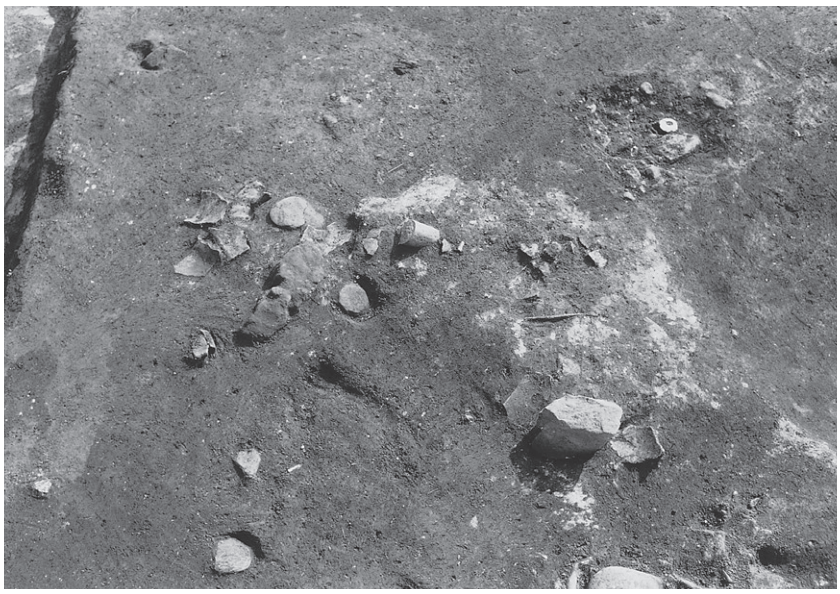
2　ＳＩ131・140壁溝断面
（北西→）

3　ＳＩ140床面検出状況
（北東→）

1　C区調査状況（東→）

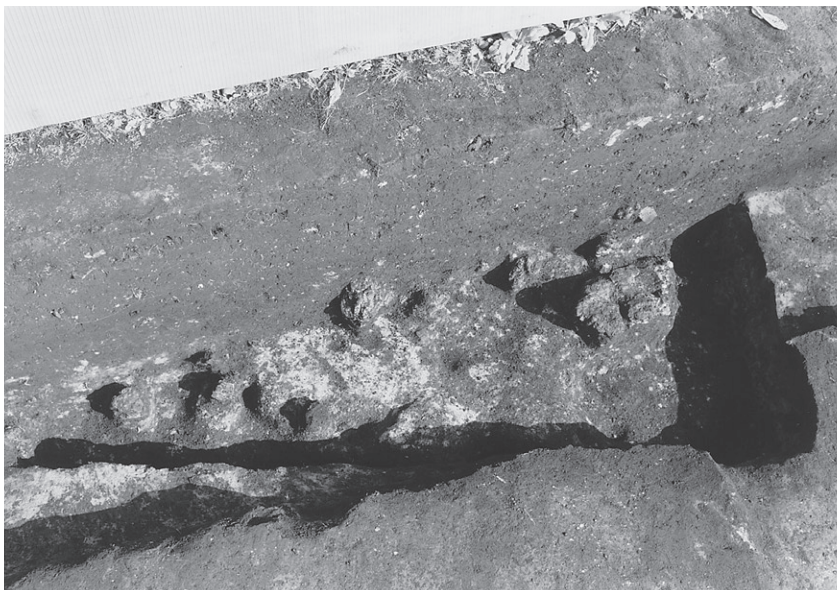


2　ＳＩ122カマド・ＳＮ84確認、ＳＩ124調査状況（南→）



1　ＳＩ122カマド確認状況（西→）

2　ＳＩ122カマド遺物出土状況（北西→）



3　ＳＩ124調査状況（南→）

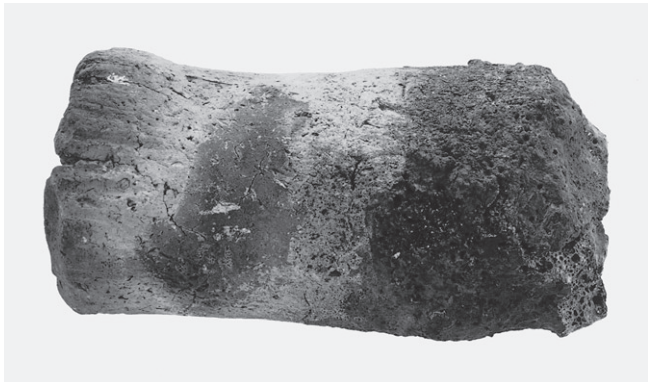
1　ＳＫＩ121確認状況（西→）

2　ＳＫＩ121完掘状況（西→）

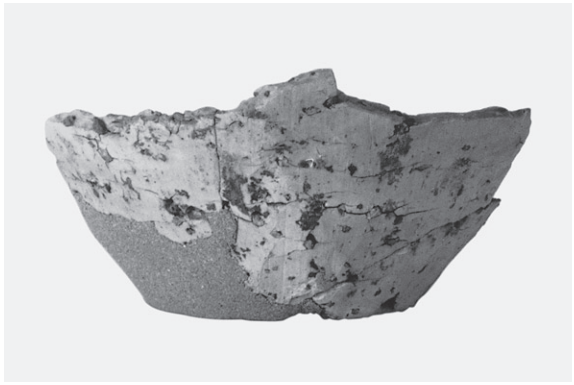
1　遺跡見学会風景

2　補足調査区法面
（南東→）

3　補足調査区土層
（南→）

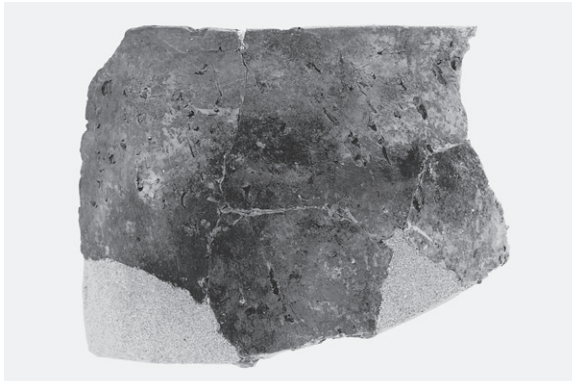


第48図１（ＳＩ５）

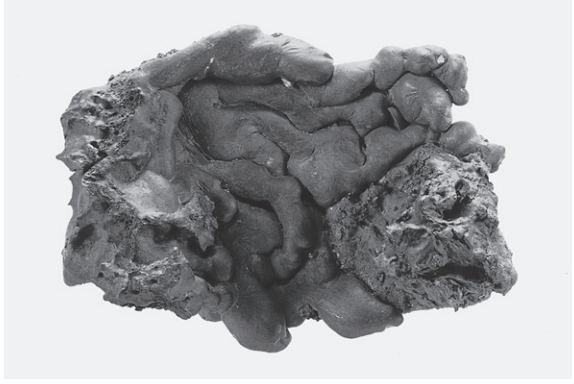


第48図２（ＳＩ65）

第48図３（ＳＩ65）



第48図４（ＳＫ157）



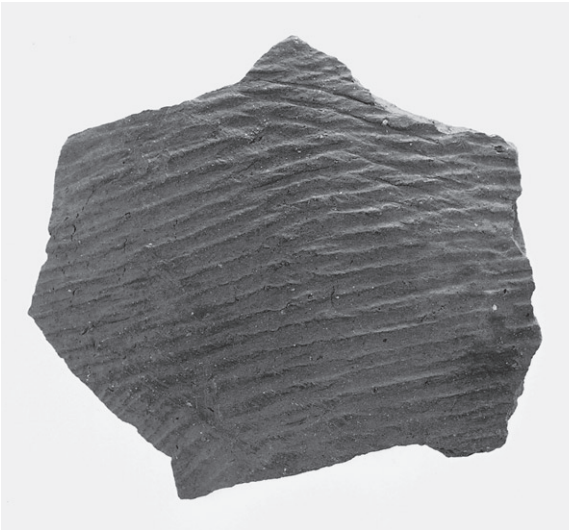
第45図５（ＳＩ131）

第49図６（ＳＩ131）

第49図７（ＳＩ131・140）

第49図８（ＳＩ131・140）

第50図11（ＳＩ140）



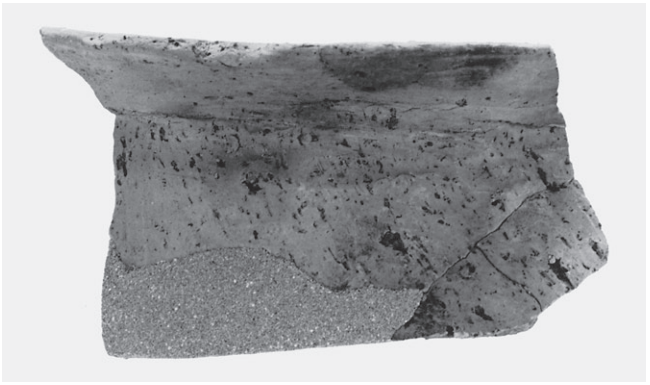
第49図９（ＳＩ132）

第49図10（ＳＩ135）

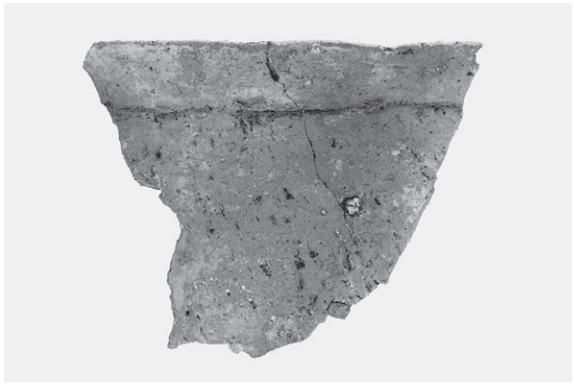
第50図12（ＳＩ221）

第50図14（ＳＫ231）

第50図13（ＳＩ221）

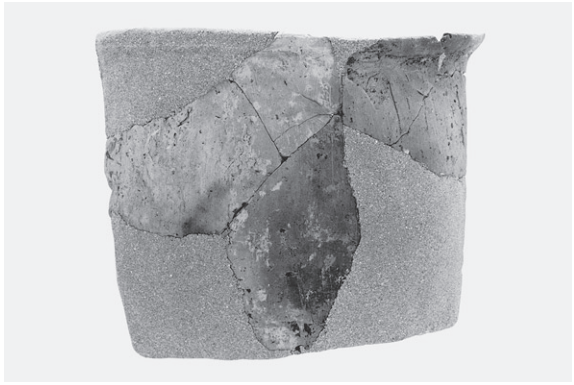


第50図15（ＳＩ122）

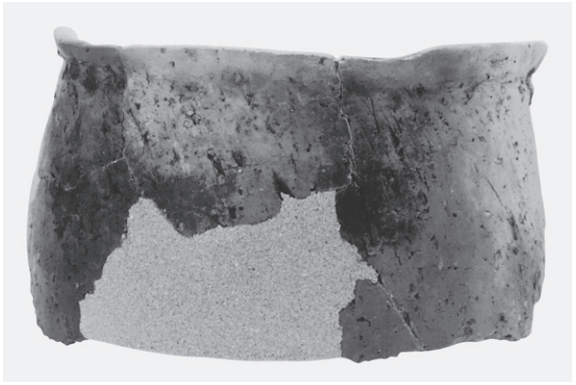


第50図16（ＳＩ122）

第50図17（ＳＩ122）

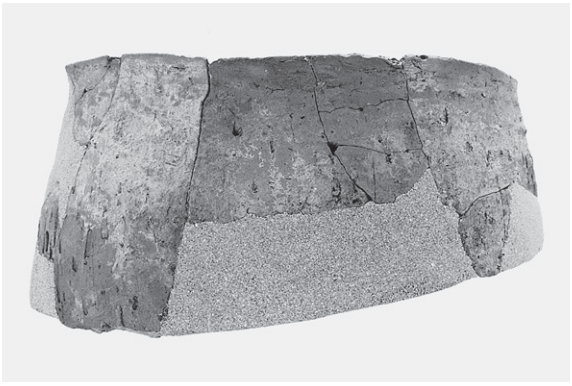


第51図18（ＳＩ122）



第51図19（ＳＩ122）

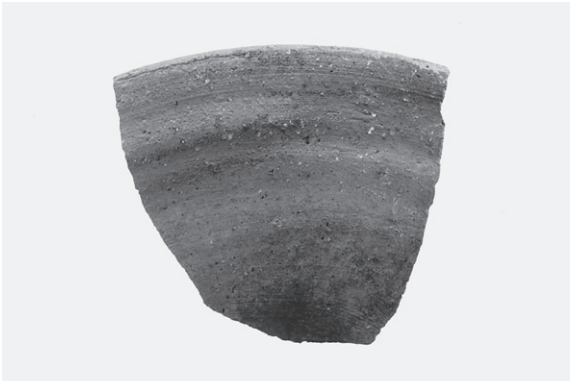
第51図20（ＳＩ122）



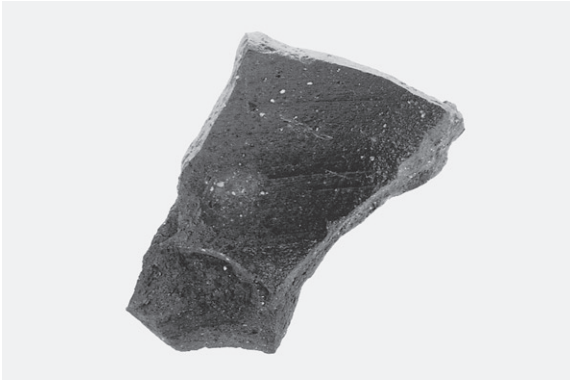
第51図21（ＳＩ122）

第51図22（ＳＩ122）

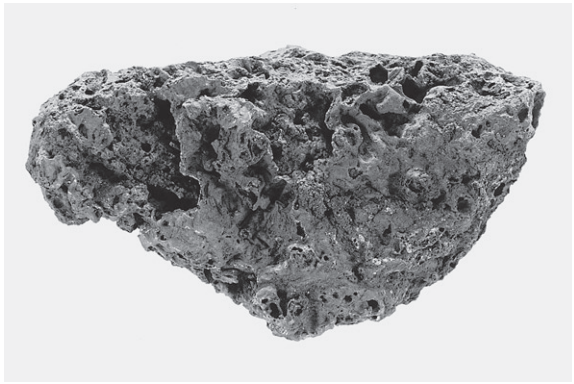
第51図23（ＳＩ124）



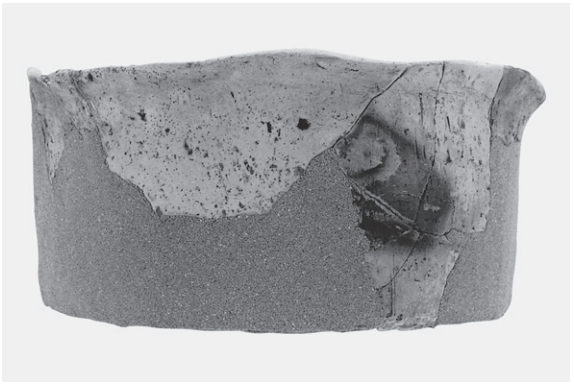
第52図24（ＳＫＩ121）



第52図25（ＳＫＩ121）



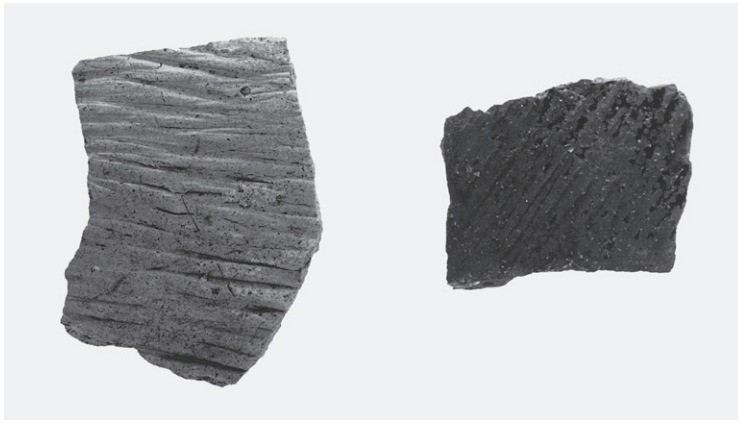
第52図26（ＳＫＩ121）



第52図27（ＳＸ201）

第52図28（ＳＸ201）

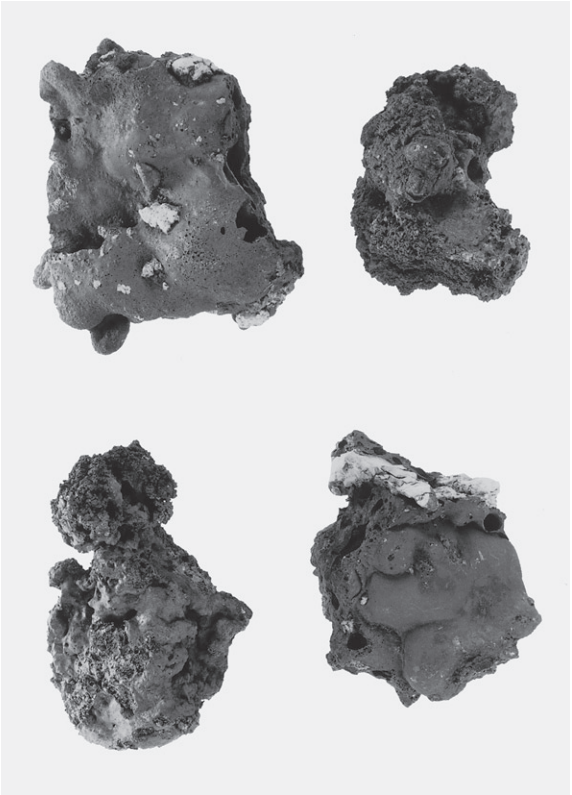
第53図29（ＬＮ48）



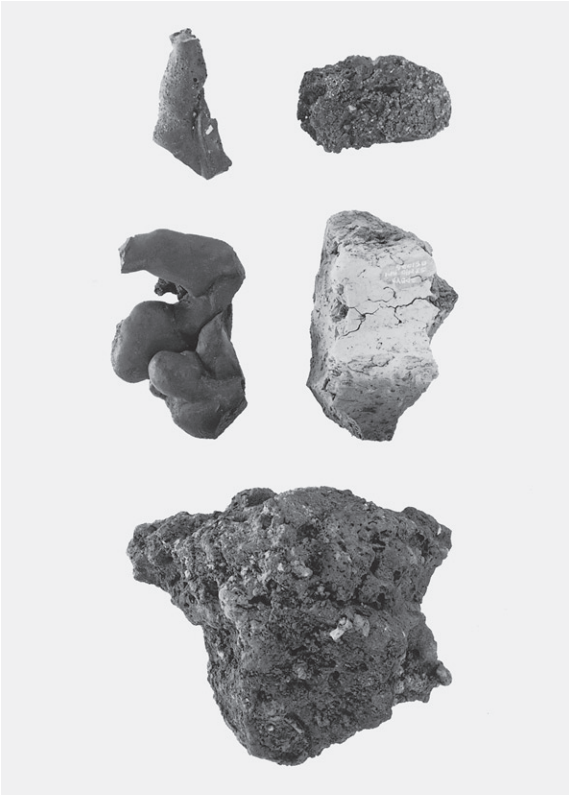
第53図30（左：ＭＤ48・49）・31（右：ＬＴ48）

第53図32（ＬＯ47・48）

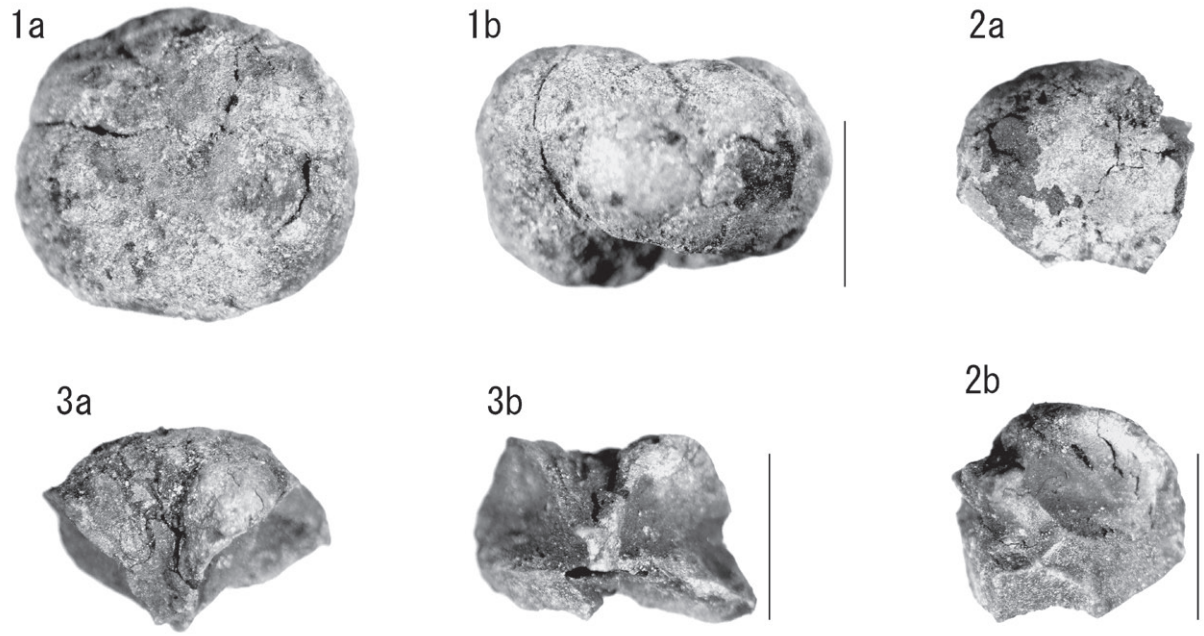
第53図33（Ａ区北側）



ＳＤ１出土鉄関連遺物



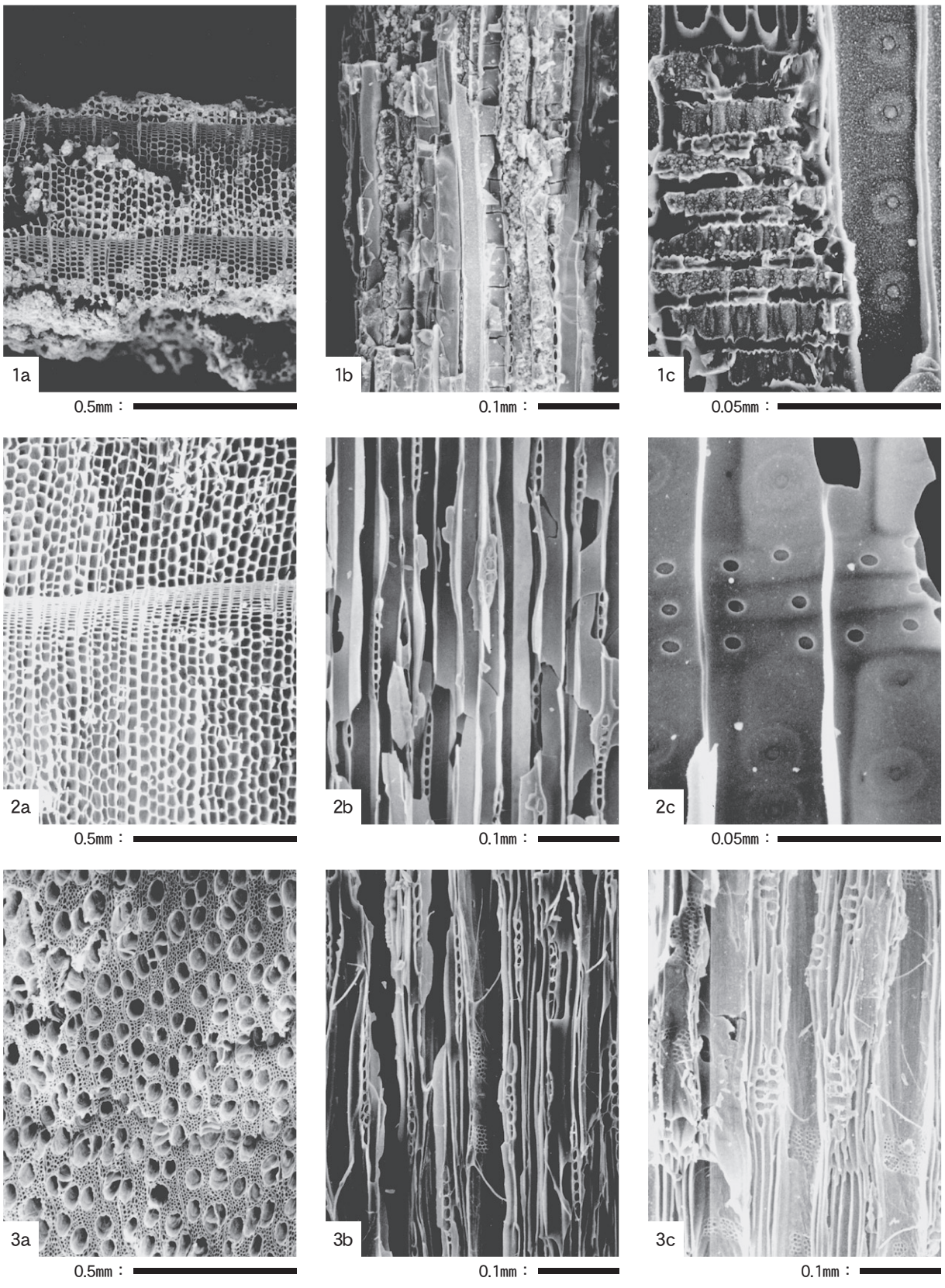
ＳＩ140出土鉄関連遺物



出土した炭化種実（スケールは１㎝）

１．トチノキ、炭化子葉（完形）、試料５（ＳＩ124床面直上）

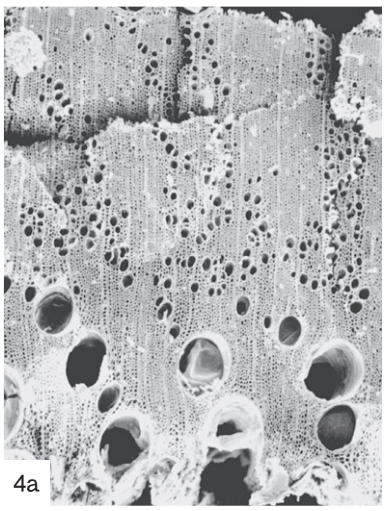
２，３．トチノキ、炭化子葉（破片）、試料５（ＳＩ124床面直上）

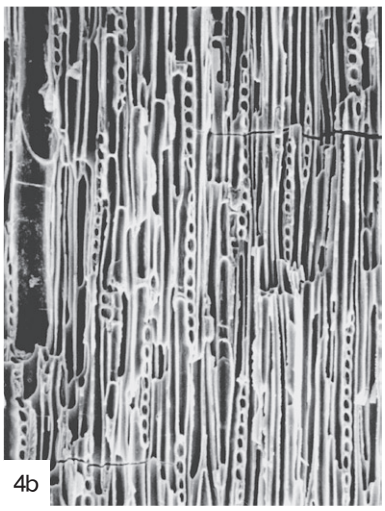


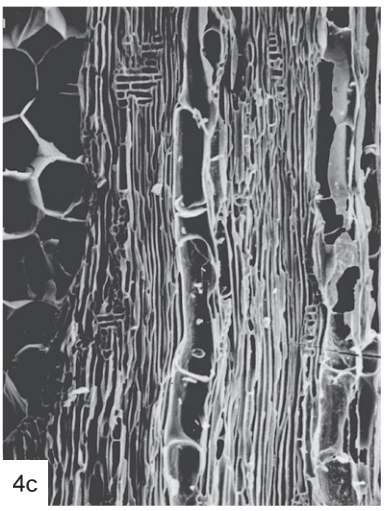
土飛山館跡住居跡出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真（１）

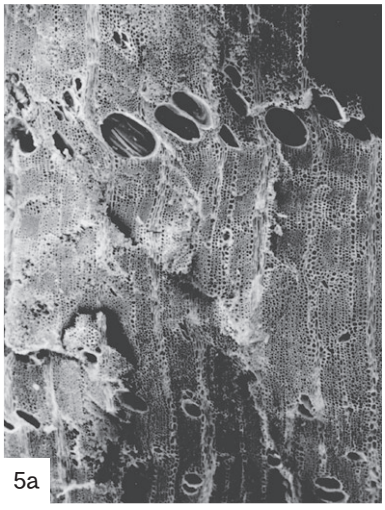
１a−１c：ツガ属(試料7)　２a−２c：スギ(試料3)　３a−３c：ヤナギ属(試料8)

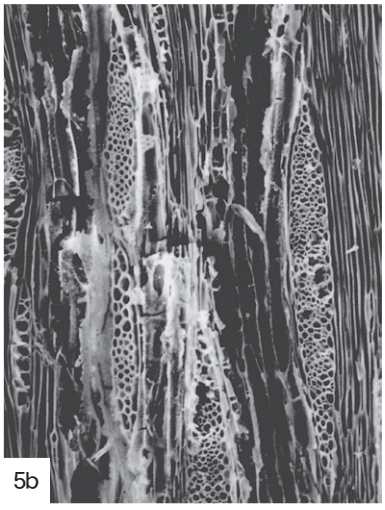
ａ：横断面　　ｂ：接線断面　　ｃ：放射断面

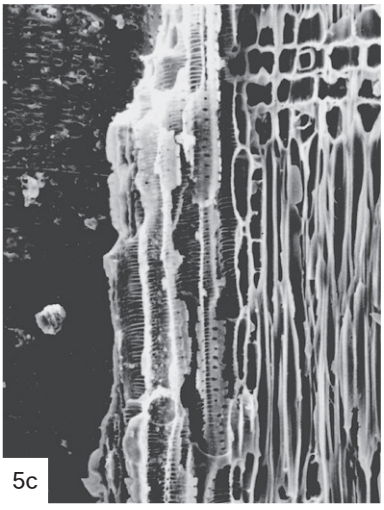


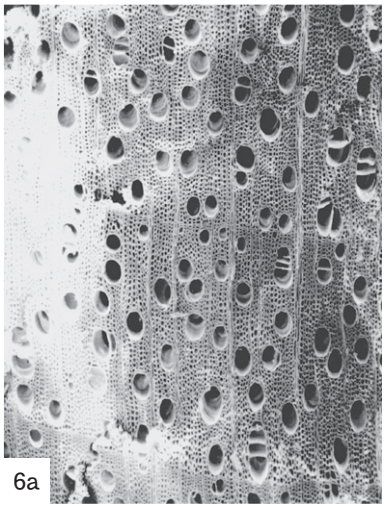


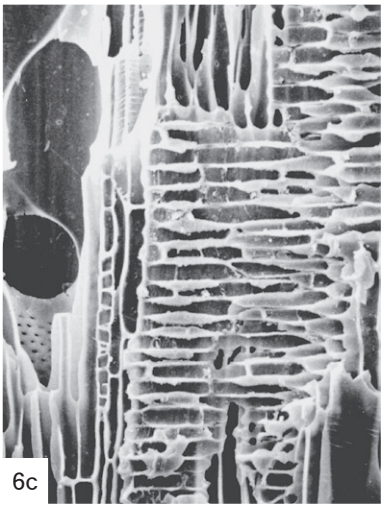










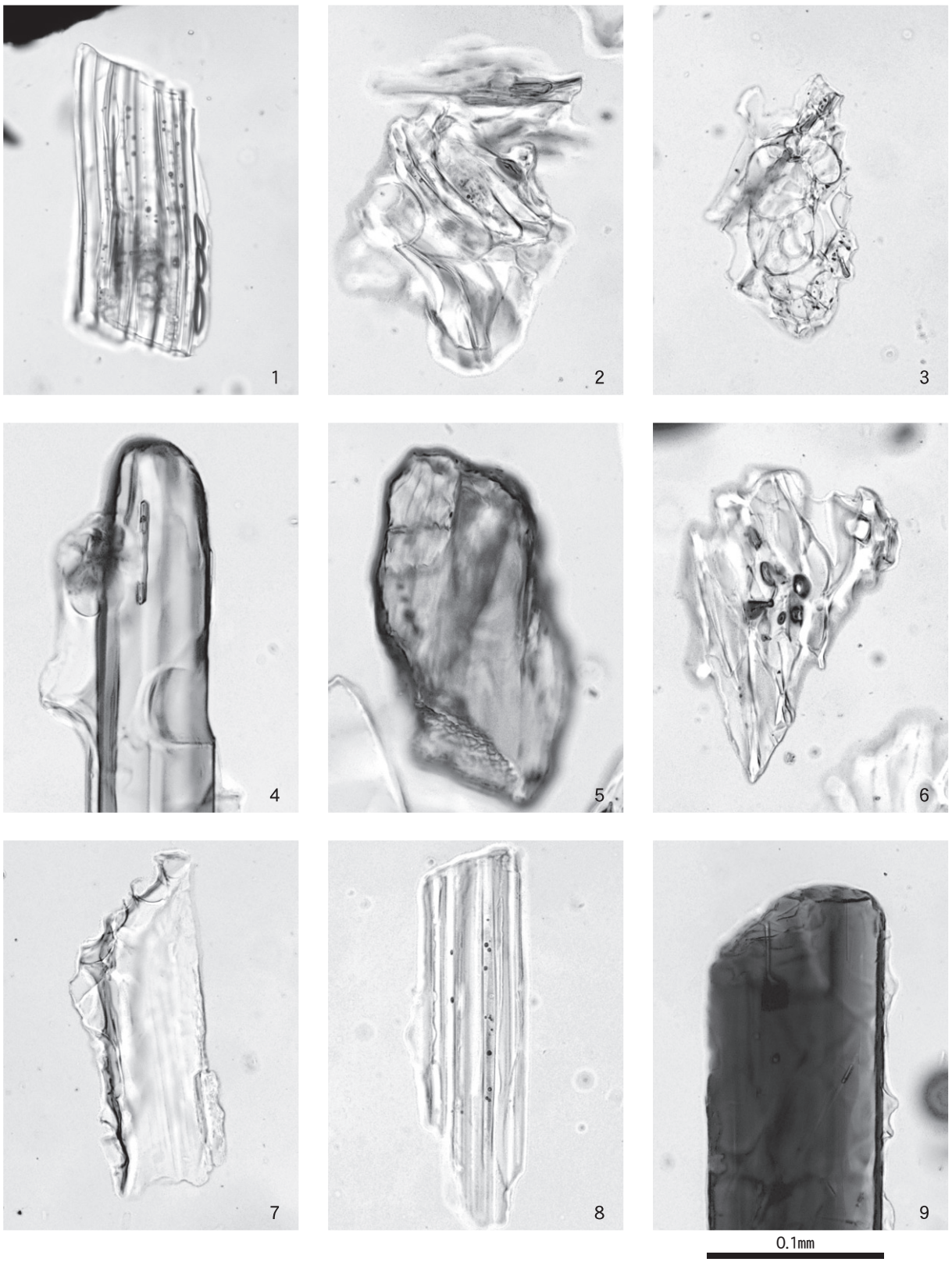


土飛山館跡住居跡出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真（２）

４a−４c：クリ(試料2)　５a−５c：ヤマグワ(試料4)　６a−６c：カエデ属(試料6)

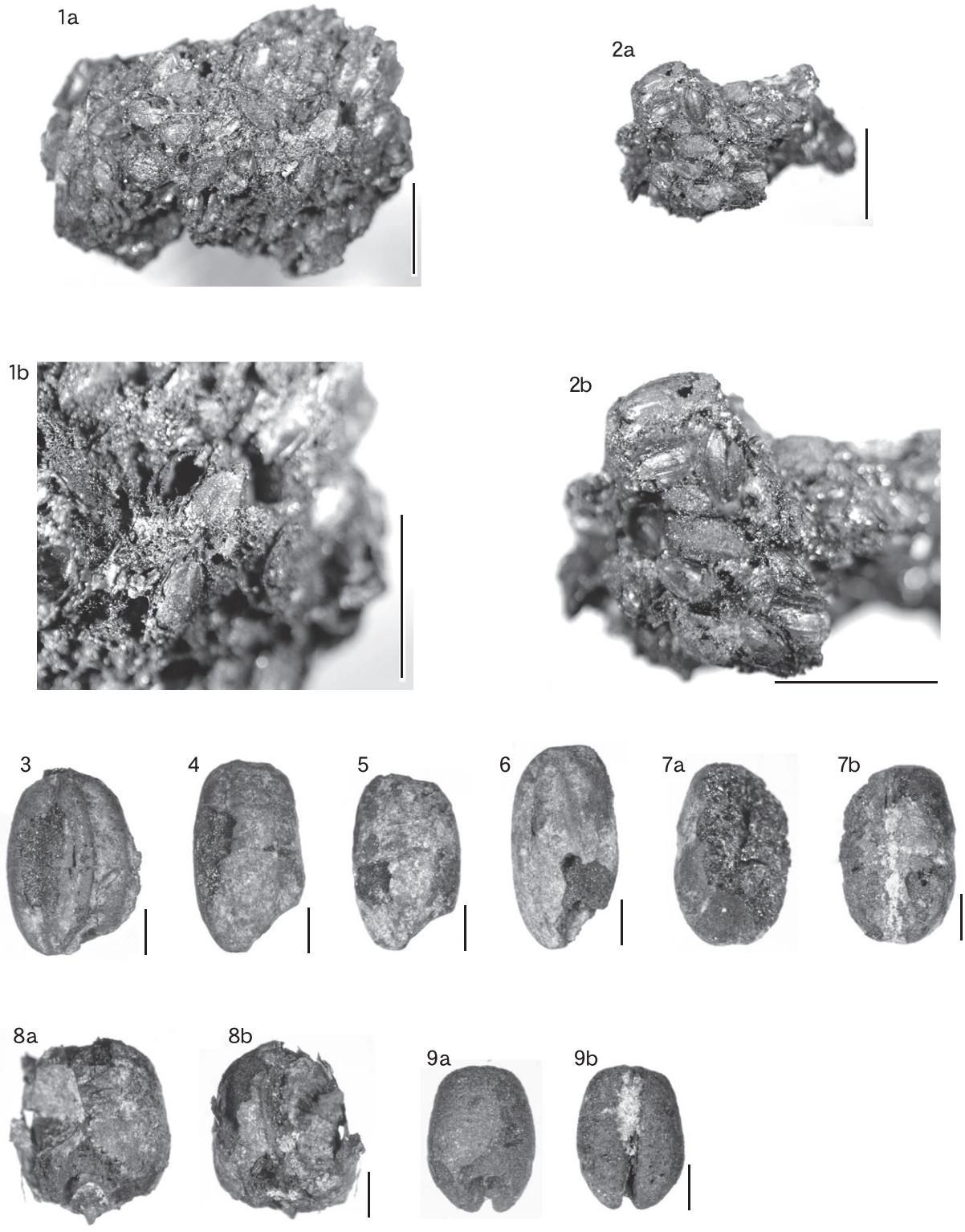
ａ：横断面　　ｂ：接線断面　　ｃ：放射断面

図版22



堆積物中の鉱物類

1．軽石型（繊維状）火山ガラス　　2．軽石型（スポンジ状）火山ガラス
3．軽石型（スポンジ状）火山ガラス　　4．斜方輝石　　5．単斜輝石
6．軽石型（スポンジ状）火山ガラス　　7．長石
8．軽石型（繊維状）火山ガラス　　9．角閃石　　1～5；試料⑨，6～9；試料⑩



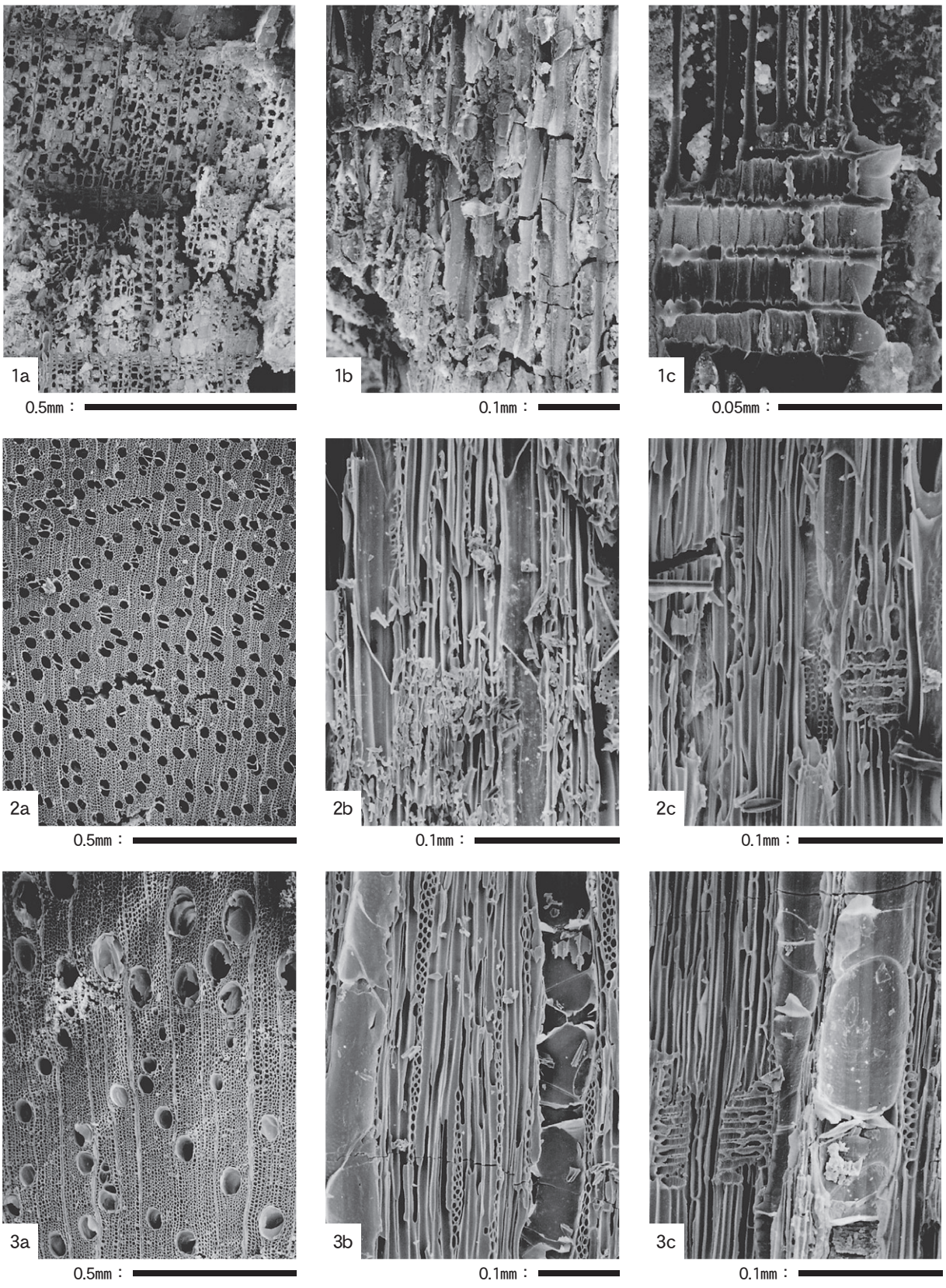
出土した炭化種実（スケールは１、２が１cm、３～９が１mm）

１．イネ、炭化穎果塊（１ｂは１ａの右端拡大）、№⑥（ＳＩ132－Ｐ２）

２．イネ、炭化穎果塊（２ｂは２ａの左半部拡大）、№⑥（ＳＩ132－Ｐ２）

３～６．イネ、炭化胚乳、№⑤（ＳＩ131･140）

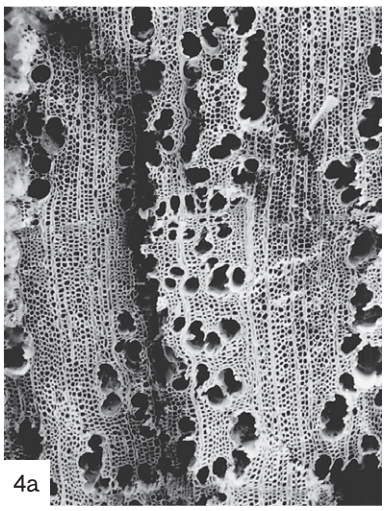
７～９．コムギ、炭化胚乳、№⑤（ＳＩ131･140）

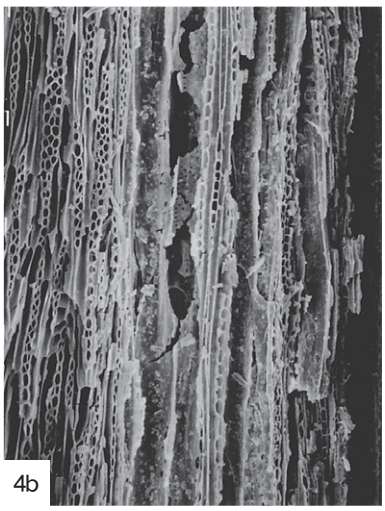


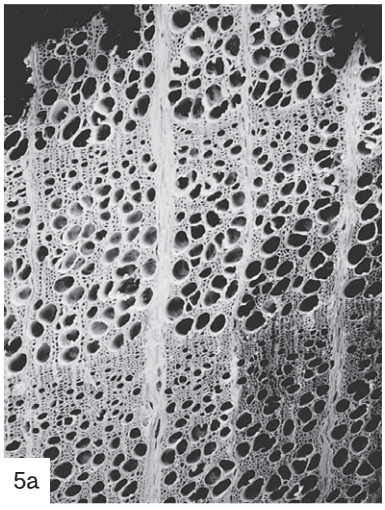
土飛山館跡出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真

1a−1c：ツガ属（試料番号1）　2a−2c：ヤナギ属（試料番号3）　3a−3c：オニグルミ（試料番号2−C）

a：横断面　　b：接線断面　　c：放射断面





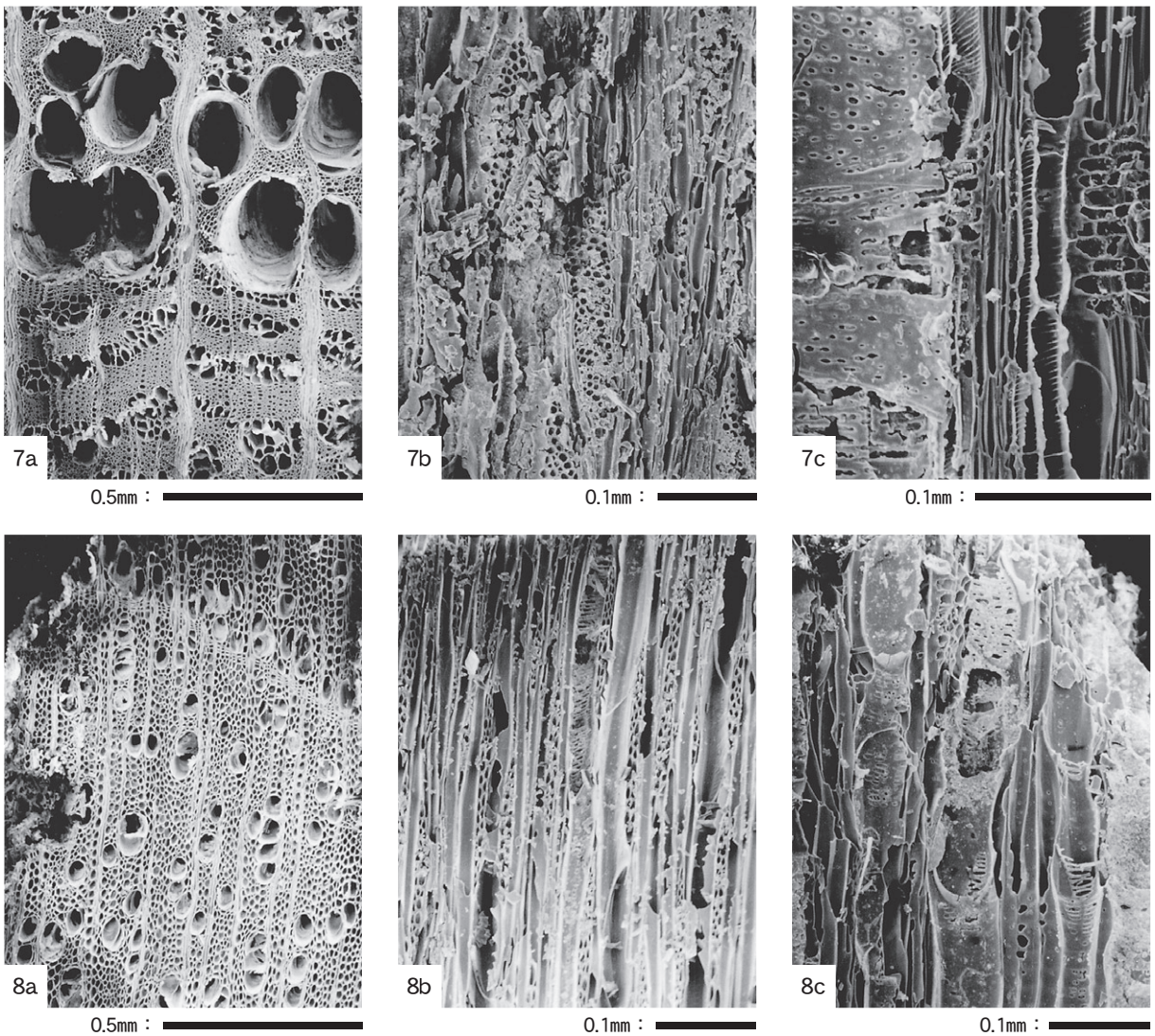


土飛山館跡出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真

４a−４c：イヌシデ節（試料番号４−A）　５a−５c：ブナ属（試料番号２−B）　６a−６c：クリ（試料番号２−A）

ａ：横断面　　ｂ：接線断面　　ｃ：放射断面

図版26



土飛山館跡出土炭化材の材組織の走査電子顕微鏡写真

７a−７c：ニレ属（試料番号2）　８a−８c：モクレン属（試料番号１−B）

ａ：横断面　　ｂ：接線断面　　ｃ：放射断面

報 告 書 抄 録

ふりがな	どびやまだてあと
書名	土飛山館跡
副書名	片山自歩道事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第425集
編著者名	菊池　晋
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　TEL0187-69-3331
発行年月日	西暦2007年８月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
土飛山館跡（どびやまだてあと）	秋田県大館市（あきたけんおおだてし） 豊町90番地43外（ゆたかまち）	05204	４－45	40° 16′ 11″	140° 33′ 21″	20050914 ～ 20051104 20060111	700㎡ 20㎡	片山自歩道事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土飛山館跡（どびやまだてあと）	散布地 集落跡 館跡	縄文時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 竪穴状遺構 土坑 柱穴列 溝跡 焼土遺構 柱穴様ピット 空堀	石器 土師器・須恵器 羽口・鉄製品 鉄滓	平安時代（10世紀頃）の集落跡と館跡に関わると推定される大規模な空堀が検出された。

秋田県文化財調査報告書第425集

土　飛　山　館　跡

－片山自歩道事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　　平成19年８月

編　　集　　秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話（0187）69-3331　FAX（0187）69-3330

発　　行　　秋田県教育委員会

〒010-8580　秋田市山王三丁目１番１号

電話（018）860-5193

印　　刷　　株式会社　成　文　社

R100
古紙配合率100％再生紙を使用しています